
-SEVEN'S WAY-

小夜時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- SEVEN・S WAY -

【Nコード】

N7047J

【作者名】

小夜時雨

【あらすじ】

王立魔術学院ホワイトウイング。

グヴォルト帝国の王が設立した国一番の魔術学院。

歴代でもトップの能力を持つ主人公と、歴代でも最悪の成績のヒロイン。そして二人を取り巻く、多くの人物が織り成す、魔術学院ストーリー。

主な登場人物

セブン・ダッシュ 17歳 男 3年

シュザリア・S・グヴォルト	16歳	女	2年
アーク・ディファルト	12歳	男	1年
クロエ・リュグルスハルト	18歳	女	4年

No.1 「対象年齢10歳児以上の簡単魔術理論講座」

「魔術とは、魔法陣に魔力を込めて発動する力のこと。その理論を学ぶのが魔術理論という学問であり、この魔術理論を究めるというのは、魔術を極めるのと同義のことだ」

若草色の髪は短めで、端正な顔立ちと相まって少年は爽やかに見える。背が高く、薄手の袖がないローブを着ている。インナーは身体にフィットしていて、そのしなやかな筋肉を浮き出させている。セブン・ダツシュ。17歳で、王立魔術学院ホワイトウイングの3年生主席である。座学、実技、演習、どれをとっても学年ではぶっちぎりで一番という超成績優秀者であり、この王立魔術学院ホワイトウイングにこれまで在籍した生徒の全てと競っても、その能力は他を寄せ付けない。

「そんな基本はどうでもいいのっ」

不満そうに頬を膨らませて言い返したのは、2年生のぶっちぎり劣等生。シュザリア・S・グヴォルトという女生徒。美しいブロンドの髪は長く、美しい顔は小さい。スタイルも、少し物足りないところはあるかも知れないが、それでもバランスが取れている。今は机の上で頬杖をつき、セブンをじとりとした目で睨みつけているのだが、それでも彼女の美貌は損なわれない。

「劣等生のくせに基本を疎かにするな。徹底的に補修授業してやるから、とりあえず説明を最後まで聞け」

「セブンの言い方が堅苦しいんだもん。もったさ、こう……ポップにキュートな感じで出来ないの？ 語尾に とかつけたりしてさっ「却下」

言い放ち、それからセブンが黒板に向かう。背を向けられ、シュザリアはまたぶすつと頬を膨らませた。優秀な人材ばかりが集められる王立魔術学院ホワイトウイング。先週はずっと試験で、生徒全員が最良評価を目指していた。 が、シュザリアだけは教官に呼

び出されて告げられてしまったのだ。長々と説教をされたのだが、それを要約すればこういうことになる。曰く、「明日の追試で成績不振だった場合、即刻退学」と。それを告げられたのが15分前。慌ててシュザリアはセブンに追試対策補習授業を頼み込んだ。そして授業中以外は開放されている空き教室で、こうしてセブンによる「対象年齢10歳児以上の簡単魔術理論講座」が始まったのだ。「魔術を使用するまでには大きく分けて3つの段階がある。シュザリア、これくらいは分かるな？」

「もちろん、そこまでバカにしないでよね。まずは構成でしょう。それから、展開。それで発動」

そう答えると、セブンが頷いた。それからチョークを手に取り、黒板に魔法陣を描く。円の中に逆三角形。それからシュザリアに向き直り、セブンが手の平を開いて見せるとそこに同じ魔法陣の文様があった。淡く輝いている。それから、セブンが魔力をそこへ流し込むとシュザリアへ向かって緩やかな風が吹く。セブンの手の平に現れた魔法陣からだ。

「この魔法陣は基本中の基本だ。丸の中に、逆さまの三角形。風を起こす効果。そして、今、実際にこれを発動しているわけだが……」そこでセブンが一旦言葉を切ると、魔法陣が消えて風もなくなった。「シュザリア、構成と展開と発動。順番に言葉で説明してみる。ちゃんと習ったはずだぞ、1年生の頃に」

「え？ 説明って言われても、そのまんまじゃない。構成は、構成で。展開は展開で。発動は、発動で……。ダメなの？」

「ダメだ」

「あうっ」

シュザリアにデコピンをし、セブンがため息をついた。デコピンされたシュザリアは額を片手で押さえて、怨めしそうにセブンを睨みつける。だが、セブンは少しも気に留めないで再び黒板に向かっていた。

「構成とは魔法陣の文様を描く作業のことだ。頭の中に精密な魔法

陣のイメージがあれば、それは手の平であろうが、手で触れた物体にであろうが、どこにでも魔法陣を敷ける。ちなみにこの魔法陣の文様が複雑なほどに威力があると勘違いする輩もいるが、本当に腕のいい魔術師ならばシンプルな文様で山一つくらい消せる魔法陣を出せる。もつとも、これは相応の魔力も必要になってくるが……今は、置いておこう。それは3年の範囲だ。そして、展開だが――

「そう、その展開がダメなのっ。訳分かんないんだもん！ 上方配置とか、下方配置とか、相関関係とか、そういうのが！」

セブンの言葉を遮ってシュザリアが言った。黒板には要点をまとめたメモが書かれていて、簡単に説明したことがまとめられている。「ちゃんと、落ち着いて考えればそう難しくもないから、頑張れ。この展開というのは魔法陣を出現させることを言う。例えば、さっきおれが魔法陣を展開した場所は手の平だ。きちんと構成された魔法陣があつて、初めて、自由自在に発動場所を選べる。対象の頭の上に発動すれば、上方配置」

言い、セブンが右手を握るとシュザリアの頭上に直径1メートル程度の魔法陣が現れた。円の中に逆三角形などという単純なものではなくて、円の中には複雑な文様が書かれている。さらにその円を、もう一つの円が囲んでいて、円と円の間の中には魔術に使われる、魔力を持った古代文字　ルーン文字　が書かれている。一瞬で頭上に現れたそれをシュザリアが感心しながら見上げていると、セブンに引つ張られて脇に立たせられた。

「そして、対象の真下に発動すれば、下方配置」今度は上方配置された魔法陣の真下に、同じ文様の魔法陣が現れる。「こうして上下で対象を挟んで発動した魔法陣には、ある関係が生まれる。これを相関関係と言つて、この相関関係も種類はあるが今は試験に出そうなのを覚えておけばいいだろう。上と下の魔法陣。この相関関係は見たまんまの上下相関関係」

「上下相関関係……。上と下に配置されてるから？」

「そつだ。簡単だろ？　そして、魔法陣自体の効果は激しい雷を落

とすもの。これを上下相関関係で発動すると、その威力が3倍にまで高まる」

パチッとセブンが指を鳴らした。瞬間、上下相関関係の魔法陣から紫電が迸って激しい轟音と、網膜を焼き尽くすような閃光がシュザリアの座っていた椅子と、その机を消し炭にする。音と閃光がやみ、シュザリアが再び目を開けると、綺麗に机と椅子がなくなっていた。床にも、天井にも、何も痕跡はない。だが、魔法陣の間に挟まれていた形だった机と椅子がごっそりなくなってしまった。

「ここまで、大丈夫だな？」

「えっと……上に発動した魔法陣は上方配置で、下に発動した魔法陣は下方配置で、これが上下相関関係で、その威力は3倍……だよな？」

「そうだ。上下は3倍で、同じ場所に2つ魔法陣を重ねるのを重複魔法陣と言っんだが、この場合は2倍になる」

「上下が3倍、重複は2倍……」

自分の頭の中に刻み込むように念入りに呟くシュザリア。そんな彼女を見ながら、セブンは小さく笑った。それに気づいて、シュザリアがまたむっとする。

「人が一生懸命になってるのに……」

「いや、いつもそうやって真剣にやっていたらこうならないのにと思っただけだ。2年生のこの時期の試験ならば、この程度で大丈夫だ。夕食でも行くか？」

教室には夕陽が差し込んでいる。セブンの誘いにシュザリアがぱつと顔を明るくさせて、頷いた。

「行こ、行こっ！ セブンの奢りでしょ？ がっばり稼いじゃって天才魔術師なんだし」

「何を言ってるんだ。そんなことを持ち出すのなら、お前はこの国の大切な姫君じゃないか」

「でも、今月のお小遣い、もう使い切っちゃったんだもん。ね、ね、セブンの奢りでいいでしょ？」

シュザリアがセブンの腕に抱きつき、おねだりをする。ため息をついてから、セブンは分かった、と返した。

「世界中探したって、お前みたいな姫様はいないぞ？」

「やーん、そんなに誉めないでよ」

「誉めてるわけじゃないんだがな。……まあ、いいだろう」

これが自分とシュザリアの関係なのだ。そう自分に言い聞かせて、セブンはシュザリアを引き剥がしてデコピンをくれてやった。

No.2 及ばない30点と救済措置

「あ、これ美味しい」

「そうだな。食材の旨味がよく出てる」

セブンとシュザリアの食事は基本的に高級レストランだ。王立魔術学院ホワイトウイングは全寮制学院で、厳しい適性検査などを潜り抜けた者しか入学出来ないというエリートの集う学院であり、学費を始めとして寮の維持費や教科書代など、多くが削減されている。校舎はその昔、王城であった古城を利用しており、その城下町もそのまま残っている。いにしえの都は学生の街となり、その街に似つかわしくない超高級レストランが一軒だけあるのだが、ここに入入りする人間はセレブリティやブルジョワなどの大金持ち。そんな場所でもいつも食事するセブンはその頭脳を評価されて、多くの魔術理論の論文を発表し、学生の身でありながらも豪遊出来るだけの貯蓄がある。そしてシュザリアはこの国の姫君であり、ほとんどの施設を顔パスで無料利用出来てしまう、多くの点を含めて桁違いの人間だ。

「ね、セブン。明日の追試が終わったら、長期休暇になるんだよね」

「ああ。……もつとも、退学になればお前は元の王城へ連れ戻されるのだろうがな」

「そんなこと言わないでよ。……とにかく、お休みになったら皆でどこか遊びに行こう」

「どこか、なあ……。おれはどこへでも付いていく義務があるものの、アークとクロエにはちゃんと前もって伝えろよ。アークは里帰りする必要があるだろうし、クロエだってもう予定を立ててるかも知れない」

白身魚のソテーを口にして、セブンが言う。赤絨毯に白い壁。豪華なシャンデリア。静かな二人だけの空間。学生には贅沢過ぎる場だ。

「えー？ そんなのヤダ。第七班の皆で行くから、いいんだから」
「だから、それをアークとクロエに伝えておけ、って言ってるんだよ」

「じゃあ、クロエには言つとくからアークに言っておいてよ。同じ部屋だし。ね？」

寮の部屋は基本的に二人部屋だ。4学年を縦割りにした班で活動することが多い為、同じ班同士が二人ずつで寮の部屋を使う。セブンは飛び級入学した天才1年生と同じ部屋だ。

「伝えるだけ、伝えておこう。だけど、その前にはお前は明日の追試だ。もしも、点数取れなかったら、遊びに行くどころじゃなくなるからな？ お前は自衛手段としての魔術を学ぶ為に入学を許可されて、成績不振なら即刻、王城へ戻されるっていう約束を陛下としているんだから」

「分かってるよ。……でも、最悪、またお城に連れ戻されたってセブンに誘拐してもらうから。そのつもりでいてね」

「おれを犯罪者にしないでくれ。……ま、その時は何とかしてやるけどな。だけど追試はしっかりやれ。いいな？」

「もちろんっ。セブンに教えてもらったし、明日はばっちりだよ」

「上下相関係の魔法陣の威力はどうなる？」

「……。えっと、2倍？」

「それは重複魔法陣だ。正解は3倍。……本当に大丈夫なのか？」

もしかしたら、本当に誘拐する破目になるかも知れない。そんな一抹の不安を抱かざるをえないセブンだった。

「……まだ9時、か……」

寮の部屋にあるベッドで寝返りを打つセブン。同じ部屋の住人、12歳の少年アーク・ディファルトがそんなセブンを見て声をかけた。

「そんなにシュザリアのこと気にしてるの？ セブン」

アークは深紅の髪をした少年で、可愛い顔をしている。一丁前にア

シンメトリの髪型で、やけに右側ばかり髪が長い。半ズボンから覗く膝小僧は年相応のもので、満面の笑みは張りのある肌、それに無邪気な笑みなど、「少年」を地でいく少年だ。

「ん、ああ……。何たって、追試が上手くいってもらわないと誘拐犯にならざるをえないからな」

「ゆ、誘拐犯……？　どうしてそうなっちゃうの？」

「こつちの話だ。気にするな。……お前、休暇はどこに行くのか？」
昨夜のシュザリアとの会話を思い出し、セブンが尋ねた。アークは現在進行形で、荷造りをしている。もつとも、3週間で学校は始まるからそれほど多くの荷物ではない。自分の体よりも大きいリュックサックに服や教科書をとにかくたくさん詰め込んでいるが、ちゃんと整理しないで入れているせいでパンパンに膨らんでいる。成績は優秀だが、その辺はまだまだ子供らしい。

「うん、実家に帰るよ」

「そうか。シュザリアが班でどこか遊びに行きたいと言っていたから、声をかけたが、それなら仕方ないな」

特にやることもないので、セブンはアークの荷造りを手伝う。リュックに詰め込まれていたものを取り出して、きちんと服を畳んでいく。そうしてから、きちんと詰め込んでいけばそれまでアークが苦戦していた「嵩張り」という名の敵は簡単にいなくなった。まさに魔術のように簡単にやったセブンに、アークは感心する。

「いいなあ……。ぼくもどっか遊びに行きたい。でも、お母さんとお父さんにちゃんと顔見せなきゃだし……」

「まあ、また今度の休みでもいいんだ。そう気を落と」

「そうだった！　ぼくの村も緑がたくさんあって、湖も近くにあるの。綺麗で、泳いでる魚も見えるんだよ。お祭りだね、湖の上を火の魔術で花火がいくつも走るの。湖に反射して、すごく綺麗なの。だから、皆で行こうよ！」

アークがセブンに飛びつき、明るい笑顔で言う。それを聞きなが

らセブンは相槌を打ってやる。まだ幼いアークがホームシックにな
っていないのは、勉強熱心なのに加えて、セブンやシュザリアとい
った同じ班の人のお陰なのだ。寂しさに耐え切れなくなると、アー
クはセブンに魔術を教わりにくる。勉強をしたり、話を聞いたりし
て、紛らわすのだ。でも、決して口にはしない。その健気さを知っ
ているから、セブンはアークを可愛がっていた。

「あとは、クロエ次第だな」

「クロエは大丈夫だよ。いつも、お昼寝してばかりだもん」

「その昼寝を優先されても、困るだろう？」

「そうだね。でも、本当にお祭りは楽しいんだよ。花火の他にも、
いっぱい催しはあってね、それでね……」

アークのマシガントークを笑いながら聞き、セブンは窓の向こ
うに見える古城を見やった。今頃、シュザリアは試験の真っ最中。
補修の成果が出ればいいのだが。

「シュザリアくん、採点が終わりましたよ」

試験後、その会場で待たされていたシュザリアのところへ空色を
した髪の男性がやって来た。穏やかな顔立ちをした、若い男性。2
0代にしか見えない。ゆつたりとした法衣をその身に纏っている。
その手にはシュザリアの答案があり、緩やかな笑みを携えたままシ
ュザリアの隣に座った。

「学長……。え、学長が採点してくれましたか？」

「はい。たまには、と思ひまして。さて、気になる採点結果なので
すが……」

マクスウェル・ホワイト。この王立魔術学院ホワイトウイングの
学長にして、国で一番の魔術師とされる存在だ。ちなみに長い年月
を生きていることでも有名なのだが、彼の姿がある肖像画や写真な
どは、全て同じ年齢で写っている。莫大な時間を全く変化しない姿
のままで過ごしているのだ。

「お見事でしたよ」

「本当ですかっ!？」マクスウェルに答案を渡され、そこにシュザリアが目落とす。「　　って、51点……。これってぎりぎりですよね？」

「そうですね。200満点中の51点というのはかるうじて4分の1を正解したということになりますから。ちなみに問題は全て四択ですから、適当にやったとしてもこれくらいは確率上だと普通に取れることになります」

丁寧な説明を受けて、シュザリアは苦い顔をした。セブンに教わったことはそっくりそのまま出題されたものの、その他は全然出来なかったのだ。採点された答案を見ても、セブンに教わったところだけでは20点しか取れていない。他は全て、勘だ。

「まあ、でも、これで合格なら　　」

「合格とは一言も言っていないですよ？」

一安心しようとしていたシュザリアが、遮られたマクスウェルの言葉で固まった。合格では、ない。と、いうことは成績不振で退学となり　　。

「ええっ!？　だって、お見事って言ったじゃないですか!？」

「はい、お見事でしたよ。たったの5点しか取れなかったのに、それが10倍近くまでの点数になったのですから。お見事です。しかし、200満点中の51点というのは残念ながら、まだ赤点ラインなのです。我が学院では赤点を平均点の半分未満としていますからね。今回のテストでの平均点は162点。その半分だと81点必要なのです。つまり、シュザリアくんは残念ながらあと30点足りないのです」

「……全然ぎりぎりじゃない……?」

「はい。30点は大きいですからね。残念ですが、陛下とのお約束に基づいて、きみを王城へ帰さなければなりません」

「そんな、嫌っ。お願い、学長っ。何か救済措置をお願いしますっ!　　そうだ、うん、セブンが何でもしてくれますからっ!」

何故かここでセブンを引き合いに出すシュザリア。だが、マクス

ウエルがそれに反応して、またにこやかに笑った。そうですね、と
もったいぶった言い方をしながら窓の向こうを見やる。城から離れ
た男子寮になっっている塔が見えた。

「では、こうしましょう。シュザリアくんは第七班でしたね。第七
班にはわたしのお仕事を少しだけ手伝ってもらうとしましょう」

「それで救済措置取ってくれるんですか!？」

「はい。それをちゃんとこなしたら、30点分をカバーしましょう」

「学長ー、大好きですー。ありがとうございますっ。それで、何を
すればいいんですか？」

明るい笑顔を向けながらシュザリアが尋ねた。

「第七班にアークくんがいましたね。彼の故郷で催されるお祭りに、
わたしの代わりに出席してきてください。わたしみたいなお年より
が出向くよりも、きみのような若くて可愛い女の子の方が喜ばれる
でしょうから。それでは、シュザリアくん。お願いしましたよ？」

マクスウエルがそう言うと、シュザリアが頷いた。だが、何とも
なしにした瞬きの後、マクスウエルの姿がそこから消え去っていた。
教室の扉は閉められたままで、どこにもマクスウエルの姿がない。

流石は国一番の魔術師、としばらくシュザリアは感心しながら呆け
ていたが、すぐに救済措置のことを思い出して、駆け出した。

No.3 湖畔の村？

「もうすぐ着くよっ！」

木々の間を縫ってアークが走る。それをシュザリアが追いかけて小走りになった。

深い森の中。しかし、柔らかな光が木漏れ日から落ちてきて、そこに不気味さはない。巨木が立ち並び、地面にはその太い根が飛び出して歩いて歩きづらい。道が整備されていないのだ。セブンは後方を振り返った。

「クロエ、大丈夫か？」

「ええ、平気よ。それよりも、お姫様とおチビちゃんの方が危ないんじゃない？ ほら、転んだ」

セブンが再び前を見やると、木の根に躓いてアークが転んでいた。ため息をつき、セブンがそっちに向かう。後ろについていたのは第七班の4年生。クロエ・リュグルスハルト。背中まである長く、艶やかな黒髪はウェーブがかかっている。独特の雰囲気放っていて、良く言えば妖艶。悪く言えば無気力そうなオーラを放っている。成績は上の中。足を引っ張っているのは朝寝坊による遅刻や欠課だ。セブンより1歳年上だが、落ち着いた物腰からはそれよりも年上に見える。シュザリアの救済措置に付き合わされて、やって来ていたもつとも、休暇中の彼女の予定は睡眠というものだったのだが。

「あ、擦り剥いちやった……」

セブンに起こされ、アークが自分の膝を見て呟いた。ため息混じりにセブンが手の平に魔術を使い、手の平から水を溢れさせると、それで泥や砂粒を落とす。

「冷たくて気持ちいい」

「大した傷じゃないし、放っておけば治るな」

流水で洗ってからセブンが傷口を見やり、そう判断を下す。アークのリュックから絆創膏を出して、それを貼り付けて処置を終わら

せた。短くお礼を言ってから、アークがまた小走りする。懲りていないように見えてセブンが注意しかけたが、クロエがセブンの肩を軽く叩いて首を左右に振った。

「大丈夫よ」

「それならいいが……」

「転んで痛い目を見ても、それは自己責任。ちょっと過保護なんじゃない？」

「おれは怪我一つでもさせたら、思い切り叱られる環境にいたからな。抜けないんだよ」

「お姫様の世話係も大変なのね」

「まあ、な」

再び歩き出す。森が開けて、明るくなった。見えてきた景色に少しだけ見とれ、何に納得するでもなくセブンは頷いた。綺麗だ。森を抜けたそこは、湖の湖畔。美しい青色が向こうまで広がっていて、左手側の方に小さく村落が見えた。太陽の光に煌く水面。魚が跳ねて、波紋が広がる。鳥の囀りに、気持ちよく抜けていく風。長閑、という印象が強い。

「うわあ……」 シュザリアが感激しながら声を漏らした。「すつこい……。アーク、ここでお祭りあるの？」

風になびく金色の髪を押さえながらシュザリアが尋ねる。ぼんやりとセブンがシュザリアを眺めていると、その自分にはっとした。ぶるぶると頭を振るい、ぱんつと頬を叩く。

「あら、もう見とれるのは終わり？」

「気が抜けていただけだ。見とれてない」

クロエに言い返してから、セブンが歩き出す。その後姿にクロエはくすりと笑いを漏らすのだった。

「ここが、ぼくの部屋。セブンは部屋一緒でいいよね？」

アークに案内されたのは、狭い部屋だった。ベッドと机と、壁一面に本、本、本。これが12歳の部屋とはにわかに思えないが

流石はアークだとセブンは感心さえする。

「ああ、構わない。……それにしても、本ばかりだな」

「うん。だけどセブンは全部読まないでも分かっちゃうんじゃないの？」

本棚に詰め込まれている本から、一冊出してアークが開く。タイトルは「魔術師の掟　～常識から非常識まで～」というものだ。ぱらぱらとめくってからまた本棚に戻す。すでにアークは全て読み切つて、頭の中に叩き込んである。飛び級入学しての主席、というのはこの勤勉さに支えられている。セブンも適当に本を手にして、中を覗いてみる。

「いや、おれも知らないことがたくさんある。だけど、あまり必要ない類のことじゃないか？　どこでトロールの飼い方なんて必要になる？」

セブンが手にした本のタイトルは「賢く育てるトロール」とされている。

「使う場所は知らないけどさ……。でも、面白いじゃない？」

「そうだな。興味深い。だけど、おれは残念ながら実用性重視なんだ。気が向いたら、読ませてもらう」

「うん」

アークがセブンをリビングへと誘って、それについていく。アークの家に来ていた。村で唯一の本屋ということもあり、常に書物に囲まれて育った為にあークは貪婪な知識欲を有してしまつた。そして、いつしかその知識はまだ解明されていない魔術理論へと向けられ、王立魔術学院ホワイトウィングの入学試験を受験したのだ。

「ここって凄いなー。本がたくさん……」

リビングにシュザリアとクロエがいた。アークの母に出されたお茶を優雅に楽しんでいる。アークの父母は黒い髪をした優しそうな人たちだ。父は少し線が細く、頼りないような印象を受ける。母は恰幅のいい婦人で、快活な人柄だ。そして、このリビングの壁は全てが本棚になっている。そこにはぎっしりと本が並べられていて、

本の重みで建物自体も少し傾いてしまっている。

「村で一つだけの本屋さんだから。お父さんも店番そっちのけで読書してるし」

シュザリアに言い、アークが母を手伝ってお菓子をキッチンから運んでくる。素朴な見た目のクッキーだ。

「それにしても、皆さん、遠いところから大変だったでしょう？」

アークの母が言う。普通、こういう対応には年長者がやるのだから、クロエはハーブティーを楽しんでいる最中だ。セブンが見かねて、穏やかな声で対応する。

「いえ、緑が多く、空気も湖も綺麗で、道中のことなど、この素晴らしい景色に比べれば何ということはありません。聡明なご子息も、この環境で育たれたからなのでしょうね」

「別人みたい……」

セブンの対応にシュザリアが呟く。しかし、アークの母はその対応にすっかり気をよくして、「まあ、まあ、まあ」と連呼しながら照れる。

「聡明なご子息だなんて、ただの本の虫なのに……。それに、あの子はわたし達の子ではないんですよ」

「え？　じゃあ、アークの両親って？」

クッキーを口へ運ぶ手が止まり、シュザリアが問うた。アークは店の方に行っていて、この場にはいない。クロエもハーブティーのカップから顔を上げる。セブンだけは無表情で腕を組んだまま、耳を傾けていた。

「主人の友人の子なんです。あの子の両親は事故で亡くなってしまっ、引き取ったんです。でも、しみりしないで下さい。ちゃんとあの子も受け止めて、その上でわたし達のことを本当の親のように思ってくれているんです」

慈愛に満ちた、優しく穏やかな表情。そこには少しも憂いの翳りは見えなかった。

「さあさ、明後日からお祭りがありますから、ゆっくりして下

さい。それと……セブンさん？」

「はい、何でしょう？」

「あの子から届く手紙に、いつもあなたのことが書いてあるんです。毎日、お世話になっているようで……」

「いえ、何ということもありません。それに、本当に立派なご子息ですよ。……まあ、時々、騒々しいこともありますけど、12歳でホワイトウイングの主席になるなんて並大抵のことでないんですから」

アークの母にセブンがそつと笑って見せた。そこへアークがぱたぱたと走って元気にやってくる。

「ねえ、外行かない？」

「行きたいっ。セブン、クロエ、行こう？」

シュザリアが二人の腕を掴んで、引っ張っていく。苦笑するセブんと、少し面倒臭そうなクロエだった。

No.4 湖畔の村？

「ほら、この木、おつきいでしょ？ お祭りはね、ここの下に会場が作られるの。だけど、今年はまだやってないみたい……。どうしたんだろ？」

アークに連れられてきたのは村から少し外れた森の広場。巨大な木がそこに聳えているのだが、あまりにも大きなサイズだ。近くに立つと、まるで壁。直径は10メートルを悠に超え、もつとあるかも知れないとセブンは密かに目測している。広場は大樹の広げる葉によってすっぽりと影に隠れている。立派な巨木だ。セブン、シュザリア、クロエが木を見上げていると、アークは村の方からやって来た大人を見つけて駆けていった。

「ねえ、おじさん。まだ会場作らないの？」

村の人口は少ない。皆が顔見知りで、すでにアークが帰ってきていることも伝わっている。やって来たのは口ひげを蓄えた、上半身半裸の上に半纏を着た壮年の男性だ。口に煙管を咥えていて、アークを見下ろすなり難しい顔をした。

「それがな、毎年、会場を作ってくれているさる高名な魔術師が今年は所用で来られないらしい。代わりの魔術師を寄越すとは言っていたんだが、外からにやって来たのはアーク達くらい。いつになったら来てくれるのか……」

その話をシュザリアはぼけつとしながら聞いていたが、その横にいたセブンはため息混じりに頭を片手で押さえていた。それからシュザリアの肩を軽く叩いて、耳打ちをする。そして、数秒後

「えっ！？ 代わりに作るのがあたしの救済措置っ！？」

「学長のことだ、会場を毎年作ってたつていうのは」シュザリアに低くした声で言うてから、セブンが壮年の男性を向いた。「その高名な魔術師というのはマクスウェル・ホワイトではありませんか？」

「ああ、そうだが……お前らが作るのかっ！？ この祭りは神聖な

ものなんだ、図工なんてものじゃないんだぞ!？」

壮年の男性が言っと、シュザリアは苦笑いしながらセブンを肘で小突く。やったこともないのにどうすればいいのか、と。そして、あの学長の代わりなんかが務まるはずはない、と。

「大丈夫です。このバカ面はグヴォルトの姫君ですの」

「へ？ 姫君……。姫君いつ!? なな、な、何でそんな方がここにっ!?」

「おじさん、リアクション上手だね」

「アーク、茶化さないの。あなただって最初に聞かされた時は驚いてたでしょ？」

「うーん……。だって、全然そう見えなかったし……」

「とにかくっ!」セブンが大きな声でその場の空気を自分のものに、それからいつもの口調で続けた。「マクスウェル・ホワイトがやることになっている仕事があつて、それが停滞しているのなら、全てを我々で請け負います。遠慮なく、何でも、言ってください。お茶汲みから、事務仕事、装飾、挨拶、何から何までやりますので」そう言つて格好付けてから、セブンがシュザリアに小声で囁く。

「……シュザリア、頑張れよ」

「え？ 一人でやるの？ 我々が、つて言つてなかった？」

「これはお前の、救済措置だろう？」

意地悪そうな笑みを浮かべて、セブンが言い放った。

「学長つて、本当に毎年こんなことしてるの……?」

唇を尖らせながらシュザリアがぶつくさと呟く。現在、やっているのは会場作り。去年の会場の写真を見せてもらい、そっくりそのまま同じものを作るのかと不安になっているところだ。大樹の幹の中腹へ続く長い階段。どうやって作ったのかは不明だが、それは大樹から延びた枝のようなもので出来上がっている。地面には石畳を敷き詰め、大樹に向かって右側には来賓席と、村の楽団の席。左側には出店の出店スペース。広場の中央には一段高くしたメインス

テージ。　こんなものをどうやって作ればいいのかなんて、シュザリアにはさっぱりだった。

「学長つて不思議がたくさんあるからね」

どこからか調達した、お祭りの出店で売られるリンゴ飴を舐めるアークが言う。シュザリアと一緒に写真を見ているが、アークもまたどうやってこれを魔術で作ったかなんて不明だ。セブンはしきりに大樹の幹に触れて何か調べているし、クロエは早々にアークの家へ戻って読書をしている。

「そつだよ。学長つて、どうしてあんなに若いの？」

「さあ……？　若返りの魔術なんて理論的には可能だけど、実証されてないし。かといって、老化しなくなる魔術だって、同じく実証されていないよ。若返りにはね、体内にある魔力が半永久的に増減し及ぼすから。だけど半永久的に増減しないなんて、無機物でもない限りは……。いや、でも、ストーリーの定理さえ解明出来たら……」

「全然分かんない……」

ぶつぶつと考え始めるアークだが、シュザリアはそれについていけない。写真を眺めたまま、短く刈られている芝の上に仰向けになった。眩しい陽光を写真で遮り、ぼんやりとそれを見つめる。頭の中は真っ白だ。

「うーん……ストーリーの定理を解くには、オルディューの公式を上手く活用すればいいとは思っただけど、問題は三重魔法陣の……」

アークの呟きも頭には全然入らず、そのままぼんやりしているとさつと二人に影がかかった。写真をずらすと、そこにセブン。片手を差し伸べ、シュザリアの体を起こさせる。

「アーク、ストーリーの定理なんか解くなよ。あれは解いちゃいけないもんだから。呪われるぞ」

「えー？　でも、現代魔術理論の最大級の謎がストーリーの定理

だし……」

「ダメなものはダメだ。代わりにシュザリアとアーク。超裏技魔術教えてやるから」

「超裏技魔術？ 何、何なの、それっ？」

「がっつとアークが食いついた。目がらんと輝いている。その一方、シュザリアは会場作りに頭がいっぱいで全然聞いちゃいない。」

「これを使えば、会場作りなんかあつという間だ」

「本当っ！？ 何それ、何、何、何なのっ！？ セブン、教えてっ！」

「一気にシュザリアは復活し、セブンに擦り寄る。アークもまた、セブンによじ登り、催促している。とりあえず二人を引き剥がしてデコピンを一発くれてやってから、腰を下ろした。」

「いいか、この魔術は基本属性には属さない。いわば、純粋な魔力のみで行使用する魔術なんだ。古代、まあ……魔術理論の基礎が出来る前に使われていたのは、この魔術だ。当時の魔力は深魔の穴から漏れてくるものだけじゃなかった。つまり人間や、他の生物、無機物にまで、それ自体が魔力を有するということはなかったんだ。しかし、深魔の穴からは魔力が放っておいても滲み出してくる。それを利用した、いわば土地密着型魔術。それが、今から教えてやる魔術だ」

「……全然、訳が分からないんだけど」

「つまり、深魔の穴の魔力を使った魔術を教えてくださいでしょ？」

「そうだ。やっぱりお前は優秀だな。……それに比べ、どうしてお前はそもそも理解力が低い」

呆れるセブン。シュザリアはむっとして、ぷいっとそっぽを向いた。分からないものは分からない。仕方ないのに。というのがシュザリアの言い分ではあるが、きっちり授業を受けてさえいれば分かることだ。

「だけど深魔の穴なんてどこにあるの？ ていうか、あつたら危ないよ」

「その深魔の穴って何なの？」シュザリアが問う。「聞いたことはなくもないけど」

「うーん……深魔の穴、っていうのはモンスターが出てくる場所って言えば分かりやすいかな？ この世界の、物理を超えた遥か下に魔界があるのは知ってるよね？ 深魔の穴、っていうのはその魔界と、この世界を繋ぐトンネルみたいなものなんだよ。魔界には、こっちの世界とは比べものにならないくらいの魔力が満ち溢れてて、深魔の穴を通じてこっちの世界に漏れ出してくるの。だから、魔術を使えるのは深魔の穴があるお陰なんだよ。でも、やっぱり魔界と繋がってるからモンスターも一緒に出てきて、危ないんだ。だから深魔の穴の近くは立ち入り禁止になってるか、ちゃんと封印されてるの」

「つまり……危ない場所？」

「すげえざつくばらん。だけど、そんな感じだな」

シュザリアのまともに苦笑しながらセブンが返した。それから地面に右手を押し当てると、広場全体が淡い緑色に輝き始めた。三人の髪の毛もふわふわと持ち上がる。

「この魔術では深魔の穴から魔力を吸い上げて、その魔力が通っている場所、つまりは地形を意のままに変えることが出来る。お前らも、地面に手を当ててみる。感覚としては地下深くに自分の魔力があると思って、それを思い切り持ち上げる感じだ」

言われてシュザリアとアークが手を押し当てた。すると、淡い緑の輝きが強くなる。しかし、シュザリアもアークもそうしているだけでぷつぷつと玉のような汗が吹き出てきた。ものの10秒ほどで弾かれたように手を離してしまい、輝きが弱くなる。セブンはいまだ手を当てたままにやにやとしていて、息を切らしている二人に向かって口を開いた。

「深魔の穴から漏れ出る魔力は膨大だからな。コントロールも効かない。ここはおれがやってやるから、よく見てろよ」セブンが地面に両手をついて、ゆっくりと息を吐き出していくと輝きが先ほどよ

りも強まっていき、目が眩みそうな光になった。「汝の力、我に貸し与えたまへ。我、いにしえの力を受け継ぎし、真名なき者」

「セブンが詠唱してる……。そんなにとんでもないんだ……」

シュザリアが驚きながら呟き、その直後に一際強く輝いた。そして、セブンの口角が歪む。次の瞬間、周囲一体、全てがいびつに歪んだ。全ての輪郭が湾曲し、そうかと思えば猛烈な勢いで形を変えていく。大樹からは階段が伸び、芝が消え去って土が見えたかと思うと、その下から細かい石が現れて、それらが溶け合って石畳を成す。景色があつという間に変わっていき、光が消えると写真にあつたままの光景が広がっていた。

「わお……」

「凄すぎ……」

開いた口の塞がないシュザリアとアークは交互に呟くのだった。

No.5 湖畔の村？

「祭りの為だけに転移魔法陣が敷かれるなんて凄いわね」

まだ正式に祭りが始まっているわけでもないのに、村に続々と人がやって来ている。湖畔にテントを張ったり、宿に人がこった返したりと、観光にきた大勢の人間をクロエはシュザリア、アークと共に眺めている。村の入口付近にセブンが作り上げた魔法陣。直径20メートル程度のそこから、続々と人が出てくる。魔法陣から光が立ち上り、それが収まると人がいるのだ。一度に20人ほどの人がやって来る。転移魔法陣とされる高等難度魔法陣で、別の地点に敷かれた同じ魔法陣から物質を運ぶことが出来る。厳密にはこれもシュザリアがやらなければならぬ仕事の一つだったのだが、結局はセブン頼りだった。

「凄いでしょ？」

にこにこと大勢の人で賑わう村を眺めながらアークが返す。手にはわた飴を持ち、口の周りには先ほど食べていた焼きそばの青のりがついている。すっかり祭りを満喫している様子だ。

「ねえ、アーク。何だかすごくゴツい人たちが多いんだけど……」
そう言ったのはシュザリアで、彼女が見ているのは祭りにそぐわない雰囲気をもし出す、筋骨隆々で体中に古傷をたくさんつけている屈強な男たち。彼らも何やら楽しげな顔はしているが、それも怖い。小さい子など泣き出している始末だ。

「ああ、うん。メインイベントの一つでね、セブンが作ったメインステージあったでしょう？　そこで武道大会やるんだよ。優勝賞金はなんと100万ルル！　準優勝は20万ルルだったかな。賞金目当ての人と、その観戦目当ての人も来るから、賑わうんだよ。そうそう、それに賭博も認められてる」

「博打？」クロエが急にマジメな顔をしてアークを確認する。「それは誰が勝つか予想する方式？」

「え？ うん……」

「ふーん、燃えるわね、それ。シュザリア、アーク、有り金全部出しなさい？ 数十倍にしてあげるから」

キラんとクロエの目が光る。シュザリアはアークと不安そうに目を合わせ、それからおずおずとポケットマネーを全部出した。その総額は2万と、とんで40ルル。そこにクロエがポケットマネーを出して、5万40ルルにした。それからクロエがメインステージの方へ行ってしまう。

「そういえばクロエって賭け事好きだったね……」

「うん。でも、毎年、出場者の実力は均衡してるから、2倍くらいにしかないんだけどなあ……」

「第一回戦は5人でのバトルロイヤルになります。相手を気絶させるか、場外に出させるか、降参させて、最後に残っていた1人だけが次へと進めます。それでは、第一回戦、第一試合、開始っ！」

司会進行の男性が魔業拡声器を用いて言うと、メインステージの周囲に集まっていた観客や、選手たちから大歓声が上がった。ステージ上には頑強そうな逞しい体つきの男性が4人と、面倒臭そうな顔をしているセブン。クロエに出るように言われ、暇だったかという理由でセブンは出場したのだ。ちなみにセブンに賭けているのはクロエだけで、優勝すればなんと76倍もの配当を貰える。

「まずはお前からだ、もやし小僧！」

顎鬚にスキンヘッドをした、上半身半裸の男性がセブンへ向かってきた。欠伸をして、セブンはその男を見据える。それから、無造作に片手で男を薙ぎ払った。簡単に男がステージからはじき出されて、詰め掛けていた観客にぶつかる。

「金は腐るほどあるんだが、まあ、いいだろう。準備運動程度にはなってくれよ？」

会場全体が静まり返ったところで、セブンが言った。残っていた3人の選手らは細いセブンを完全に侮っていたのもあって、シヨッ

クが大きい。そして観客も、完璧に見えてしまったセブンと「その他」の力量差に驚愕した。セブンがそんなことを気にせず、駆け出して服からタトゥーを覗かせている男を蹴り飛ばし、その近くにいたもう一人に掌底を叩き込む。残った一人に目をやると、彼は自らステージを飛び降りて逃げていった。

「し、試合終了　ッ！　強い、圧倒的に強い！　えー、この少年はセブン・ダッシュ！　なんと王立魔術学院ホワイトウイングの3年生主席にして、年間10もの魔術理論の論文を発表し、学会にもその名が精通しているというとても実力者だ　ッ！」

「何じゃそりゃあ！」「魔術師のくせに腕っ節も強いのかよ！？」
「大損じゃねえか！」「賭けた奴いるのかよ！？」「いた、いたぞ！？」「マジでかつ！？」「準優勝だけでもいいから頼むぞーっ！」

歓声や野次が飛び交う中をセブンは肩を竦めながら通り過ぎていった。色々な声をかけられながら一先ずメインステージを後にして、湖畔へと向かう。森の中の小道を歩きながら、これからメインステージへ向かう人とすれ違っていく。盛り上がっているところは盛り上がっているが、静かなところは静かだ。喧騒を離れ、静寂の中を行く。と湖の近くに出た。

「お疲れさまっ！　楽勝だったね！」

湖のほとりに3人がいた。アークが飛びついてきて、それに返してから引き剥がす。

「これで380万ルルはいただきね。ありがとう、セブン」

「どういたしまして。……そんなに金稼いでどうするんだよ？」

「さあ。お金を稼ぐのが好きなのよ、わたしは」

そう言うクロエに苦笑し、セブンはシュザリアの隣に腰を下ろした。

「魔術なしでよく戦えるね」

「まあな。だけどルールなし、ともされているんだ。魔術を使っただけ、武器を持ち出したっていいんだ。そうだろ？　アーク」

「あ、うん。ルールは気絶させるか、場外にするか、降参させるか

だから」

「所詮は祭りのイベント。レベルは低いし、出ているおれが気の毒に思っちゃうよ」

立ち上がって、セブンが近くに落ちていた石を拾った。それを湖へ投げると、3回ほど跳ねて沈んだ。それを見たアークが真似したが、1度として跳ねずに虚しく水面に落ちていった。

「ねえ、セブン」シュザリアが言い、傍らでアークに石選びを教授するセブンを見上げた。「優勝したら、その賞金はどうするの？」

「ん？ 賞金の使い道か……。考えてないな。けど、金は腐るほどあるし、まあ経済の流れを止めることになるんじゃないか？」

「うわ、超金持ち宣言……。ダメだよ、ぱっと使わなきゃ！ あたし、欲しいものあるんだけど」

「浪費癖もどうかした方がいいぞ。少なくとも、今後の為に。で、何が欲しい？」

「ホウオウ石ってあるじゃない？ あれのブローチがね、さっき売られてたの。90万ルル」

「それはあれか。優勝賞金の9割寄越せってか？」

渋い顔をし、セブンが平たい石をアークに渡して、投げ方を教える。アークが横投げで石を湖へ放ると、2回跳ねてから沈んだ。それに目を輝かせて、アークは熱心に石探しを一人で始める。

「ダメ？」

再び隣に腰を下ろしたセブンに頭を寄せ、シュザリアが尋ねる。

それをじとりとした目で見つめてから、呆れ気味にため息についてデコピンをして引き剥がす。

「使い道もないし、いいよ。買ってやる」

「本当っ！？ 流石セブンー。ありがと、大好きっ」

「あら、セブン。もう第一回戦終わったみたいよ。早く行かないと失格になっちゃう」

クロエがムードも何もかもを無視して口を挟んだ。

「失格になったら賞金ってないよね」

「そうだな」

「セブン、早く行つてっ！ 走つて、早く！ 応援行くから！ 100メートル3秒で走るくらいで！」

急かされながらセブンが追い立てられる。苦笑いしながら、セブンはメインステージへと戻っていった。背中に聞こえるのは、アークが湖へ投げる石の音だけだった。

No.6 湖畔の村？

「だ、第二回戦ですが……残った選手……えー……」

セブンがメインステージへ到着すると、そこは静まり返っていた。喋っているのは魔業拡声器を使っている、司会進行の男性。セブンが一発で場外にした、あの空気が流れている。何があったのかとステージ上を見やると、そこに胴着と袴を着用した骨と皮ばかりの老婆が立っている。きちつと伸ばされた背筋に、細くて白い髪の毛。今にも倒れそうな年齢。もう、90歳は超えているように見える。「カクハ選手と……セブン・ダッシュ選手のみの一騎打ちと、なります……」

震えている声。他にも選手はたくさんいたはずなのに、第二回戦で一騎打ちなんて変だ。セブンが人混みを掻き分けてメインステージ上に出た。老婆　カクハ、というのだろう。彼女が両手を合わせて、セブンにお辞儀をする。会釈を返してからセブンは司会者を向いた。

「残った選手ってどういうことだ？　何で、おれとあの人しか残ってない？」

「それは私から説明させてください」老婆が言い、セブンは彼女を向いた。「あなたのご活躍は先ほど、見させていただきました。そうしたら少しだけ遊んで帰ろうと思っていた、わたしの武道家としての魂に火をつけてしましまして、ムリを言って、残っていた皆さんと大乱戦をさせていただいたのです」

「それで、あんたが残った？」

その問いに老婆が頷いて、セブンは小さく息を吐いた。まさか、年寄りが他の選手全てをのしたなんて容易に考えられない。だが、この空気は驚愕と、そこからくる不審、さらには全てを上回る期待。それらがまぜこぜになった特異なものだ。

「一応、ルールなしとはなっているが……あんたは、どの程度の武

道家なんだ？」

「少しか魔闘術を習った程度です。アンチ・エイジングの一環として50年ほど前に」

「50年もやってりゃ、アンチ・エイジング目的だとしても相当の使い手か……。ちなみに流派は？ おれは我流」

「天禅流です」

「そりゃ、凄い。じゃあ、手加減は無用だな。老いを言い訳にはしないでくれよ？ 悪者になっちまう」

セブンが拳を構えると、老婆もまた構えた。司会者は本当にこんな年の差対決をするのかと戸惑うが、どちらの実力も見ている。そして自棄になり、髪の毛をぐしゃぐしゃとかきむしってから魔業拡声器のマイクを口に近づけた。

「その年の差は、丁度100年！ 一方は17歳の若き天才魔術師セブン・ダッシュ！ 一方は御年なんと117歳！ 鍛え抜かれた天禅流魔闘術の使い手、カクハ・オーレルファー！ 勝利の女神も、どちらにつくか頭を悩ます！ 決勝戦っ！ レディ、ファイッ！」

合図と同時に両者が飛び出た。互いの右腕、肘付近がぶつかり合うとその衝撃が周囲に弾けて観客に浴びせられる。帽子やウィッグが吹き飛んで、大樹の葉がひらひらと舞い落ちる。続いて老婆が上段蹴りを放ち、それをセブンがしゃがんで回避して足払いする。だが小さく跳んで老婆が足払いをよけ、軽い掌打を三発叩き込む。それを腕で乱暴にはじいて、セブンが人差し指と中指を揃えた特異な手の形で突きを放った。だが、老婆の姿が揺らいでセブンの一撃が空を裂く。風切り音すらさせたその一撃は標的を失って、体勢を崩しながら崩れこんだ。セブンの背後から老婆が開いた両手を当て、その直後。そこから発せられた衝撃がセブンを地面へ叩きつけた。

「痛ってえ……。バアサン、あんた……。免許皆伝か何かか？」

言いながらセブンが体を起こして、胡坐をかく。顔から叩きつけられたせいで、額から血を流していた。それを拭ってから、老婆を

見据えて問う。

「まさか。師範代ですよ」

「師範代……。それなら良かった。あんまり手加減しなくても、平気だよな？」

よし、とセブンが立ち上がる。ぱんつと手を叩き、老婆に向けて腕をゆつくりと伸ばした。手は握り拳。老婆がその腕に取り組もうとし、同時に吹き飛ばされた。急に老婆が向かって行った正反対へと飛ばされたのだ。

「魔闘術も、魔術の一種。魔術とは魔力を扱う術のこと。魔闘術は魔力を用いた肉弾戦闘法。バアサン、生物は皆、魔力を備えてるんだ。それは物質に宿ったり、空気に漏れ出たり、初めから人にあつたり。そして、個々で魔力を扱える絶対量　キャパシティがある。細かな魔力の操作やら、何やらもあるんだが、このキャパシティは大きいほど、強い。10カセルの魔力を込められた魔法陣と、20カセルの魔力を込められた魔法陣。単純に後者の方が威力は2倍ある。魔闘術も魔力を用いているから、込める魔力の分だけ、その威力も跳ね上がる。魔力の単位をカセル、っていう。常人のキャパシティはだいたい120カセル。訓練次第で上限は上がっていくが、これは才能にも大きく左右される」

「お話が随分と長いのね。結局、何を教えてくれるのかしら？」

にこやかに笑いながら老婆が言い、セブンが笑んだ。

「そうだな。じゃあ、結論から言おう。おれはバアサンには負けない。おれのキャパシティ、2万カセルちよいあるんだ。実に常人の166倍。同じ技を使っても、その数十倍の威力を余裕で出せる。どーよ、このバケモノ」

「弱者が強者に立ち向かう為のものが、武術。そうやって習ったんだけれどねえ」

「そうだよな。武術はその通り。けど、魔闘術は魔術だ。バアサン、そこそこ、はき違えない方がいい。　　ってことで、そろそろこのステージを次の催しに明け渡そうぜ？　野蛮人がいると小さい子

が泣き止まないから」

再び腕を伸ばして、セブンが不敵に笑う。老婆が走り出した。地面を蹴る度、そこが挟れるほどの脚力、スピード。そっとセブンが開いた手を押すと、そこに老婆の喉の下に当たった。

「宙^{ソラ}圧し」小さく呟くと、老婆がバランスを失ったようにふらふらと後ろへ自ら行ってしまい、そのままステージから降りてしまった。「優しい技だろ？ 一回尻餅ついたら、それで終わるから」
ぱたんと老婆が腰を落とすと、それで勝負は終わりだった。

「しょ、勝者、セブン・ダッシュ ツ！ 栄えある、第329回大会はセブン・ダッシュの勝利で幕を閉じた ツ！ 皆様、惜しめない拍手を、盛大な拍手をお送り下さいっ！」

勝利を称える歓声や、騒ぎに乗じた野次がセブンへ浴びせられる。その中からシュザリアを見つけ、セブンはそっちに目配せした。老婆が再びステージ上に来て、セブンに握手を求めて手を差し伸べる。
「やっぱり強かったのね」

「バアサンも、なかなかだった」

「もう一回か二回、やりたいわ」

「はっはっ、おれはごめんだな。バアサンとやってると、ぽっくり死にそうな気がして」

握手をすると、優勝賞金の100万ルルと、準優勝賞金の50万ルル、それに二つのトロフィーを載せたカートが押されてきた。主催者の村長が来て、小さなトロフィーを手にする。セブンに直り、それを渡そうとした、直後。

「全員伏せる！」

怒鳴り、セブンが屋台の方を向いた。そこにいた、黒いフードを被った人の姿。その人物が手を上げると、メインステージの上に巨大な魔法陣が展開される。セブンも片手を頭上へ掲げると、最初に発動された魔法陣の真下に僅かな空間を空けて魔法陣が展開された。凄まじい稲光と轟音がして、メインステージ周辺がパニックに陥る。蜘蛛の子を散らしたように人々が逃げ惑い、セブンは村長と老婆を

逃がしてから屋台の方を向いた。

「見つけた、フォース・ナンバー・セブン・ダッシュ」

フードの人物が、言いながらメインステージへと上がってくる。

フードの下にあるのは無表情。中世的な顔立ちで、目にかかる髪の毛は深い藍色。パーカーを着ていて、手はポケットに突っ込まれている。その雰囲気を感じ取って、セブンはいつでも魔術を発動出来るように身構える。

「何者だ？ 折角の祭りを台無しにしゃがって」

「祭りなら、始まったばかりじゃないか。今から、ショーが始まる。ダンス・ショー。逃げ惑い、死んでいく」感情のない、冷たい声で続ける。「血染めのダンスパーティーを始めよう」

No.7 湖畔の村？

「お前の言うダンスパーティーとやらをしたいなら、リジュール地方でも行つて戦争に参加してくることだな。100万人、敵国の人間を殺せば英雄だぜ？」

相對しながらセブンが言いやる。見た目の年齢はセブンとそう変わらない少年だ。全体的に少し長めの毛髪は深い藍色をしていて、同色の瞳がじつとセブンを見つめている。体の線が細く、謎めいたミステリアスな雰囲気をかもし出している。

「戦争なんかに興味はない」彼が言い、周囲を見やると残っているのはシュザリアとアーク、クロエだけだ。「この退屈を晴らしてくれるような戦いをしたい。血を流して、骨を砕いて、怒りをたぎらせて、意識を飛ばして、その先にある、絶頂へと導いて欲しい。同じフォースのお前なら、おれを満たしてくれる」

「お前……何者だ？」神妙な顔をしながらセブンが問いかける。「お前もフォースだったのか？ 言え、番号は？ 七番^{オレ}じゃ、ないだろうな？」

セブンの体から漏れ出た魔力で、見守っていたアークは背筋に冷たいものを感じた。指先から体が震え、それが全身に広がってくる。傍にいたクロエがそつとアークの肩を持ち、それを静めてくれる。

だが、見上げたクロエの顔にも緊張は色濃く表れていた。

「魔導^{フォース}対戦用人型兵器・ナンバー・シックス。性質は陰質^{ダウ}。呼称として、ダウンと言われている。これだけ言えば満足するか？」

「もう一つ、質問だ。血染めのダンスパーティーってのは、何をするつもりなんだ？」

「殺戮ショー。頼んでもないのに血の気の多いバカ共がついて来た。今頃、好き勝手やつてる。あいつらこそ、戦争に行った方が英雄になれるだろうな」

言葉が終わるか、終わらないか。そのタイミングでセブンがダウ

ンへ向けて魔法陣を展開していた。セブンの体を向けている方向へ展開された魔法陣で、異なる文様をした二つの魔法陣が重なっている。

「今すぐ止めさせる。でなきゃ、ぶっ放す」

「それはムリだ。……あいつらはバカだから、言うことを少しも聞かない」

「それなら、てめえをぶっ飛ばしてからおれが止めてやる」

魔法陣が輝いて、魔法陣から無数の光の弾が撃ち出された。断続的で、重い、空気を引き裂く音が響く。だが、ダウンがその中を突っ切ってきた。顔色一つ変えず、片手で光弾をいなしながら接近するとセブンの顔面を掴んで、そのまま地面へ叩きつける。背中からセブンはメインステージにめり込んで、さらに上方配置魔法陣が展開された。ダウンが背を向け、首を曲げながらばきばきと骨を鳴らす。と、魔法陣から凄まじい光と轟音を伴った雷が落ちた。

「セブン！」アークが飛び出し、それをクロエが止める。「何するの、クロエ！？ セブンが！」

「大丈夫よ、セブンなら。それより、ダンスパーティーの方を止めましょう。あなたの顔見知りか、命を落とす可能性がとても高いのよ。シュザリア、あら、あの子も一応は王族なのね。もういい」

クロエが周囲を見渡すと、すでにシュザリアの姿はなかった。どんなに成績不振でも、どんなに一国の姫君と思われなくても、彼女は王族。その使命は国民を守ることにあると教育されてきたのだ。「アーク、クロエ。ちょっと時間がかかりそうだ。先に行っていくれ。……シュザリアを頼む」

メインステージ。雷で陥没した地面の上にセブンがいた。いつも着用している薄手のローブを脱ぎ捨てて、ダウンを見つめる。少しだけ息を切らしているが、それでもまだ余裕は見える。軽く跳びはねながら体を念入りにほぐし、ズボンのポケットに手を入れた。取り出したのは指輪だ。飾りのない、銀色をしたシンプルなもの。そ

れを右手の人差し指に嵌めてから、拳を握る。

「おい、六番。おれがフォースの最高傑作って知ってるよな？」

「当たり前だ。もつとも、ぬるま湯にずっと浸かっているとは聞いている。だから一番よりは強くないと踏んでいる」

「そうかい。なら、格の違いを見せてやるよ」

「……是非とも、見せてくれ。……この退屈は、そこら辺のゴミ相手じゃあ持て余すばかりだ」

二人がにらみ合うと、その直後に直径30メートルはあろう巨大な魔法陣が両者の背後に展開された。紋様は違うものの、大きさはほぼ同じ。それから、巨大な火球と、円錐形の氷柱が飛び交った壮絶な魔術合戦が始まった。

「ちょっと、あなた！ どうして、こんな酷いことが出来るの！？」

首を刎ね飛ばされた死体に、執拗以上に剣を突きたてて傷つけていく男へ向かってシュザリアが言う。幅広、肉厚の剣を持っていて、腰に通常規格の剣も佩いている。壮年くらいの男で髭の手入れをしていないのか顔は黒い。体格も大きくて、悠に身長2メートルは超えているだろう。鋼のような筋肉を全身につけている。

「ああ？ 何だ、てめえ。……なかなか上玉じゃねえか。下手な正義感なんかに駆り立てられて、死んだ方がいい思いをするぜ？ ええ？」

「そんなことしたら、あなたこそセブンに本物の地獄に落とされるんだから。今すぐに仲間連れて帰るか、わたしに裁かれるか、好きな方選びなさい」

「はっ！ ざけんじゃねえぞ、小娘。おれは指図されるのが一番嫌いなんだ。そっちこそ、本物の地獄に落としてやる！」

手にしている大剣をシュザリアへ向けて振り下ろすと、刀身から炎が発せられた。剣の軌跡をなぞった炎が大蛇のように動き出して向かってくる。

「きゃっ」

向かってきた炎の蛇を横つ飛びになつてよける。すると、炎の蛇は消えたが男が迫っていた。にやついた、下品で残虐な笑みを男は浮かべている。シュザリアが固く目を閉じると、金属音が響いた。目を開けると、シュザリアと男の間にアーク。手に刃渡り30センチ程度の短剣を持っていて、それで大剣を受け止めていた。

「オジサン、安物使つてるんだね。魔術具搭載の武器なら、もつといいの選んだ方がいいよ」

不敵に笑いながらアークが言うと、男が後ろへ跳んで距離を空けた。思い切り振り落としたはずなのに小さな子供が簡単に受け止めた。しかも、今は無防備に背を向けてシュザリアを立たせてあげている。

「この、ガキがア！ 行け、炎蛇^{えんじや}！」

刀身からまた炎の蛇が出現して、二人へ向かってくる。その数は10匹。だがアークは手にしている、装飾の目立つ短刀を前へ出しただけだった。炎の蛇がアークへ迫ると、短刀の刀身が煌いて炎の蛇を吸い取ってしまう。

「魔術具とは魔力を有する鉱石に魔法陣を刻み込み、魔術の素養がない者でも魔術を使うことが出来る道具である。魔術具は核となる鉱石に刻み込んだ魔法陣の効力だけを発動し、その格に込められていた魔力が切れると、再び補充しなければ使用が出来なくなる。また、魔業は魔力をエネルギー源とする機器のことであり、魔術具とは別物である」丸暗記した教科書の内容をすらすらと口に出してから、アークが男を見据えた。「オジサンのは手抜きだよね。核は小さいし、魔術も大したことないし。シュザリア、ここはばくに任せで。……ちよつと、頭にキテるから」

アークがここに来るまでに見てきた、多くの死体。見知った顔もあった。それら全て、同じような傷があった。執拗に体を引き裂かれた傷痕。そして、その犯人は目の前にいる。

「お前みたいなガキが、おれをどうにか出来るはずがねえだろうが！」

男が炎の蛇を再び向かわせ、それらと一緒にアークへ駆け寄ってくる。短刀を握る手に力を込めながら、アークは自分を落ち着かせる為にふーっと息を吐いていく。

「ぼくは魔術が苦手だから、この武器を使っただけど、凄いだよ。世界最高の魔術具職人グランギューロ・グランエイドの作品なんだ。名前を悪魔の懐刀デモンズ・ナイフって言うんだけど、能力が複数あるんだ。オジサンみたいなには、とびきりのお見舞いしてあげる」

悪魔の懐刀を腰溜めに構えて、アークが駆け出した。炎の蛇がそれだけでまたしてもどこかへ吸い込まれて消え去り、アークが男の懐に潜り込む。男を見上げた瞳に、いつもの無邪気で明るい光はなかった。冷たく、暗く、怒りに沈んだ双眸。

「消えてもらうから。悪魔の息吹デモンズ・ブレス」

あまりにも冷たい声。極地に吹く寒風を思わせる、冷気がその場に満ち溢れた。悪魔の懐刀を男の腰から肩の方へ切り上げると、その箇所から凍結していく。そしてアークが完全に悪魔の懐刀を振り切ると、男が斜めにずれた。切断面が凍結し、さらにそこから白い結晶が体を侵食していく。恐怖の表情を顔に貼り付けたまま、全身を凍結させた二つの肉塊を見下ろして、アークがしゃだんが。悪魔の懐刀の切っ先を氷に当て、また呟く。

「早く、消えてよ」苛立ち気味の声で言うと、悪魔の懐刀が吸収した炎の蛇が氷に纏わりつき、そのまま昇華させて跡形もなく消し去った。「もう二度と、悪さしちゃだめだよ」

No.8 湖畔の村？

「こんな老人を相手に情けないですね」

カクハ・オーレルファーが手をぱんぱんと叩きながら呟いた。彼女の足下には長髪の男が石のように固まったまま倒れている。手には魔業銃を持っていて、それを構えた体勢のままだ。誰かが放ったか、何らかのことが原因なのだろう。森には炎が盛っていて、周囲を朱色に染め上げている。

「わたしには老人っていうほど、年老いているようにも思えないけれど」

そんな声がして老婆が振り返るとそこにクロエがいた。木の幹に寄りかかっていて、金色をしたフレームのモノクルを右目にしている。

「何を言っているのです？ 見ての通り、わたしはしわくちゃの老体です」

「そうね。わたしよりは、全然、年寄りだわ」言いながらクロエがモノクルを外して、それを握り、開くと、もうそこにはモノクルがなくなっていた。「今は魔術具。レンズを通して見た生物の、生体情報を見抜くの」

そう言うってから、クロエが余裕を見せている態度で老婆を見据える。もう、全部をお見通しとばかりに。すると、少ししてから老婆がふうつと息をついた。

「ホワイトウイングの学生さんは優秀なのですね」

「それでも、わたしは不良よ？ セブンやアークの方が、よっぽど優秀。お姫様よりはましなつもりだけれど。……それにしても、凄いのね。あなたの鍛え上げられた肉体。筋力だけなら、セブンよりもずっと上。その気になったら、決勝戦でセブンに勝てたんじゃない？」

「それはどうでしょうね。わたしは50年やって、この程度ですか

ら。あの方が50年もやれば、足下にも及びませんよ。あなたも、わたしと闘います?」

老婆が拳を構える。しかし、クロエは首を左右に振った。

「いいえ。それよりも、教えて欲しいわ。……どうして、あなたはその人を殺したのかしら?」

「この方ですか?」老婆が固まったまま動かない男を見下ろす。「正当防衛と言うではありませんか」

「魔闘術を50年もやって、素人を屈服させるのに殺すかしら? 理由によつては、わたしが裁く」

下方配置魔法陣がクロエの近くに展開された。そこから漏れ出す魔力がクロエの髪を揺らす。どこか憂鬱とした雰囲気が一変し、ぴんと張り詰める。ぱちぱちと音を立てる火の粉。風に揺らめき、炎に焦がされる葉。

「仕方がなかったんですよ。セブンさんとはもつと、やりたかったのです。鬱憤を晴らそうとしたら、この方があまりにも手応えがなくて、壊れてしまったんです」

「最低ね。化けの皮を剥いであげるわよ。 エクスキューター 執行者・ガゼル」

魔法陣が輝きを増し、老婆の目を眩ませる。再び老婆がそこを見ると、巨大な鎌を肩に担いだ漆黒の甲冑がいた。全身から湯気のようなものを立ち上らせていて、兜の向こうで赤い光が宿って目となる。

「ガゼルは魔界の執行者。彼はわたしの下した裁きを実行する」

「魔術師というのは凄いですね。このお方なら、わたしも楽しめそうです」

「そう。じゃあ、心行くまで楽しんで。あなたの罪は、過剰防衛による過失致死。それと、年齢詐称。 ガゼル、やってちょうだい」

「御意」

低く響く声がクロエに答え、ガゼルが動き出した。全長3メートルはある巨躯が鎌を振り上げ、老婆へ迫る。風を裂く、鋭い音がして鎌が老婆めがけて振るわれる。しかし、老婆が刃に手を添えて

簡単に受け流した。そのままガゼルの胸当てに激しい蹴りが放たれ、巨軀が力負けして後退する。

「天禅流魔闘術・宙圧し」

間を詰めた老婆が、ガゼルに掌低を叩き込んだ。セブンのやったのとは違い、強烈な一撃だった。その一撃だけでガゼルの甲冑が碎け散り、そのまま吹き飛ばされてクロエの横の木に激突する。

「ガゼル……！」クロエが巨木をなぎ倒しながら崩れ落ちたガゼルの傍にしゃがむ。「大丈夫？」

「む、無念……。次、こそ、は……期、待……に副え、る」

言葉の途中でガゼルの姿が透明になって消えた。魔界へ送還されたのだ。ゆつくりとクロエが立ち上がり、両手を合わせている老婆を見つめる。

「たった一撃でガゼルを倒すなんて、そうそう出来ることじゃない……。あなた、何者？」

「先ほどの魔術具で見透かしたのではないんですか？」

「生体情報しか読み取れない。つまり……あなたの表面上の情報しか見られないの」

「そうですか。では、あなたが宣言した通りに、わたしの化けの皮を剥いたら、教えてあげましょう」

「……面倒臭いわね。だけど、ガゼルがやられちゃったし仕方ないわね。……やっただげるわよ」

クロエが言い、自身の前方に魔法陣を展開した。地面に対して垂直に設置されたそれは老婆へ向かっている。それを見て、すぐさま老婆が走り出した。地面が彼女の脚力に耐えられず、抉られる。セブンの闘いで見せたスピードより、ずっと早い。魔法陣の横をすり抜け、魔界の執行者を一撃で屠った一撃がクロエへ向けられる。

「魔術にはね、こんなものもあるの」言った直後に、クロエへ向かって魔法陣から光が放たれた。「アンチ・マジック反魔術」

光はクロエへ向けられていたが、攻撃する為に接近していた老婆にも注ぐ。すると、老婆から紫煙が立ち上った。すぐさま彼女はク

口エから遠ざかるが、すでに光を浴びてしまっている。紫煙は体積を増して、空へと上っていく。凄まじい量だった。少しも老婆の姿が見えずに、煙に呑み込まれてしまっている。

「これは魔術を打ち消すことを目的にした魔術。魔術って奥が深くて困るのよね。敵に回すと」

「そう、ですか……。流石はホワイトウイングの学生さんです。……しかし、わたしが姿を、年齢を、偽っていたのは周囲に溶け込むのが目的だったのです」紫煙の向こうで老婆が言っている。「そうでないと、わたしの本来の姿では浮いてしまいますから」

煙が消えると、そこに老婆の姿はなかった。代わりにいたのは、異形。

全身が薄い青色をしている。長く、角ばっている腕は普通に下ろしているだけで地面へ届きそうだ。人間とは絶対的に違う。2メートルと半分ほどの大きさ。男か女かも分からぬ、恐ろしい顔。全体的に関節部分が角ばっていて、固そうな皮膚を露出している。

「あなた……魔人？」

「違います。しかし、とても近い存在なのでしょう。とある病なのです」

「病……。もしかして、あなた……咎人なの？ 魔術の禁忌を破った者は、咎人となって神罰が下る。生死の狭間を彷徨わせられたり、魔界の最下層に幽閉されたり、人であることを奪われたり」

クロエが言うとかくハが小さく笑んだ。しかし、人の顔と違うせいか、邪惡めいたものに見えてしまう。

「わたしは詳しく知りませんが、恐らくあなたの言う通りなのでしょう。この姿を隠す為に、わたしは魔術をかけていただきました。

……しかし、悪いことだけではないのですよ、この体も。咎、とあなたは言われましたが……この姿になってからは、とても体が頑強になりましたから。さあ、再開しましょう。魔術師さんの実力というものを、見せてください」

言ってから、カクハが消えた。クロエの眼前に現れ、手刀で薙ぎ

払う。地面を抉りながら転がり、クロエが顔を上げるとどこにもいなかった。一瞬し、地面にかかっている影に気づいて上を見ると指先まで硬質化しているカクハの手が落とされていた。

「天圧衝」

小さな眩き。直後、その周囲の地面が盛大にひび割れながら抉れた。大地の欠片が衝撃で浮き上がり、崩したパズルのピースのように粗雑に散らばった。

No.9 湖畔の村？

「魔導対戦用人型兵器。通称・フォース。魔術師の生み出した、究極の戦争兵器。古代大戦の折に構想されるものの、実用化される前に大戦は終結し、平和な世になった。しかし、数百年の時を経て、戦争に利用としてドラスリム国が復活させた。そんな、太古の産物がどうして、おれなんか挑んだ？」

セブンが言いながら、血塗れのままぐったりとして動かないダウンの襟を掴んで持ち上げた。ダウンは全身に傷をつけていて、指一本も動かせる力は残っていなかった。対するセブンは多少の傷こそあれど、どれも掠り傷程度だ。メインステージは荒れ果てていて、地面には無数の衝突痕。木々は焦げて炭となり、大樹だけが変わらずに聳えている。

「少し……誤算を、していた……」

切れ切れの声でダウンが口を開いた。圧倒的なまでにセブンの力を見せ付けられ、その結果の敗北だった。魔術の威力を一つ取っても、体術における体捌きにしても、セブンが圧倒的だったのだ。

「誤算？」

「お前……程度なら、勝てると思っ……いた……。ドラスリムは……紛争で、今に……滅ぶ……」

「紛争？ そんなのはお前らが、フォースがいれば簡単に治められる」

「クーデター……。ドラスリムの、フォースが……結託し、国を裏切った……。一番から四番まで……」

「フォースが、裏切った？ あり得ない。奴らは、プログラムされてるはずだ。絶対に反逆行為なんかをしないように。なのに、何で？ そもそも、それなら、お前はどんなんだ？ まだドラスリムに飼われてるのか？」

厳しい口調でセブンが問うも、ダウンは自虐的に小さく鼻を鳴ら

すだけだった。掴んだ胸倉を揺するが、それでもダウンは力ない笑みを崩さない。それから、陰鬱にため息をついてから言葉を発する。「七番……オリジナルの方。奴が、解き放たれた……。お前なんかにも勝てず……一番や、ましてオリジナルの七番に……勝てるはずがない」

「七番が解き放たれた？ ……いつ、誰がそんなことをした？」

「聞いてばかりだな……。ドラスリムにでも……行けばいい……」

そこで、何が起きているのか……自分の目で、確かめたらいい……。そして、絶望を思い知れ……」

嘲笑するダウンの襟を放し、セブンが忌々しく舌打ちをする。死にかけの人間を痛めつける行為などはしたくない。どうせ放置したところで、妙な真似をするだけの体力も残ってはいないはずだ。荒れ果てた周囲を見やり、それから森へと入っていく。シュザリアが気がかりになっていた。

「頼むから、無事でいてくれ」

「クロエ……？」

地面に穿たれた半円形の衝突痕。そこに横たわっていた彼女を見つけ、シュザリアの顔がさっと青ざめた。急いで3メートル近く深い、衝突痕へと降りる。斜面で滑り、クロエに倒れこむようになった。すぐに体を起こして、クロエに声をかける。

「クロエ、大丈夫？ ねえ、クロエ……」

ぼろぼろの体をしていた。肌には擦傷や青痣がいくつもあつた。乱れた黒い髪の毛は泥と血がついている。クロエの体を抱き起こすようにして、シュザリアが声をかけるが、ぐったりとしたまま彼女は動かない。かろうじて呼吸はしていたが、弱々しかった。

「誰がこんなこと……」

悲痛に呟くシュザリア。衝突痕にアークが降りてきた。悪魔の懷刀を持ったままで、周囲を絶えず警戒している。

「分からないけど、クロエより強いなんて相当だよ。早く、湖畔に

運ぼう。あつちに皆が非難してるから、きつと手当てもしてくれるよ」

言いながら悪魔の懐刀を腰から提げるホルダーに突っ込んで、クロエを持ち上げる。だが、体格差と力不足のせいで、持ち上げるだけで精一杯だ。結局、シュザリアと一緒にクロエを左右から支えることにして、衝突痕から這い出た。

「シュザリアっ」

声がし、2人が右手の方を見やるとセブンが走ってきた。ところどころ破れた薄手のローブは汚れているし、セブン自身も軽傷ではあるが多少は血に汚れている。

「大丈夫だったの？」

アークがまず尋ねた。

「ああ、あいつはもう戦闘不能だ。それより、怪我はないか？」

「わたしは大丈夫だけど、クロエが……。ここで倒れてて……」

「ちよつと診せる」

言い、セブンがクロエを横にした。脈を取り、まだ生きていることを確かめる。だが、あまり良くない状態。クロエの手を軽く握り、魔力を流し込む。その際に起きる、魔力同士の反発でもって、相手の状態を見極める技術だ。

「少しも抵抗がない。クロエの体内にほとんど、魔力が残されていないな。アーク、クロエのキャパシティ、どの程度か知ってるか？」

「え？ えつと……試験やる前で、確か、8000カセルだったと思う」

「どんな状態なの？」

セブンが一旦、クロエの手を放した。シュザリアとアークを向き、小さく息を吐いてから説明を始める。

「クロエの体内には魔力がほとんどない。普通は、どんなに痛めつけられたって最低限の魔力は体内に残るはずなんだ。それなのに、そうなっていない。体力と一緒に、魔力までぶっ飛ばされたってことだ」

「そんなこと出来るの？」

「ぼく、読んだことあるよ。莫大な魔力をぶつけられると、ぶつけられた対象からも一緒に魔力が流れ出ちゃうんだよね」

「ああ、その通り。クロエはつまり、それだけのダメージを受けたんだ。そのせいで魔力が尽きかけている。物質の含有魔力が完全に消え失せてしまうと、形を成していられなくなる」

「それって……このままじゃ、クロエが消えちゃうってこと？」

まさか、とばかりにシュザリアが不安そうに言う。苦くした表情のままセブンが頷いた。

「そんな……！？ 助けられるよね？ セブンなら、大丈夫でしょ？」

「不可能じゃない。けど、おれじゃあダメなんだ。生物の魔力には固有の属性……血液型みたいなものがある。それがおれとクロエでは違うんだ。だから、おれの魔力を分け与えることは出来ない。アーク、お前は自分の属性が何か分かるか？」

「火だよ、きつと」

「それじゃあダメだ。シュザリアは王族だから属性が絶対に違う。クロエは土。他に魔術師なんてこの村にはいない。これじゃあ、手の打ちようがない……」

森の焼ける音が耳にこびりつく。朱に照らされながら、3人は黙り込んでしまう。セブンが無理と言えば、それは無理なこと。他に手がないのかと頭を働かせても、何も浮かんでこない。だが、シュザリアは何かが引つ掛かっていた。固有の属性。これが鍵。つい先日、属性がどうということをセブンが言っていたような気がするが、それが何なのかが思い出せない。

「ねえ、セブン」

「どうした、シュザリア」

「属性が、違うからダメ……なんだよね？」

「ああ。土の属性を持った魔術師がいないと、助けられない」

「必要なのは……土の属性を持った魔力で、それをクロエにあげら

「れば……助かるんだよね？」

「ああ。何か、方法があるか？」

「うー、と唸りながら、シュザリアは引つ掛かっているものを思い出そうとする。一体、何が引つ掛かっているのだろう。絶対にこれだと思ふのに、なかなか出てこない。」

「あの、あれ……あれ、何だっけ？ ほら」

「あれじゃ分らないだろう。……何のことだ？」

「あれだよっ、あの……そうっ！ 土地密着型、とか何とか！」

「言つた直後、セブンとアークの目が見開かれた。頭のいい2人が同時に閃いたのだ。」

「深魔の穴なら、助かる……よね？」

「ああ、属性つていう概念がないから、誰でも魔力を取り込める。でかした、シュザリア。急いでメインステージへ向かうぞ」

クローエを抱き上げ、セブンが来た道を走っていく。シュザリアとアークもそれに続いて、森の中を走っていく。燃え盛る火に折られた木が、突如としてセブンの前に倒れた。

「セブン、シュザリア、退いてっ」後ろからアークの声がし、セブ

ンは脇へ寄ると、悪魔の懐刀をアークが腰溜めから振り切っていた。

「デモンズ・ブレス
悪魔の息吹」

アークから一直線に冷気が迸る。それは龍を象り、激しく燃える木にぶつかり、そこから一気に森中が凍結していく。ものの数秒で辺り一面が霜と氷の世界になった。盛っていた炎までもが、氷の中へ閉じ込められている。

「これを見るとおれも欲しくなるな、グランギューロ・グランエイドの魔術具……」

小さくセブンが呟き、凍結した木を身軽に飛び越えていった。目指すメインステージは、もう目と鼻の先にあった。

No.10 「自立命令魔法陣」？

「どうして休みつてこんなに早く終わっちゃうんだろう。大したことはしてないのに……」

そんなことをぼやくシュザリアを尻目にしながら、セブンは呆れ顔で羊皮紙に羽根ペンを走らせている。場所は王立魔術学院ホワイティング図書館。うず高く積まれた本や、壁一面、それも見えないう天井のてっぺんまでぎっしりと本が詰め込まれた本棚が印象的だ。そんな場所でセブンは魔術理論の論文を書いていた。

「お前は休み中じゃなくても、大したことをしていないだろう」

「え？ そんなこと……あつたかも。でもさ、でもさ、セブン。折角の休みがもう、あと4日で終わっちゃうんだよ？ こんなのがって寂しいよ。だから、どっか行こう？ ね、近いところでもいいから」

論文を書くセブンの肩を揺するシュザリア。ため息混じりにセブンが羽根ペンを持つ手を止め、シュザリアを向いた。

「休み中にどこへ行ったか、覚えてるのか？」

「覚えてるよ。アークの村でしょ、魔業都市でしょ、アルトリズ海岸に、デイルフイレ山脈」

指を折りながら数えるシュザリア。それを聞きながらセブンはまでも重いため息をついて、シュザリアにデコピンを一発くれてやる。「痛ったい……」

「あのな、田舎に、都会に、海に、山。全部を網羅しといて、他に何を見たいって言うんだ？ その前に宿題終わっているのか？ 2年の宿題は？」

「宿題ないもん」

そう言うシュザリアだが、セブンは信じられない。長期休暇の度に宿題は絶対に出されるはずだ。それなのにないと言う。まして、シュザリアだ。宿題そのものの存在を忘れている可能性だってある。しばらく訝しく見つめていると、シュザリアはそれにむつとした。

「本当だよ。その代わりに休み明けの班対抗戦の時に、自分で作った魔法陣を見せればいいんだから」

「じゃあ、その自作魔法陣は作ったのか？」

「ううん」

「魔法陣を作るのが宿題だ。今からやれ」

「え？ そんな宿題出来るはずじゃない！」

真顔で言ったシュザリアのせいでセブンは頭痛を覚えた。論文を脇へどけ、新しい羊皮紙を広げる。そこに羽根ペンで簡単な魔法陣の図式を描いた。円の中に逆三角形。基本中の基本だ。

「復習だ。魔術を使うまでに必要な3つの段階は？」

「えっと……構成、展開、発動？」

「よし、ここまでは大丈夫な用だな。今回の宿題は、この構成の部分だ。これまではきつと、教わった魔法陣を暗記して、それを展開や発動する実技があったと思う。だけど、これからは自分で構成つまりは魔法陣そのものを考えないといけなくなるわけだ。いいな？」

「……。うん、多分」

「不安にさせる返答をしないでくれ。こつちが自信を失くす」苦い顔で言ってから、セブンは羊皮紙に魔法陣の図式をまた描く。「魔法陣の描き方は覚えてるな？ 外円を描き、その中に紋様。必要に応じて、発展的に外円の外側にストリクス文字を描き、それをさらに円で囲む。ストリクス文字を書く上では絶対にスペルミスをしてはいけないように。どんな優れた魔術でも、一箇所のスペルミスがあったせいで暴発したり、注ぎ込んだ魔力が全部無駄になって不発するなんてこともある」

「……」

「魔法陣を自作する上で大切なのは、具体的なイメージを持つことだ。順番を追って、決めていき、それを図式化すればいい。属性や、形態。展開方法。持続時間。これらのことを総合的に考えて、外円の中に書き込んでいく。シュザリア、実際に決めてみる」

言ってセブンがシュザリアを向く。

「zzz……」

こっくり、こっくりと首が上下に動く。すーすと静かな寝息が聞こえ、セブンは盛大にため息をついた。それから人差し指を立てて、目の前、何もない場所に何かを描き始める。指先の動きを辿るように光が溢れて、描かれていくのは魔法陣だった。

「属性は水。効果は水鉄砲。持続時間は3秒。対象が眠っている場合に、何度でも発動される。不眠要求^{ねるな}」

発動した瞬間、シュザリアへ向けて直径10センチほどの水が魔法陣から吐き出された。突然の水責めにシュザリアが椅子から転がり落ちて目覚める。

「あ、懐かしのお仕置き魔術……！」

ホワイトウイングに来る以前、王族として王城で教育を受けていたことのあるシュザリア。その成果は芳しいものではなかったが、よく居眠りをする彼女用にセブンが手がけた魔術だった。他に類を見ないのであろう魔術だ。

「懐かしいと言っな。……ったく、いいか、魔法陣を作る時には

「

「ねえ、セブン。あたし、この魔術がいい」セブンの言葉を遮ったシュザリアが、空中に描かれている魔法陣をしげしげと眺める。「これは眠ったら、っていう発動条件があるでしょ？ だから、これを相手が攻撃しようとしたら、とかってやれば無敵じゃない？」

彼女にはしてはいい閃きだ。そう、誉めてやりたい一方で、セブンは少しだけ呆れる。

「発動条件をつけられるほど、お前は魔法陣を上手く作れるのか？それに、相手が攻撃しようとしたら、なんていうのは適用されない。傍目に見た状態で判断出来ないとかダメなんだ。それにこの魔術は完全な後攻。一発でやられたら、それで終わりだ」

「あ、そっか……。でも、何だか、これっていいなあ。ほら、面白いじゃない？勝手にやってくれるっていうのが」

「勝手にやってくれる、か……。それなら、自立命令魔法陣っていうのがある」

言って、セブンが立ち上がった。後ろの本棚に向き合い、梯子を登って高い位置にあるぶ厚い本を取り出す。

「自立命令……？」

「魔力伝導率の高い、骨組みの組まれた媒体にコアとなる、魔力を含有した鉱石を組み込む。コアに命令内容を刻めば、あとは魔力さえ充填してやれば骨組みがコアが朽ちるまでは永続的に動き続ける。夜中に学院の敷地内をうろついてる、変な人形みたいのは見たことないか？」

「……あるかも」

「あれも自立命令魔法陣によるものだ。きっと、あれは不審者がいないかどうかの警備だろうな」

「セブン、それ教えて！」

シュザリアが目を輝かせると、セブンは彼女の前に取ってきたぶ厚い本を出した。その表紙には「魔法陣構成 - 上級編 - 」とされている。目次を開いて、セブンがとある項目で指を止める。

「難易度 A……。自立命令魔法陣……」

「どのくらい難しいかって言うと、そうだな。一本の重量が 80 キロの鉄骨でジエングをするくらい難しい」

「無理じゃない、そんなのっ！」

「手伝ってやるから、安心しろ。ただし、覚悟はしろよ。自立命令魔法陣は複雑だからな」

言うなり、その場でセブンによる「対象年齢 15 歳以上の難関魔術理論講座 - 自立命令魔法陣編 - 」が始まるのだった。

No.11 「自立命令魔法陣」？

「セブンー、勉強教え」

図書室で行われている「対象年齢15歳以上の難関魔術理論講座

- 自立命令魔法陣編 -」。

本来はシュザリアの為だけに行われていたのだが、いつの間にか20人ほどの学生が集まってしまっていた。セブンが優秀なことは学院の誰もが知っている。そして、こうして不定期にシュザリアを対象とした、目から鱗な有益な講座が開かれることも。勉強熱心な学生たちは皆、セブンの周りに集まって必死にメモやら何やらをする。そこへやって来たアークは真面目な学生たちを見やり、それからこつそり邪魔にならないようにシュザリアの横へ来る。

「ね、これは何の勉強会？」

「勉強会って言うか……。自立魔法陣、教えてもらってるんだけど」

「嘘、自立魔法陣っ！？ やった、知りたいっ！」

アークまでもが、熱心にセブンの話を聞き始める。この異様な光景をシュザリアはざっと見渡した。それから、何やら大事になっていると思っ^{ねるな}た瞬間、

「不眠要求」

シュザリアに水鉄砲がかかった。

「寝てないのに！」

「命令を書き換えた。余所見も厳禁だ。と、このように魔法陣を展開してから何度も発動される魔術の類では、勝手に魔法陣を書き換えられてしまうこともある。だから、自立命令魔法陣なんかを構成する時には一度、定着させたら二度と書き換えが出来ない、という条件をつけなければならない。これは既製品の魔術具のコアの魔法陣を書き換えられないのと同じだ。逆に使い捨てだったり、手抜きだったりする魔術具はこの命令がないから、安い。つまりはそれだけ、この条件をつけるのが複雑で難しいってことだ。他に

も自立命令魔法陣は立ち上がる、歩く、などの動作でどんな順番で手足を動かすのか。そういったことまで命令として組み込まないといけない。そうなると命令の数が莫大な数になってしまう。しかも一箇所でも紋様や、スペルをミスしてしまえば発動されない。これが自立命令魔法陣の難度の理由だ。ちなみに自立命令魔法陣の歴史は古く、

セブンの講義は、結構、早い。それなのに集まった聴衆はきっちりノートを取り、まとめ、話に耳を傾ける。アークも同様だ。カリカリと羽根ペンが走り回る音ばかりが響く。シュザリアは何だか退屈になってきて、欠伸を一つした。

「ねるな不眠要求」

「だから、寝てないのに！」

「眠気を払ってやってるんだろう」

ちよくちよくセブンにちよっかいを出されながら、シュザリアは何とか頭の中へ入れようと試みる。だが、どうにも理解するのは難しく、というよりも、全然、訳が分からなくなってきていた。

「大体さー、あんなに難しくて、どうやってわたしが構成しろって言うの……？」

「お前が言い出したことだろう。何を勝手に不貞腐れてるんだ」言いながら、セブンが子羊のソテーを口に運ぶ。「そもそも、自立命令魔法陣を前にして、難しいって言う言葉を吐き出す方が間違ってる」

二人の夕食は、相変わらず豪勢なものだ。いつものように貸切状態のレストランで、小さなテーブルを挟んで向き合うようにして食べている。ちなみに外食ばかりしているこの二人は全く料理が出来ないのだが、舌ばかりはやけに肥えてしまっている。

「それはわたしを前にして、可愛いつて言うのと同じ？」

「どこがだ。おれを前にして天才、って言うのとは同じだが」

「セブンってナルシスト」

「お前も人のことを言えないだろうに」

そんな会話をしながら、フォークとナイフは動く。

「そういえばさ、セブン。クロエって、あの後、体調はどうなのかな？」

「ああ……。もう、今は回復しただろうな。ただ、深魔の穴から漏れ出る魔力だから少し、酔いを感じてるかも知れない。もつとも、それをきちんと受け入れられるようになったのなら、キャパシティもぐんと上がるだろうがな」

アークの村で起きた一件以来、クロエは医療技術の栄えている少し遠くの街の病院に入院していた。全くの音信不通で、クロエが意識を取り戻したのかさえ、まだ連絡は伝わってきていない。

「……？」

ゆつくりとシュザリアが首を傾げ、セブンはため息をついた。そんなに難しい話をした意識は全くないのに、どうしてこうも理解能力が低いのだろう。

「いいか、シュザリア。魔力酔い、っていうものがあるんだ」

「魔力酔い？」

「そう。自分のキャパシティを超える魔力を注ぎ込まれた生物が起こす症状で、意識が朦朧としたり、頭痛がしたり、魔力の制御が出来なくなってしまうんだ。深魔の穴から漏れ出る魔力は、抑えられている状態であっても膨大だから、おれがクロエに魔力を注ぎ込んだ時も、過剰に注がれてしまった。そのせいでクロエは魔力酔いを起こしているかも知れない。でも、魔力酔いっていうのは悪い部分も確かにあるが、それさえ終われば過剰に注がれた分だけ、キャパシティが増えるんだ。ちなみに、大戦当時に強力な魔術師軍隊を作る為、わざと多くの魔術師を魔力酔いさせる実験があったんだ。けど、あまりにも過剰に魔力を注ぎすぎたせいで魔術師の多くはリバウンドを起こして魔力を全部失って死んでいった。だから、魔力酔いによるパワーアップは、今は禁止されている。いいな？」

「最後の方、よく分からないんだけど……」

「お前の先祖が決めたことだぞ？」

頭を抱えるセブン。シュザリアはうんうん唸りながら腕を組んで、何とか理解しようと頭を悩ませている。セブンはフォークに刺した一切れの肉を、彼女の方へ向けて近づけた。

「法については、また後で教えてやるから」

「……うん。ありがとう、セブン」

ぱくつとシュザリアが肉を食べようとしたのだが、さつとセブンがフォークを引いていた。カチン、と歯が合わさり、シュザリアはセブンを見つめる。そこには悪戯めいた笑み。勿体つけるようにしてセブンが口の中へ肉を放り込んでいた。

「……」

「あー、美味い」

「セブンのバカっ！」

「バカで結構。お前よか、バカじゃなければな」

デコピンをシュザリアにくれてやり、セブンはにっこりと笑んだ。

「セブンって本当に意地悪……」ぶすつとしながらシュザリアが言う、それに対してセブンが大仰に肩をすくめてから、胸元から紙切れを出して渡した。「……何それ？」

「特別だぞ。その魔法陣さえ覚えれば、評価はA A Aだ」

小さな紙切れには複雑な紋様の魔法陣があった。シュザリアが目を見開き、セブンを見つめる。感涙さえしている。

「ごめん、セブンっ！ 大好きっ！」

「誰にも言うなよ。……ま、デキが良すぎてバレちまいそんな気もするけど」

目を半開きにしながら言うセブン。その魔法陣は自立命令魔法陣。いつの間にやらセブンが構成した、特別製のものだった。

「で、これってどんな効果？」

「発動したら、発動者がそれを止めるか、発動者の魔力が尽きかけるかするまでが発動時間だ。そして、効果は魔法陣外部から侵入してこようとするものを全て拒絶すること。つまり、バリアだな。そ

れを発動すれば、その中にいる限りは安全だ。それも自立命令魔法陣だから、不意を突かれたって勝手に発動される。属性は使用者の固有属性によって左右されることになるから……まあ、お前オリジナルの魔術が出来上がるだろうな」

「オリジナル!? 凄い、セブン、好きっ!」

「本来はお前が、自分で、作らなきゃならないことだったんだけどな……。それに、これは自立命令魔法陣とは言っても、簡単な設置型の方だ」

「設置型……?」

「ああ。設置型と、人型……とでもするか。まあ、勝手に動き回るのもある。基本的には自立命令魔法陣って言えばそれを指すんだが、まあ、いいだろう。課題は自分で構成したものを見せればいい訳だから」

「そうだね」

「……何度も言うけど、本当はお前が自分でやらなきゃならないことなんだからな?」

「分かってるって。大丈夫、大丈夫。やる時はやるから」

その「やる時」というのがいつなのかは分からないが、セブンはこちら辺で引き下がっておいた。シュザリアはあまり集中力が持続しないタイプ。だから、いくら言ったって覚えちゃくれない。もう、何年も共にして分かっていること。それでも、くどく同じことを言ってしまうのはまだ諦めきれていないから。

「本当、頼むからな」

疲れ顔で言ってるが、シュザリアはにこにこ笑いながら紙切れに描かれた魔法陣を見つめていた。

No.12 班別対抗魔術戦？

「さあ、今日は待ちに待った班別対抗魔術戦です。それぞれの班ごとで力を合わせて、優勝を目指してください。なお、今回の優勝商品はグランギューロ・グランエイド作の魔術具です。勿論、この順位によって各個人の成績も良くなったり、悪くなったりしますから、同じ班の仲間を思って優勝を目指しましょう」

魔業拡声器を使って喋るのは学長のマクスウェル・ホワイトだ。いつもの柔らかな物腰。擂鉢を縦に真つ二つにしたような闘技場。ステージは低い位置にあり、それを見下ろすようにして机や椅子が段々になっている。マクスウェルはその一番前の席にいた。職員用の席が最前列正面に陣取ってあるのだ。

「セブン、今回はトーナメント表どうなってる？」

マクスウェルの挨拶が続く中、観客席に座っているアークが後ろを振り向いて尋ねた。そこにセブンが座っていて、手にした紙をじっと見つめている。班ごとに観客席に座っているのだが、クロエの姿はそこになかった。

「相変わらず、おれ達だけ偏ってる。7回勝って、ようやく優勝だ。決勝戦までに6回。反対側はたった3回勝っただけで優勝出来る」

セブンの手にしているトーナメント表。一番右端に「第七班」とされた文字があるのだが、そこから伸びる棒はとにかく、他の棒とよくぶつかる。これは単にセブンの戦闘能力が評価されてのことなのだが、なかなかえげつない。これを決めるのは毎回、学長であるマクスウェルだったりする。

「こういう時だけ、どうしてセブンと一緒にいたんだろうって思う……」

「そんなに都合が良かったらおめでたいな」

シュザリアの呟きに言い返し、セブンはトーナメント表をアークへ寄越した。戦闘における諸注意が終わり、そろそろ第一試合。口

ーブの襟を直し、セブンが席を立った。アークもトーナメント表をポケットにしまい、シュザリアが重いため息をつきながらセブンに手を引っ張ってもらい、立ち上がる。

「ルールは変わってないみたいだな。相手を全員場外へ追い出すか、降参をさせるか、戦闘不能の状態にさせるか。殺しや、重傷を負わせるような行為は厳禁。その他もろもろ、まあ、引っ掛からないだろう細かなルール……。今回も、おれ一人で楽勝だな。シュザリア、アーク。おれの代わりに前線出るか？」

「遠慮します」

揃った声がし、セブンは苦笑しながらため息をついた。軽く柔軟をしていると、魔業拡声器で凜々しい女性教官の声が響く。

「第一試合、第一回戦！ 第七班対第十二班！ 双方、出場！」

声と同時にセブンが跳んだ。身軽に、優雅に、観客席から闘技場へと降り立つ。

その登場に生徒らから、大歓声上がる。中には「死ね」「単位寄越せ」「シュザリアと別れる」など、個人的な恨みをぶつける者も多いが、それでもセブンはそれらを受けてどこか、楽しげだ。続くようにして、向かいから第十二班の四人がやって来る。彼らは普通に東側入退場出入口からだ。遅れ、シュザリアとアークが西側入退場出入口から登場。

「双方、準備はいいな？」審判を務める女性教官が言い、第七班と第十二班の双方が頷いた。「では、レディ、ファイッ！」

爆竹が幾つも連続で鳴ったような爆発音がした。それが試合開始の合図だ。すかさず、第十二班の面々がやってくる。一年生と二年生が、手にした長い槍をセブンへと突き出した。踏み込みで闘技場床の石畳が割れる。それを見てセブンはひゅっと短く口笛を鳴らしながら、半身になって避けた。

「まず、2人。宙圧し」

とんと軽い衝撃が2人を襲う。それだけなのに、意に反して体はよろめき後ろへ、後ろへと後ずさっていつてしまう。

「あれは魔闘術の高等難度の技です。見た目では、ただ単に軽く手の平で押されただけです。絶妙な魔力のコントロールをもって相手の体内の魔力を乱し、それによって平衡感覚を奪い去るのです。本来はそれだけの技ですが、セブンはさらに命令魔法陣を同時に発動し、重力でもって相手を後ろへ後ろへと追いやってしまうのです」
マクスウェルの解説が入り、熱心な生徒の何人かがメモを取る。そんな解説を聞きながら、セブンは残っている三年と四年へと向かっていく。

「おれを甘く見るな、セブン・ダツシュ！」

手にバンデージを巻いた四年の生徒が突きを繰り出した。それをセブンが避けようと横へのフットワークを試みた瞬間、何かを踏んだ。ちらと足下を見やれば、そこには魔法陣。大きくはないが、右足が完全にその中にある。三年の生徒が魔法陣を発動していた。

「土属性。性質変化。絡め取れ　クレイ・ジェラシー泥の嫉妬！」

セブンの右足が突如、地面へと埋まっていく。その感触は泥のそれだった。咄嗟に足を抜こうとするも、強い力で右足がずんずん埋まっていつてしまう。

「まだ終わらんとぞ、セブン・ダツシュ！　バーニング・ガーデン業火の園！」

四年生がセブンの頭上に魔法陣を展開した。それが輝き始めると、周囲に熱気が満ちる。ちっとセブンは舌打ちをし、シュザリアを振り返った。

「シュザリア、あれをおれの周囲に展開させる！」

「あ、うん！」

言われ、シュザリアが目を瞑る。魔法陣の構成を思い出すのだ。教わったばかりの、セブンと一緒に作り上げた魔法陣。細部まできっちり脳内に描き、それを展開する。セブンの頭上の魔法陣から巨大な燃え盛る火球が落ちてきた。それを睨んだまま、セブンはシュザリアを待つ。

「えっと、　ティア・ドロップ発動！　一雫の涙！」

セブンを中心とした直径2メートル程の魔法陣が展開された。そ

れが輝き、寸でのところで火球を受け止める。すると、火球が半円形のシールドに吸い取られた。すぐさまセブンが魔法陣から飛び出して、三年生へ迫る。

「なかなか、いい魔術だった。けど、おれ相手には二度と使わないことだな」

眼前で言うなり、セブンが手の平を向けた。そこには小さな魔法陣。属性は水。ただその場に水を定着させるだけ。だが、その手の平を相手の口と鼻へ押し付けた。

「殺しやしねえから、安心して寝てろ」

発動している魔法陣を書き換え、セブンが言う。すると手の平から濁流があふれ出して三年生をそのまま場外へ押し出す。四年生を振り向くと、鋭いストレートが飛んでくる。その一撃がセブンの顔を打ち抜き、教官を含み、生徒らにまで大きな驚きとどよめきの声漏れた。しかし、セブンは顔面に拳を受け止めたまま、動かない。

「流石に四年はいいのを打ち込んでくるな。けど、まだ弱え」

拳の陰から覗いたセブンの笑みに、四年生は怯んだ。残虐な笑みを口の端にぶら下げて、ぎらつく瞳は今にも襲い掛かってくるような魔物のそれ。背筋を冷たいものが駆け抜けるのを感じると、セブンの顔がにたりとしたものになったのを見た。

「おれだけに注意してちゃ、ダメだよな」

デモンズ・ブレス
「悪魔の息吹」

背後からアークの声を聞き、振り返ると同時に凄まじい冷気が四年生を襲った。威力は控え目で、それでも四年生の彼を力チコチに固めてしまう。同じ線上にいたセブンは自分でシュザリアに教えた魔術・一雫の涙を発動して回避していた。

「勝者、第七班っ！」

魔業拡声器で告げられ、大歓声が上がった。シュザリアとアークがセブンに駆け寄ってくる。

「アーク、ナイスだ」

「うんっ！」

「シュザリア、もっと発動までの時間を早くしろ」

「えー？　そこでダメ出ししちゃうの……？」

言いながらセブンが西側入退場口から出て行く。そこから次の試合に出てくる生徒らが出てくる。普段はすれ違う人間に対して気を留めないセブンだったが、その人物を視界に捉えたまますれ違い、足を止めた。

「セブン、どうかしたの？」

シュザリアの問いかけに答えず、セブンが彼を追いかけていく。頭からすっぽりとフードを被った人物。パーカーのポケットに手をつ突っ込んだまま歩いている。彼の肩を掴んで引き止めると、セブンは目を見開いた。

「何で、お前がいるんだ。　六番」

深い藍色をした毛髪。端整ではあるが、無表情な顔。陰鬱な雰囲気。フォース魔導対戦用人間兵器・ナンバー・シックス。

「いたら悪いのか？　……マクスウェル・ホワイトに、呼び出されただけだ。生徒として」

セブンの手を払いのけ、ダウンが言う。それから、闘技場へと出て行った。通路にセブンは取り残され、ダウンの背を睨んだまま動きを止めた。

「何で、あいつがここに呼び出される」

小さな呟き。誰に聞かれることもなく、そのまま消え去ってしまった。

No.13 班別対抗魔術戦？

「えー、突然ではありますが、転校生をこの場で紹介いたしましょう。彼は3学年に編入してきた、ダウンです。セブンと同等程度の実力を持っていますから、皆さん、本気でやっちゃって下さい」

魔業拡声器でもってマクスウェルから伝えられた第五班の全員は疑惑を込めてダウンを見つめた。事故で退学した第十班の穴を埋めるべくして、そこに加えられたダウン。未だに第十班の生徒も、ダウンのことは今朝になって知ったばかり。まして、ダウンは打ち解けようとする素振りすらも見せず、ただ一言だけ「邪魔はするな」と言いつけただけで前へ二歩、三歩と出ている。

「第二試合、レディ」開始の声を待ちながら、ダウンはフードを取った。その瞳に陰鬱な光が宿っているのを見た第五班の一年生女子生徒は、それだけで腰が引けてしまう。「ファイ！」

「こんな余興、さっさと終わらせてやる。
クラッシュ 轟圧撃」

眩きの直後、突然に第五班の全員を中へ入れた下方配置魔法陣が展開された。その大きさは、直径20メートルはあるだろうか。普通、この規模の魔法陣はいくら優秀とて、学生がたった一人で展開し、まして発動することも難しい。出来るとすれば、一握りの四年生か、セブンか。マクスウェルの言葉に半信半疑だった生徒が、やっと、その光景を見て信じた。いや、信じざるを得なかった。

「潰れて、消えろ」

言い捨てた直後に魔法陣が発動され、轟音を響かせながら魔法陣の敷かれた場所が瓦解していく。それは地面だけではなく、その上にずっと続いていく空気も。そして、魔法陣に閉じ込められた第五班の生徒も破壊する。土属性は力で力を制する、剛胆な性質。その上で、効果は魔法陣の範囲上に対する震動。空気さえも震えさせ、物体を内側から破壊する。第五班の全員が、痛みと苦しみ、恐怖から喉が枯れんばかりの声を漏らす。ダウンはそれを見てから、さら

に魔力を注ぎ込むべく片手を前へかざす。

しかし。

まだ魔術の効果が続くはずだったのに、いきなり魔法陣が消え去ってしまった。ダウンが自分の手を見て、それから魔法陣を展開させていた場所を見やるとそこにセブンの姿。右手の人差し指に銀のリングをはめ、ダウンを睨んでいる。乱入して魔法陣を消し去ったのだ。

「てめえ、ルール知ってやがるのか？」

「ルール……。途中で第三者が試合を止めてはならない、ということか？」

「そうじゃねえ！ 相手を殺すか、重傷を負わせるべく行為は厳禁。てめえがやってんのは、それに反する」

言い、セブンが失神した第五班の生徒を抱き起こし、脈を取ってから審判の女性教官に頷いて見せる。

「こいつ懲らしめるんで、ここは任してください」

割れた石畳にセブンが手の平を押し付け、そこに魔法陣を展開した。すると、瓦礫の破片が歪な人型を作って動き出す。気絶した生徒を担ぎ上げ、そのまま建物内の保健室へ持っていつてしまう。即興の自立魔法陣だ。

「弱い奴等が弱い。戦場に出て、そこで死ぬのは誰のせい。相手が強いから？ 言い訳にすらならない。死ぬのは自らが鍛錬を怠ったから。それから、才能を貰えなかったからだ」

「ああ、そうだ。そりゃ、死んだ奴のせいさ。だがな、六番。ここは学院で、戦場じゃねえ。いつ、いかなる状況下であろうと、規律を乱す者がいればそれを粛清するのがおれの役目。覚悟しやがれ。てめえは、この王国魔導騎士セブン・ダッシュが裁く」

「やってみろ。お前程度でなければ、こちらも満足が出来ん」

ダウンがまた、先ほどと同じ魔法陣を展開させた。それを見たセブンもまた、ダウンの足下に下方配置魔法陣。発動しようとしたところで、両者が舌打ちをした。互いが発動した下方配置魔法陣の上

に、相手が上方配置魔法陣を展開していたのだ。それも、上方配置魔法陣の方が下方配置魔法陣よりも威力が高くなるという相関関係がある。だから、発動したところで無駄になってしまう。

薄手のローブを翻しながらセブンが駆け出した。細身の長剣魔術具を手元に出現させる。そして、それで斬りかかった。だがダウンは唐竹割りのそれを半身横に退いて回避し、軽いが細かな掌打を繰り出す。セブンの額を、喉を、胸元を一瞬で撃ちぬき、さらに肘鉄が頬へ炸裂した。勢いのままに転がされ、セブンが受身を取ってダウンを見やる。と、セブンを取り囲む形で六面の魔法陣が展開されていた。対象を取り囲む複数枚の魔法陣は立体魔法陣と呼ばれ、高等難度で知られる。相互に作用し、高まりあつた魔力。それが属性を雷に変化させ、セブンへ向かつて牙を剥く。

「フラッシュ・ボックス
万雷の箱」

網膜を焼き尽くすかのような、強烈な光が固唾を飲んで見守っていた、ほぼ全員の視界を白に染め上げた。一部の生徒は咄嗟に目を背けたり、魔術を使ったりしてそれを避けられた。ちなみにマクスウェルはお茶をすすりながら、懐から出したサングラスでもって悠々と対処していた。魔術が解除されると、セブンが無傷のままダウンへ飛び出した。ローブすらも焦げ跡一つない。

「先日もそうだった。何故、どうやって、お前は魔術を無効化する」「企業秘密だ、根暗野郎」迫ったセブンが長剣を突き出すと、刀身が一気に伸びた。ダウンはそれを咄嗟に避けようとしたが、かわしきれずに頬から血を流す。「お返しを、食らえ。
ファイア・エクスタシー
赤の絶頂」

長剣がセブンの手の中へ吸い込まれるようにして消え去り、その手をダウンの鳩尾へ掌底として叩き込んだ。するとダウンの服の上に魔法陣の紋様が浮き上がる。ダウンはそれに目を見開くのだった。が、このような魔術を知らなかった。円陣になっていない魔法陣。そんなものは存在しない。はずだった。少なくとも、ダウンの中で、この瞬間までは。

「七番目を、ナメンじゃねえぞ……!!」

紋様は赤色に輝き、セブンの言葉に呼応するようにしてその輝きを増した。そして、ダウンは全身を泡のような赤色の炎に包まれる。完全に呑み込まれてしまうと、外からは繭のような物体にしか見えない。だが、その中ではダウンが灼熱の業火を味わっていた。皮膚が溶け、肉は焼け、骨は灰となり、思考は赤の、その一色によって塗潰される。

セブンが銀のリングを外して、ローブのポケットに突っ込んだ。そして、再び長剣の魔術具を出すと袈裟掛けに赤い繭を斬りつけて切断する。切断面から赤色が逃げるようにして空气中へ漏れ出すと、ステージ上だけでなく、全体に酷い熱気が満ち溢れた。繭から解放されたダウンが膝から崩れ落ち、セブンは長剣の刃を彼の喉下へ突きつける。

「次はこんなもんじゃ、済まさねえぞ。……学長、おれは失格でも構わない」

それだけ告げると、セブンはステージを降りてそのまま闘技場から出て行ってしまった。

まだ始まったばかりの班別対抗魔術戦だったが、この一大ハブニングによって、続行か中断かの会議が開かれてしまうのだった。

「それにしてもよ、マクス。ダウン、だっけか？ あれはドラスリアムのフォースで最後まで、国についていた奴だろうが。それを置いといていいのか？ 早速、今日だってやらかしたんだぜ？」

班別対抗魔術戦が中止となった、その日の午後。学長室に一人の男がやって来ていた。小麦色をした髪に鍛え抜かれた、引き締まった体躯。その年齢は40歳代ほどに見える。だが、そこに年老いたような印象はなく、その立派な体格がそう見せるのか、むしろエネルギッシュな印象を見た物には受けさせる。

「そんなのは杞憂でしかありませんよ、グラン。すでにドラスリアムは内乱で半壊状態です。フォースの一番か二番がいるのならまだしも、他に対しては大きな期待など寄せないでしょう」

一人掛けのソファに座り、書類に目を通しながらマクスウェルが答える。それから、ふと顔を上げてグランと呼んだ人物を見やっ
た。

「それよりも、セブンはどうでした？」

「ああ、いいデキだな。フォースの最高傑作つてのも頷ける。でも、
ありゃあ、蓋がされてる状態だぞ？」

その指摘にマクスウェルがええ、と頷いた。それからぶ厚い本の
並ぶ本棚へ向かい、そこから一冊の本を出す。それを開くと、本で
はなく箱になっていた。見た目はぶ厚い本だが、中身は箱のように
くり貫かれていて、そこにセブンがしていたのと同じ銀色のリング
が納められていた。

「これが、魔封具です。セブンは手加減をして勝てないであろう相
手とやり合う時に、これをつけるように言いつけてあります。そう
でないと、手加減が出来ないで周囲を全部壊してしまいますから。

まあ、通常は本来の数割にも満たぬ力で圧倒出来るから、外してい
ても関係がないのですがね」

「ほー。つまり、わざとこれで自分の力を封じないと、それなりの
力を出して強い相手とやり合っても、コントロールが効かないと？」

「ええ。相変わらず、聡明ですね。……見た目に違わず」

「何か言ったか、腹黒野郎」

「いえ、何も」笑顔でマクスウェルは返して、リングを自分の右手
の人差し指にはめた。「かつては、わたしもこれをしなければいけ
なかったのですが……老いとは怖いものですね」

どこか遠い場所を見るような目をし、マクスウェルが呟く。グラ
ンはふんつと鼻をならして背を向けてしまう。学長室の出入口とな
っている扉のドアノブに手をかけ、そこで首だけ振り向いた。

「おれ達は、いつくたばってもおかしくねえ存在だろうが。今さら、
そんなことを言ってるんじゃないよ、マクスウェル」

「そうですね。……もう、我々の逝くべき場所は幾度となく世代交
代してしまいましたし。今日は申し訳ありませんでした。ハブニン

グで、あなたへの仕事がなくなってしまうました」

「構わねえ。おれのモンを持つてる小僧がいたからな。あれをちょっとメンテナンスでもして、帰るさ」

「分かりました。では、またいつか会いましょう。 グランギュー

ーロ」

片手を上げ、グランギューロが学長室を出て行った。それを見送ってから、マクスウェルは魔封具を元に戻すのだった。

No.14 魔術具職人グランギューロ・グランエイド

「それにしても、何であの人……ダウン、だっけ？ 学院に来たん
だろう」

夜。アークがベッドの胡坐をかきながら言った。シャワーから上がったばかりで、髪の毛が濡れている。セブンは私物としてここへ持ち込んだオークの机に向かい、今日も論文を書き上げている。

と、思いきや、今回は反省文を書かされている。反省など微塵もせず、言葉だけを適当に並べていく作業をしている。しかし、何となく筆は進んでいなかった。論文を書いている方が、進みはダントツに早かったりする。

「さあな。学長の気まぐれか何かだろうが。……もつとも、お前の村でおれが倒して、また戻った時には姿を消していたけど。それがあんな場所に出てきて、おれがとうとう狂っちまったかと思った。

それにしても、グランギューロ・グランエイドの魔術具ってのは魅力的な賞品だったな。惜しい
デモンズ・ナイフ

「ぼく持つてるもん。悪魔の懐刀。いいでしょ、いいでしょ？」

自慢するアーク。つまらなそうにセブンは舌打ちをし、それから反省文に向き合う。出された課題などの類は、その日の内にやってしまうのがセブンのスタイルだ。だが、アークが自慢すべくセブンの背中から押し掛かってきた。分かった、分かった、と適当に流そうとするもしつこくリアクションを求めてくる。学業優秀なアークだが、こういうところではまだまだ年相応だ。

「邪魔だ、離れろ」

「えー、やだ。何か教えて。ね、ね、立体魔法陣教えてよ」

「お前はキャパシティが異様に少ないからムリだ」

デコピンをされ、アークが剥がされた。怨めしそうにセブンを見やりながら、しかし、諦めてベッドへと戻った。セブンは夜が遅い。何もなければ眠るのはいつも日付が変わった後だ。それに対して、

アークは夜9時になれば自然と眠くなってしまう。

「あーあ、ばくもキャパシティ増やしたいなあ……」

「普通は成長するにつれて、キャパシティも増えていく。お前は飛び級入学して、周りの連中よりも成長してないんだから、現時点で少ないのは当たり前だ」

「そうだとしても、ばくは……少ない方でしょ？ 入学直後の検査で、分かったもん。たまたま居合わせた学長がいなかったら、入学も出来なかったんだよ？」

「入れたんだ。良かっただろ。……それとも、魔力酔い起こして、無理やりにキャパシティ増やすか？」

「それは、ヤダ……」

「増やしたいんだろ？」

「だって犯罪行為だし、苦しいし、痛いし、気持ち悪いんでしょ？ ヤダよ、そんなの」

ぷいっとそっぽを向いたアーク。セブンの目論見通りに話がそこで打ち切られ、もそもそとアークは毛布を被った。灯りをしぼってアークが眠れるようにセブンは黙って作業に戻る。しかし、そこでノックする音がした。アークが体を起こし、セブンもまた手を止める。2人がアイコンタクトをしてから、不審がりながらもドアへ向かった。

「はい」

扉が開くと、そこにグランギューロがいた。だが、2人はこの人物がつい先ほどまで話していた魔術具の職人だとは知らない。見知らぬおっさんがいきなり訪ねてきた、とは思えなかった。

「よお、ちっこい方に用がある。いるか？ おお、いるじゃねえか。お前だ、小僧」

「おい、その前に誰だ？ 名乗れ」

グランギューロがセブンの陰から覗いたアークを見つけたが、そんな言葉で拒まれてしまった。

「おれはグランギューロ・グランエイド。昼間を見せてもらった

が、セブン。今はお前に用はねえ。おい、チビっこ。何て名前だ？」
名乗ったグランギューロにセブンとアークが疑惑の眼差しを向ける。言葉を発しないままにアークがセブンの袖を引っ張ると、しゃがんだセブンに小さな耳打ち。

「ねえ、職人ってこんなにフランクな感じ？」

「お前が気になったのはそこなのか？」アークに呆れながら返し、セブンは再びグランギューロを見やった。「信用ならない。証拠は？」

「証拠だあ？……面倒臭え野郎だな。……ほら、じゃあ、手え出せ」

少し躊躇い、セブンが片手を出した。グランギューロがその手を思い切り握りしめ、反射的にセブンも思い切り握り返す。だが、力負けして手を振り払ってしまった。指の節々が痺れたように痛み、驚愕しながらグランギューロを見やる。フォースである自分よりも、純粹に力の強い存在などそうそういない。

「てめえ、何者だ……」

「だから、グランギューロ・グランエイドだって言ってるだろうが、そっちの小僧が持つてる、おれの造むすこった武器に会いに来たんだ」

「本当にっ！？」

食いついたのは、言わずもがなアーク。セブンを押しやり、前へ出てグランギューロを爛々と輝く純粹な眼差しで見つめる。無邪気な、透き通った眼。それを見下ろしながらグランギューロは珍しいものを見るように眉間をくぼませる。

「上がらしてもらっぞ。悪魔の懐刀持つてこい」

遠慮という言葉など知らぬかのようにグランギューロはずかずかと上がりこむ。アークもまた、ぱたぱた走って悪魔の懐刀を取りに行ってしまう。戸口でセブンは一人残され、舌打ちをした。仕方なしに扉を閉め、自分の机へ戻るとそこにグランギューロが思い切り腰を下ろしていた。書いていた反省文を雑に脇へやり、そこに何やら道具を出している。

「……そこは、おれの場所なんだが」

「気にすんじゃねえ。禿げるぞ」

「もう好きにしてくれ」

言い返すのさえ嫌になり、セブンは自分のベッドへ座ってしまう。グランギューロが帰ったら、それから取り組めばいい。提出期限はまだまだ先だが、早く片付けてしまいたいのがセブンの性分だ。

「これで魔術具作るの？」

悪魔の懐刀を包んだ布を持ってきて、アークが言った。机の上に広げられた道具は大工道具に見えなくもない。ノミや、小槌や、キリ。グランギューロの持つ道具はどれも年季が入っていて、汗や泥などの汚れにまみれて黒ずんでいる。

「魔術具は二通りの作り方がある」横からセブンが口を挟み、説明を始めた。「一つは、魔法陣をそっくりそのまま、それらの道具を用いて刻み込む方法。これは後書きされる心配がない。それに魔業を使えば簡単に量産も出来る。けど、どうしても威力は二つ目に劣ることがある。二つ目は魔術でもって刻み込む方法だ。魔法陣をそこへ定着させる為に、ずっと気が遠くなるようなほどの手間と労力、それに時間をかけて魔力を注ぎ込む。こっちの方が威力は高いし、複雑な紋様を刻み込むことが出来る。けど職人の腕がそのまま出るし、一つ製作するのに短くても2週間から、長くて、そうだな……5年はかかる。だから、前者は安物として、後者は高級品として市場に出回る。そうだな、グランギューロ・グランエイド」

「厳密には違う」その回答にセブんとアークが目丸くする。セブンが間違っているのは、あまりないことだ。「おれが作るのは高級品。それ以外は、安物だ」

自信に満ち溢れ、それでいて傲慢過ぎるくらいの言葉。その物言いにセブンは呆れ、アークは目を輝かせた。悪魔の懐刀をグランギューロの所へもって行くと、彼が布を取る。現れたものを見てから、ほう、とグランギューロは小さく納得するような声を出した。

「チビっこ、お前、キャパシティがないだろ？」

「へ？ 何で分かるの……？」

いきなり言い当てられ、アークが目を大きくした。グランギューロがにやりとした笑みを浮かべながら悪魔の懐刀を手に取り、白刃を見つめる。その刀身は30センチ程度。片刃で、先端へ近づくとつれて僅かに反る。鍰のようなものはなく、柄から直接、刀身が伸びている。柄には赤い綺麗な玉が埋め込まれていて、これが核となっている。覗き込めば、向こう側には複雑に刻み込まれた魔法陣が見える。

「キャパシティは大体、20から30ほど。随分とお粗末だな。体質か。それを悪魔の懐刀の含有魔力で補っているんだな。まあ、お前のようなチビっこにはおあつらえ向きってとこだ。けど、悪魔の息吹と吸収しか使ってねえのか。いや、ここ数年、使った形跡がないってことは……知らねえだろう？ それから、お前の属性は火。ほー、お前の両親のどちらかはなかなかの魔術師だったみたいだな。他には……何だ、お前、魔法陣を作っても試すことはねえのか。勿体ねえな」

次々とアークは自分のことを知られていき、ぽかんと口を開ける。まして、自分でも知らないことや、自分しか知らないことまでグランギューロによって暴露されていく。驚き半分、羞恥半分といった様子で固まったまま、アークはセブンを見やった。セブンもまた驚いてはいたようだが、怪訝そうに顔をしかめていた。

「どうして、分かるの……？」

「ああ？ コイツはおれの息子も同然だ。それと会話して、何が悪い？」

「会話？」

俄かに信じられない。セブンは余計に顔を苦くしながら何か言いかけたが、止めた。グランギューロは間違いなく、魔術具職人として最高の人間。その道の達人にしか分かりえない境地というものがあるのだらうと推測しつつ、しかし、やっぱり信じ難い。

「さて、じゃあ魔力を一応充填しておくか」

「充填？ 含有魔力なくなっちゃってるの？」

グランギューロの言葉で表情に不安の影を広げ、アークが問う。
だが、グランギューロは首を左右に振った。

「いや。まだ含有魔力そのものは残ってる。けど、コイツも古い。レスポンスが少し悪くなってるやがる。だからおれの魔力を流し込んで、魔力の通り道を掃除してやるだけだ。2、3日はこの街に残ってるから、何かあったら来い」言い、グランギューロが悪魔の懐刀に魔力を注ぎ込んだ。綺麗な白色の光が悪魔の懐刀の核から発せられ、しばらくしてから収まる。「コイツも、お前のことを気に入ってるみたいだな」

No.15 お使い

王立魔術学院ホワイトウイング。単位制。1コマ90分の講義が日に7時間まで開講されている。生徒はそれぞれ、必修科目さえ履修していれば問題はなく、それは週に10時間程度しかない。故に平気で休みの日ばかり多くなる生徒もいるのだが、成績を良くしようと思えば多くの講義を履修した方がよい。必修講義を全て受け、問題なく単位として認められ、それで初めて最低限の成績となるのだ。故に成績優良者というのは休みなく、毎日、毎時間、何らかの講義を履修している。セブンの場合も同様で、彼は朝から晩まで、今さら習わずとも知っているようなことを学んでいた。

「ねえ、セブン。後でノート見せてっ」

3限の講義「現代魔術論 ? - C」が行われる大講堂へ向かっている途中で、シュザリアがセブンに飛びついた。飛びつかれたまま、セブンはちらと目で見やっってから歩き続ける。

「勉強が苦手なのは分かる。けど、講義の全てを寝て過ごして、拳句に悪あがきを企むのは往生際が悪いぞ」

「分かってる、分かってる。分かっているから、ノート丸写しさせて」「絶対に分かっちゃない……。ったく、仕方ないな……」

脇に抱えた教科書やらノートやらの束から、前の時間の講義である「古代魔術史 A」のノートを出し、それをシュザリアへ渡す。何だかんだ、説教じみたことを言いながらもセブンはシュザリアに甘いのだ。

「ついでに宿題、後で教えて」

「……夕食の後、331教室。借りとく」

「ありがと、セブン。じゃ、またねー」

ぱたぱたとシュザリアが駆けていき、セブンはため息。履修の登録をする際、シュザリアに頼み込まれて学年に関係のない講義を取ったのが事の発端だった。セブンがいるという安心感からシュザリ

アは講義を睡眠時間に充てることが常になり、何かとその講義はセブンに頼りすぎている。

「おお、いいところにいたっ」

不意に声をかけられてセブンは足を止めた。学院の事務員をしている青年が、後ろから走りよってくる。どうやら目当てが自分らしいことを察知し、セブンは振り向いて彼を待つ。

「何か？」

「セブン・ダツシュ君。きみ、公欠にしてあげるからぼくのお使いに行ってもらえないかな？」

事務員のこの青年は、名をキールと言う。金色の髪は決して短くもないが、そう長くもない。年齢は22歳ではあるが、気さくで優しいところが一部の女生徒に人気もある。また教官や教授らからは誠実な人柄を評価されている。キールと大した話をしたこともないセブンだったが、何となく悪い人間ではないということは分かっていた。

「お使い……？ 公欠にしてまで、何を？」

「きみ、魔業都市には行ったことあるかい？ 魔業都市ガウセンフェルト。その第4研究所に手紙を届けて欲しいんだ。道中、クラウンクラブが大量発生しているらしくて、民間人の通行が封鎖されているんだ。ぼくじゃあ、そこを通れない。かと言って、遠回りには出来ないんだ。急ぎの手紙なんでね。そこで、きみの出番だ。きみは王室付魔導騎士なんだろう？ その肩書きがあれば、国内で立ち入れない場所はない。だから、頼まれてくれないかな？ 少ないけど、手間賃も出させてもらうよ。いいかな？」

キールが喋っている間に講義開始の鐘が鳴っていた。「現代魔術論 3-C」の教授は遅刻にうるさい。そして、論文を次々と発表しては高評価をされているセブンに嫉妬していて、嫌っている。今さら行ったところでねちねちと嫌味を言われたりするだけ。

「分かりました。じゃあ、頼まれます。今すぐですか？」

「いや、悪いけど……肝心の手紙をまだ書き終えてないんだ。明日

の朝から、そうだな。2週間もあれば行って、帰って来られるね。その間、公欠扱いにするから、よろしく頼むよ。明日の朝までに、届けてもらう手紙を持っていくから。あ、班で一緒の方がいいかな？ きみは第七班だったね。そういうことで、明日から皆で行ってきてくれる？ じゃあ、また」

喋り尽くしてから、キールが鼻歌を歌いながらセブンの横をすれ違っで行った。これから90分間、することのなくなったセブン。小さくため息をついてから、寮の自分の部屋へ行って荷物をまとめることに決めた。

「あれ、セブン。どしたの？」

寮の部屋へ戻ってくると、アークがベッドの上でパンを齧りながら何やら広げた紙に向かっていた。セブンが入ってきたのを見て、その紙を丸めてベッドの下へ転がしてしまう。一応、隠したつもりらしいがセブンはしっかり見えていた。

「事務員にお使いを頼まれた」

「事務員……。キール？」

「ああ。魔業都市ガウセンフェルツまでな。明日から2週間、公欠にするから行ってきてくれって。しかも、班全員で。だから、お前も荷物まとめる。シュザリアには後でおれから言っておく」

粗方の事情を説明してからセブンは机の引出しを開けた。そこから、剣と龍をモチーフにしたデザインの指輪を出す。アークがそこを覗き込む。

「何、その指輪？」

「王室付魔導騎士であることを証明する指輪。コイツで封鎖される道に無理やり踏み入れてこと。あの事務員、あれでなかなかあくだいとこがありそうだな」

「えー？ ないって。キールはいい人だよ」

「その根拠は？」

大した興味も示さずに、セブンが言う。鞆の中に着替えの服を突

つ込み、夜営用の折りたたみキャンプセットが壊れていないかを確認する。しかし、テントを広げようとしたところで骨組みが折れてしまい、舌打ち。

「この間、高いところにあった本取ってくれた」

「お前、そこは男として絶対にコイツとは仲良くしねーって決めるところだぞ？」

「いいじゃん、別に。落し物を一緒になって捜してくれたよ」

「それ、確か学長の落し物騒動じゃなかったか？ あれは職員として当たり前だし、生徒まで駆りだされたのに事務員が動かないのはあり得ないだろ。落し物をして、捜させる学長が一番腹黒いけどな」

他愛のない会話をしていると、アークがつまらなそうに頬を膨らませた。いいもん、と勝手に拘ねてから悪魔の懐刀を片手に出て行くとする。

「どこか行くのか？ …… そんなの持って」

「うん。ちょっと、グランギューロ・グランエイドのところに行く」

「そうか。向こうがああ言ってるのもあるけど、あれでも一応は国の要人なんだから無礼なことはしてくるなよ」

「分かってるよ。じゃ、行ってきまーす」

アークが出て行くと、セブンは壊してしまったテントをどうしようかと腕を組んで考え込む。いっそ、新しいものでも買おうか。でも、そうそう頻繁に使うものでもない。腐るほど金はあるが、浪費するのは好きでない。

「よし、処分」

そう決めてから、魔法陣を手の平に発動する。それは全てを消し去る業火を呼び出すもの。魔術を発動したまま壊れたテントに触れると、触れた傍からテントは消えていく。そうして簡単に文字通り消して処分してしまうと、一息ついてからベッドに仰向けに倒れこんでみた。

「ガウセンフェルツ、か……。あまり好きな場所でもないんだけど

な……」

小さな呟きはセブンの本音。

魔業都市は、文字通りに魔業の発達した一大都市だ。時代の最先端を行く多くの魔業が日々、開発され、実用化されている。しかし、魔業はそのエネルギーを魔力によって補っているだけの機械。魔術具とは違って、魔法陣が必要なければ、誰だって指一本で使える。今の時代では古い考えではあるが、セブンは魔業というものの自体が好きになれなかった。

No.16 お使いの始まり

「ねー、セブン。何か最近、ずつとつまらなそうにしてない？」

「おれが教えたことを、お前がちつとも覚えてくれないからな。そりゃあ、つまらなくもなるさ」

言いながら、セブンは黒板に次々と文字を書き連ねていく。魔術史の特別復讐講座が開講されてしまっている。無論、講師はセブン。受講者はシュザリア。いつもの光景である。

「だって覚えられないんだもん」

「だって、で済ませるな。その前に努力をしろ」

ばつさり言い捨てて、セブンがチョークを置いた。今日は魔術史の復讐なので、図式などは描かれていない。代わりにびっしりと年号やら、出来事やらが並んでいる。

「常識問題だ。今から、およそ500年前に起きた過去最大の戦争を何と言う？」

「古代大戦」

「よし、ここを間違えないでとりあえず、胸を撫で下ろしてやる」

「……ちよつと酷くない？」

「お前はそれくらい、バカなんだよ。自覚しろ」

言ってから、シュザリアにデコピン。なんせ、シュザリアは学院始まって以来の劣等生。進級したこと自体が奇跡なのだ。もつとも、それだってセブンの助け舟なしでは決して出来なかったのだろうが。「じゃあ、次に古代大戦で活躍した人物、3人のことを何と言う？」

「……えつと、三雄？」

「ここら辺は常識だから、考えるなよ……」

頭を抱えなくなるセブン。まだ答えてくれているからいいが、まだまだ常識中の常識だ。10歳の子供だって、きつと知っているような常識事項なのだ。

「その三雄はどんな活躍をした？」

「大戦を終結させて、現代の魔術の基礎を作った……だっけ？」

「当たり前だ。自信を持って、ぱつと言ってくれ。次の問題、三雄の内、判明している2人の名を挙げる」

「マクスウェル・ホワイト。……。あと、えつと……あのー……何だっけ、喉まで来てるんだけど……」

えへ、とシュザリアが可愛らしくポーズを取ってみたが、セブンのデコピンが見舞われた。小さな音がしてシュザリアの首が後ろヘガクンと落とされる。痛いよー、と呻きながらも前を見やるとセブンが大仰な仕草で肩を竦めていた。いっそ、ウザいくらいに。

「ストリユース・レヴァノスだ。10回、紙に書け」

「うー……」

「耳障りだ、唸るな」

言いつけながらセブンは紙と羽根ペンを与える。不貞腐れたようにシュザリアが10回、紙に「ストリユース・レヴァノス」と書き綴り始める。

「でもさー、セブン。学長が三雄って、本当なの？ すっごい、若いのに」

「本当かどうかは知らないけど、あの見た目にはタネがある。御伽噺にあるように、神様に仕える為に永遠の命を与えられた、なんていう理由じゃないとだけ言っておく。さて、次の問題だが」

セブンは手にしている「特製 これさえあれば試験なんて余裕でパスする問題集（非売品）」というものに目を落とし、問題を読み上げようとしたが途中で止めた。シュザリアが、いつになく真剣な顔をして首を傾げている。こんな顔をするのは珍しい。試験でさえ見せない顔だろう。

「どうした？」

「三雄のもう一人って、誰なのかなーって。学長と、ストリユース・レヴァノスって人と、もう一人。もう、ずっと昔の人だけど……だからこそ、何で謎のままなのかなーって。ほら、どんどん新しいことって説明されたりしてるのにさ」

「そうだな……。最後の1人に関しての情報が、多くあり過ぎるのが一因になっている。男だったのか、女だったのか。大戦当時、どこに属していたのか。また、三雄の2人との関係性。マクスウェル・ホワイトとは兄弟だとか、恋人だとか。ストリウス・レヴァノスとは険悪な仲だったとか、逆に同性愛者で濃密な関係を持っていたとか。線の細い、痩せっぽちって説もあれば、逆に筋骨隆々で、三雄の中で一番体格が良くて、前線へ自ら切り込んでいく勇猛な性格だったとか。他には一切、魔術を使えなかったとか。無限の魔力を持っていた、とか。とにかく、最後の一人に関しては情報が多すぎて、絞り込めないっていうのが大きな理由だ。多くの名前を持っていた、って説もある」

問題集を閉じ、セブンは未だ難しい顔をするシュザリアを見つめる。納得していないのがよく分かる。うーん、と唸りながらしきりに首を傾げている。きっと、この状態の彼女に何を説明しようと、明確な答えを与えない限りは何も頭の中に残りはしない。長い付き合いからそのことをセブンはよく分かっていた。

「そんなに気になるなら、学長に聞きに行くか？」

「学長に？」

「本当に三雄のマクスウェル・ホワイトが学長なら、知ってると思うだろ？」

にやりとした笑みをセブンが見せる。シュザリアはぱつと顔を明るくして、立ち上がった。だが、セブンの目は動かない。

「……あれ？ 学長のとこに行くんじゃないの？」

「とりあえず、お前の復讐が終わってからな。その上で、お前がまだ知りたいなら、いや、お前の知的好奇心が残っていた体力に勝っていたなら、な。座れ」

「セブンの意地悪……」

「何とでも言え。おれの知ったことじゃない」

にべもなく言い放ってから、セブンは再び講義を始めてしまう。シュザリアは頬杖を突きながら、適当に聞き流すことを決めるのだ。

った。

翌朝。学院の門の前でセブンは守衛と世間話をしながら、時間を潰していた。出発の時間になったのにシュザリアがやって来なかったのだ。しかも、アークは昨日、部屋へ戻ってきてから開口一番に「グランギューロ・グランエイドの弟子になるから、悪いけどお使い一緒に行けない」と言い出し、来ていない。結果、一人で待ちぼうけを食らったままセブンは門のところにはーっと突っ立っているのを不審がった守衛に事情を説明し、その流れで世間話をしていたのだ。

「しかし、その若さで王室付魔導騎士だなんて信じられんね」

「よく言われます」

「わたしなんか、頑張って試験を受けて、やっと魔導守衛だ」

「魔導守衛でも立派なものですよ。魔術学院を卒業したからといって、その全員が魔術師や、それに関わる職につけるといふ訳でもないのですから。魔導守衛と言えば、魔術の扱いに長けた、管理者ですから。やっと、なんて言葉で片付けるには惜しいものです」

セブンと話している守衛の男性は今年で47歳になるらしい。少し疲れた顔をしている。

「夢を見て、魔導守護者になると息巻いていた頃が懐かしい。若さとは、いいものだ……」

遠い目をする守衛男性。セブンが何か励まそうかと口を開きかけ、そこでやっとシュザリアがやって来るのを見た。

「では、連れが来たのでこれにて」

「ああ、行つてらっしゃい。道中、気をつけて。魔導騎士に言うのも、なんだがね」

苦笑で守衛男性に返してから、セブンはシュザリアの方へ歩み寄る。

「遅い」

「ごめん。寝坊しちゃって」

「野宿になつても知らないぞ。キャンプセットを今回は持つてきていないからな。順当に歩ければきちんとした宿で泊まれるが、この分だとどうなるか……」

歩き出し、セブンが軽く脅してやる。すると、その効果が現れてシュザリアは苦虫を噛み潰したような顔になった。

「そんなあ……。ちゃんと歩くから、野宿はやめよ。ね、ね、セブン。お願い」

「ちゃんと歩くとは言つても、すでに出発が1時間ほど遅れてるしな。さて、どうなるか」

はぐらかしながら、学院を出て街中を歩き出す。がっくりとうなだれるシュザリアを連れながら、セブンは久しぶりの二人旅だと気づいた。

「ね、セブン」

不意にシュザリアがセブンの腕にしがみついた。満面の笑みが、何かをねだろうとしているのだとセブンに教えている。

「何だ？」

「転移魔法陣は？」

「そんなものを、たかがお使いで使うとでも？ それに、あれは許可制だ。どこに敷いて、どこどこを繋ぐのか。それをきちんと言告しないと使つてはいけないことになっている。……お前の祖父らへんが決めたことだからな？」

「ぶー。面倒臭い……。あつ、じゃあさ、馬車は？」

「ない。全部、徒歩だ。健康的でいいだろう？」

完全にシュザリアはうちのめされ、とぼとぼと歩く。ちゃんと歩く、と宣言したことなどすっかり頭の中から追いやられてしまったらしい。そんな彼女を見つめながら、セブンは小さく苦笑した。

「魔業都市まごうに着いたら、とりあえず、美味しいもんでも食わしてやるから元気出せ」

「本当っ？」

ぱつとシュザリアの顔に満面の笑みが浮かんだ。ああ、と頷いて

見せるとシュザリアがやる気を取り戻す。世話の焼ける姫君だが、
こつこつ素直なところには救われる。従者として、セブンは本当に
そう思った。

No.17 クラウンクラブ 駆除

「魔業都市ガウセンフェルツに行きたい？ 悪いね、あんちゃん。クラウンクラブがこの先の森に大量発生しちゃったんだ。そのせいで多くの人が足止めを食らってる。早く駆除して欲しいのに、なかなか魔術師も、魔導師もやってこないんだ」

学院を出てから2日。セブンとシュザリアは街道を歩き、やっと問題の場所までやって来ていた。ちなみにセブンは2日歩き通すくらいは平気なのだが、シュザリアは慣れていないせいですっかり疲れきっている。彼女曰く「足も痛いし、頭も痛いし、何だかお腹も痛いし、とにかくもう帰りたい」とのことらしいが、本当は足だけなのだろうとセブンは予測がついている。とりあえず、嫌になっっているということが判明していれば十分だ。

「わたしは駆除しますから、通っていいですか？ 申し送れましたが、わたしは王室付魔導師騎士。セブン・ダッシュと言う者です。軍では中佐相当の権限も与えられています。国に一報、入れて確認していただいても構いません」

街道を封鎖しているのは地元の自警団。色褪せた茶色の制服に胸当てと手甲といった、簡素な装備に身を包んでいる。その人物にセブンが言い、指輪を見せた。剣と龍をモチーフにした、大きなリング。それを今回、セブンは鎖に繋いで首から提げていた。胸元から出したリングを見た自警団の男性が、目を見張る。

「き、きみがかい……？」

「ええ。……こっちのバカ面はシュザリア・S・グヴォルト。姫君です。急ぎの用がありますので、失礼します。行くぞ、バカ」

「セブンの鬼」

シュザリアの手首を掴み、セブンがロープの張られた向こうへとずかずか行ってしまった。

「あれが……姫君？ 思い切りバカって言ってたような……」

呆然としたまま、彼はセブンとシュザリアをそのまま見送ってしまっただった。

「薄気味悪いよー。セブン、ここ、変な感じするんだけどー？」

「そりゃあな」

2人が入っていったのは名もなき森。だが、一步、そこへ足を踏み入れると濃霧に包まれた。1メートル前方も見えない。短いロープで互いの手首を結びつけ、はぐれないようにしている。

「クラウンクラブはそう、強い魔物ではない。けど、厄介な性質があるんだ」

「厄介な性質？」

「危険を察知すると、自身の体から少量だが濃霧を発する。クラウンクラブは100匹ほどの群れを成していて、1匹でも濃霧を発すると仲間までこぞって濃霧を出す。そうして外敵から逃げるんだ」

「へー。頭いい」

「けど、その一方では違う群れとの仲は最悪でな。違う群れの個体同士が出合ってしまうと、大喧嘩をするんだ。そして、クラウンクラブは絶命する時も濃霧を発する。そうすると、近くの仲間がその死に気づいて弔い合戦を始めてしまう。そうすると、どんどん、濃霧が膨れ上がってこうして森などをすっぽりと包んでしまう。いつか終わるとは言えど、クラウンクラブはタフなんだ。だから、一度、こうして濃霧が膨れ上がってしまうとしばらく収まらない。厄介だろ？」

どこか呆れ加減にセブンが言う。うん、とシュザリアも同意すると足下の方でパキパキ、と何かが割れるような音がした。セブンが咄嗟にロープを引いてシュザリアを引き寄せると、周囲の気配を探る。

「お前、何か踏まなかったか？」

どこか面倒臭そうな、それでいて責めるような声。

「えっと、何か、変なの……踏んだかも」

「感触は軽くて、それと同時にパキパキした音がしなかったか？」

「うん、当たり」

「こんのバカ姫……。それ、クラウンクラブだっ」

と、何かがセブンにぶつかってきた。腕で払いのけるが、そこにべつたりとした何か液体が付着する。ちつと舌打ちし、セブンが走り出す。シュザリアも引つ張られるままに走る。

「一雫の涙で自分の身を守っとけ。クラウンクラブは執念深い一面もあるからな。仲間を踏み殺されたら、何度でも襲ってきやがるぞ」
「えー？」

面倒臭そうなシュザリアの声。

「えー、じゃないっ！ お前がやったんだろうが！」

叱ってからセブンが上方配置魔法陣を展開した。セブンを中心に、半径10メートルはあるだろうか。巨大な魔法陣だ。それを展開すると、魔法陣から強烈な光が注がれる。光は濃霧を一瞬で消滅させた。同時にシュザリアが喉の奥で声が引きこもったような悲鳴を上げる。

「ひっ……何これ!？」

2人の周囲に、びっしりと直径30センチはあろう甲殻の白い蟹がたくさんいた。足の踏み場もないくらいだ。シュザリアはすでに一雫の涙を発動していて、そこに白い蟹　クラウンクラブは入って来られない。

「クラウンクラブだ。お前が踏んづけたせいで、こんなに出てきた。つたく、面倒臭いことをしてくれたな……」

「あたしのせいなのっ!？」

「あー、はいはい、分かった、注意しなかったおれが悪いことにしといてやるよっ！　けど、でも、お前に注意力ってもんはねえのかっ!」

「あるよ！　ていうか、気持ち悪いから早く退治してっ!」

クラウンクラブがセブンへ向かって飛んでくる。クラウンクラブの攻撃方法は基本的に体当たりだ。しかし、その殻は硬く、なかなか

か痛い。素手でセブンがクラウンクラブを叩き落とし、それから魔法陣を展開した。魔法陣は青色に輝き、セブンの足下に広がっている。

「水柱　昇華・水龍昇天」

発動すると、魔法陣から水柱が吹き上がった。それが龍を形作ると、周囲をぐるりとぐるでも巻くようにして移動し、その中にクラウンクラブを取り込んでいく。大部分のクラウンクラブを水で形成されている体内に押し留めると、そのまま天へ向かって昇っていった。水飛沫が濃霧を払い飛ばし、注いだ陽光を受けて虹をかける。

「わあ……」

一雫の涙に守られていたシュザリアは、青空に綺麗にかかった虹を眺めた。しかし、セブンはまだクラウンクラブの相手をしなければならず、虹などに構ってはられない。

「ねー、セブン。もっと綺麗なのやってよ」

「バカ姫が……！　そんな余裕、あるかつ！」

体当たりしてくるクラウンクラブ。それを片手で捕まえ、続いてぶつかってきたクラウンクラブにぶつけた。クラウンクラブは異様にしつこい。一度、敵として認識されてしまうと逃げ切るのも、全部を蹴散らすのもそれなりに時間がかかってしまう。

「鬱陶しい連中だ……。焼き蟹にして食っちゃもうぞ、こら」

忌々しく呟いてから、セブンが自分の足下に魔法陣を展開した。赤色に輝くそれを見て、シュザリアは少しどぎまぎする。魔法陣は輝く色によって、属性が一目で分かる。赤色は火属性。そして、火属性はほとんど例外なしに破壊力を重視したものだ。さらに魔術を発動するのはセブン。その威力はそこら辺の魔術師を簡単に凌駕してしまう。

「シュザリア、間違っても魔術を解くなよ。お前のキャパシティなら防ぎ切れる」セブンがクラウンクラブの体当たりを何もせずには受けながら、魔術の発動に魔力を注ぎ込む。　　発動。エンシェント・フレイムいにしえの焰」

魔法陣から溢れ出たのは波打ち際にやって来るような、ゆるやか

な赤色のさざ波だった。シュザリアが眉を顰めながら見てみると、セブンに這い上がるうとして足下から登ろうとしていたクラウンクラブが赤い波に触れた瞬間に真っ黒になって、そのまま炭のように動かなくなってしまう。超高温の炎。そんなものを無闇やたらと周囲にばら撒いてしまえば森は簡単に焼き払われてしまうことになる。そこでセブンはこの炎を出し、その範囲を魔法陣内部だけに留めたのだ。しかもこれはセブンが発動した魔術だから自身に害をもたらすことはない。クラウンクラブは愚直にセブンへ向かって次々と体当たりをしてくるが、セブンはそれを冷静に足下へ叩き落していくやがて、クラウンクラブは1匹も姿を見せなくなった。全てが炭になってセブンの足下に転がっている。

「 終わり」

パンツとセブンが両手を合わせると、発動していた全部の魔法陣が消え去った。シュザリアの一雫の涙もだ。

「シュザリア、歩くぞ」

「あ、うん……。ね、セブン」

2人が並んで歩き出す。濃霧はいつの間にか晴れ、気持ちのいい木漏れ日の下に小道が見えていた。

「何だ？」

「全然、最後のは綺麗じゃなかったんだけど」

「あのなあ……」

別に綺麗なものをやってやろうという気持ちは微塵もなかったのだ。

「それに焼き蟹だって。あんなの、焦げ蟹じゃないっ」

「お前、食つつもりだったのか？」

「え？」

「……もつと、自覚を持って欲しいな。お前、一応は姫君なんだからな？」

「なりたくてなったんじゃないもん」

そんな会話をしながらセブンは森の中を歩いていった。

手首と手首を繋ぐロープを未だに繋げた、そのままで。

No.18 魔業都市ガウセンフェルツ？

「何回来ても、ここって凄い……」

ぽかんと口を開けたままシュザリアが呟いた。

魔業都市ガウセンフェルツ。それはグヴォルト国内で最も魔業技術の発達した都市。大きな川の近くにその巨大な街はある。すつぱりと街の外を魔業の壁で多い、360度、空も含めてどこからでも外敵の侵入を防ぐことが出来る。魔業都市としても名高いが、これは魔業発達以前の城砦都市としての名残でもある。そんな魔業都市の外門に2人はいた。大きな扉。縦80メートル、横36メートルもある。それは勿論、魔業で開閉するようになっている。門の横にある守衛室にセブンが話をつけている。

「第4研究所に所用がある。身分の証明は王立魔術学院ホワイトウィングの事務員キールに問い合わせしてくれ。セブン・ダッシュと、シュザリア・S・グヴォルトだ」

「ああ、きみらかい。それなら、もう連絡が来ているよ。今、門を開けるから少し待っててくれ」

守衛が言い、魔業外門のスイッチを押す。すると、音もないままに門が3メートルほど上がった。セブンが短く礼を言い、見とれるシュザリアを連れて中へと入る。

「用事のあるのは第4研究所だ。さっさと手紙を届けたら、帰るぞ」

「えー？ 観光は？」

「ここまで来るのに5日。今日だけ、ゆっくりして、また帰りに5日。合計で11日も学校を休むことになっている。ただでさえ、学業不振のお前がこれ以上休んだら、取り返しのないことになるぞ」

「じゃあ、今日と明日観光して、明後日は観光の片手に転移魔法陣の手続きして、明々後日に帰るって言うのは？」

「バカ姫」

シュザリアにデコピンをし、セブンは道を歩き出す。高い建物が多いせいで、空を見上げても青色があまり見えない。街中の至るところに魔業があり、それは動く歩道エスカレーターであったり、魔業遠隔映像再生装置ビであったりと、この都市ならではのものばかりだ。セブンはとりあえずホテルへ向かい、その建物の重量感知式魔業自動扉重力ドアを通った。中は明るい光に満ちていて、魔業による空調が利いていた。

「魔業って凄いねー」

「……おれは嫌いだ」

言いやってから、受付でセブンは部屋を取る。そして、魔業昇降機エレベーターがあるのに使わず、わざわざ階段で上がっていく。シュザリアも文句を言いながら続き、6階のスイートルームに来て荷物を置いた。「セブンって何で魔業嫌いなのか？ お年寄りの魔術師でもないのにさ」

「魔業が出来る大抵のことは、魔術師だって出来るんだ。それをわざわざ、無闇にスペースを取って、あたかもこれが進化だとかかりに見せ付けられたってウザい。確かに体系化された今の魔術、魔法陣を用いている限りでは、部屋を涼しくすることは出来ても、勝手に開く扉は作れない。けど昔の魔術ならそれこそ、思いのままに環境を変えることが出来る。アークの村でも見せたらう？ 土地密着型魔術を使えば創造主にさえなれるとまで言われていた」

「でも、皆が皆魔術を使える訳でもないから……魔業は受け入れられてるんでしょう？」

「……お前にしては冴えたことを言うんだな。確かに魔業は魔術の素養がない者でも手軽に扱える。それが強みであって、魔術至上主義派には完全に否定出来ないところだ」

「魔術至上主義派って……セブンの他にその派閥っているの？」

「学会の常連はほとんどがこれだ」

言い切り、それからセブンが必要な荷物だけを持った。手紙と金と、身分証明代わりのリング。薄手のローブの襟を少し直して、シュザリアを振り返って言った。

「行くぞ。こんな街、おれは長居したくないんだ」

「セブンって我俣……」

「お前に比べりゃ何てことはないけどな」

2人が揃って部屋を出て行く。そして、また階段を使って1階まで降りるのだった。

「ここ、第4研究所では魔業兵器の開発をしています。外門に設置されたほとんどの魔業兵器はここで作りだされました。ドラスリアムの侵攻に備え、日夜、強力な殲滅兵器を開発しています」

一本調子の女性の声。魔業録音装置^{レコーダー}によって何度も繰り返されているアナウンス。セブンとシュザリアが目の前にしている、大きな工場の入口に設置されていた。受付に話をつけ、手紙を渡したら終わり。と、というのがセブンの思い描いていたものだったのだが、手紙はどうやら重要なものらしく手渡ししなければならなかったのだ。その為、この第4研究所の所長なる人物を待たせてもらっていた。

「セブン、中を見学しなくていいの？」

「したくない」

「しようよー。折角、見学をしてもいいって言ってくれたんだから」
「そりゃあそうだろうさ。王室付魔導騎士と、姫君がやって来たんだ。魔業兵器とやらの性能を見せつけて、あわよくばって魂胆なんだろう。魔業は歴史こそ浅いが、その普及率は異常だ。学院にも幾つかあるし、ガウセンフェルツは丸ごと、全部が魔業だらけって言える。それをきちんと上へ見せつけ、うまくいったら多額の予算を回してもらえるかも知れない。下心があって、おれ達に魔業の実態を見せたいんだろう」

ふーん、とシュザリアが気のない返事をした。何だか大人って汚い。そう思ってしまう。

「お噂通りにとても頭のよろしい方なのですな」

声がして、2人のところへ1人の女性がやって来た。白衣を着て、

少しくすんだ朱色の髪をしている。30代の後半から40代くらいの年齢。女性にしては背も高く、スタイルもいい。

「あなたが第4研究所の所長、フレルダ・ヴァリフルールですか？」

「はい。セブン・ダッシュさん。あなたの噂はよく耳にいたしますよ」

フレルダ・ヴァリフルールが微笑み、セブンに言った。

「それはどうも。早速だが、王立魔術学院職員のキールから手紙を預かっている」

言いながらセブンが大判の封筒を出した。それを手渡すと、その場でフレルダが中を改める。中に入っていたのは数枚の書類らしきものだった。しばらくそれを眺めてから、封筒へ戻して両腕で胸に抱えるようにして持つ。

「どうもご苦勞様でした。少し、耳にいたしたのですが……わたしくどもは決して下心などはありません。ただ、一般の方にも魔業がどのようなものなのかを理解して頂きたいだけなのです」

「ほら、セブンが勘繰りすぎなんだよ」

「……いえ、おれは魔業が嫌いなんです」

魔業研究をしている場所で、魔業が嫌い、と言い切るセブン。他でもないシュザリアが呆れてしまったが、フレルダはそれに小さく笑んだ。

「何が可笑しい？」

「いえ、正直な方なのです。確かに素晴らしい魔術を扱える方からすれば、魔業などというものは邪道なのかも知れません。しかし、魔術の素養がないものも、それと同じことが出来る。平等というのは、そのようなことを言うのではないかと常日頃からわたくしは考えております。そして、それを叶えるものが魔業。魔業は魔術と同じことが出来るようになるのが目的ですが、将来的には魔術を超えるものと固く信じて研究しております。それを少しでも、あなたのような方にこそ見ていただきたいのですが、お時間を頂戴してもよろしいでしょうか？」

フレルダが言い、セブンをまっすぐ見つめた。茶色の瞳がセブンを見つめ、動かない。セブンもまた、どこか胡散臭そうに見ていたが、やがて一息だけ吐き出した。

「シュザリア、どうする？」

「じゃあ見る」

「……そういうことだ」

「ありがとうございます。では、こちらへ」

彼女の誘導でセブンとシュザリアが研究所の中へと入っていく。数ある研究所の中でも、第4研究所はとて広い方だった。見渡す限り、ずっと巨大な魔業が並んでいる。1つの魔業につき、10人以上もの研究員がつきつきりで何やら作業をしている。研究員は若い人から、壮年を過ぎたほどの年まで、男女を問わずに多くいた。「魔業都市ガウセンフェルツの全人口の内、6割は魔業の技術者です。学校では魔業に関係する授業が数多く取り入れられ、この都市に住む者ならば誰でも魔業を使用することが出来ます」

フレルダの説明を受けながら、2人は巨大な魔業を次から次へと見せられた。そして、そのどれもが特に強力な魔業兵器だった。試用の際のデータまで見せられ、それを見る限りではセブンの魔術にも引けを取らぬものばかりだ。

「一説ではドラスリアムの魔業研究はとて進んでいると聞きます。ですから、わたくし達もそれに負けぬようにと日々、試行錯誤を重ねているのです」

それがフレルダの言葉だった。シュザリアは感心しっぱなしで見せられるもの全てにぽかんと口を開けていた。その一方でセブンは、何を見せられてもつまらなそうにしていたが、話だけはじっと聞いているのだった。

No.19 魔業都市ガウセンフェルツ？

「凄い、セブン。ほら、お金入れてボタンを押すだけで飲み物出てくるよっ」

シュザリアが楽しそうに言いながら魔業自動販売機でジュースを買った。それを自分の分と、セブンの分。2回使い、片方をセブンへ押し付ける。フレルダの説明が終わり、2人は第4研究所の休憩室なる場所で休んでいた。まだ見せたいものがあるらしいのだが、その準備があるということで待たされている。

「……」

シュザリアから受け取ったアイスコーヒーを一口飲み、セブンはぼんやりとテレビを見やる。休憩室からは研究所内を見渡せた。魔術至上主義派と自称したセブンだったが、フレルダに連れられて説明を受けている内に魔業を認めようと考えてしまう自分に気づいたのだ。それは疲れたせいだと自分に言いながらも、やはり、魔業は便利なものかも知れないと思ってしまう。

「セブンー？」

「……」

「セブンってばっ！」

「……」

「ちよっとー、聞いてる？」

「……」

「ねーえー、セーブーンー」

シュザリアがじっと考え込んでいるセブンの顔の前で手を振ったり、大きめの声で呼びかけたりする。しかし、反応がない。セブンはこうして、一度深く考え込んでしまうとなかなか周囲のことに気づかなく というより、周囲のことが分からなくなってしまった。

「シュザリア、魔業をお前はどう思った？」

「ほえ？ 何、いきなり？」

「いいから」

急に口を開いたかと思えば、感想を求められ。シュザリアは首を傾げながら、アップルジュースを一口飲んだ。よく冷えていて美味しい。

「いいものなんじゃない？ セブンのほさ、やっぱり偏見だよ」

「そうか……。魔業は、人の生活を便利に、豊かにする。人はそうする為に文明を生み出し、進化させている。魔術で築いた一大文明も、魔業による文明に趨向されていくのかも知れないな……」

「何て言ったの？」

「分からないなら、それでいいさ」

何となく、寂しさがある。アイスコーヒーを飲み干し、空になった紙コップをゴミ箱へ投げ入れた。それからまた、しばらく考えていると休憩室にフレルダが入ってくる。

「お待たせしました。準備が出来ましたので、こちらへ」

「ああ。……シュザリア、行くぞ」

「うん」

フレルダに先導されてセブンは細い通路を行く。そして、向かったのは突き当たりの部屋だった。そこへ入ると、ただっ広い空間に一つだけ魔業が置いてあった。卵の殻のようなものだ。ただし、それは骨組みだけで、パイプやら何やらが楕円形になっている。中に入れるようになっていて、高さは2メートルほど。直径は1メートル強くらいだろうか。

「中へどうぞ」

「これは何をするものなの？」

「入ってみれば、分かりますよ」

フレルダに促され、セブんとシュザリアがその魔業の中に入った。ちゃんと入口のところだけ開閉するようになっていて、そこを通る。そして、フレルダによって扉が閉められた。

「変だな。魔業なら、核があるはずだ。こんな薄っぺらの魔業に核が入っているのか？」

内側から魔業を観察し、セブンが言う。するとフレルダはそれに繋がっている魔業電子計算機パーソナルコンピュータを操作した。

「入ってはおりませんが、今は入っている状態です」

「どういうこと？」 シュザリアが尋ねた直後、異変に気づいて胸元を押さえた。「何か……あれ？ 力が抜けていくような……」

セブンがシュザリアの体を支え、眉を顰めた。頭に浮かんできたのは、これまでに感心していたことを全て水泡へ帰すような考え。幸い、まだまだセブンは耐えられる。

「今なら、まだ手違いで許してやることも出来る。言え、フレルダ・ヴァリフルール。おれ達から魔力を搾り取るつもりだろう？」

「おや、流石は魔導騎士ですね。数秒もしない内に気づいてしまわれるなんて。これは次世代型魔業兵器のプロトタイプなのです。核を必要とせず、数人の魔術師から搾取した魔力によって起動する魔業兵器。含有魔力が1000カセル以上の大台はなかなか見つかりませんので、それを人体から補えばよいと考え付いたのです」

フレルダが言いながら装置をさらに弄ると、シュザリアの意識が朦朧としてきた。自分で立っていらなくなり、セブンに寄りかかっただけ弱々しくうなだれる。このまま続けられると、危ない。

「早く装置を止めて、おれ達を出せ！ おれだけならともかく、シュザリアは王族だ！ 国家反逆罪だぞ！」

「それが何か？」

「な ふざけていやがるのか？ そうなれば、お前は禁固なんかじゃあ済まないぞ。死刑確定だ」

「だから、それが何だと言うのです？ ここにいるのは、わたくしと、あなた達だけ。もう、とっくにあなた達はこの研究所を後にして、ホテルへでも戻っているでしょう。そして、その途中で行方を眩ませた」

穏やかでないものがセブンの中で溢れてくる。卵の殻のような装置に向け、魔法陣を展開した。そして、発動しようと魔力を込めると、同時に魔法陣が少量の煙となって消え去ってしまった。

「その中にいる限り、魔術は使えません。……それにしても、素晴らしい。すでに620カセルも搾取したというのに、あなたは平然としているんですね。流石は魔導騎士、ですね」

「てめえ……！ 早くシュザリアを解放しろ！」

「では、このような交換条件を試みませんか？」

「交換条件なんかを持ちかける立場じゃねえだろうが！」

「それなら、仲良く、姫君と共に魔力を失ってください」

少しも表情を崩さず、フレルダが言い放つ。奥歯を噛み締め、セブンは魔業に体当たりを始めた。だが、魔業はビクともしない。魔力が搾取されていくという環境では魔闘術も使えず、一切の抵抗が封じられている。

「クソ、クソ……！ シュザリア、しっかりしろ」

「う、ん……セブン……。何か、体……ふわふわ……しない……？」

「そんな場合じゃねえだろうが……。クソ……クソ……！」

シュザリアを腕に抱き上げ、どうにか出来ないかとセブンは思考を巡らせた。魔力を全て搾取されれば、死に瀕する。シュザリアのキャパシティはおよそ900カセル。王族特有の莫大なキャパシティだ。それでもまだ、成長途上なのだからシュザリアは頭さえ良ければ、セブンに匹敵する魔術師になれる。しかし、それでも呼吸が激しくなっていて、もう、彼女の中にはあまり魔力が残されていないのが明白になっている。ふと、ローブの中へ手をつ込んだ。取り出したのは銀のリング。魔力を制御する為の魔封具。見つめ、それをシュザリアの右手の人差し指へ嵌めた。

「さっきの交換条件……言いやがれ」

「彼女を出しましょう。しかし、その代わり、あなたから大量の魔力を搾取いたします。勿論、死なない程度には。ただし、その後、何度でも、あなたが魔力を自然回復する度に搾取させていただきま

す」

「……いいだろう。おれだけが犠牲になればいいんだな？」

「ええ。では、交渉成立ですね。彼女を出しましょう」

フレルダが何やら操作すると、卵の殻に幾つものアームが伸びてきた。それがセブンの手足を押さえつけ、その間に扉を開けてシュザリアを引きずり出す。そして、扉が閉められてからアームが戻っていた。少しも抵抗することなくセブンは一部始終を見つめ、やがて、外に出たシュザリアに目をやる。意識はないようだが、呼吸が戻っていた。

「それでは、スピードアップしましょう。あなたはどれくらい、魔力を持っているのでしょうかね」

「……ああ、好きなだけ持っていきやがれ。たかが魔業如きの制御が、効くんならな」

皮肉に言い返してから、セブンが自ら魔力を解放していく。するとフレルダがコンピューターを見ながら目を見張った。想定した以上に魔力が集まっていくのだ。

「凄い…… 1400…… 1600…… 1800…… 2000カセル

……！ まだ、まだまだ搾取出来る！」

「ああ、そりゃあ、まだまだだろうよ。おれのキャパシティは、2万カセルだ」

言い切った瞬間、フレルダの顔が驚愕に染められた。常人のキャパシティは120程度。実に、その166倍近くのキャパシティがあるとセブンが言い切ったのだ。

「まだまだ、持ってけ。こんなもんで、驚いてんじゃねえぞ……！」
さらにセブンが魔力を解放すると、コンピューターの周囲に取り付けられている機器の針が大幅に動き出した。

「あなたはきつと、2万カセル全てを出し切って、こちらのキャパシティを超えさせることが目的なのでしょう？ でも、それは叶いませんよ。計算上、この魔業は5万カセルまで蓄えることが出来るのです」

「……」

黙ったまま、セブンはずっと魔力を自ら魔業へと注いでいく。自暴自棄にでもなったのだろうかとフレルダは考え、しかし、このま

ま搾取することを決めた。思っていた以上に魔力が集まっている。嬉しい誤算だ。

「もう、1万3000カセルを超えましたよ。気分はいかがですか？」
「ああ……最高だ。こんなに魔力を消費するなんて、ここ数年なかったからな」うつすらと額に汗をかきながら、セブンが言い返す。
「少しずつではあるが、息も上がっていた。」「けど、もう、終わりにしてやるよ」

「終わりに？　どうすると言つのです？　この魔業は5万カセルまで」

言葉の途中で、フレルダが手を置いていたコンピューターのキーボードが爆発した。続いて、コンピューターに繋がっている、色々な機器が爆発していく。後退しながら、フレルダはどうなっているのかとこの状況を疑う。

「1万5000カセル以上の魔力を、大量に集める。そうすると、魔力にもともとあった属性は消え去り、純粋な、つまりは無属性の魔力となる。大量の、無属性の、魔力。これが何を表すのか、教えてやる。劣化版の深魔の穴だ。そして、おれは超一流の魔導騎士。深魔の穴さえあれば、環境だつて変えてやる」セブンが言い、目を瞑り、自分を閉じ込めている魔業に手を触れた。「汝の力、我に貸し与えたまへ。我、いにしへの力を受け継ぎし、真名なき者」それは詠唱。高位の魔術を使用する際に一種の契約をすることで、強力な力をより扱いやすくするのだ。詠唱し終わると、セブンが目を見開いた。

ゴット・ウィル
「創造主の御魂」

直後、部屋全体がぐにやりと歪んだ。壁も床も、天井も、魔業でさえ。全てが一つになり、混ざり、溶け合い、何かの形を成している。フレルダは目を見張ったまま尻餅をつき、収まるのを待っていた。そして、セブンが自分を閉じ込めていた魔業を床の中へ消し去り、床から巨大な握り拳を創りあげる。

「フレルダ・ヴァリフルール。お前の行為は、重罪だ。魔導騎士セ

ブン・ダッシュの名の下に、裁きを下す」巨大な握り拳がフレルダ
へ向かって、振り上げられる。「あの世で永劫、懺悔しろ」

「きみが、お姫様？」

ずっと昔、初めて見たのはまだ城の中にいた頃だった。

いかつい顔をしながらも何かと慌てふためく大人しかなかった。そこに突如としてやって来た少年。爽やかな短髪は淡い緑色。同い年くらいなのに落ち着いていて、彼女をじろじろと見た。品定めをするように。それから、彼を連れてきた、国で一番偉い皇帝に向かつて言い放った。

「これ、本当にお姫様？」

これ、呼ばわりである。仮にも一国の姫君のことを。そして、彼女を娘に持つ皇帝に向かつて。周囲の、普段ならば仏頂面を崩さないような大人までもが雷に打たれたような驚愕の顔をして固まった。そして、皇帝が少年の前にしゃがむ。

「そうだ。そして、きみが一番大切にしなければいけない人だ」

「どうして？」 まっすぐ少年は皇帝を見つめて問いかける。「どうして、自分を差し置いて一番大切にしなければならないのかを教えてください」

「きみはこれから、フォースではなくて、一人の男の子として生きることになる。そして、男の子は女の子を守る義務がある」

「男の子として生きる……。守る義務……。それで、どうやって守ればいい？」

「その内、自然と分かってくることだ。一つだけ、アドバイスをしなう。わたしからの、願いとして受け取ってもらっても構わない。いや。そうなければいいと切実に思っている。シュザリアの笑顔を守ってくれ」

「シュザリアの、笑顔」

皇帝から目を逸らし、彼女を見やる。と、そこには両手で顔を潰すようにして、いわゆる変顔をしていた少女。それを見た少年が言

葉を失くして、それから皇帝をちらと見た。しかし、彼は目を細めて見守っている。

「じゃあ、お嫁さんに貰っていい？」

「えっ!？」

少女が驚き、手を放してセブンを見つめる。

「嘘。セブン・ダッシュ。名前。きみの笑顔を守ることを約束するから」

小さな手を差し出して、セブンが言う。頬を赤く染めながら、少女がその手をそつと握った。

「キャパシティが90カセル。王族って凄い」

「そうだろう？ わたしの自慢の娘だ」

「そついうのを親ばかって言うの？」

「……シュザリア、手を放しなさい」

父に言われ、少女がセブンと繋いだ手を放した。直後、皇帝の拳骨がセブンの脳天に落とされる。ゴンツと重い音がし、セブンはそのまま床へ目を落としてしまう。頭を両手で押さえ、顔を上げる。

「間違ったことをすれば、叱る。これは親として当然のこと。セブン、目上の人間には丁寧な言葉を心がけなさい」

「丁寧な言葉……。分かりましたでございますです」

「まあ、最初はその程度なのだろう。……シュザリア、セブンと遊んでおいで。好きな場所へ行つて構わない」

少女に皇帝が言くと、彼女はセブンの手を取って赤絨毯を走っていった。手を引かれながらセブンは何度も皇帝を振り返り、やがて廊下の角を曲がって姿を消した。

「陛下、よろしいのですか？ 子供とは言え、フォース。彼は生まれながらの戦争兵器ですよ」

体のサイズよりも大きな法衣を着て、皇帝の傍らに歩み出たのはマクスウェル・ホワイト。柔らかな微笑みを浮かべたまま、やんわりと言った。

「生れ落ちたのだ。生まれる前に定義されていたことなど、関係な

かろう。彼の存在意義は、彼が決める。それに彼を兵器とするつもりは毛頭ない。シュザリアだけの騎士にでも、なつて欲しいものだ」

「そして、彼を次代の皇帝にでもするのですか？ 先ほど、彼女を嫁に貰うと言った時は何とも清々しい顔をしておられましたか」

「どこに悪いところがある？ 我が娘を、嫁に欲しいと言った。男ならば、当然だろう」

「なる程、親ばかり言うのは確かに的を得ていたのですね。ああ、わたしは拳骨をされる年齢でもないので、ご遠慮を」

「お前から拳骨を貰ったことはあるのだがな。……もう、何十年も昔のことだが」

「ははは、わたしはこれでも、うん百年生きていますから。さて、彼を無事に引き渡したことですし、わたしはこのあたりでお暇いたしましょう。それでは、陛下」

「マクスウェルが踵を返したが、その肩をがしつと掴まれる。陛下？ 何か、他に御用があるのですか？」

「今はまだ子供だが、これからもつと彼は強く成長すると思っている。あと5年、10年と経過した時に力の制御が出来ないほどの魔力を持つてしまったら、それをコントロールする必要があるとわたしは強く、それはもうお前くらいに強く思う。とっても強いと思わないかね？」

「制御する力をつけるのは、それはそれは、難しいことです。ただ力をつける、その何倍も。しかし、簡単なことではないのでしょうか。わたしも苦労いたしました」

「そこで、だ。お前に一つ、頼みたいことがある。必ず一定量以上の魔力を残して、それ以上の魔力を決して体外に出さぬような……そうだな。指輪。そんなものを作り、セブンに与えたい」

「魔力に蓋をするのですね？ しかし、それでは健全な成長が妨げられてしまうかと思いますが」

「何かあった時だけつけければ良からう？ さあ、頼んだぞ。勅命、だ」

皇帝が言い、マクスウェルは少しだけ肩をすくめて見せた。それから恭しく一礼し、右手に嵌めていた銀のリングを差し出す。

「魔封具と言います。これさえつければ、キャパシティの6割は必ず温存されます。それ以下になっていたとしても、それ以降の魔力の流出は完璧に抑えこみます。これで、よろしいでしょうか？」

「流石だな。お前ほど頼りになる魔術師は国でも、いや、世界から見ても少ないだろう」

「お褒めのお言葉、ありがたく頂戴します。ですが、まあ、少しは自重というものをお知りになってください、陛下」

「一言多いな、腹黒魔術師」

「そのようなことはございません。少し、口が柔らかなだけです。年でしょうかね」

あきれ返る皇帝をよそに、今度こそマクスウェルが帰っていった。手の中のリングを見つめ、皇帝は幼い2人の顔を思い起こす。

「誰にもやらぬぞ、シュザリアは。帝位はあれに譲ればいいのだ」

「

うむ、と満足そうに頷いてから皇帝は部下に銀のリングを預け、玉座の間へと戻っていった。

No.21 魔業都市ガウセンフェルツ？

「創造主の御魂まで使わせやがって……余計に魔業が嫌いになつてきやがる」
ゴッド・ウィル

眩きながらセブンは額の汗を拭い、失神したフレルダを見下ろした。床から振り上げられている巨大な拳は彼女の真横に叩きつけられている。ただの大掛かりな脅しでしかなかったのだ。横たえられているシュザリアの方へ歩み寄り、その傍らにしゃがんだ。呼吸も脈も正常。どうやら、彼女に嵌めた銀のリングが効いたらしい。魔力の放出を抑える効果のある魔封具。それを与えることで、あれ以上魔力の放出によって弱るのを防いだのだ。

「シュザリア、シュザリア……」そつと呼びかけ、シュザリアの頬を軽く叩く。「起きろ、帰るぞ」

しかし、目を覚まさない。魔力の過剰放出は危険極まりない。魔術を使えば使うだけ、魔力は減る。それによって6割も失ってしまう、意識が朦朧としてきてしまう。セブンも多量の魔力をあえて流出させていたが、まだ何とかなっていた。むしろ、いつも溜め込んでいる魔力を放出出来て、清々しさがある。

「ダメ、か……」

一度深い眠りに落ちてしまえば、起こすことは途端に困難になる。シュザリアに限った話ではなく、魔術師がそうなるというのは通説だった。睡眠は効率よく魔力を回復することが出来るとされていて、魔力を失いかけた以上は本能的に睡眠を求めて起きることを拒む。セブンもすぐに寝てしまいたかったが、そうにもいかない。この第4研究所をどうにかしなければならぬ。仮にも自分の住む国の姫君から、非人道的に魔力を搾取しようとしたのだ。それに劣化版とは言え、深魔の穴が出来上がってしまった。その内に消えるのだから、封印のされていない深魔の穴は危険でしかない。大量に集まった魔力は深魔の穴となり、深魔の穴は勝手に魔力を増幅していく

という性質がある。無限にそれが繰り返され、深魔の穴は物理を超えた遙か下にあると言われている魔界と繋がる。そうなれば続々と魔物が湧き出してきて危険だ。幸いにも、たかだか1500カセル程度で形成された劣化深魔の穴ならば、完璧に消し去れるのだろう。

「所長、大変ですっ！」

急に扉が開け放たれ、そこに白衣の研究員が入ってきた。しかし、倒れているフレルダと、唯一、無事のセブン。変わり果てた部屋の様子を見て、困惑する。

「な、これは……」

「第4研究所所長フレルダ・ヴァリフルールは国家反逆罪で拘束する。よって、この第4研究所の全権は一時的に王室付魔導騎士セブン・ダツシュが預かる」

「そんな……！ 所長でなきゃ、止められない！ とうとう魔物の大群が押し寄せてきたというのに、所長の魔業が完成していれば……」

「魔物の大群？ 詳しく話せ」

シュザリアから銀のリングを取り上げ、自分の右手の人差し指へ嵌める。そして、白衣の研究員男性の胸倉を掴んだ。

「それとも、何も出来ずにガウセンフェルツを魔物によって壊滅させられるか？」

「……この数ヶ月間、近くに魔物の大群が住み着いていたんです。ここから西へずっと行ったところにある、天空の海に。その大群が少しずつ、こちらへ向かってきているのが分かっていたので所長は魔業の開発に、力を入れていました。そして、今日にもやってくることが予測出来ていたんです。所長は考えがあるから任せなさい、の一点張りで……。それなのに国家反逆罪だなんて、所長は何をされたのです！？」

研究員の胸倉を放して、セブンは苦い表情で舌打ちをした。初めから事情を話していれば良かったものを、どうして意固地になった

のだろうか。魔物相手ならば、それこそ魔業ではなくて魔術師の領分。そこまで考え、セブンは自分の言い放った言葉を思い出した。

おれは魔業が嫌いなんだ。

仮にも相手は魔業開発に心血を注いでいた研究者。それを魔術師が、それもあり高位の立場にしながらも若造でしかないセブンが否定した。逆の立場でセブンが魔術を研究し、魔業を目的としていたのならば、それほど頭にくる言葉はない。

「全部がおれのせいだってか……？」

シュザリアを苦しめたのも、劣化深魔の穴を作って魔物を誘き出してしまったのも。

冴えない考えが頭の中を埋め尽くす。どうしようもなく、下らないのは他でもなくて自分自身。

「外に、都市を囲んでいる、あのでかい門まで案内してくれ。おれがどうにかする」

「どうにかって、魔物の大群ですよ！　いくら魔術師だって、およそ1000頭はいるかも知れない大群なのに」

セブンがそこで、研究員の胸倉をまた掴み、ぎらぎらした瞳を向けた。溢れんばかりの殺気を込めて、命令をする。

「ごたごた言わずに、連れて行け」

「……！」

有無を言えず、研究員は慌てて走り出した。その後ろを追いかけながら、セブンは右手に嵌めた銀のリングを見つめる。1000頭もの魔物。普段なら、どうにかなると断言出来る。だが、今、セブンに残っている魔力はせいぜい5000カセルほど。ある程度、魔力を温存しておかないと劣化深魔の穴を消滅させられない。

「ちよっとだけ、力を解放するしかないか？」

銀のリングを見つめながら、セブンが呟く。奥の手ならば、まだ

ある。自分は他でもない、フォースの最高傑作。戦争の為に作り出され、戦争の為に力を与えられた。このような状況が、想定されていないはずはない。それならば、この状態からも強くなることが出来る。きっと、必ず。でも、と心のどこかで躊躇う自分がいた。それをして大丈夫なのだろうか、と。

「門を開ける」

先ほど通った門。守衛室から顔を出した守衛に言い、セブンが銀のリングをロープのポケットへ突っ込んだ。

「そんなことをしたら、魔物が雪崩れ込んでくるじゃないか！」
「なら、こうだ」

強引に守衛の顔を出している窓から中へ入り、そのまま門の向こう側へ出て行く。門を通らず、守衛室を通過してしまったのだ。守衛が制止するのを少しも気に留めず、外へ出てしまうとその光景に眉を顰めた。

魔業都市ガウセンフェルツは見晴らしのいい荒野のど真ん中に位置している。故に隠られるような場所がなく、敵の発見も早かった。城塞都市としては、その方が都合も良かったのだろう。だが、それは時に敵方の戦力を一目見て、どれだけ絶望的かを思い知らせることにもなってしまう。この場合は、それだった。

地平線、一面に黒々としたものがまっすぐ向かってきている。猪型の魔物や、狼の魔物。中には熊の魔物や、巨大な猫科らしき魔物も。種類も何もかもを無視し、ごった換えして、向かってきている。まだ距離はある。数キロメートルはあるだろう。だが、地響きや、何ともつかぬ怒号のような鳴き声。それらがとんでもない規模の大群なのだと伝えてくる。

「どうして、こんなことになってやがるんだ……？」

呟きながら、前進した。あの量で突撃されれば、すぐに街を守る門は陥落する。外門に設置された魔業砲からは幾度となく、魔力の塊でもって砲撃されているのだが、魔物の大群は怯む様子を見せていない。

「いくら封印されていない深魔の穴って言っても、あんな小さなものがこの量の魔物を、一度に誘き寄せたなんて……。絶対に裏がある……。天空の海に奴らは突然現れた。天空の海って言えば、浅い水面が空を反射させる広大な砂浜。クラウンクラブの生息地。……クラウンクラブは、どうして森の中に大量発生した？ 棲家を追われたから？ だとしたら、どうして魔物の大群が突然……」

考えを必死にまとめようとするのだが、まとまらない。決定打が欠ける。裏に、何かがある。そうとしか思えない。偶然だとすれば、それは出来すぎている。そこまで仮の結論を出してから、セブンは大きく息を吸った。

「何にせよ、今は目の前のことを片付けなきゃな」

駆け出して、セブンは片手を振り上げた。その手に片刃の剣が現れ、それを握りしめる。剣と龍をモチーフにしたレリーフが彫られた、帝国軍の佐官以上が持つことを許される魔術具の剣。下段に剣を構えながら、セブンはスピードを上げた。風と共に走り、さらに追い越す。

「全部まとめて、足止めた。
クレイジー・ライン
「狂気の一線」

魔術を発動する。極端な楕円形で、それは一本の線のようにセブンの踵の後ろへ横向きに広がった。

「その線越えたら、痛いぜ？」

宣告してから、先頭にいた魔物へ斬りかかった。

赤黒い血が飛び散り、セブんに付着する。しかし、そんなことを少しも気に留めず、体を翻して次々と魔物へ刃を突きたてていった。

No.22 魔業都市ガウセンフェルツ？

「とんでもねえ強さだ……。あれが、生身の人間だったのか……？」
守衛室に詰め掛けた、大勢の人間。そこに設置されている、外の映像を映すテレビを見て、人々は驚愕している。セブンのあまりの強さに、だ。敷かれた魔法陣はたったの1つ。線のように細く、それはガウセンフェルツをすっぽりと覆う、同心円になっている。魔物はそこを踏み越えてしまうと、突然、怒り狂ってセブンへ襲い掛かる。数多の魔物を、たった一本の剣でもってセブンは切り伏せていく。その身を爪牙で引き裂かれても、およそ抗えぬであろう巨躯の魔物の一撃を受けても、退こうとせずに剣を振るう。

「そんなことより、早く避難をしろ！」

守衛だけが声を張り、集まった見物人をガウセンフェルツの緊急避難場所となっている施設へ行くように促すのだが、人々は固まっただま映像を見つめる。魔業都市ガウセンフェルツは半世紀前までは、時代遅れの城塞都市でしかなかった。しかし、他所から来た一人の技術者によって魔業で町興しをしようということになり、国にその名を轟かせる、一大都市へと発展を遂げた。信じてきたのは、魔業。街はどんどん大きく、便利に、進化した。だから、全員が使える訳でもない魔術より、魔業の方が何倍も良いものとしてきた。

しかし、この状況は何であろう。

「おれ達の魔業は、何で通用しないんだっ！？」

誰かが怒鳴った。自分の無力さを呪うかのように荒げられた声。

「どうしてあんな少年一人が、おれ達を守る！？　ここは魔業の街だぞ！」

「おれア聞いた！　あのガキ、堂々と魔業が嫌いだって言ってやがった！」

「じゃあ、見下してんのかよ！？」

荒くれ者が多いのは、いつか、屈強な戦士の集った城砦都市の名

残。

その中で、腕を組んで見守っていた若い男が、小さな声で、しかし、はっきりと言った。

「魔術と、魔業。魔術は歴史が古い。魔業はまだ半世紀。産声を上げた、赤ん坊も同然。魔業の目標が魔術を追い抜かすことであるのと同時に、魔術もまた、日進月歩で進化している。この街に住まう者として出来るのは、彼を支援して、いつか、魔術師を魔業で救い出すこと。……そう思います」

「いつの間に、こんな場所へ……？」

若者は、ちよつとした有名人だった。少しくすんだ赤い髪。年齢は20歳ほど。中世的な顔立ちの男性で、じつと映像を見つめている。クロウ・ヴァリフルール。若年ながらも街で一番、大きくてレベルも高い第1研究所の所長を務めている。

「我々がするべきは、ここで彼の活躍を見守ることではないはずです」

「そつだ、早く避難してくれ！」

守衛が叫ぶが、クロウはふふ、と小さく微笑みながら口を開く。

「今すぐに、彼を援護することです。第4研究所の魔業吸引装置に溜まっている魔力を、至急、回収して下さい。それをエネルギーにして、魔物に有効な実弾をぶつけましょう。皆さん、ここは魔

業都市である前に、戦士の街。城皆都市ガウセンフェルツだったのです。誇りを、見せ付けてやりましょう」

その言葉で、集っていた多くの人々が怒号のような返事をした。それからクロウの指示に従うべく、それぞれに駆け足で作業へと入っていく。その光景に守衛があぐりと口を開け、呆然としてしまう。クロウが彼の肩をそつと叩いて、苦笑しながら言った。

「すみません、守衛さん」クロウが白衣を脱ぎ捨て、彼に預ける。

「せめて、ゆつくりしてて下さい」

「っ!？」

真横から猪のような魔物の突進をまともに食らい、セブンが体勢を崩した。弧を描く鋭利な牙が腹部にめり込み、呼吸が詰まる。だが、片足で地面をしっかりと支え、倒れない。ごわごわした毛皮に覆われた魔物へ、剣を振るう。返り血。拭う暇など許されず、次から次へと襲い掛かってくる魔物の相手をする。

剣が魔物に引っ掛かるような手応えがした。しかし、力を込めて無理やりに引き裂く。疲労が溜まり、力も入れられなくなってしまふ。向かってきた狼の魔物を視界に留め、思い切り、その横つ面を蹴り飛ばした。そのまま体を捻り、剣を閃かせる。赤色。自分の体で感じられるのは、ただ疲労だけ。体が重くなり、動くのも億劫だ。しかし、一度でも止まってしまえば、そのまま動けなくなってしまうような直感が働く。だから、無理をして動き続ける。魔術さえ使えば少しは楽になれるのだが、残っている魔力が少ないのが自分でも分かる。そんな状況で魔力を使ってしまうば、深魔の穴を塞ぐことが出来なくなってしまう。あと100カセルでも魔力があれば、魔術でこの状況を打開出来るかも知れない。

「ブモオオオオオオオオオ！」

正面から、一際大きな個体の猪の魔物が突っ込んできた。ヤバい。

そうセブンが思った時、体と思考が止まってしまった。それだけで膝が地につき、急に前進が鉛のように重く感じる。手にした剣も、重くて持ち上げられない。固く目を閉じ、直後に地響きがした。

「な……！？」

目の前に、巨大な杭のようなものが刺さっていた。それで魔物が串刺しにされていて、絶命している。続いて、セブンの周囲にいる魔物へ次々と同じようなものが撃ち込まれていく。背にしていた魔業都市ガウセンフェルツを見れば、そこから次々と魔業兵器なのだろう。物理的な力を持った巨大な杭が撃ちだれていく。思いがけない援護に、セブンは少しだけ目を見張り、それから深く息を吐き出した。

「ありがとよ」

魔業都市の方へ口をそつと動かし、目配せしてから立ち上がる。満身創痍の体。全身に傷をつけていて、多くの魔物と、自分自身の血を浴びている。着用している薄手のローブはもう、ぼろ布を纏っている過ぎない。それでも、セブンは剣を握りしめた。

「深魔の穴も、明日でいいか……」

小さく呟き、杭の間を縫って迫ってきた3メートルを超える、大きな熊の魔物を見据えた。剣を顔の前で縦に構える。刀身から覗いた目に、熊の魔物が怯んだ。魔物の大群の上に、上方配置魔法陣が展開された。その直径は、200メートルを超える、超巨大サイズ。それが赤色に輝き始めて、セブンの持つ剣が煙のように消え去る。

「エンシェント・フレイムいにしえの炎」

巨大上方配置魔法陣から、オーロラのような赤いさざ波が舞い降りた。そして、それが急速に動き出して一つの巨大な柱を形作ったかと思うと、細部が徐々に変化する。燃え盛る、巨大な頭。大きな目に、大きな口。唼内は燃え盛る炎。その姿は、まるで、荒々しい龍

「昇華・炎龍乱舞」

炎の龍が、セブンの声に応じるように一声、高く天へ向かって吼えた。

それから高く天へ昇ったかと思うと、真つ逆さまに地面へと降りてくる。そのまま地面へ突っ込むと、大地が轟音を響かせて震えた。魔物が次々と焼き払われ、大地があまりの炎に焦土と化していく。そして、最後に龍が全て大地へ潜ってしまったから、また姿を現す。猛き炎の龍は、数多の魔物の死体と、焼け焦げた焦土を残して、天へと昇っていった。

「……ったく、これだから……魔業都市なんて来なくなかったんだ……」

忌々しそうに呟くセブンだが、口元を少しだけ綻ばせたまま、地面へ前のめりに倒れる。そのまま、セブンは深い眠りへと落ちてい

つ
た。

No. 23 魔業都市ガウセンフェルツ？

「 シュザリア、何故カッツを試みた？」

そこは真つ白の部屋。壁も、天井も、カーテンも。魔業都市ガウセンフェルツの病院にある、病室。ベッドにいるのはセブンで、その傍らにはシュザリアが椅子に座っている。そして、彼女が持っているお皿にはやけにボコボコのリンゴ。ウサギにしたかったらしいが、無残な姿になっている。

「女の子だから、嗜みとして」

「おれを練習台にしないでくれよ……」

はあ、とため息をついてからセブンがすでに褐色に変化したリンゴの欠片をつまんで、口へ運ぶ。味がさほど変わっていないのが救いだ。

「それにしても、大変な騒ぎだったんだね」

「お前はのうのと寝てたけどな」

「セブンだって昨日まで眠ってたじゃない」

「おれは2万カセル近く、使ったんだよ。その分、回復には時間がかかる。睡眠時間が多くなるのも当然だ」

言いながらもセブンはシュザリアの切ったリンゴを結構な勢いで口へ詰め込む。と、病室の扉がノックされた。セブンとシュザリアが顔を向けると、扉が開けられる。無論、自動扉だ。

「こんにちは。お加減はいかがです？」入ってきたのは第1研究所の所長、クロウ・ヴァリフルル。「母が、大変な迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

クロウは、フレルダ・ヴァリフルルの一人息子。そして、この魔業都市では知らぬ者のいない、生粋の天才魔業技術者だ。事件のあった3日前、倒れたセブンをここの病室へ移動させたのも、煩雑な多くの手続きをこなしたのも、そして、事後処理をしたのも、全てが彼だった。

「気にするな、とは絶対に言えない。本人はのほほんとしてるが、王族の、しかも、次期帝位継承者候補を殺しかけたんだ。きつと、一生涯、獄からは出てこられない」

厳しい口調でセブンが言うも、シュザリアは難しい顔をしながら首を捻っている。シュザリアはフレルダのやらかしたことに對して特にこれといった怒りも、悲しみも、呆れも、覚えていないのだ。身分の自覚をしていないと言えはその通りではあるが、彼女が他人類を見ない能天気だから、というのもあるだろう。

「はい。それは……分かっております」

持って来た見舞いの果物を置き、クロウが少しだけ俯く。だが、そこに悲哀はなかった。ただ、何かを仕方なしに受け取っているかのような表情。諦め。

「どうして、あの人はあんなことしたの？ 別にムリしてかき集めなくても良かったと思うんだけど」

たった今、クロウが持って来たお見舞いの入った籠からバナナを出すシュザリア。その皮をむいて、勝手に食べ始める。セブンはその行為に呆れながら、何も言わない。

「母は……焦っていました」

「焦ってた？」

「はい。魔業はこの半世紀で急激に発展し、未だに進化を続けております。しかし、最近になってからというものの、母はその進化が徐々に遅くなってきたのを感じ始めていました。いえ、正確には、母の中の意欲　とも違うかと思うのですが、とにかく、行き詰っていたようなのです。母は第4研究所を預かる人間ですから、重圧もあったでしょう。わたしが第1研究所の所長となった頃から、余計、それが顕著になりました。様々な葛藤を抱えて、母は結果を、それも、とびきりのものを求めました。戦争になれば絶対に勝てるような兵器。魔術を超越出来る、最強の破壊兵器。そこで閃いたのでしょう。戦争を仮定し、敵方の魔術師を魔力吸引装置へと誘き寄せる。そして、魔力を搾り取り、それでもって強力無比な魔業砲を

ぶつける。そして、試作品を作り、しかし……人体実験などは禁止されていますからね。そこへあなた達がやって来て、母は好機だと思ったのでしょうか。大義名分も、ありました。魔物の大群が、街のすぐ傍までやって来ている、という」

喋り、クロウが最後に頭を下げた。申し訳ありませんでした、と謝罪を口にしてから顔を上げる。

「ねー、セブン」

「何だ？」

バナナの皮をゴミ箱へ放り込み、シュザリアが口を開く。

「フレルダさん……無罪に出来ない？」

「んな お前、バカかつ！？ いや、バカだ！」

「そんな決め付けなくても……って、いつものことだっけ」

「バカって言われることに馴れるな。 じゃなくて、お前、ことの重大さが分かってないのか？ 王族へ対しての、殺人未遂だ。国家反逆罪が適用される。あの場で、おれが殺したって、当然の状況だったんだ。ここで裁かなければ、法も、それだけじゃなくて王家や、国そのもの。あらゆる秩序が、保たれなくなる。お前が気にしないから、じゃあ無罪にしようなんてことじゃないんだ。法という秩序が失われて、王家への威厳も、失われるんだぞ」

「でも、それって必要？」

その言葉で、セブンは言葉を失う。

不必要のはずがない。なのに、平然と、シュザリアは言い切る。

「だってさ、王家への威厳って言うても……普通に生活してる分には全然感じられないじゃない。お城の中なら分かるけど、一步、外に出て、普通の服を着たら……もう、威厳なんか感じないでしょ？ 王族の誰でもさ。お父さんも、お母さんも、メイジも。それに威厳がなくても、世界が消えちゃうことはないし。ね、だから、いらないんじゃない？」

「……陛下に合わせる顔が完全になくなった……。どこでお前はそんなにバカになったんだよ……。甘やかしたのがそんなに悪かった

のか……？」

頭を抱えるセブン。もう、どこから反論していいのかさえ分からなくなる。シュザリアはそこまで悩まれるとは思っていなかったらしく、ちよつと意外そうな顔をしている。

「この国は、大戦を治めた三雄が仕えていた領主が興した帝国ですからね。建国当時は無理やりにも、権力というものを誇示して治国しなければなりませんでした。それによって、王家の威厳というものがとても大切にされる伝統になってきたのです。……わたしのような者の説明で、ご理解いただけましたでしょうか？」

クロウが口を挟むと、シュザリアが「へー」と相槌を打つ。分かったのか、そうでないのか、いまいち不明瞭な返事だ。

「とにかく、シュザリア。無罪放免なんていうのはムリだ」

「じゃあ、刑を軽くしてよ。のつびきならない理由があつたんだしさ」

「おれに言うな。陛下にでも相談するんだな」

「うーん……お城には帰りたくないしなあ……」

腕を組みながらシュザリアが考え込む。セブンがリングゴを手に取り、赤いその実を指で軽く弾く。それから軽く拭いて、齧りつく。

「そうだった」

「どんな考えを思いついた？ 期待しないで聞いてやるよ」

「メイジに来てもらえばいいと思わない？ それで、伝言してもらうの」

「……アレが来られるはずないだろうが。伝言の為に呼び出すってのか？」

そっか、とシュザリアがつまらなそうに舌打ちをする。

「母は然るべき罰を受けるべきです。そして、それを終えてから、また……未来を歩めばいいと思っております。お心遣い、感謝いたします」

そうクロウが言って、シュザリアに微笑みを向けた。

「でも、お母さんが国家反逆罪なんだよ？」

「いえ、罪には罰です。罪を犯し、何も咎められないなんておかしい話です。きつと反省する意思さえあるのならば、極刑は免れるでしょう」

そう言い、クロウがセブンを見やった。言った言葉が合っているかどうか、確かめるようにして。小さくセブンは頷き、またリングを齧る。

「……それでは、これで失礼いたします。お大事に」

会釈をし、クロウが病室を出て行った。彼は病院を出ると、第1研究所へと向かう。歩きながら、袖を通してある白衣のポケットから小さな魔業機器を出した。それは魔業遠隔用無線電話装置。^{テレフォン}通称・ケータイ。

「わたしです。……フレルダ・ヴァリフルールの始末はつきました。……これより、計画の第二段階へ移行します」

雑踏を横切りながら、クロウが冷たい声を出した。笑みも消えていて、じつと虚空を見る。

『了解。ご苦労だったね、クロウ。適当に切り上げて、こっちへ』
ケータイからの返事。

「分かりました、キール様」

返事をし、クロウがケータイをまた白衣に突っ込む。

「……魔導騎士セブン・ダッシュ、ですか。……楽しみが一つ、増えましたね」

不敵に笑むクロウ・ヴァリフルール。柔らかな笑みには程遠い、にたりとした表情をしていた。

No. 24 「死ぬんじゃないぞ」

「 とんだ災難だったね。もう、体は平気かい? 」

キールに労われながら事務員室にセブンは入った。並べられた幾つかの机。どれも机上が整理されていて、書類や文具などが置かれている。キールがコーヒーを持ってきて、セブンに空いている机へ座るように促した。

「お蔭様で、当初の予定より2日も帰りが遅くなりました。シュザリアだけでも、それを公欠扱いにしといて下さい。補修はおれがやっております」

さらりと言ってからセブンは出されたコーヒーを一瞥した。ミルクが入れている。向かいに座ったキールは砂糖をスプーン3杯も入れているから、きっと甘いのだろう。少し考え、とりあえずカップに口をつけた。

「クロウ・ヴァリフルールさんから連絡を受けた時は、ぼくのクビが飛ぶんじゃないかって不安になってたよ。とにかく、無事に帰ってこられて良かった。ああ、そうだ。約束していた、お駄賃。きみからしたらはした金になっちゃいそうだけど、これで食べ歩きでもして」

キールが自分の座っている机から封筒を出した。封筒を受け取ってからセブンは席を立つ。

「じゃあ、おれはこれで」

軽く会釈をして、それからセブンは事務員室を出て行った。受け取った封筒を、廊下を歩きながら確認する。入っていたのは3000ルル。行き着けのレストランで一番安い料理を食べられるか、食べられないか、それくらいの額だ。何だか割に合わない気もしたが、考えないでおいた。

「セブンっ! 」

どんっと軽い衝撃が後ろからして、少しよろけるがセブンは転ぶ

ことはなかった。背中にアークがくつついている。どうやら、後ろから全力疾走して飛びついてきたらしく、軽く息切れをしている。

「久しぶりだな、アーク」

「うん。ね、ガウセンフェルツってどうだった？」

「とりあえず、降りろ」デコピンをかまし、アークを引き剥がしてから歩き出す。「面倒臭い街だった」

簡単な感想。アークは何だか拍子抜けた顔。セブンのことだから、魔業都市ガウセンフェルツについての雑学なんかをたくさん披露してくれると思っていたのだ。

「どんなだったの？」

「魔業がそこかしこにあった」

どうにも話が膨らまない。首を傾げて、アークは理解した。セブンにとつてはあまり良い印象ではなかったのだと。

「お前は？ グランギューロ・グランエイドに弟子入り、だろ？」

「したよ。それでね、そうっ。魔術具作ってみたの。でも、師匠つてあれで意外と忙しい人だからさっさと帰っちゃって見せてないんだ。だから、見て、セブン」

「今夜な。おれは3分後に『応用魔術論』？ Bだ」

ぽんとアークの頭を軽く叩いてから、セブンは小さな講堂に入ってしまうのだった。

「クロエー、良かった、無事だったんだー」

べったりくつつかれるのは長い黒髪にウェーブのかかったクロエ・リュグルスハルト。学院内の食堂に彼女がいた。シュザリアが久しぶりに会えたのと、セブンには及ばないが宿題を手伝ってくれる彼女が復学したことに歓喜して猫か何かのようにくつついていた。

「ええ、ごめんなさいね、心配かけて。……元気だった？」

「勿論っ。クロエがいなくて寮にいるの寂しかったんだよー。これで夜のお喋りが出来るし、うん、おめでとう、クロエ」

「ふふ……ありがとう。セブンとアークは……講義？」

30メートルもある長いテーブルに並べられた、大量の食事。パンにスープに、肉に野菜に、魚や果物。バイキング形式で、好きなものを取って好きに食べる。昼食の時間帯は多くの学生がこれを利用する。

「うん、多分。2人とも主席だから大変だね」

「そうね。でも主席になるといいことたくさんあるのよ?」

「そうなの? どんな?」

シュザリアがオレンジに手を伸ばして尋ねる。クロエは海藻とエビのサラダを食べている。

「まず授業料が免除されるわね。寮の部屋も、本当は一番いいところを一人で独占出来るのよ。セブンとアークは一緒に使ってるみたいけど、20平米の部屋を一人で使えるんだから、特権ね。しかも最上階で眺めが良くて、お風呂も広いし。学生には勿体ない部屋よ、主席のは。それに主席は最高学府への進学も出来るし、魔導師の職に就くことだって可能よ。まあ、セブンはすでに魔導師だからそんなのいらないんでしょうけど」

へー、と相槌を打ちながらシュザリアはオレンジを咀嚼する。

「でも、クロエって第8席くらいだね?」

第8席。それは学年の中で上から8番目の成績、ということの意味している。ちなみにこれは20席までしかなく、それ以下は厳密に順位を定められていない。シュザリアのような劣等生はどうしても教官や教授の目に留まってしまい、落ちこぼれのレッテルを貼られてしまうのだが。

「そうよ。それがどうかした?」

「主席は狙わないの?」

「当たり前じゃない」

「何で?」

「別に主席がどうか、思っていないもの」

きっぱりとクロエが言い切ってしまう。第8席という「成績優良者」に属する彼女が言ってしまうのだからそれを否定するのは難し

い。主席になることのメリットを説明しておいてからの、この落差にシュザリアでさえも脱力した。クロエは、やはりクロエだった。

「そつえばシュザリア、掲示板の貼り紙見た？」

「貼り紙……？ ううん、見てない。何かあったの？」

「合宿、やるみたい。全員で。班対抗魔術戦の振り替え企画ってあったけど、何かあったの？」

「あった……。え、合宿？ 何、何をやるの、それ？」

「よく知らない。来週、空間転移魔法陣でどこかへ連れて行かれるって」

えー、とシュザリアが苦い顔をした。まだ魔業都市へ行った疲れが残っている。それにきつと、合宿なんてことになってしまえば大変な目に遭う。それが分かりきっている。

「やだよー、合宿なんて……」

「噂だと班がバラバラにされるらしいわよ」

「えっ！？ そしたらセブンに助けてもらえないじゃない!？」

「一説によると学年対抗バトルロイヤルとか、全校生徒による総当たり戦とか、面倒臭そうなのが目白押しね」

「うー……」

唸るシュザリアをクロエは楽しげに見る。そうしていると、気配に気づいて後ろを向いた。シュザリアは気づいていない。

「セブンがいないと真正の落ちこぼれになっちゃうのに……」

「それなら、いつそのこと、おれがいなくなつて危機感持った方がいいんじゃないか？」

背後からの声。振り向くのと同時に額にデコピンをされ、シュザリアは小さな悲鳴を上げた。

「久しぶりだな、クロエ。魔力酔いは？」

「最悪の気分だったわ」

「何はともあれ、ちゃんと退院出来て良かったな。お前のことだから、ずっと病院に居つくんじゃないかと思ってた」

「それでも結構、粘ったのよね」

さらりとクロエが言う。苦笑しつつ、セブンはシュザリアに目をやった。

「合宿の件なら、さっき、おれに話が来たから内容を少し知ってる」
「本当っ！？……て、何でセブンに話が来るの？」

「今回、おれは合宿の運営側に回る。……おれがいるところが優勝するのは必然だからな」

「うわー、すつごくナルシスト」

シュザリアの額にデコピン。2発目のデコピンで痛がるシュザリアに小さなため息をついてから、セブンはクロエと目を合わせて肩をすくめた。

「とにかく、今回の合宿はあまりサポートを出来る立場にない。だから、来週までに」

「来週までに？」

「徹底的に鍛えてやる。ありがたく思え」

言われたシュザリアはがつくりとうなだれてしまう。セブンに勉強に関する教えを請うことはあっても、鍛えられることを請いはしない。それはただ一つだけの理由。

「おれのしごきで、死ぬんじゃないぞ？」

楽しげでありながら、どこかで残酷そうな表情をするセブン。特訓を請わない理由は、とびっきりのドSな内容になってしまったことが分かりきっているからだった。

No.25 次期帝位継承者

「メイジ・J・グヴォルト ? それは何だ？」

フードを被ったまま、相手の顔も見ずにダウンは問うた。

「今回、きみが警護しなければならぬ方です。勿論、警護ですから何があっても、その方を渡してはなりませんし、きみが傷つけてもいけません」

「つまり、向かってくるのを全て消せ、と？」

「いえ。殿下 ごほん、メイジ様は無益な争いを好みません。そうですね……鬼ごっこ、という風な形で逃げまくってみて下さい」

穏やかな声。相変わらず楽しげで、ダウンはそれが気に入らない。だが、黙ったまま頷いておいた。誰かに仕えることしか知らない。主の為に全てを尽くすべき、と徹底的に教え込まれた。だから、今の主には従わねばならない。もう、拾ってくれる者などいないから。

「そうそう、メイジ様はグヴォルト帝国においては、とても高い位を持つお方です。くれぐれも、粗相のないようお願いいたしますよ」

「粗相……？ 何だ、それは」

「何だ、とされると少し困りますね。……無闇やたらと汚い言葉や、乱暴な言葉を使わないで下さいね。そういった態度も、NGです。警護をしている間、きみしかメイジ様に頼れる人間はいませんので、そこを察して優しい態度で接して下さい。もしも、事後にメイジ様から、きみがと……っても、警護をする人間としては不適切だった、という評価をされては、わたしのクビが飛びますから」

「お前のクビが飛ぶなら、見てみたいものだ」

「止めてください、シャレになりません。わたしのような、ひ弱な魔術師はいつ、クビを飛ばされてもおかしくないんですから」

どの口が言うのかとダウンは思ったが、肩をすくめるだけにして

おいた。相手はグヴォルト帝国で一番の魔術師。いや、世界一かも知れない。フォースですらも寄せ付けぬ強さ。魔術における創成期からの知識を全て蓄えている。

「それでは、頼みますよ。メイジ様の警護は、夕刻からです。詳細はすでに覚えましたね？」

「分かつている」

「では、夕刻からよろしくお願いします。……そうそう、メイジ様は今回の件をご存知になっておりませんが、バラさないようにして下さい。こればかりはメイジ様に懇願されても、答えないで下さい。面白くありませんので」

「面白く……？」

「ああ、いえ、気にしないでください。それでは、また」

笑顔で言われて、ダウンは背にしていた扉のドアノブに手をかけた。そのまま、部屋を出て行く。何度会っても、何度言葉を交わしても、今の主はよく分からない。マクスウェル・ホワイト。アレは一体、何者なのだろう。ダウンの中での疑問は、ずっと膨らみ続けるばかりだった。

「メイジ・J・グヴォルト？」

首を傾げたアーク。目の前にいる少年が、そう名乗ったのだ。美しいブロンドヘアに、知的に澄んだ碧い瞳。背丈は、丁度アークと同じくらい。年も同じだろう。寮の部屋に訪ねてきた珍客が、本当に名乗った通りならば急いで頭を下げないといけないのだが、それよりも驚きの方が大きい。

「はい。いつも、姉がお世話になってます」

「あ……いえいえ、こちらこそ……でもないけど……うーん……」

正直、シュザリアにお世話になったことが記憶にない。だが、一応、丁寧な返事を試みた。

「アーク・ディファルトさんですよ。飛び級入学で主席って、凄いですね。ばくも早く、ここに入学してみたいけど、なかなか難し

くて」

「凄くなんてないよ　です」敬語になれていないアークは、ちょっと難しい顔になった。「……それで、えっと……何のご用で……？」

恐る恐る言ってみると、メイジはにっこりと微笑んだ。

「いつも姉がお世話になってるので、そのご挨拶にお伺いしました。……セブンは、いらっしやらないのですか？」

「あ、うん。セブンはもうすぐ帰ってくると思うんだけど……じゃなくて、ですけど」

慣れない敬語を使うアークにメイジが小さく笑んだ。

「大丈夫ですよ、敬語なんて使わなくても。ぼくは今、従者を誰一人付けていませんので、あなたと同じ、ただの一般人です」

「そう、なの……？　じゃあ、こんな口調で大丈夫？　田舎の出身だから敬語なんて使うことなくてさ……」

おっかなびつくり言い、アークは慌ててメイジを部屋の中へ招き入れた。

「はい、大丈夫です。それに、王都も古代大戦が終結されるまでは田舎でしたから。そもそも、あの地はぼくのご先祖様が治めていた小さな地。現在、共通語として出回っている言葉も、昔はあの地方における典型的な鈍りのある言葉でしたから」

「あ、それは知ってる。あとさ、あとさ、王家の紋章が一本の剣だけで龍を平伏させたからって聞いたんだけど本当なの？」

「ええ、本当です。現在もその剣は城に飾ってあります。龍の血を刀身に宿したことで、不思議な力が宿っているそうです。それが何なのかはよく分らないのですけれどね。とにかく、宝剣として玉座の間に飾ってありますから、今度、是非とも見にきてください」「行つていいのっ！？」

「はい。王城は一般公開されているのですよ。少し堅苦しいところはあるのですが、でも、是非遊びにきてください。ぼくはまだ姉様のように自由が認められていないので、一人で王城にいるのも

何となく寂しいものなのです」

アークが王城へ行けるということを許され、はしゃぐ。自分でも認める田舎育ちのアークは都会というものに憧れる傾向がある為に、国で一番栄えた王都の、しかも、王城へ行くなんてことは夢のまた夢だったのだ。

「アーク、玄関先で何を話して 殿、下……？」

2人に声がかかり、振り返るとそこにセブン。だが、メイジを見た目が大きくなって、引きつっていた。

「久しぶり、セブン」

「お久しぶりです、殿下。何故、このような場所へ……？」

膝をつき、セブンが頭を垂れた。メイジはにこやかに微笑んでから、しゃがんでセブンの肩を叩く。

「ちよつとだけ、お話がしたくなったから来た。セブン、お願い。楽にして。姉様みたいに」

「しかし、殿下は次期皇帝陛下となられる身分にあります。わたしのような者が」

「勅命。……これでも、ダメ？」

難しい顔をした後でセブンがゆっくりと顔を上げた。不承不承、といった苦い顔をしながらメイジを見て、じっと瞳を見つめる。それから、ため息をついた。

「国の未来が心配になる……」

「そんなの杞憂に終わるよ、セブン。……中に入れてよ。立ち話じやあ、足が疲れちゃう」

「分かった。……どうぞ、殿 メイジ。……学生の部屋へ」

メイジが玄関から部屋へと上がりこんだ。物珍しそうに部屋の中を見渡して、それからふと目についたアークの机へ向かう。そこに広げられていた紙を見て、続いて、その隣のセブンの机を見やる。整然と片付けられており、埃一つない。

「凄いや。……人が暮らしてるって気がする」

「何で、そんなこと……？」

首を傾げたアークだが、セブンは目をそつと伏せた。

「王城は、毎日、毎日、綺麗に片付けられています。朝起きて、夜眠るまでにやったことが全部、翌朝にはなくなったことになっているんです。あんまりにもお掃除が行き届いているせいで。どんなに散らかしても、どんなに汚しても、翌日は何もなかったかのようになっています」

「それじゃあ……何か、寂しいね」

「正直、寂しいです。……だから早く、この学院に入りたいのですが、なかなか許して貰えません。完璧な生活なんて、ぼくは求めません。完璧なものなんて、求めたくありません。でも、王家の者としてはそれを追求しなければならぬ。……なまじ、ちゃんと教育を受けたせいでしょうか。姉様みたいに奔放には振舞えなくて、何だか……自分が嫌になりそうです」

セブンが紅茶を淹れ、メイジに椅子をすすめた。ティーカップの置かれたソーサーを机へ置き、セブンは自分のベッドへと座る。シユザリアが王城にいた頃は、メイジの世話も少なからずしていた。姉弟ということと一緒にいる時間が多かったのもそうだが、シユザリアにとつてのセブンのような存在が、メイジにはいなかった。日替わり、週替わり、いつも、違う人物がやって来ては腫れ物にでも触れるかのようにメイジに接する。だから、時折、セブンはメイジが不憫に思えた。

「メイジ。……愚痴こぼしにきたのか？」

「……うん。それも、理由の一つ。もう一つ、セブンに相談したいことがあるんだ」紅茶を一口すすり、メイジがセブンを見た。「姉様じゃなくて、ぼくの……従者になって欲しくて」

アークが目を丸くした。セブンの持つて来たクッキーを手からこぼして、メイジを凝視する。

「セブン。……お願い。ぼくは、姉様よりもちゃんとしてるから。姉様より、勉強もしっかりやるし、迷惑をかけないから。だから……。……ごめん、ムリだよね」

「……悪いな、メイジ。でも、お前に何かあったときは……力になつてやるから」

「それは、国のために？ 父上のため？ ……姉さまのため？」

「何言ってる。……お前のため以外に、理由なんかないって」

アークの机の椅子に座り、メイジの肩に腕を回して抱き寄せた。シュザリアより真面目で、シュザリアより知的で、国の将来を考えればずっとメイジの方が優れている。だが、中身はまだまだ未

熟だ。むしろ、周囲の尽力の賜物なのか、大人へと生き急いでさえている。そのせいで、精神的に弱いところが出来上がってしまった。そこを知っているから、セブンはあえてメイジを片腕に抱いた。

「何日かは、いるんだろう。その間、何回だってここへ来ていい。だから、変なことと言つなよ。おれはお前の友達には立場上なれない。でも、アークはもう、お前の友達になった気でいるから」

「うんつ。王城に遊び行つていいんでしょ？ そしたら、メイジの部屋とか見せてね。美味しい料理とか、いっぱいあるでしょ？」

底抜けに明るい笑顔でアークが詰め寄り、メイジは微笑んだ。セブンの腕から離れて、アークに頷いて見せる。恐らくは、政治や、大人の策謀の絡まない、初めての同世代の友人。2人を見つめ、セブンはそつと息をついた。

（正直、シュザリアの従者よか、メイジの従者やってた方が気苦労はしないだろうな……）

そんなことを、まんざらでもなく考えてしまっていた。

No.26 皇帝候補の決意

日が沈み、西の空に茜色が滲み出した頃、それは起こった。

セブンは外出し、部屋にはアークとメイジだけ。魔術理論についての話を夢中になって語っていた時、突然、地震が起きたのだ。最上階という場所にある分、揺れは大きいのだが、それにしても激しい地震だった。縦揺れし、部屋の中がごちゃまぜになってしまう。

「な、何！？ 何なの、これ！？」

「分かりません……！」

机の下に頭を突っ込み、アークが声を上げる。それからメイジが何もしていないのに気付いて、引っ張って机の下に潜らせた。

「地震の時は、こうやって頭を守るんだよ」

「そうなのですか？ すみません、世間知らずなもので」

「あ、うん、いいけど……ただの地震のほずないよ、これ……！」

一向に揺れは収まらないどころか、激しさを増していく。寮が壊れてしまうのではないかと思った、その時に窓硝子が破られた。そして、そこから何かが勢いよく入ってくる。

「メイジ・J・グヴォルト。お前を、誘拐しにきた」顔に黒い布を巻いた男が机を蹴り飛ばし、尻を向けている二人に言い放った。「赤髪のチビ、お前が、他の連中に伝える。要求は、一つだけ。おれを、満足させることだ。」
ベルズ・サンダー
雷鐘

雷の轟音が鳴り響き、部屋中を真っ白の閃光が埋め尽くした。そして、アークが再び視力を回復すると、謎の男の姿も、メイジの姿もなくなっていた。

「え……ええっ！？ 嘘でしょ！？ メイジ！？ どこ、どこかいるんでしょ！？」

焦りながらアークが部屋に散らばった物を引っくり返したり、ベツドの下を覗いたりする。だが、いない。口をぽかんと開き、ゆっくりと割れている窓硝子を見やった。風が吹き込む、そこから下を

覗き込む。

「これって、ぼく……物凄く、問題視とかされちゃう……？」

ひっ、と息を呑んでから、慌ててアークは部屋から走り出て校舎となっている城へと向かった。

「立场上、こういうことになるのは慣れてるのですけれど……随分と、まあ……大切にしていたでいて、申し訳ないですね」

小さく呟いてから、メイジは閉じ込められた部屋を見渡した。いつの間にか眠っていて、気付いたらここにいた。明るくて、綺麗で、清潔感のある上等な部屋だ。高級な革張りのソファーもあれば、お菓子や、紅茶のポット。何冊かの本もあれば、魔業蓄音機まである。ただ、窓はなかった。その代わりに壁に直径30センチほどの魔法陣が発動されていて、そこから涼やかな微風が出ている。

「すみません、少し、よろしいですか？」

ただ一つの出入口となっている扉を軽くノックし、メイジが言った。すると、少ししてから声が返ってくる。

「何だ」

「アークに要求をしていましたが、あなたを満足させるというのはどのような意味なのでしょう？ それとも、愉快犯か何かでしょうか？」

問いかけたメイジだが、返事はなかった。小さく息を吐き出してから扉に背を預けて座り込む。誰の目もないという状況への憧憬は少なからずあったが、あまり楽しいものでもない。

「どうせなら……もっと誘拐みたいなことして下さい。軟禁じゃあ、いつもと何ら変わりません。だから、いつそこの国でもいいから連れてって下さい」

こんなことを自分の住む王城で言ってしまうえば大臣にでもキツく叱られてしまいそうなものだが、メイジは扉越しに顔も知らぬ誘拐犯に告げた。拗ねている訳でも、悲観的になつていく訳でもない。それなのにメイジはそれを望んでいた。軟禁同然でずっと王城へ閉

じ込められて育ったというのもあるし、それ以上に姉のシュザリアがあまりにも奔放だった。それが羨ましくて時には嫉妬もしたし、諦めてしまうようなこともあった。

「ドラスリアムという国がある」

扉の向こうから声がして、メイジはいつの間にか俯いていた顔を上げた。

「最近、紛争が起きたと聞きました」

「その国にはフォースと呼ばれる、強力な力を持つ六人の魔術師がいた。だが、その内の四人が反旗を翻した。突然バカバカしくなったらしい。あからさまに自分たちよりも劣る人間どもの為に、いいようにその力を使わなければならぬという使命が。そして封印されていた七人目のフォースも解き放った。七人目はそれこそ最強の魔術師だ。この国で一番強い魔術師だろうと、勝てないほどに。だから……ドラスリアムは今に滅ぶ。哀れな国だった」

声は陰気で、暗く沈んでいた。メイジはそれを聞きながら思ったことを口に出す。

「あなたはその国の方だったのですか？」

「おれもフォースだ。無能なクズどもの命令だけに従ってきた。だが、おれはそれしか知らなかった。誰かに従うことしか出来ない上に、自ら動くことを知らない。フォースとして造り出された時に、そういう性質がつけられた」

立ち上がって、メイジは扉のドアノブを握ってみた。ゆっくり回し、引いてみる。だが当然のように開かなかった。息を吐き出してから扉に寄りかかると、そのまま扉が開いて倒れ込んでしまう。

と、向こうにいた男に支えられた。

「鍵とか、閉めていなかったんですね」

「そこまで指示されていない」

答える男　ダウンはメイジを放して、それまでずっと座っていたのである。木箱に腰掛けた。別にメイジを部屋へ戻そうとしなければ、どこへ行くとしても止めようとする気配を見せない。

「名前……教えていただいてもよろしいですか？　ぼくはメイジ・J・グヴォルトです」

「ダウン。魔導^{フォース}対戦用人型兵器・ナンバー・シックス。性質はダウン。呼称、ダウン」

少しもメイジを見ずに、虚空を睨みながらダウンが名乗る。フードをすっぽり被っているが、整った顔立ちは見える。瞳には暗く、陰鬱な光。人形のような印象を受けながら、メイジは少し自分とダウンとだぶらせていた。

「今、あなたに指示を出している人は……誰なんですか？」

「それは言えないことになっている」

「じゃあ、その人じゃあなくて……ぼくに従ってくれるということはありませんか？」

顔を上げてダウンがメイジを見やった。品定めでもするかのようにメイジの全身を眺め、それから眉間にしわが寄る。

「あり得ない」

「どうしてですか？　あなたは別に、誰に従っててもいいんじゃないですか？」

「ガキの玩具になるつもりは毛頭ない。それとも……おれを認めさせるだけの何かを持っているか？」

突き放すように言われてメイジはダウンの手をいきなり握った。

そして、自身の魔力を流し込む。その反発でもって互いの魔力許容量がどれだけあるのかを確かめる魔術師の初歩技術だが、ダウンの魔力が多すぎてメイジは強く弾かれた。逆流してきた魔力で軽い吐き気を覚え、メイジは自分の口を片手で押さえた。

「およそ360カセル。ガキにしてはある方だが、まだまだだ」

簡単にダウンは言い放ち、興味も示さない。常人のおよそ3倍に当たるメイジの魔力許容量。成長途中の身でのこの魔力許容量は王族としての血による体質なのだが、それを遥かに凌ぐダウン。圧倒的なまでの差を体感し、メイジは生唾を飲み込んだ。昔、セブンと同じことをしたことがあったが、その時はセブンがわざと手加減を

してごく微量の反発だけに留めてくれた。しかし、ダウンはそんなことはお構いなし。望んでもいないのにずっと甘やかされてきたメイジにはショックよりも、このことが新鮮に思えた。

「誰にも言ってます。ぼくは、この国の皇帝になるつもりはありません」決意を込め、メイジがダウンを見据えて言う。「成人を迎える前。16歳になったら、すぐにでも城を出て、この国から出て行くつもりです。まだ、あなたを認めさせるようなものはありません。だけど……いずれ、何が何でもあなたにぼくを認めさせる。だから、ぼくに力を貸してください」

No.27 小悪魔の宴会

「次期皇帝候補のメイジ・J・グヴォルト殿下が、男子学生寮塔最上階セブン・ダッシュ、アーク・ディファルトの部屋で誘拐をされた。犯人は顔に布を巻いていた。強力な魔術を扱ったともされている。生徒、職員一同、直ちに殿下を捜索して保護をすること。尚、この件は学長から皇帝陛下へ報告をすることになるが、誰も外部へこのことを漏らしてはならない。見つけ出し、無事に保護した者には何よりも勝る栄誉という名の褒章が贈られる。王立魔術学院ホワイトウイングの名にかけ、絶対に殿下を見つけ出すのだ」

生徒全員が呼び出された城内の大ホール。生徒は普段は着用義務のない制服に袖を通している。白を基調にしたスーツのようなものだが、機動性を損なわぬように裾が少し詰められており、上着も肩から先がない。ベルトから伸びているチェーンにはそれぞれの扱う武器が繋がれている。特殊な魔術具で伸縮自在だ。揃いの物々しい格好。まるで軍隊。卒業生の半分以上が軍人となる進路を取るのだが、すでにこの魔術学院にいる時点で有事の際には様々な任務に駆り出されることになる。この服装はその時に着用することになる。整列をした状態で話を聞きながら、アークはずっと不安の色で顔を染め上げていた。

「ディファルト、お前のところにどうして殿下がいらっしゃったんだ？」

横にいた年上の同級生が、アークを肘で突ついた。年下で、魔力許容量が少ないのに主席という立場にいるアーク。当然のように、それをよく思わない者もいた。

「何だっていいじゃん」

「セブン先輩の脇で甘い液ばっか吸いやがって。この役立たず。見てろ、おれが殿下を救い出して、お前の部屋を奪い取ってやる」

ぞんざいに言い返したアークに向かって、その男子生徒は意地悪

く笑みを浮かべた。細かな教官の指示が飛び交う。

「好きにしたら。……出来るならね」

皮肉気な口調。舌打ちをしてから、その男子生徒は列から出て行ってしまった。もう、解散の命令が出ている。それぞれに殿下救出という目的を持って動き出している。セブンの姿が見えなかった。もう、すでに動き出しているのだろうと推測をし、ごった返す人の群れの中で目を凝らす。しかし、シュザリアもクロエも見当たらない。シュザリアは生徒である前にこの国の姫君だから、こういうことを免除されているのだろうか。クロエだって4年生。それなら、一人で何だって出来るようなもの。

「メイジ……。ごめん、ぼくが……。ぼくのせいで……」

小さく呟いてから、まだ小さな拳をぐっと握りしめた。それから、緊急で敷かれた転移魔法陣へ向かって歩き出す。この魔法陣は学院のある街の門に繋がっている。チェーンに繋がっている悪魔デモンズ・ナイフの懐刀に目をやってから、白く輝く魔法陣に脚を踏み入れた。

「アーク殿でございますね」

魔法陣から出たところで声をかけられ、アークが周囲をきよろきよろと見渡した。しかし、何も無い。

「こちらです」

声のした方。自分の足下を見やると、そこに兜があつた。いや、厳密には違う。兜を被った、小さな何かだ。東洋にあるという国の資料を読んだ時に、こんな絵を見たことがある。三角形のような帽子。角を思わせる飾り物があつて、黒々とした重量感を思わせる塗料が塗られている。そんな兜を被った、丸っこい生物が見上げている。何だか、可愛い生物だ。桃色をしていて、薄い毛が全身を覆っている。大きな丸い顔に短い手足がついていて、腰。なのであるうか、側面にこれまた短い剣を佩いている。

「えっと……どなた？」

「わたしはクロエ様の使い魔が一、カルアロディ・ブロウ・トエロ

ウフィと申します。カブト、とクロエ様には呼ばれております」

「はあ……。それで、クロエがどうして？ どこにいるの？」

しゃがみ、カブトに目を合わせてアークが問う。

「クロエ様より、言伝ことづてを預かりました。主人の言葉を、そっくりそのまま、お伝えいたします。『セブンはどこ探してもいないみたい。シュザリアも探したけれど……あの子は、まあ、大丈夫ね。それでアーク。あなたはとうする？ わたし一人だと、ちょっと大変だから手伝って欲しいんだけど。一人でやれるなら、カブトにそう伝えて頂戴。手伝ってくれるなら、カブトに連れてきて貰って。』

と、いうことです」

「うん、分かった。……じゃあ、クロエのところに連れてって」

「ではわたしの手を」

指のない、粘土で作った楕円形みたいな手をカブトが差し伸べ、アークはそれを握った。すると、ぐいつと引つ張られてカブトが兜の中へ吸い込まれてしまい、アークもそのまま一緒に飲み込まれた。全身を押し込まれるような圧を感じながら、何かが光ってそこから飛び出て地面に転がった。

「痛ったい……」

「お帰り、カブト。荒くて悪いわね、アーク」

「クロエ？」

体を起こすと、そこは見知らぬ森の中だった。倒木にクロエが腰掛けており、彼女の制服姿を初めて見たアークは何だか新鮮に感じる。金色をしたモノクルをかけ、周囲を見渡していた。

「それ、六ツ目単眼シックス・アイ？」

「そうよ。……詳しくなったのね、魔道具に」

モノクルを取って、物珍しそうにするアークにクロエが渡した。

「うん。それは中期革命で量産された装身魔術具の一種だよ。装身魔術具は堂々と身につけても警戒されることがないし、ごく少量の魔力だけで発動出来るから便利なんだよね。これの効果は……情報透察と……やっぱり6つも効果があるんだ。便利だね、これ。し

かもメイド・イン・フィルエル。魔術具の里のだし、高級品だよ」

「凄いじゃない。わたしも一時期、魔術具には興味持ったけど、魔術具の解説は出来なかったわよ。ましてメーカーなんてね」

「えへへー。じゃなくてっ、メイジだよ！」

モノクルを返し、アークが大きな声を出した。少しだけクロエが眉を顰めて、それから六ツ目単眼をまたかけた。

「分かってるわよ。男子寮塔からここまで、魔術の痕跡を追ってきたの」

「魔術の痕跡？」

「これを使えば分かるのよ、何となく。魔術を使った場所には大きな靄が出るの。それはその魔術を使った者から漏れ出たものだから、尾を引いていく。セブン並みにとんでもない量の靄だから、それだけ長く尾を引いてここまでは辿りついたの。それでここまで来たのはいいけど、とうとうその尾がなくなっちゃって。休憩したら、カブトがあなたを連れてきた」

「そうなんだ……。この近くにいるのかな？」

「そうね。もしくは……。ここを通ってずっと遠くまで行っただか。それにしても、変な誘拐犯ね。満足させることが向こうの提示した条件なんでしょう？ 満足なんて……。遊びたいのかしら」

「遊び？」

周囲を見渡してから、アークがチェーンに繋いでいる悪魔の懐刀を抜いた。核に片手を置き、そっと目を瞑る。グランギューロに教わった悪魔の懐刀の第三の能力。試すのは初めてだ。

「何をするの？」

「見てて。
ゴブリン・パーティー
小悪魔の宴会」

刀身が薄い緑色に輝き出し、そこから奇声を発しながら幼児くらいの大きさをした、小さな角を持つ悪魔が飛び出した。肌は緑色。粗末な布を前掛けにしている、手には短めの棒を持っている。全部で6体。ゴブリン、と呼ばれる使い魔の一種だった。

「オイオイ、オレヲヲ呼ンダノハ才前カヨッ!? ギャハハッ、き

「やばしてい超少ネーデヤンノ！」

ゴブリンの一体がアークを見てから笑い出すと、一緒に出てきたゴブリンも下品な大笑いをする。クロエは渋い表情。呼び出した主人に対して、こうもバカにするのはよほど低俗な魔物ということだ。「黙って。でなきや、サタンに報告するよ」

「ケツ、テメーミテーナがキンチョニ出来ルハズガネーダロ！」

「じゃ、刑罰ね。樽の刑」

そうアークが言うことやたらとうるさいゴブリンがいきなり樽に包まれた。そのまま宙へぽーんと放り出されるように上って、5秒してから猛烈な勢いで落ちてきて樽が割れる。すると、ゴブリンはすっかり目を回しており、ふらふらと倒れ込むようにしながら服従を誓うようにしてアークの足下にひれ伏した。

「ナ、ナニガアツタンダヨ、キヨーダイ！」「ダイジョーブカヨ！？」「コンナノ、タダノがキンチョダゾ！」「タダノ樽ジャネーノカヨ！」「死ヌンジャネーゾ！ 頑張レヨ！」

こぞってゴブリンどもが心配するが、へろへろのゴブリンは首を左右に振ってから何かを近くのゴブリンに耳打ちした。

「へ……？ アア、ウン……ナルホド、ソイデ……マジカヨツ、ソナコトガアツタノカヨ！？」「ソレハヤベージャネーカ、オメーラ、従ツタ方ガイイゾ！」

話がまとまったのか、ゴブリン達がアークを向いて整列すると敬礼のポーズを取る。額にあてがう手が逆なのだが。

「今、人捜しをしてる。その手がかりがこの辺にあるかも知れないから、見つけたら教えて。ぼくはやたらめつたらに罰を与えないけど……真面目にやらなきや、今度はもつと酷い刑にするから。分かったら解散」

「へイ、ボス！」

6体のゴブリンが散り散りに消えて、アークは疲れたような、外れくじを引いたような、そんな顔をして見せた。

「今のは小悪魔の宴会って言う効果なんだけど……ゴブリンって、

扱うのが大変なんだね。まあ、ゴブリンに対しては絶対的優位になるような仕組みになってるんだけど……」

「ふふ、いいじゃない。賑やかで。ねえ、カブト？」

「わたしはあのような常識のない輩は嫌いであります」

きつぱりとカブトが言い切り、アークは苦笑いをした。そして、心に決める。よっぽどのことがない限りは、ゴブリンを呼ばないようしよう、と。

No.28 決意と誓いの行方

「学長、生徒達による搜索も今日で五日……殿下はご無事でしょ
うか？」

学長室に入ってきた女性教官に尋ねられ、マクスウェルは椅子に
座ったまま目を細めた。

「そうですね……。ご無事であることを祈るしかありません。す
でに陛下にはご報告をしましたが……そろそろ、限界ですかね」

「やはり、魔導騎士の派遣を要請した方がいいのでは？」

「魔導騎士なら、いるじゃあないですか」

「しかし、ダツシユはこの数日間、一切の連絡が繋がりません。や
はり、17歳という年齢では……」

「アリエノールくん、滅多なことは言わない方がいいと思いますよ」

「はい……。それと学長、ファーストネームはご遠慮下さい。虫唾
が走ります」

「それは厳しいですね」苦笑してから、マクスウェルが椅子の後ろ
にある本棚に向かった。「では、魔導騎士を要請しましょう。生徒
を労って下さい。あとは、わたしがやります」

「分かりました。では、失礼します」

アリエノール・フライツが学長室を出て行き、マクスウェルはぶ
厚い本を手にとった。本となっている見た目だが、そのほとんどは
くつついていて見開きで1ページしか読めるところはない。開いた
ところにあつたのは複雑な紋様をした魔法陣だった。

「この試みは失敗ですかねえ……」

小さく呟いてから描かれた魔法陣の上にマクスウェルが手を置く
と一瞬でその姿が消え去った。

「そっち行つた！」

「カブト、やって頂戴」

アークが追い込んだ影を、曲がり角から飛び出したカブトが襲撃する。

フラッシュ・ボックス

「万雷の箱」

片手だけでその影はカブトを押さえ込んだ。そして、カブトを閉じ込めるように六面の魔法陣が現れるとその中で激しい雷光が閃く。影は、ダウンだ。脇に無造作にメイジを抱え、アークとクロエの追走から逃げている。

「カブト！」

「心配はありませんっ！ それよりも、奴を……！」

黒焦げになりながらも、カブトがクロエに言葉を返した。カブトはクロエが使役する使い魔の中でも打たれ強くて丈夫なのが特徴だ。ダウンの放った魔術は複雑な相関関係で威力が数倍にまで跳ね上がっているのに、表面を黒く焦がしただけで済んだのがその証拠。いくら使い魔と言えど、傷ついてしまうのは忍びないもの。心配が必要だったと分かると、クロエはすぐに六ツ目単眼シックス・アイをかけた。

「アーク、右っ！」

「了解。デモンズ・ブレス悪魔の息吹！」
デモンズ・ナイフ

腰溜めにした悪魔の懐刀を振り切ると、強烈な冷気がアークから先の右方向へ放たれた。背の高い樹木が多い雑木林に氷河期でも訪れたかのような光景になる。葉も、幹も、枝も、土でさえも凍り付いてしまったのだ。しかし、木々を飛び移っていたダウンは魔術で防いでいた。

「魔術具……目障りな」

「ダメです」

魔法陣を展開させようとしたダウンにメイジが小さな声をかけた。メイジは抱えられたままだが、ただの演技だった。この場では誘拐されていることしておかなければならない。微動だにせず、口だけ動かしてダウンを止める。

「誓いがある。今はそれに従おう。おい、貴様ら。もっと、楽しませろ。それとも、七番がいないと何も出来ないのか？」

凍りついた太い枝に立ったまま、ダウンがアークとクロエを見下ろす。顔には黒い布を巻いたままだ。手がかりを追っていたアークとクロエは四日前にダウンへ近づいた。しかし、そこからはずっといたちごっこをする破目になっていた。どれだけ追いかけても、後少しでちつともダウンを捕まえない。夜になると簡単に姿を消して、朝方になるとまた姿を発見する。アークとクロエはすでに疲労が限界まで達していたが、目の前にいるというだけで必死になって追いかけていた。

「そっちこそ、どうしてぼくらを蹴散らそうとしないの？ セブンと同じくらい強いなら、そんな朝飯前なんでしょ？ それとも、ぼくらが怖い？」

周囲の状況を伺いながらアークが挑発をする。こちらの目的はメイジの救出だ。それならば、向こうから近づいてきた方があり難いクロエが空間移動魔法陣を敷けるといので、どうにかしてそこへダウンごとメイジを押し込めれば、後は学院にいるはずの教官たちがきつと上手くやってくれるはず。勝機はそれだけだった。

「ふざける。そこまで言うなら、試してやる。これを凌いだら、大人しくこの皇帝候補は返す。もしも、凌ぐことが出来なかったら塵も残さずに消す」

「ダウン」

また、小さくメイジが嗜める。だが、ダウンは少しも聞く耳を持たなかった。ポーカーフェイスのままアークとクロエを見下ろしている。

「そう。じゃあ、やってみなさいよ」

「クロエ……大丈夫なの？」

小声で問うとクロエが小さく頷く。カブトならば大抵の魔術に耐えられる。そもそも、そういう使い魔なのだから。

「命知らずのバカどもめ……。望み通りにしてやる」

冷たく言い放ち、ダウンが片手を天へ掲げた。すると、四つの巨大な魔法陣が中空に展開される。一番上が最も大きく、そこから一

回りずつ小さくなる。そして、四つ目になるとまた二回りほど大きくなる。それを見たアークとクロエが目を疑う。

「そんな……！　これ、重複魔法陣で、しかも四つ重ね！？　こんなの、悪魔の懐刀で吸収出来る魔力量を超過してる！」

「カプトでも無理そうね……。アーク、どうしようかしら」

「し、知らない……。こんなの、どうしようも」

魔法陣が輝くと、空に暗雲が立ち込めた。目を瞑り、精神集中をしていたダウンがゆっくり瞼を押し開ける。そして、無情に言葉を発する。

「吠えろ。　雷虎召喚」

巨大な雷が展開された魔法陣の内部を通る。

正に一瞬。視界全てが白色に塗潰されたかと思うと、次に空と大地を揺るがすような轟音が鳴り響いた。訳も分からないまま、全身を衝撃が駆け抜けていく。五感全てが麻痺をして、何も知覚出来ない時間の中に放り出された。上下左右、色の区別、時間の感覚、音の有無、　自分の存在すらも、感じられない。

「やり過ぎですよ、ダウン」

唐突にアークは意識がはつきりした。目の前に他でもない学長マクスウェルがいて、自分の頭に触れていた。そのお陰で急に覚醒したのだと悟り、それから周囲を見て驚愕する。周囲一体、全てが薙ぎ倒れていた。悪魔の息吹などとは比較にならない広範囲、そして、その威力。周囲を地平線の向こうまで見渡すことが出来るのだ。地面はむらもなく真黒に焦げていて、その臭いが嫌でも鼻をつく。

「がく、ちょ……」

声を出すと酷く掠れていた。

「今は何もしないで下さい。わたしが咄嗟に守りましたが、雷属性の術は五感にまで働きかけます。そこまでは防ぎ切れませんでした。すぐ、学院に帰れますから、頭を空っぽにでもしていて下さい。あ

なたもですよ、クロエ・リュグルスハルトさん」

立ち上がるうとしていたクロエにマクスウェルが言い、軽く彼女の手を取って座らせてしまう。穏やかな笑顔のまま、険しい顔をしているクロエの頭にそつと手を当てるとすぐに眠ってしまった。

「さて、と……殿下。申し訳ありませんでした」

ダウンを向いてマクスウェルが声をかける。すると、ダウンに守られていたメイジが自分の足で立った。

「どうということ……ですか？」

「実は数週間前に陛下より、とある勅命を言い渡されまして。メイジ様に相応しい魔術師を紹介してくれ、という内容です。殿下の心優しい性格を知っておりましてので、きっと、誰をご紹介しても本心を押し殺して簡単にご了承してくださるのではないかと考えました。そこで、ご迷惑をおかけいたしました但今回はテストをさせて頂きました」

「テスト？」

「はい。この五日間、ダウンと共にいるのがほとんどうんざりするようなことがありましたでしょうか？ 何かあつてはいけないと思い、一応ではありますが……ずっと、セブンを監視につけていました但特にそれらしい問題はなかったと報告を受けております」

「セブンが……監視？ でも、全然、そんなの……」

「勿論、気取られては意味がありませんから。例えどんなことを仰られたとしても、それはセブンが決して口外いたしませんのでご安心を。それで……ダウンはいかがでしょう？ もしも、不満がありましたらまた別に見繕いますが、ダウンを……連れて行ってはくれませんか？」

興味なさそうに腕を組んだまま、自分の後ろにいるダウンをメイジが振り返る。セブンとは違って優しくなければ、言うことを聞かなかったり、手加減をせずに魔術を放つたりもしたが、それでもメイジは文句などなかった。

「こんなに素晴らしい人材を、ぼくなんか……よろしいのですか

？」

「はい。それに……あなたが即位なされたら、国にいる全ての魔術師はあなたのものです。もっとも、殿下はお優しい心の持ち主ですから、そのようなことはどうでもいいのでしょうかね。さて、わたしは早く学院に戻り、仕事を片付けなければなりません。陛下より、許可を頂いておりますので……ダウンと共にのんびり王城までお戻り下さい。猶予は二週間、だそうです。学院にお越し頂ければ、何でもいたしますのでよろしければどうぞ。それでは、失礼します」

深くメイジに一礼すると、マクスウェルはその姿を一瞬で消してしまった。驚いてメイジが周囲を見やると、同じようにアークやクロエ、カプトもいなくなっていた。

「ダウン……あの誓い、ぼくはずっと守ります」

「誓いを破れば、その時はどうなっても知らん」

「はい」

「それと。……その気持ち悪い喋り方はおれの前でするんじゃない。行くぞ」

ぶっきらぼうにダウンが片手を出すと、メイジがその手を握った。

「学長の思いつきって、これだから嫌い……。頑張りすぎちゃったよ……」

城の医務室でアークはぶつぶつとセブンに愚痴をこぼした。一日だけ、様子見のために医務室に泊まった。幸いにも後遺症はなく、今は元気にぶつくさ言っている。

「おれだって色々と振り回されたんだ。被害者はお前だけじゃないさ」

迎えにきたセブンは校医に挨拶を済ませ、アークの少ない荷物をすでにまとめて肩に担いでいる。

「セブンは何してたの？」

「殿下と六番の見張り。それと、学長との連絡。あとは自律命令魔法陣で作ったマジック・ドールに生徒全員を見晴らせて、それから

……」

「もういいよ、セブン……」

続けようとしたセブンをアークが遮った。セブンの方が自分よりも色々やっていた。それなのに愚痴をこぼすなんて、と少しだけ自己嫌悪に陥る。すると、セブンが苦笑いしながらアークの頭を一度撫でた。

「だけど、よく頑張ったな。実力差があつて、それでも、五日間ずっと追いかけて……。六番を相手にあれなら、上出来だ」

「ほ、ほんとに……？」

「ああ。まあ、あいつの性格考えたら、挑発するのは頂けないけどな」

ぐしゃ、と赤い髪の毛を乱してセブンが笑みを見せた。アークもいつもの笑顔を作り、白い歯を見せるとベッドから降りた。

「ねえ、そう言えばさ……セブンとダウンはどうして、七番とか、六番とかって呼び合ってるの？」

医務室を出てからアークが素朴に疑問を投げつけた。すると、セブンが一瞬だけ表情を消し、それから今度は難しそうな顔を作って見せる。

「まあ……遅かれ早かれ、お前も知ることだからな……。部屋で、話してやるよ」

それだけ言ってしまうと、セブンが歩調を早くした。後に着いていきながらアークは首を傾げる。セブンが何かを躊躇うなんてあまりないことだ。

「あ、セブン。ちょっと待って！」

城の入口、玄関ホールのところであークが掲示板に目をして呼び止めた。セブンが振り返るとすでにアークは掲示板の方へ小走りで向かっており、そちらを見やれば事務員キールが何かを丁度貼り付けていた。

「やあ、アーク。おめでとう、堂々の二位だよ」

キールが掲示を終えてにこやかに言った。それから去っていく。セブンも掲示板へ近づくと、そこには先日の「殿下誘拐事件解決への功労者」という名目の「合宿」の結果が張り出されていた。メイジ誘拐事件はマクスウェルが仕組んだもので、より実践的に生徒の実力を判定するものだったのだが、蓋を開ければほんの数人しか手柄らしい手柄を上げられなかった。クロエが一位で、アークが二位。ポイント制の評価になっているのだが、クロエは42ポイント。アークは37ポイント。とんで、三位はなんと8ポイントとなっているのだから、どれだけダウンが上手く逃げたのかが窺われる。

「やっぱりクロエには勝てない……」

「まあ、クロエは探索に優れた魔術具を持っていたからな。魔術具ならほぼ全員が持っているけど、やっぱり攻撃手段として持っているに過ぎない。補助系の魔術具がどれだけ現場では大切な、ってことだ」

「ふーん……」

「厳密には搜索、探索専門の魔術師とかがいるんだけどな。連中は

五感どころか、第六感まで研ぎ澄まして対象を探し出す。魔導騎士にも一人いるけど、とんでもない奴だった。進路を見据えて、何を重点的に学ぶかが大事ってことだな。行くぞ、アーク」

再びセブンが歩き出し、アークも掲示板から離れる。セブンの横に並んで歩きながら、また質問を投げかける。

「セブンはさ、何を重点的に学んでるの？」

「何も学んじやいないさ」

「え？」

「おれはただ、シュザリアのお守りでここに入った。学ぶようなことは何もない。それどころか、この学院で教えられていることはほぼ全て自分の中に知識として持っている。まあ、専攻は魔術理論だけどな。それだっておれは年間、何本も論文発表してる身だ。寝てたって試験なんか余裕だ」

違う次元。前々から感じてはいたが、やはりセブンは化物じみている。改めて感じ、アークはセブンの背中を見ながら歩いていった。

寮の部屋に届いていた新聞を片手にセブンが自分の机に座る。アークはセブンから受け取った荷物を自分のベッドへ放り出した。部屋は以前、ダウンに荒らされたのに今はもう完璧に直っている。セブンが魔術で修復したのだ。

「それで、さっきのことだけどさ、セブン」

「ドラスリアムが開戦を宣言っ！？」

いきなりセブンが声を荒げた。アークもその言葉に目の色を変えて、新聞を食い入るように見るセブンの肩に後ろから寄りかかって紙面を見やった。

「開戦宣言の契血印が王城へ届けられた……？」

アークが読み上げると、セブンが解説をしてくれた。

「何の効果もない、ただ光るだけの魔法陣なんだ。でも、それを発動するのに百人の人間の血が必要なんだ。血を吸わせた魔法陣は契血印と言って、何かの意思表明をする際に用いるものなんだ。グヴ

オルト帝国でも戴冠の儀などは契血印を発動させる仕来りになっている。でも、開戦の契血印は百人の人間の血が必要になる。この意味が分かるか？」

「簡単には、発動出来ない？」

「そう。つまり、それだけ重い宣言で、本気で仕掛けるっていうことだ。こうしちゃいられない。アーク、王城へ行くぞ。すぐに準備しろ。おれはシュザリアのところへ行く」

「え、でも、ぼく……！」

「王室付魔導騎士の名において命ずる。同行しろ」

命令し、セブンが部屋を出て行った。ローブの背にある、王家の紋様を眺めながらアークは見送る。

「戦争……本当に始まっちゃうのかな……」

緊張状態が長く続いていることは知っていたが、本当に始まってしまふということは想定出来ていなかった。いや、考えたくなかった。戦争になったら、自分はどうなってしまうのだろう。戦火の中に立ち尽くす自分の姿を想像してから俯いた。

「シュザリアっ！」

大広間で食事をしていたシュザリアを見つけてセブンが怒鳴った。「あ、セブン。どうしたの？ アーク、大丈夫そう？」

「よく聞け、ドラスリアムと戦争が始まる。お前は王城へ戻るんだ」シュザリアのところまでセブンが走り、華奢な肩を正面から捕まえて言い放った。呆気に取られた碧の瞳。それから、首を少し傾げて言われたことを噛み砕き、消化をしていき

「戦争っ!？」

その声が聞こえた大広間の生徒たちがセブンとシュザリアに目を向けた。それからすぐにざわめき出してしまい、セブンがシュザリアの手を掴んで大広間を早足に出て行く。

「さっき届いた新聞に載っていた。いいか、シュザリア。まだ、どう転ぶかは分からないけど、これは緊急事態だ。軍事国家のドラス

リアムが、しかも、ダウンからの情報によればフォースによってクーデターが起きた、そんな国が攻めてくる。全面戦争になれば、国中、あちこち戦禍を被る。安全な場所は王城だ。だから、すぐにでも行くぞ。いずれ、正式に向こうからも使者がくる。すぐに寮へ戻って荷物まとめろ。クロエにも声かけて、連れてきてくれ。おれは学長へ話を通しに行く」

歩きながらセブンが言い、玄関ホールでシュザリアを向いた。

「でも、帰るのは留年か卒業した時だって約束……！」

「戦争が終わればまた戻ってくる。それに、戦場によってはこっちに避難をする場合だってある。とにかく、今は陛下の指示に従うのが先だ。いいな、シュザリア。おれはお前を守る義務がある。従え」

「そんなの……どうだっていいのに」

「そうもいかない。じゃあな。1時間後には荷物をまとめて城門へ来てくれ」

そこでシュザリアと別れてセブンは学長室へ走っていった。まだ、生徒は戦争のニュースを耳にしていない者がほとんどらしい。しかし、すぐに広まってしまふ。次に彼らと出会うのは戦場かも知れない。嫌なことを考えてしまってから、余計なことを振り払うようにして学長室へ急いだ。

No.30 帝都フォングレイド

「グヴォルト帝国帝都フォングレイド。別名、魔術師の聖地」

帝都フォングレイドの巨大な門をくぐり、一人の青年が周囲を見ながら呟いた。旅人風の格好をした青年だ。頭からすっぽりとフードを被っていて、目から下を隠しているようにも見える。腰には片刃の剣を佩き、纏っているマントの下は要所を鉄で覆うだけの軽装だ。

「魔術師の聖地、ねえ……？」

青年と共に来たのは声変わりも終えていないような少年だ。美少年、という形容が相応しいほどの顔立ち。しかし、その瞳は細められていて、周囲を行き交う活気のある人々を疑わしそうに追っている。フードをしておらず、ステッキを突いている姿は堂々としている。

「何がそんなに引っ掛かる」

「だってさ、サード。グヴォルト帝国だよ？ フォースもないし、魔術だって時代遅れじゃないの？」

サードと呼ばれた青年が少年の傍らにしゃがみ、小さな声で耳打ちをする。

「何を言ってる。ここには最高傑作セブン・ダッシュがいる。そして、この国を築いた三雄の力は侮れない。ああ、それと 役立たずの六番ダウンもこっちに来たきり。フォース相当の戦力を、この国だって持っている」

「でも、魔術師の聖地だなんてちよつと傲慢過ぎない？」

「何故だ、スピード」

「魔術を極めたのは、フォースはいだ。だから、その聖地はドラスリアム。まあ、魔術師としての最高位を言うなら……きつとボスなんだろうけど。行こうよ、サード。のんびりしてるのは性に合わないしさ。さっさと、済ませよう」

スピードと呼ばれた少年が言い、ステッキを突きながら大通りを

歩き出した。その後をサードがついていく。共に魔導^{フォー}対戦用人型兵器。開戦の宣言に揺れ動くグヴォルト帝国の王城へ向かって、その歩みは着々と近づき始めていた。

「来ちゃった……。お城」

「あら、アークは初めて？」

「当たり前じゃん。ぼく、田舎者だもん。あ、クロエって貴族なんだっけ？」

やたらと広い王城の一室。そこにアークとクロエが案内されていた。荷物をキングサイズのベッドへ降ろして、アークはいまいち価値の分からない、飾り物の芸術品の数々をぼんやりと眺める。特例でセブンが敷いた空間移動魔法陣によって帝都フォングレイドに到着したのが五分钟前。シュザリアがやって来た、ということとで城内が急に慌しくなり、それが落ち着くまでは、ということとで客室に通されたのだ。セブンはいつの間にか消えていたし、シュザリアは侍女たちに連れて行かれてしまった。

「一応はそういう立場だけど……そんなに大層なものじゃないわよ」
「でもさ。そうやって考えると、うちの班って凄い人ばかりだね……。シュザリアはお姫様だし、セブンは魔導騎士だし、クロエは貴族だし……。ぼくは何もないけど……」

ふかふかのベッドに転がりながらアークが呟く。

「魔術師に立場は関係ないのよ」

「でもさあ……。何か、ほら……」

「気にするだけ損するわよ。生まれや、富貴は誰かが決める訳でもないんだから」

そうクロエが諭すと、部屋の立派な扉が開いてセブンが入ってきた。

「待たせたな。今、陛下に報告を終えてきた。今後のことについて、協力をして欲しい。玉座の間へ来てくれ」

入ってきたセブンに言われてアークとクロエが目を合わせた。ま

さかの「協力」を要請されるだなんて。セブンに呼ばれた時点で不思議な感じはしていたが、一体、何が起ころうとしているのだろうか。セブンが歩き出し、アークとクロエがその後ろに続いて部屋を出て行った。

赤絨毯の敷かれた長い廊下を歩き、吹き抜けの広い玄関ホールの三階に相当する場所にある巨大な扉。セブンがその扉の両脇に控えている兵士に何か囁くと、兵士が重そうな扉を押し開き始めた。そして、その向こうの光景にアークが目を大きくする。

「凄い……」

巨大な玉座の間。学院の大広間に相当しそうな広さだ。その一番奥には玉座があり、そこに座っている人物こそがグヴォルト帝国の帝王ウインザード・S・グヴォルト。セブンが堂々と歩き出し、アークは玉座の間の端に控えている大勢の魔術師と思しき人たちを意識しないようにして続いた。

「陛下、姫の学友である二名をお連れいたしました。こちらがアーク・ディファルト。1年生ですがトップの成績で主席です。そして4年生のクロエ・リュグルスハルト。リュグルスハルト子爵のご令嬢です」

恭しく頭を下げ、セブンが丁寧な言葉遣いで言う。アークとクロエも頭を下げていた。

「うむ。顔を上げてくれ」

気さくな口調。3人が顔を上げ、ウインザード帝王を見やる。シユザリア、そしてメイジにはあまり似ていない、というのが印象だった。紫紺のかかった黒髪に凛々しい目鼻立ち。しかし、そこから漂うのは圧倒的な、絶対的な存在感。帝王の風格。

「さて。……セブン、それで、あれだ」

「はい、何でしょう」

「あれ、あの……そう、説明。小難しくて忘れた。改めて、お前からしてやってくれ」

何だかアバウトだ。アークが苦笑すると、背後から足音がした。

そちらに首をやるとメイジが歩いてきていた。傍らには周囲の人が眉を顰めている人物　ダウン。どうしてこのような者が次期帝王であるメイジの従者なのか。　そんなところだ。

「皆さん、お久しぶりです。先日はどうも、お世話になりました。こちらへ来てしていると聞き、挨拶をと思ったのですが込み入ったお話でも？」

「メイジ、お前も話くらいは聞いておくといい。セブン、始めてくれ」

ウインザードが言い、セブンは小さく頭を下げてアークとクロエを向いた。

「先日、開戦宣言の契血印が届けられた。これにより、ドラスリアムが攻めてくるのだということはほぼ間違いない。突然の開戦宣言で、こちらとしては何も状況確認が取れない。そこでドラスリアムへ直接向かい、何が起きているのかを極秘に調査することになった。その人員として、お前たちに着いてきて欲しい」

「敵国に行くってこと！？」

アークが思わず大きな声を出し、近くの大臣やら何やらが咳払いをした。

「あ、すみません……」

「気になさらないで下さい、アーク。こんな些細なこと、何ていうこともないのですから」

メイジが静かに言う。そこには咳払いをして咎めようとした大臣への皮肉も込められている。

「どうして、わたし達なのかしら？　それより、わたし達の他には誰が行くの？　まさか、わたしとアークだけじゃないんでしょう？」

「勿論だ。おれ、アーク、クロエ。それに」

後ろの扉が開き、またアークとクロエが振り返る。そして、息を呑んだ。美しいクリーム色のドレスに身を包んだシュザリアだったのだ。普段はラフな格好をしているだけに、その姿は二人の度肝を抜く。馬子にも衣装　　というのは失礼だが、あまりにも美しすぎ

た。そうやって呆けていたのだが、シュザリアが発した言葉によって全てが現実へ引き戻される。

「もー、こんなドレス着たくない！ お父さん、また勝手にドレス買いこんだんでしょ！？」

「ははは、たくさんあるんだ。どんどん着てくれ」

「税金の無駄遣いっ！ こんな服よりも、美味しいもの食べたいよ！」

「何を言う。権威とは衣の上より纏うもの。お前に着こなせないものはないのだから、存分に美しい姿を父に見せてくれ」

「ぶー、この親バカ」

「ははは」

何だかアットホームである。いつものシュザリアと何も変わらない。黙ってさえいれば、絶世の美女だというのに。何だかアークは和んでしまっただった。

No.31 フォース襲来

「陛下、お話の続きをしてもよろしいでしょうか？」

「そうしてくれ、セブン」

親子の会話が一段落ついたところでセブンが切り出した。このようなとアークの緊張も大分解けて、メイジと目配せをしたりしている。「ドラスリアムへ行くのは、おれとアーク、クロエ。それにシュザリア。そこで向こうの国のトップに無理やりにも会って戦争回避の道を探る」

「危険ではありませんか？」

メイジが問うが、セブンは首を左右に振った。

「いえ。これでもわたしは魔導騎士の一員。そして、アークもクロエもフォースであるダウンを何日も追跡したこともあります。それに、ドラスリアムの戦力はフォース。そのフォースの中でも最高傑作であるわたしがどうして向こうに劣らなければならないのです？」
「しかし、敵国へ乗り込むなど危険な行為ではないでしょうか？」
それと、そのフォースというものは何なのでしょう？」

質問をぶつけられ、セブンはアークにも説明をしていないのを出した。限られた一部の人間しか知らないことだ。周囲を見渡し、フォースという存在を知らぬ者が多いことを確認する。

「では、説明を。フォースとは魔導対戦用人型兵器 要するに、人工的に作られた戦争の為だけの存在です。全員が何かしらの特別な能力を持ち、それを差し引いたとしても圧倒的な力を有しています。全部で8人のフォースが作られていて、それぞれに製造された順番に番号がふられています。1から7まで。それぞれがフォース・ナンバー・ワンからセブンまで。そして、おれはその七番目を、さらに改良したフォースの中の最高傑作。故に『^{セブン・ダッシュ}7』。ドラスリアムが軍事利用の為にフォースを製造していました」

「だが、そいつ以降、フォースは作られていない」ダウンが途中で

口を挟んだ。「まして、ドラスリアムは内紛によってこれまでの制度が崩壊した。向こうに行くのは勝手だが、甘く見ていればお前だろぅが死ぬぞ。いや、死ぬ」

「お前じゃあ無理だろぅが、おれなら可能だ。そっちこそ、おれを甘く見るな」

「やるのか？」

「上等」

「セブン、ダウン。ぼくはそういうのが大嫌いです」

喧嘩腰になっていた2人を止めたのはメイジだった。舌打ちをして鼻を鳴らすダウンと、バツが悪そうに小さく頷くセブン。

「とにかく、フォースというのはバケモノみたいな強さを誇る魔術師のことです。今は、簡潔にこの程度でご容赦下さい」

言い、セブンがウインザードを向いた。

「ご苦労。　そういう訳だ、ディファルトくん、それにリュグルスハルト嬢。他に何か質問があればセブンが受け付ける」

「一つ、いいでしょうか？」

クロエがいつものまったりした様子で言う。

「どうして、わたし達なのか……まだ、聞いていないと思ったのだけれど。ここには大勢の優秀な魔術師がいるはず。なのに、どうして学生の身であるわたし達を？」

「人手不足なんだ。確かに多くの魔術師がいる。だけど、そのほとんどの魔術師は軍に属している上、戦争になった時は大切な戦力になる。そこで手が空いていて、少なからずドラスリアムの地理を知っていて、実力も兼ね備えた人材が必要になった。おれが選ばれて、そうなる今回は誰を連れていくのか。おれに一任されたから、連携も出来るお前らを選んだ。これでいいか？」

クロエの問いに答え、セブンが悪いな、と付け足した。

「他には？」

「いいえ、大丈夫よ」

アークも質問はなく、セブンがまとめに入る。

「出立は明朝。今日はゆっくりくつろいで、英気を養ってくれ。何が必要な装備等があれば、おれに言ってくれ。用意させる。では、陛下」

「うむ。2人とも、期待をしている。頑張ってくれ」

ウインザードが告げ、恭しく頭を下げた。不意に、周囲が暗闇に飲まれる。突然の出来事。

「おひさー、七番と根暗っち！」

明るい声が響き、直後に硝子が破られる派手な音がした。すぐに暗闇が消え去ると、セブンとダウンがいつの間にかそこにいた2人と組み合っていた。サードとスピードだ。セブンが剣を振り下ろしていて、サードはそれを二本の指で受け止めて押さえ込んでいる。ダウンは手の平に展開している魔法陣をスピードの眼前に突きつけているが、スピードもまた同じようにダウンの腹部に展開した魔法陣を定着させた手の平を向けていた。

「捕らえる！」

それが誰の声か。ウインザードの近衛兵がやってきたが、床を何かが激しく蠢いた。絨毯の下で何かが動き出し、それが近衛兵たちを足下から吹き飛ばしたのだ。

「止めといた方がいいよ」

スピードが言い、ダウンを不敵な笑顔で見やっただま口を開いた。「我々はフォースだ。力なき者が齒向かうのなら殺す」

セブンの剣を受け止めたままサードも言う。構えを解くとセブンも剣を下ろして互いに後退して間をとった。

「今日はただのご挨拶だよ。ほら、根暗くんも止めようよ？　こんなところでやりあったら、そこら中、ぶっ飛ばしちゃうよ？」

「おれは構わない」

「ダウン、止めてください」

メイジに言われてダウンが舌打ちをした。しかし、次の瞬間にスピードを蹴り飛ばして魔法陣を発動する。雷の蛇がスピードを拘束しようとしたが、蛇が追いつく前にスピードの姿が消えてメイジの

背後に回っていた。

「ほらほら、根暗っち。ご主人様に逆らっちゃダメじゃないの。それとも、殺しちゃおうか？」

見た目はさほど年の差がないのにスピードが据わった目をしながらメイジの首筋を細い指でなぞった。

「なんてねっ、冗談だつてば。ぼくがそんなことをする人間に見えるのー？ 心外だなー」

「何をしに来たのかね？」

落ち着き払った様子でウインザードが言った。玉座に腰掛けたまま、動じているような素振りは見せない。

「ちえ、面白くないなあ。もつと取り乱してくれば良かったのにま、いつか。まずは自己紹介でもするよ。ぼくはフォース・ナンバー・フォー。性質と、呼称は速度^{スピード}。そっちがフォース・ナンバー・スリーのサード。契血印、届いたと思うんだ。あれ、本気だよ。ドラスリアムは革命が起こったんだ。ぼくらフォースが全てを支配する。それでね、手始めにまずはグヴォルト帝国を貰おうと思うんだ。どうする？ 今の内に無条件降伏でもしておく？ それなら、戦争で死ぬのはお偉方だけで済むよ」

「断る」

「あれ、即答？ じゃあ、あれだね。無闇に戦死者を出すってことなんだ。ぼくらは構わないんだけど、戦争で民は苦しむと思うよ？ 本当にいいの？」

「無論だ。スピード、と言ったね。きみ達をまとめる者がいるのだからっ？」

「いるよ。ボスがね」

「では、そのボスに伝えてくれないか？ 我々は勝利だけを信じて徹底的に交戦する」

ひゅっとスピードが短く口笛を鳴らした。感心したように目を丸くしてから、にこりと笑顔を作る。

「何だ、あっさりしてるんだね。兵士がどれだけ死んだって構わな

いんだ？」

「死なせやしないさ。我々が傷つくよりも早く、そちらにいるフォースを全員再起不能にする。小僧、おれの国を舐めるんじゃないぞ」

ウインザードが凄んで見せるとぴりつと肌に何かが走った。好奇の眼差しをしながらスピードが満面の笑みを浮かべる。

「あははっ、いいね。思わず好きになっちゃうそうだよ、おじさんのこと。じゃあ、ぼくらは退散するよ。あ、お土産用意しておいたから、後で見えてね。サード、行こっ」

スピードがぽんとメイジの肩を叩き、それから膝を曲げた。そして、跳び上がると破られていたステンドグラスから外へ出て行く。サードはセブンを見やり、それからスピードと同じようにして去っていった。

「メイジ、怪我はないか？」

「はい、父上……。しかし、本当に戦争を？」

「当然だ。これは守るための戦いだ。我が民を守れずに、玉座にいることなどは出来まい。大臣、すぐに最高会議を開く。手配しろ」

ウインザードが立ち上がったて玉座の間を出て行った。あれがこの国の帝王。大きい存在だ。小さな拳を握りしめてから、険しい表情をいているセブんに目をやった。これから、どうなってしまうのだろうか。

No.32 冠と剣の関係

あてがわれた客間のテラスに出て、アークは城下の美しい夜景をぼんやり眺めていた。日が落ちれば全員が家が一軒しかない酒場に居る故郷の村とは違い、夜でもにぎやかな活気に包まれている。暖かな光に彩られた通りは飲食店が威勢よく客引きをしている。ほろ酔いの者、喧嘩をする者、それを煽る者、難しい顔をした上官と共に愚痴を聞く下級兵士、親子での食事から帰っている家族も見受けられた。

「フオンブレイドの夜景はどうですか？」

「えっ？ あ、メイジ……」

後ろからの声に振り返るとそこに友人がいた。どうやら一人で来たらしく、ダウンの姿も、従者の姿もアークには見られなかった。テラスへ出て、夜風を浴びながらアークに倣うようにして手摺にもたれて城下の様子を眺める。アークもまた、先ほどと同じように手摺にもたれて顎を乗せる。

「城下にはおよそ1万4千500人が暮らしています。グヴォルト帝国全体では3万2200人。ぼくは将来的には、この大人数を治める皇帝とならなければなりません。姉様は……きっと、気ままに暮らすのでしょうけれど」

苦笑しながらメイジが言うと、アークも小さく笑った。

「でも」付け足したメイジの言葉にアークが目を少しだけ見開いた。「ぼくは恐らく、通過儀礼をし、その後の成人の儀をする頃にはどこか別の外国へ行きます」

「え？ 玉座に座らないの？」

「今のところ、ぼくが掲げる理想としては、です。どう転ぶかは分かりません。誰にも言わないで下さいよ？ そんなことが知られたら監視の目が厳しくなりますから」

「でも……外国でメイジは何をするの？」

「旅をしてみたいと考えています。ぼくの見識は本や、聞く話だけです。自分の目で確かめて、自分自身で発見をする。そんなことかしてみたいんです。まあ、視察などといった公務はありますが……それだつて自由に何かを見たり、体験したりすることは出来ません。ぼくが自分に自身を持つて、胸を張つて自分の意見を語れるような人間になったら……その時にまだ、ぼくに少しでも期待をしてくれる人がいたら、戴冠の儀をしたいですね」

柔らかなメイジの口調を聞きながら、アークは何かもやもやしたものを感じた。メイジは王族だ。生まれながらにして上に立つ人間。一方で自分は小さな村の出身で親もない身。双方とも友達であると思つてゐる。けれど、メイジがどうしてか眩しい。

「アークは何か……夢とか、目標といったものはありますか？」

「ぼくは、ないかな……。魔術師になりたくなつたのも本当は知識を集めるのが楽しいから。魔術具職人に弟子入りしたのは……。ぼくの少ないキャパシティを補えるのが魔術具だったから。結局、自分のことしか見られないし、メイジみたいに立派な目標を持つてゐるわけでもないんだ」

「そうですか」

しばらく、無言の時間が続いた。気持ちの良い風が吹いた。

城下を歩く人々のうねりのような動きを見つめながらアークが不意に言葉を発する。

「本当は、怖いんだ……」

小さな言葉を漏らしてから、アークは力なく笑つて見せる。歯を噛みしめ、口角をぐつと上げたが目だけが憂いの感情に取り残された。

「ドラスリアムにはフォースがいて、セブンと同じくらい強くて。戦争になるのも怖いし、それを回避するための任務つていうのも責任が重いし……。ぼくはキャパシティが少ないから、使える魔術も威力がないの。魔法陣を二つ発動するのも難しい。非力なものもあるし、経験だつて皆より劣つてゐる。いくら理論を積み上げても、実践

出来ないなら仕方ないでしょ？ だから、怖くてたまらないんだ！

……」

「手を貸してください」

メイジが手摺から自分の体を起こし、まっすぐアークの方を向いた。戸惑い気味にアークが片手を差し出すとメイジがポケットから何かを出してその手に渡した。金色のリングで剣の紋章が刻まれている。同じものをメイジは自分の手に乗せた。しかし、こちらには冠の紋章が刻まれている。

「何、これは……？」

「魔術具の一種です。戦場に赴かないほうが持つていても仕方ない代物です。この二つの魔術具は繋がっています。単体で使っても効果はありません。冠のリングは装備者から魔力を搾取し、剣のリングは搾取した魔力を装備者に与えます。これを指にはめれば、アークの魔力は一切減らずにいくらでも魔術を発動することが出来ます。勿論、ノーリスクです」

「リスクはあるよ！ 搾取するってことは、メイジの魔力が奪われるんだよ！？ それなのに魔術を乱発でもすれば、最悪メイジの魔力が尽きて　！」

「ぼくはきみの力になりたいんです」

冠のリングを右手の中指に嵌めてメイジが言う。碧の瞳がアークをじっと見つめた。

「でも……」

「それに、このリングをつければ互いの状態が何となく分かるようになるんです。本来は師弟関係などでつけるのですが、ぼくはあえて剣のリングをアークに預けたいんです。まだぼくは魔術を扱えません。しかしキャパシティがあります。互いに足りないところを補い合うのが友達だと、ぼくは考えます」

穏やかな碧の瞳がアークを見つめる。そうされると、もう言い返すことも出来なくなってしまった。自分の手に乗せられた剣のリングを見て、それからゆっくりとまたメイジを見やった。

「ぼくが一方的に魔力を貰うだけじゃ、そんなの頼ってるだけだから……ちよつとだけ、これ加工させてもらっていい？　これでも魔術具職人の見習いだから。一方的な搾取じゃなくて、互いの魔力を混ぜて効果を数倍に高める魔法陣を組み込んでみる」

「そんなことが出来るんですか？」

「分からないけど……そうすればメイジの力を貸してもらうことになるから。それに……今のところ、ぼくの武器は魔術具しかないからさ。ちよつとだけでも自信つけておきたいんだ」

にこりとアークがいつもの人懐こい笑みを浮かべて見せる。と、メイジも微笑んで指に嵌めていたリングをアークに預けた。

「それではお願いします。明日の出立までに完成出来そうですか？」

「うん。やるだけやってみる。理論だけで主席になれたんだから任せという」

夜は更けていく。

明日の朝日を照らすために。

そして、誰かに光を届けるために　　。

No.33 誇りの持ち方

「それでね、ボタン押したらガコンって音がして飲み物落ちてくるんだよ」

「ほう、それは便利な魔業だ。どれ、大臣に伝えて城下にいくつか配置してみるか」

シュザリアはウインザードと談笑にふけていた。晚餐をしていた部屋で父の右隣に座っているシュザリア。今は誰も近くにいない親子水入らず。王城に帰ることは拒んでいたが、別に父や大臣や神官らが嫌いな訳ではなかった。むしろ、シュザリアは人を嫌いになるということがない。感情的で向こう見ずでお間抜けなところもあるが、何でもかんでも包括してしまう広い心を持ち合わせていた。

「それにしても、しばらく見なかった内に立派になったものだな」

「へ？」

いきなり言われてシュザリアは目を丸くした。最後に会ったのはホワイトウイング入学前。ほんの一年と少しだけなのにどこか変わっただろうか。相変わらずセブンにおんぶに抱っこという状態であるし、劣等生のレッテルはきつと剥がれてはくれない。

「お前がホワイトウイングに入学したいと言い出したときは反対ばかりしていたが、どうやら得るものはあったようだ。お前が楽しんで話をするだけでそう思える」

「何か、照れちゃうな……」

「ドラスリアムへ行かせることになって申し訳なく思っている。お前にも、セブンにも、リユグルスハルト嬢にも、ディファルト君にも。きっと辛く、長い旅路になるだろう。一国の主として年端もいかぬお前たちを向かわせることには抵抗がある」

ワインを一口含み、ウインザードは間を置いた。シュザリアはぼけっとしたまま聞いている。

「でも、わたしは嬉しいよ。ちょっとだけね」

「嬉しいだど？」

眉間にしわを寄せ、ウインザードが少し笑った。シュザリアの突飛な発言は時に周囲の人間を救ってくれる。

「だってセブンとアークとクロエと、一緒に居られるんだもん。テストもないし、勉強だって旅の間はお休みでしょ？ それに珍しいもの見られるかも知れないし、ドラスリアムって魔業が発達してるみたいだから見るの楽しみだし」

「ふふふ……ははは、そうか、お前は変わらないな」

いきなりウインザードが笑い出してシュザリアはむっとした。

「笑わないでよ。人が真面目に言ってるんだから」

「いや、済まない。だが……くく……お前はどこまで楽天家なんだ？ おれでもそこまで樂觀しないというのに。お前は人を救う天才だ」

「天使様？」

「そうだな、お茶目でドジっ娘な天使だよ」

「形容詞いらないんだけど……」

またむすつとして呟いたシュザリアの頭をウインザードの腕が抱いた。ぽすつと父の胸に頭をもたれかける形になり、シュザリアは懐かしい匂いをかぐ。

「無事に帰ってくれ、娘よ」

「うん。……大丈夫だよ」

扉の向こうで中に入ろうとしていたセブンは、そっと踵を返して歩いていった。

「それで、何の用だ？」

王城の裏庭。庭師の手入れが行き届いたそこにセブンは呼び出されていた。相手は、同じフォースであり、昼間の襲撃者。フォース・ナンバー・スリー。通称サード。マントを今も着用している。鷹を思わせる鋭い目つきがじつとセブンを見据えている。

「それは分かっているはずだ。置き土産を、密かに処分したようだ

な」

「ああ。あんなものを放置しておけるほど不潔じゃないんだ、おれは。それよりも、のことこんな場所へやって来ていいのか？ スピードはどうした？ 早くお国に帰らないといけないんじゃないのか？」

昼間とはかく、夜間はここに人の気配がない。セブンが誰かに言いさえすれば兵士が駆けつけるが、そうしていなかった。

「最高傑作と呼ばれ、その試用で存分に性能を発揮したというのにどうして下劣な者どもの下につく？」

静かだが嘲笑的なサードの問いにセブンは肩をすくめて見せた。

「下劣な者？ 何を言ってやがる。おれが従うのは、たった一人だけだ。そして、その一人は誰よりも特別で、誰よりもおれが信頼している。あんまり人様を貶すと、殺すぞ」

庭師に整えられた木々がざわつき、その葉がぱちっぱちつと音を発した。殺気を乗せた魔力がセブンから漏れ出して周囲に影響を及ぼしている。

「そうか。おれは覚悟を問いにきた」

「覚悟？」

「ドラスリアムは内紛と革命により、我々フォースが支配者となった。だが恐怖政治も、武力による統治もすることはない」

「それならどうして契血印なんてものをこしらえた」

「復讐だ。魔導対戦用人型兵器を産み出した人間に対する裁きを、我々の力をもつて加える。そして復讐が成功 要するに、人間の大多数を殺した暁には、また我々は長き眠りにつく。セブン・ダッシュ。お前は悔しくないのか？ 戦争の道具として産み出され、肝心の戦争とは人間が自らの富を築くために引き起こす。では、我々は何なのだ。ただの殺戮人形。 そんなのは違う、と決意を露わにしようともそうなるように造られている。故に、我々はこのような行動に出た。セブン・ダッシュ。お前にも、復讐の資格がある。共に来い」

傲慢な言葉ではあるがサードの瞳は静かに、じつとセブンを見据えたまま動こうとしなかった。敵対ではなく共闘を望んでいる。何年間もドラスリアムを離れ、別の国に忠誠を誓ったセブンのことをだがセブンは首を左右に振って見せた。

「残念ながら、おれは違う。戦争の道具でも、殺戮人形でもいい」
「お前には誇りがないのか？　それがフォースにおける最高傑作か？」

「何とでも言え。例えこの先、世界がひっくり返ったとしてもおれはフォースとして生まれたことは覆らない。普通の家に生まれて、普通の生活をして、普通に死んでいく。　そんなのを夢見た時期もあったが、そうじゃなかったがためにおれは様々な人間に出会った。何でもないことに一喜一憂して、そうして暮らしてきた。おれをこんな状況に送り込んでくれたことに感謝はすれど、恨む道理はおれにはない。もっとも、これは生温いこの国に暮らしてきたおれにだけ当てはまるのかも知れないけどな。だから、お前らの思想には賛同しかねる。分かったら、契血印を引っ込めるか、戦争を止めるか、おれのことは諦めてくれ」

敵同士という立場ではあるが、それでもセブンとサード、双方とも同胞だという意識はあった。それが造られる際に組み込まれた思考なのかどうかは分からないとしても。

「それならばセブン・ダッシュ、お前は我々の敵だ」
「そうして貰えるなら話が早くて助かる」

二人から漏れ出して、高まった魔力が次の瞬間にバチンと強烈な音を立てて弾けた。その衝撃だけで木々の葉が全て枝から落ち、近くの建物の窓硝子が砕け散る。セブンとサード、互いの目の前に魔法陣が展開され、しかし、それは互いが相手のすぐ目前に展開したものだ。白い無数の光線が魔法陣から発せられて二人が避ける。そのまま庭石を蹴って相手に接近すると、セブンが握り拳を打ち込む。サードはそれを手刀で叩き落してから、セブンの首の裏を掴んで強烈な前蹴りを叩き込む。肋骨が折れたような音がし、セブンが吐血

した。さらにサードが片手を上へかざすと二重の上方魔法陣が展開されてセブンに落雷が浴びせられる。

ベルス・サンダー
「雷鐘」

周囲一帯を激しい雷光が閃いた。瞬間的に白昼のような明るさになり、その光源のただ前にいたサードが目を眩ませる。轟音が遅れて響き渡ると、今度はその音が平衡感覚を一時的に麻痺させる。

「この魔術は……！」

「久しいな、三番。七番のやられるザマをどうもありがとう。ついでに死ね。雷虎召喚」

超巨大上方魔法陣。その上に暗雲が立ち込める。魔法陣は下に行くほどに小さくなり、その照準はサードへ向けられている。続いて巨大な雷が魔法陣内部を通過していく。

一瞬、視界が全て白色に染め上げられる。

大地が大きく揺れて、空が地響きを立てた。

全ての感覚を奪い去り、一切の知覚をさせないのはあくまで副産物。本当に恐ろしいのはその凶悪なまでの威力だった。サードのいたところに直径3メートルほどの底が見えない穴が穿たれたのだ。周囲が焼け焦げて、魔術となれなかった多大な魔力そのものが未だにその周囲に残留するほど。

「ダウン……」

放り出されていたセブンが折られた肋骨を押さえながら何ともない風にサードのいた場所を眺めるダウンに声をかけた。

「何だ、七番」

「やったのか？」

その瞳は確認というよりも問い。ダウンの今の魔術の威力は十分に知っている。周囲一帯、見渡す限り全ての木々をなぎ倒すほどの威力だ。セブンとて扱えないかも知れない。それを一箇所に収束し、サードへ向けて落とした。だが、サードの実力とて侮ることが出来ない。

「いや、逃げられた。スピードの仕業だ。雷虎の一撃が放たれるま

でのタイムラグは0・05秒。その一瞬にあいつが割り込んだのが見えた。どこかで見ていたんだろう」

「やっぱりか……。お前、魔力の残りは？」

「3800カセル。何をするつもりだ？」

「そこら辺、直しておけ。創造主ゴッド・ウイユルの御魂で元通りに。それだけの魔力があれば十分だ。魔導騎士団長殿に報告へ行つて来る」

言い、セブンがダウンの脇を通り過ぎようとすると肩を掴まれた。

「待て」

「……」

立ち止まって肩越しにダウンを見やった。

「お前、弱くなったのか？ おれを無傷で下した時は何だった？」

「おれの残り魔力。たったの240カセルだ。昼間、奴らが置いていった土産の処理に失敗した」

「土産 あの魔術具か。フォースロスト・アクセサリース製作者の作り上げた滅びの七つ道具。何を置いていった？」

「退魔の栓抜き」

答えるとダウンの目が大きく見開かれた。滅びの七つ道具とはそこにあるだけで半永久的に効果を発揮するという、製造も所持も禁じられる魔術具だ。そして、退魔の栓抜きというのはそこにあるだけで周囲から無尽蔵に魔力を吸い込んでいくというもの。その処理方法は一度に多量の魔力を流し込んで機能を止めてしまうという方法なのだが、それこそフォースでなければ出来ないようなほどの魔力が必要なのだ。

「あれにつけられていた罠に気付かず処理しようとして魔力のほとんを失くした。その状態から何とか魔力を絞り出して処理はしたけど今度はなかなか魔力が回復しなくなった。明日までの回復も怪しい」

「それでほとんどの魔力を失って、そのせいで体調は最悪、サードに遅れを取ったか」

「ああ。だから、ここの後始末は頼む」

肋骨を押さえ、左足を引きずりながらセブンは王城へと向かって
いくのだった。

No.34 幽玄谷の試練？

「ドラスリアムは国土の半分以上が永久凍土でありながら、そうではない場所も不毛の荒野が延々と続くような環境だ。資源こそ豊富だが、人が住むには適していない。そんな国が武力による国土拡大を目指すのはある意味では当然とも取れる。資源が豊富なお陰で魔業も発達していて、都市ならばガウセンフェルツと同等か、それ以上に発達しているはずだ。そして、グヴォルト帝国からドラスリアムへ行くのに道は一つ。幽玄谷を通過すること」

空間転移魔法陣でやって来たのは年中、霧の立ちこめる薄暗い谷の入口だった。そこには大きく「KEEP OUT」の文字が書かれた夥しい量の看板が立てられている。セブンが解説を終えてから、ふむ、と早速の問題に考える。

「何で立ち入り禁止？」

シュザリアが看板を眺めながらぼつんと呟く。勅命でやって来ている以上は、必要に応じてグヴォルト帝国内なら立ち入れない場所はない。だが、問題は立ち入り禁止になっている理由だった。

「危険なことはあるが、立ち入り禁止にはなっていないかと思うがな……」

「立ち入られたら困る人がいるからそうなったんじゃない？」

クロエがいつもの様子で言う。

「誰が困るんだ？ こんな辺境の地で。ここは帝国の土地で、一般に開放してある。いわば、公共の地だ。それが封鎖されていて、何でおれのところにも連絡がきていない？」

「勝手にここを封鎖して、何か悪いことをやってるとか？」

アークが今度は言う。セブンは眉を顰め、それから無数の「KEEP OUT」の看板を眺めた。

「そうだいいが……。とりあえずは行ってみよう。ここを通らないとドラスリアムへは行けない」

看板を無視しながらセブンが幽玄谷へと入っていく。シュザリアも続くと、すぐに濃霧に包まれた。一寸先も見えない霧だ。アークはシュザリアにくつつき、さらにクロエに手を繋いでもらっている。怖がりである。そして、これが不幸中の幸いとなるのだった。

「ね、ねえ……セブンは？」

「前にいないの？」

「後ろには多分、いないわね」

案の定、ほんの5分間だった。濃霧の中を歩き出してから、たったの5分。それだけでセブンのすぐ背後を歩いていたシュザリアが見失ったのだ。自分にくつついているアークの片手を握り、シュザリアが振り返る。

「あれ……迷子？」

「ほ、本当に？ ドラスリアム目指して、早々に？」

「セブンだったらこんな所、簡単に抜けるんでしょね」

クロエだけは平然としている。しかし、かといっても何か打開策があるという訳でもないらしい。

「どうするの？」

「歩くしかないわね。ほら、先頭歩いたげる」

クロエが前を歩き出し、三人が手を繋ぎながら霧の中を進む。霧によって全ての感覚が閉ざされているようだった。視界は勿論、話せば声こそ伝わるが獣や鳥などといったものの声はしない。

「幽玄谷、という由来を知ってる？」

「知らない」

「あ、ぼく何かの本で読んだよ。確か……この場所が発見されてから、どんな手段を用いても霧が晴れたことがないんだよね？ だから地図でも地形が記されてなくて、歩いていてどこまで続くのか分からなくなる。遭難者が多くなって、広くて深い様を幽玄、って言葉にあてはめた……んだっけ？」

「ええ。まあ、諸説あるんだけど」

諸説、という言葉にアークが少し首を傾げた。シュザリアは感心しながらアークの話を聞いていた。

「じゃあ他にどんな説があるの？」

「ずっと東の海、そこに浮かぶ島から来た人間にちなんで名づけられたのよ。丁度、古代大戦の頃。その東洋人の名前が幽玄といたらしいの。彼は独特の魔術を使っていて、三雄とも互角に渡り合っただらしいわ。それで……この地で壮絶な最期を遂げた。彼の魂を鎮める為にこの地を幽玄谷と名付けたとか」

「へー。でも、何でそんな話を？」

「出るのよ」

簡単に言い放ったクロエにシュザリアとアークが固まる。

「な、何が……？」

「その幽玄さんが。お化けになって」

「う、うう、嘘でしょ？　ね、クロエがぼくらを脅かしたくなって……」

「もしも、その幽玄が何かやらかして、この異常な霧を発生させていたとしたら？　幽玄というのは大層な盗賊で、この谷に財宝を隠した、ともされているのよ。そして、その財宝を守る為に幽霊となって侵入者を襲撃したら？」

「信じない信じない信じない信じない信じない……」

アークがぶつくさ言いながらクロエに手を引っ張ってもらった。もう片方の手はシュザリアが握っている。幸い、モンスターなどの気配がないのが救いだ。

「ふふ、大丈夫よ。少なくとも、幽霊は今のところ確認されていないから」

「本当？」

「ええ。ただ、モンスターは出るそうよ。例えば……そう、霧の中から触手を伸ばして浚っていつてしまうような」

「下手なお化けより怖いかも」

そんな会話をしていると、急に地面が揺れた。ドン、と最初に衝撃が来て、それから立っているのもやっとなくらいの激しい縦揺れが生じる。クロエがアークの手を引っ張り、近くに二人を寄せると魔法陣を展開した。下方配置魔法陣で三人の足下に展開されると、その中だけ霧が消え去る。

アンチ・マジック
「反魔術が効いたってことは、この霧はやっぱ何かしらの魔力によつて生じているみたいね」

魔法陣の中には光が満ちていて、互いの姿がくつきりと見えた。

「今の地震、何だったのかな？」

「幽玄谷に生息する主なモンスターは確か……ゴーストバイソンと、食人植物と、クラウンクラブと、あとは……」

「ガムトリね」

クロエが言うとシュザリアが変な顔をする。

「ガムトリ……？」

「さっき言った、触手を伸ばして浚っていくコウモリのようなモンスターよ。その触手がガムのような不揮発性の粘液で動けば動くほどに絡まってしまふの。単体ならどうってことはないけれど、群れに出くわしたら最悪ね。それで地震を起こせるようなモンスターと言えばゴーストバイソン」

「ゴーストバイソンって、何？」

「シュザリアって本当に勉強してないんだね……」アークが苦笑いしつつ、続けて答える。「ゴーストバイソンは牛みたいなモンスターだよ。お肉は美味しいらしいけど、体長は小さくても3メートル魚と一緒に生きている限り、どこまでも大きくなるんだよ。穴の中で寝起きするんだけど、活動は地上。つまりゴーストバイソンが起きるか、寝るかした時は地震が起きるんだよ」

アークの説明でシュザリアがふうん、と分かったのか分からないのか、どうも微妙な返事をする。それから、真顔でアークに問う。

「ちなみに今の地震は？」

「起きたわね、多分。ほら、声を潜めて。地面を手で触れてみれば

分かるわ。少しずつ、こっちに向かってきているのが分かる」

クロエに言われてシュザリアとアークが地面に手についてみた。

若干ではあるが、揺れている感じがしないでもない。

「でさ、気になったんだけど逃げられるの？」

「無理」

「無理ね」

アークとクロエの声が揃って返ってきた。

「どうして？」

「ゴーストバイソンが走れば時速130キロは出る。ゴーストバイソンの由来は巨体でありながら、走ったらとんでもなく速いから。それが神出鬼没のゴーストみたいだからなんだよ。ちなみにゴーストバイソンの体毛は剛毛で名工の鍛えた刀剣でも刃が欠けるとか」

「じゃあ、どうするの？」

「どうしようかしらね？ アーク、考えて」

「ぼく、一応は守ってもらいたい立場なんだけど……。えーと、まずは視界が悪いから反魔法の魔法陣を思い切り広げて欲しいな。端から端まで二十歩、いや、三十歩くらい。その中で戦うしかない」

ゴーストバイソンの足音が大きく響いてくる。霧の向こうに何か大きな影が見えた気がした。それを見てクロエがそうね、と呟く。

「それが一番いいかも知れないわね。じゃあ、行くわよ」

クロエが宣言すると足下の魔法陣が広がった。霧が退けられて視界が広がると、そこにゴーストバイソンの姿が見える。

「シュザリア、魔術！」

「うん。光の雨！」
シャイン・レイ

「あ、待つて。ここで魔術やつても」

ゴーストバイソンの頭上に展開された魔法陣。しかし、一秒でかき消された。

「あれ？」

「だって魔術打ち消す魔法陣の中だもの」

「ねえ、クロエ？ それ、どうやってゴーストバイソン倒すの？」

「さあ。どうしましょうか？」

反魔術を消せば視界がなくなり、そうでなければ魔術が使えない。
この状況はどうやって打開すればいいのか。それに答えられる者
はいなかった。

No.35 幽玄谷の試練？

「はぐれたのが幸か不幸か……。思った以上に厄介になってきたな

」

一人、濃霧の中を走りながらセブンは小さく呟く。後ろから追いかけてくるのはゴーストバイソン。木々をなぎ倒し、その根本にいたクラウンクラブを踏み潰すことで濃霧はどんどん湧く。地響きが迫るのを感じ、逃げ切るのを断念して振り返る。ゴーストバイソンが最高速度に達するまでには二分間。それまでは徐々にスピードが上がっていく。もう追いつかれるのは時間の問題。ならば、それは諦めて立ち向かうしかない。

クレイ・ジュラシー
「泥の嫉妬」

いつか交戦した生徒が使っていた魔術。あつさりと下した相手だったが、この魔術の有用性は大いにあった。それを発動すると濃霧の向こうから迫った、巨大な影が突如として目の前で止まる。セブンが独自に改良を加え、相手の足下を絡め取るのと同時にその地面を固めてしまうのだ。ゴーストバイソンの剛毛に覆われた足が大地を突き上げようとしたが、その前にセブンがゴーストバイソンの前に脚に片手を触れていた。

「ちよつと眠っててくれ。」

ヘルズ・サンダー
「雷鐘」

激しい雷光と轟音が発せられて、それに照らされた濃霧が一瞬だけ輝いた。目が眩むどころか、その激しい光はただでさえ網膜が焼きつきそうになるのに、充滿する濃霧がそこに含む魔力から光量をさらに増幅させることとなった。固く目を瞑ったセブンも瞼越しに目が眩みそうになったほどだ。ゴーストバイソンがその巨体をその場に横たえるとまたもや地面が揺らいた。

「さて、まずはこの異常な霧の正体突き止めないとな……」

倒れたゴーストバイソンに背を向けてセブンが歩き出す。幽玄谷は、谷と名ばかりに木々が密集した森も同然だ。ただ、両端に高い

崖があり、その上から見れば立ち込める霧がまるで大河のように見える。そういう訳で「谷」とされてはいるのだが、実際には一度迷えば抜けられぬ森という側面も持っている。

「クラウンクラブだけならまだしも、この霧はそれとは異質の何かが混ざってる……。けど魔力を源にしているから何らかの作用によって動いている魔法陣には違いがないと思うが、こんなことをして一体何になるっていうんだ？」

呟きながらセブンは濃霧の中へ歩を進めていく。どこまで行っても白い霧ばかり。この霧をどうにかしないとほぐれたシュザリア達が心配でならない。どうにか原因を突き止めたいのだが、どうしたものか。

「幽玄谷……。やっぱり、供養させてやらないとダメか、こりゃ？」
あまり気乗りはしなかった。腕を組んだまま、苦い表情をしながらセブンはため息をつく。こうするしか方法はあるまい。この谷の由来となった故人を直接、鎮める。そうと決めるなり、セブンは自身の体から漏れる魔力を抑え込む。鋭敏に研ぎ澄ました感覚が谷全体に溢れる霧の魔力を探っていく。その出所を、流れ来る方向を。目を閉じ、感じるままに歩いていった。

「ゴブリン・パーティー小悪魔の宴会！　ゴーストバイソンをどっか遠くまで連れてって！」

「デモンズ・ナイフアークが悪魔の懐刀から召喚したゴブリンに命じると、すぐさまゴブリン達がゴーストバイソンの体にしがみついたり、物を投げたりして気を引き出した。そして、注意を向けるとすぐさま駆け出していく。6体の内、1体が残ってアークの前で敬礼をした。

「ボス、他二用ハネーノカ？」

「うん、大丈夫だよ」

言い返すとゴブリンが反魔術で開けている視界できよろきよろと周囲を見渡した。クロエを見て、シュザリアを見て鼻を伸ばし、それからアークにまた向き直る。

「ニシテモ、辺鄙ナトコニオ住イデ」

「別にこんな場所に住んでないんですけど」

「ソリヤ失敬！ ダケド、ボス、ココニ長居スノハ良クネーデスゼ！」

また敬礼をしてゴーストバイソンを追いかけようとしたゴブリンだったが、シュザリアの声で呼び止められる。

「待って！」

「オウオウ、オ姉チャンヨー、オイラハソコノがキンチヨニシカ従ワネーンドガナ！」

「待ってあげて」

「ヘイ、ボス！」

何ともゴブリンの変わり身は早い。シュザリアに食ってかかりそうな勢いだったのに敬礼をしたまま固まって、文字通りに待っている。

「ねえ、何か知ってるの？ ここのことを」

「ヘイ、ココハウチラノ間ジャナカナカニ有名ナトコデスゼ！ 何タツテ、人間ノ身デアリナガラ魔界ノ半分以上ヲ統治シカケタツトントンデモネー野郎ノ眠ル場所ナンドカラナ！」

「魔界の半分以上を統治？」

アークの問いにゴブリンが頷いて見せた。

「モウズット前ノコトデスゼ！ 人間ドモガ、古代大戦ト力何トカ呼ブ時代ニ、幽玄トカイウ人間ガ魔界ニハルバルヤツテ来テ、魔界ノ王トソリヤーモー壮絶ナ死闘ヲ繰リ広ゲタノハ有名ナ語り草ナンド！ ソノ幽玄ガ死ンダツツにゅーすガ魔界ニ流レタ時ハトントンデモネーオ祭り騒ギダツタンド！ ンデ、ココガソノ幽玄ガ死ンダ土地ダ！ 魔界ノ王ヲ殺シタ人間ダカラ、ソコカシコニ呪イノ影響ガ出テル。セーゼー、気ヲツケナ！」

「ねえ、ちょっと……ごめん。きみだけ、別の命令いい？」

またゴーストバイソンを追いかけに行こうとしたゴブリンを呼び止めてアークが問う。するとゴブリンは「ヘイ！」と返事をした。

「その幽玄つて人の呪いは解くことが出来るの？」

「ソリヤ、難シ―二決マツテル！ ケド不可能ナンテ言葉ハ魔界ニヤネーノサ！ モットモ、ソンジヨソコロノ人間ガ解ケルトハ思ワネーケドナ！」

「じゃあ、可能なんだね？ それなら、呪いを解きたい。どうすればいいか、教えてくれる？」

「いいよね、とアークがシュザリアとクロエを振り返る。すると、シュザリアは少し不安そうな顔をしていたが、クロエは涼しい顔をしながら頷いた。

「アイアイサ！ ソシタラマズハ幽玄ノ墓地ニ行クゼ！」

視界全部が真っ白い霧に包まれる森の中では、どれだけ進んだのかも分からなくなってしまう。ゴブリンに導かれて行く3人が時間の感覚を忘れた頃になって、到着が告げられた。クロエが周囲に反魔術の魔法陣を展開すると、そこは崖に掘られた横穴だった。その向こうには霧が漂っていない。ただ、不気味に口を開けた洞窟の入り口があった。

「ここに……幽玄が眠っているの？」

「ヘイ！ トリアエズ、オイラハますたーカラ貰ッタ魔力ガ尽キソウダカラ説明ダケシテ帰リマスゼ。ココノ最深部ニ幽玄ノ眠ッテル場所ガアルハズダカラ、ソコデ亡霊ト和解スルナリ、チカラヅクデネジ伏セルナリシテ、幽玄ノ未練ヲ絶チ切ルコトダナ！ ソースリヤ、呪イダッテ消エテココラ辺ノ霧モドツカヘオサラバデスゼ！」

ゴブリンが言い、アークがシュザリアとクロエを振り返った。それぞれに頷いたのを見て、アークは分かった、と返す。

「ありがとう。じゃあ、またね」

「ヘイ！」

ゴブリンがぼんつと音を立ててその場から消え去った。

「こんな洞窟に入っていくの？」

「そうね。そうしないと霧が晴れそうにないし。仕方ないわね」

「仕方ないのは分かるけど、気は進まないね……。しかも、説明聞いた限りじゃ幽玄を倒さないといけないみたいだし……。魔界の王様と壮絶に戦ったんでしょ？」

「勝てるの？」

「セブンならどうか分からないけれど、わたし達じゃあ難しいんじゃないかね。さ、行きましょ」

さらっとクロエが言ってから洞窟の中へと歩き出す。シュザリアの手をアークが握り、クロエの後ろに続いた。3人が洞窟へ入るとクロエが展開していた反魔術の魔法陣を消す。そうして外が再び白い濃霧に包まれると、クロエが火の魔術で周囲を照らすのだった。どこまでも続くように見える、薄暗い洞穴の中は肌寒く時折、ぞつとする冷気が背筋を凍らせた。

No.36 幽玄谷の試練？

洞窟の奥深く、その祭壇に奉られている一つの骸がある。

頭に蜘蛛の巣が張られた、古くて大きな冠を載せた骸骨だ。椅子に堂々と座したままの姿で、その体からは肉が消え去り骨と空洞だけになっている。肋骨の内側には小さな魔物の家族が住み着いている。薄暗く、もうずっと光が差さないそこで幽玄はずっと眠っている。

「さて、幽玄。この谷に蔓延してる、お前の魔力を消してもらいたい」

暗闇に響くセブンの声。明かりはない。光がなくとも感じる事が出来た。その祭壇から発せられている異質なものを。ここから漏れて出て行く魔力が、クラウンクラブの発する煙を増幅させている。煙や、光や、音や、そういった性質で広がりゆくものを増幅させる効果がある。セブンがゴーストバイソンに使った魔術・ヘルズ・サンダー雷鐘も、通常以上にその効果を発揮したのだ。

「それとも、消したくない理由があるのか？」

声は反響し、虚空に何度も木霊する。

「生意気な小僧めが」

静寂に張りのない、しかし威圧的な声がした。

気配だけを探りながらセブンは暗闇に目を凝らした。やはり、ここに幽玄がいるのだ。そして幽玄谷全体を包む込む霧もまた、この幽玄による仕業であるのだろう。

「生憎、おれは現代の生まれでね。あんたのような、旧時代の遺物じゃない」

「旧時代の遺物か……。その言葉はお前にも降りかかるのではないか、フォースよ」

「おれを知っているのか？」

「その体に秘めている莫大な魔力と、この暗闇にも対応しうる能力

の高さ。この谷に入ってから行動も監視していた。お前はフォースだ」

声の出所がどこなのか、セブンはまだ感知出来ていなかった。どこから発せられた声ではなく、洞窟内の壁に反響した声だけが届くのだ。

「それはどうも、ご丁寧におれを見てくれて感謝する。だが、おれは今を生きている。死に損ないとは違ってな。だから旧時代の遺物じゃあない。本題だ。さつさと、天に召される」

「出来かねる」

断固とした返事。セブンが眉間にしわを寄せる。一筋縄でいくとは思っていなかったが、案の定、幽玄の返事は固い意志を持っているようだ。

「それなら、どうしたらあなたは消えてくれる？」

「もう一度滅びるか、もしくは我が野心が一片として残らぬ形で満足をするか、だ」

「分かった。それなら、力ずくで滅ばしてやるよ。」

雷鐘

セブンが轟音と炸裂する閃光を放った。洞窟内、全てがその魔術を増幅させて轟音と雷光が大爆発を引き起こす。固く目を瞑った上に両腕で目を覆ってやり過ごすなり、セブンは手の平に光を灯して周囲を見渡した。骸の中に巢食っていたモンスターが気絶している。しかし、幽玄らしき姿はやはり見えない。

「その程度の魔術で、どうするつもりだというのだ？」

冷ややかな声がしてセブンが振り返ると、そこに着物を纏った半透明の人間がいた。脛の下から半透明に裸では完全に消えている。右目の瞼の上から斜めに大きな刀傷があり、漆黒の髪がまっすぐ重量に従って伸びている。

「あんたが幽玄だな？」

「いかにも。この谷における、永久の支配者だ」骸と同じ体格、背格好。幽玄がにたりと口角を持ち上げた。「そして、我が野望は強者との死闘。フォースよ、お前はおれを満足させられるか？」

ふつと幽玄が浮いて宙で翻る。そして、そのまま自身の亡骸に突っ込むと、骸骨に肉がついて生身に見える幽玄がそこから立ち上がった。さらに左手を上へ掲げると、どこから錆びた鞘に入った刀が飛んできてそこに握られる。

「我が名は幽玄。名を名乗れ、フォースよ。それが礼儀だ」

「……フォース・ナンバー・セブン・ダッシュ。セブンだ」

セブンも右手を出すと、そこに片刃の剣が現れる。その剣の切っ先を幽玄へ向け、鋭い視線で睨む。

「では、セブン。 参る！」

幽玄が飛び出して刀を振るった。鞘から抜き放たれた刀身は錆びついていたが、幽玄が振るうとそこに美しい白刃が蘇る。セブンがそれを自身の剣で受け止め、後ろへ飛んだ。確かな手応えが感じられたということは、今の幽玄はやはり生身であるということなのだろう。この状態で息の根を止めれば、谷に満ちる異質の魔力も消え去るはず。

「魔闘流剣術、見せてやるよ」

口の端を歪めてセブンも言い、下段から剣を振るう。すると、その刀身に魔力が満ちて刃を延ばした。幽玄が刀でさらに下方向から受け止め、そのまま流しつづり足で接近する。その流麗な動作は一切の隙を与えずにセブンを切り払う。しかし、セブンの姿が揺らいで消えた。

「残像……！」

「違う。虚像だ」

幽玄の足下が突然、泥にまみれて絡み取られた。幽玄の切裂いたセブンの真後ろに本物のセブンがいて、魔術を発動していた。泥の嫉妬だ。ジェラシー

「弱くねえか？」

肩越しから振り下ろされたセブンの剣が幽玄を捉えた。その体から血が噴いて、幽玄の目が見開かれる。驚嘆と、狂喜と。さらにセブンの第二撃が加えられて幽玄の体が衝撃で吹き飛ばされる。剣を

下ろしてセブンは岩壁にぶつかった幽玄を見やる。

「こんな程度のはずがないんだろ？ 出し惜しみならするな。

三雄はおれより、ずっと強かったはずだ」

ばらばらと岩から砕けた石が落ちた。幽玄の体がふわりと持ち上がり、平然とセブンの前に立つ。刀を左手にぶら下げ、無防備な姿で目の前にいるフォースを見つめた。

「三雄か。懐かしき名だな。小賢しい連中だった。最初の手合わせではおれに勝てぬと見て魔界へと無理やりに押し込めた。二度目は丁度、魔界でやり合った。あの時はまともになっていたが、それでも一対三という数的優位に立ちながらほぼ互角のまま引き分けた。そして三度目。この森で。我ながら無様に敗北を喫したが、あの戦いほど心地よいものはなかった。魔界の猛者をも霞む、あの高揚感。何度も、何度も、思い出しては恍惚とする。……だが、お前はまだ遠く連中には及ばない」

幽玄の瞳に赤い光が宿る。薄い闇の中に煌くその眼光はまっすぐセブンを射止めて揺らぐことがない。

「そうかよ。好きにしろ。だがそんなおれに対して、まだあんたは有効打を与えちゃいねえぜ？」

「神経を研ぎ澄ませ。感情を露わにするな。死を臆せず、生を渴望しろ。 少しだけ、力を解放してやる」

直後にセブンは両手で握った剣を前に出した。強い衝撃を刀身で受け、びりびりと痺れる両手で押し返す。目に見えぬ速さだった。ティア・ドロツブ一雫の涙を発動して周囲を見やると、左側から幽玄が突っ込んでくる。

「虎峰」

刀を前方へ突き出し、その先端が一雫の涙の防壁に阻まれるとそこから力ずくで真横へと薙ぎ払う。すると防壁が破られたのだ。展開していた魔法陣に亀裂が入って砕け散る。セブンが目を見張り、幽玄の薙ぎ払った隙について刀を振るう。だが刹那の斬り返しで受け止められると、そのまま軽く払われて刀がセブンの首筋から胴に

かけて深く裂いた。倒れていくセブンの体を右足で前へと蹴り倒すと、刀をセブンの顔の真横へと突き立てた。一連のことがほんの一瞬で行われ、セブンには動きを追えなかったし何があったのかも理解出来なかった。

「弱い。これが、フォースか？」

吐き捨てるような幽玄の言葉。ギリ、とセブンが奥歯を噛み締める。強かった。圧倒されるというのはこのことだ。反撃の余地も見せず、気付けば負ける。今だって何の気紛れかトドメを刺されなかったが完全に殺されていたのだ。

「生憎……本調子じゃないってのもあつてな」

「言い訳を聞く為に生かした訳ではない。早く、おれを満足させる。お前なら出来るんだろう？」

脇腹を強く蹴られてセブンが吹き飛ぶ。壁に背中からぶつかる正面から幽玄が迫ってきた。呼吸を整える間もなくセブンは魔法陣を展開する。

サラマンダー・フアング
「火蜥蜴の爪！」

壁に展開された魔法陣から巨大な炎の爪が現れて幽玄を引き裂こうとしたが、その炎は幽玄の刀の一薙ぎで突破された。しかし、魔術を破った先にセブンの姿がなかった。

ソラ
「宙圧し」

静かな声がして幽玄が振り向きざまに刀を振るうも、セブンは身を低くした状態で幽玄の体に掌底を当てていた。いつぞやの時とは違い、そこには魔力が込められて重い一撃となる。ゴッ、と鈍い音がして幽玄の体が強い打撃に打ちのめされる。幽体がセブンの掌底を受けたところから陥没し、それから少し遅れるように後ろにしていた岩壁へぶつかってめり込んでいく。

「ぐ、おおお……！」

「もう一丁、食らえ。天圧衝」

大地の重みを全てその手へ乗せて放つ一撃。
岩壁が崩れ、その亀裂がバリバリと広がっていく。幽玄の体は岩

へとめり込んでいき、次の瞬間にその体が弾け散るような衝撃に襲われた。

No.37 幽玄谷の試練？

「ねえ、ここの洞窟のモンスターって地味に強くないっ！？」

デモンズ・ナイフ
悪魔の懐刀でゲル状の体をしたモンスターを切りつけてアークが叫ぶ。ガムトリというモンスターで丸い体に羽を生やしたコウモリのようなモンスターだ。口から幾つもの触手を伸ばすことが出来てそれで獲物を捕らえて捕食する。しかもガムドリは音をあまり出すことがなく、気付けば触手に捕らわれることが多い。

「そうね。ここの土地と何か関係があるかも知れないわ」

エクス・キョウター
執行者・ガゼルを召喚してクロエは戦わせている。ガゼルは3人の中で一番の戦力で襲いくるモンスターを次から次へとなぎ倒している。クロエは六ツ目単眼をかけて不自然な魔力の流れを追っている。

「土地って？」

短い杖を武器にするシュザリアが尋ねた。魔術を使ってモンスターと応戦しているがあまり役立ってはいなかった。魔法陣を展開しても、展開方法を間違って訳の分からぬところに魔術をぶついたり、魔力のコントロールを疎かにして暴発や不発を連発したりと劣等生としては見事なまでに役立たずだ。それでも時折、成功する魔術は簡単にモンスターを倒してしまう。

「谷に蔓延している霧はこの洞窟から漏れてる魔力に影響を受けているのよ。この魔力は極めて特殊な性質を持っていて、魔法陣に勝手に吸い込まれて威力を底上げしている。だからここに暮らしているモンスターもその影響を受けて含有魔力として体内に取り込むことで強化されている。これがわたしの説」

「だしたら、どうにかしてこの魔力を消さなきゃ。危なすぎるよ」
ガムトリに足首を絡め取られ、アークは悪魔の懐刀を腰溜めから切り放った。すると刀身が伸びて3メートルは離れていたガムトリを両断する。触手が消えると、今度は深緑をした狼のモンスター・

グリーンウルフが突っ込んでくる。ごわごわの体毛は魔術によるダメージを軽減されると言われていて、物理的ダメージしか受け付けないという厄介なモンスターだ。アークが身構えると横からガゼルが割り込んで手にしていた長い槍の一撃で仕留めて打ち捨てる。

「あ、ありがと……」

「いえ、刑を執行しているだけです」

淡々とガゼルは答え、次の標的目掛けて勇んで駆け出す。一向は常に走りながらクロエに従って最深部を目指している。洞窟内の戦いにおける難点は強い魔術を使えば落盤して生き埋めになりかねないという点だった。それに行き着く先までの距離が分からないから魔力を節約しておかなければならない。

「近いわよ」

そう、クロエが言った直後に洞窟が大きく揺れた。大きな音が洞窟の先から響いてくる。遠くない距離だった。

「何、何なの？」

「この先でセブンが誰かと戦ってるみたい」

歩を止めてクロエが言う。しかし、悠長にしている時間もなかった。今の衝撃で天井や壁からぱらぱらと土や石が零れてくるようになったのだ。

「とにかく行くか戻るかしないと。ここで立ち止まってもろくないことないよ」

デモンズ・プレス

力をセーブした悪魔の息吹を放ってアークが言った。氷漬けになったモンスターにたじろいで後続の勢いが弱くなる。

「セブンがいるなら行こう！ またはぐれたら今度こそ会えないよ、きつと！」

「そうね。シュザリアの言う通りかも……。ガゼル、モンスターを足止めしておいて」

「行こ！」

アークが先頭を走り出した。前にいたモンスターが3人に気付くと、悪魔の懐刀を下段に構える。そして自身の魔力を核に込めて一

気に切り上げる。

フレイム・ブレード
「炎魔剣！」

刀身が伸び、そこに滾る炎が纏わりつく。ガムトリ2匹とグリーンウルフ1頭が焼き払われた。その火力は岩壁までも溶かし、洞窟を超高温で焦土にさえしようとした。

「熱っついッ！」

「ちよつと、アーク！ 危ないでしょ！」

「さっさと行くわよ」

そもそも悪魔の懐刀にはこのような能力はなかった。先ほども使った刀身を伸ばす能力に、自身の火の属性を加えた魔力を加えることで合成させたのだ。初めて使ったせいで加減が出来ずに魔術を使ったアークまで熱がってしまったのだ。

エンシェント・フレイム
「いにしえの炎　！」

洞窟の狭い通路を左折し、その先にあつた空間にセブンがいた。

息を荒げながら魔法陣を展開したところだ。幽玄がまっすぐセブンに向かって行くが展開された魔法陣は幽玄を四方、さらに上下から囲んでしまつてそれにより閉じ込められる。

「燃え散れ……昇華・赤翼炎儀！」
せきよくえんぎ

対象に向けて縦横から展開する魔法陣は立体魔法陣と呼ばれる。

その中でも対象を閉じ込める形での六面を用いる魔法陣は最高難度の展開方法として知られていて、その威力も通常の展開より何倍も威力が上がる。セブンが発動したのもまた同様に超強力な魔術だった。六つの魔法陣からさざ波のように薄い赤色をした炎が漏れ出すと、それが魔法陣に囲まれた中で急速に形を成して無数の羽となる。それが激しく動き出すと幽玄に触れる度に激しく炸裂して燃え上がる。三分も激しい爆発が続くと魔法陣が消えた。

「はっ……はっ……」

息を切らしながらセブンは黒い炭のように地面へ崩れ落ちた幽玄を見つめた。シュザリア達はいきなりの状況に戸惑いながら見守る。
「大した魔術だ……」

手をつくことなく、ふわりと幽玄の体が起こされた。それまでの激闘で肉は削げ落ち、骨はむき出し。さらには焼け焦げた醜惡な肉体は死人とするに相応しい程だ。しかし、そこにはダメージを受けた疲弊などが感じられなかった。

「フオースよ、全くもって見事だ……。しかし、このおれを滅するには不十分。まだ魔界の猛者の方が強いというものだ」

「そうかい。……現代は平和なんだ。あんたの時代と違って……桁外れに強くなる理由がないんだよ」

言い返すセブンだが満身創痍だった。魔力は残り少なくなっている。体力だってもう長くない。体には刀傷が多く刻まれて、刀傷独特の鋭い痛みが全身を駆け巡っている。

「言い分はもつともだが、どのような時代においても強さこそが至上。平和にかまけていることが理由にはなるまい。……丁度、貴様の連れも到着したようだがお前とは違って楽しめそうもないな」

幽玄がシュザリア達に目をやってからつまらなそうに言う。実際、3人はレベルの違いを感じていた。普段からセブンの強さは断トツだというのに、そんなセブンが苦戦している様子なのだ。実戦で立体魔法陣を使うなんてそうそうあることではない。魔力の消費が半端ではない上に使用者への負担も大きいのだ。

「だが、あんただって終わりは近いんじゃないのか？」不意にセブンが口を開いた。「化けて出ている、今のあんたは誰かの魔力によって実体を保っている。その魔力を全部吹き飛ばされたら……消えるしかないんだろ？」

「おれ自身、どういう理由で時を経たこの時代にいるのかは分かん。しかし、ここにいればおれは生きているよりも快適に存在してられる。魔術師ではないから魔力についてはよく知らぬが、力だけは溢れてくるのだ。そう、まるで　魔界にいた頃のように」

刀を一振りすると幽玄の肉体が光に包まれてあつという間に元の傷一つ無い姿になった。

「魔界……。そうか、この異常な魔力はそれが原因か……。幽玄、

お前に一つだけ質問をする」

「何だ、フォース」

「死ぬ間際にお前は何か、特別なことをやらかしたはずだ。それは何だ？」

質問の内容に幽玄は少しだけ目を細めた。アークが何か勘付いて周囲をきよるきよると見やり、それからクロエに何かを耳打ちする。「特別なこと……」。三雄の一人、マックスとの一騎打ちで奥義を使った程度だな。我が奥義は全てを切り裂く究極の一振り。結果として敗北を喫したが、確かに奥義は放った。それが一体どうした？」

「恐らく、そいつで深魔の穴がこの地に作られた。あんたは魔術師ではないが確かに魔力を扱っている。それは今の戦いでしつかり確認した。そんなあんたが放つ奥義には莫大な魔力が付加されていたんだろう。その結果として魔界への通り道が、深魔の穴が作られて長い年月を経て徐々に谷全体に満ち溢れてきた。奥義が強い残留思念となり、意識としてだけあんたはここに縛られている。有害な魔力の性質を伴ってな」

セブンの言葉にシュザリアは首を傾げる。全然意味が分からなかった。深魔の穴が一体、この状況にどう関連しているのだろう。

「つまり幽玄が深魔の穴を作ってしまったて、その深魔の穴が幽玄自身に魔力を与えているってこと。封印されていない深魔の穴だから、悪影響がそこかしこに出ているでしょ？　もしも、この仮説が正しいなら深魔の穴さえ封印すれば……幽玄は姿を保っていらなくなる」

そうクロエが解説し、六ツ目単眼で深魔の穴を探す。幽玄が小さく口元を綻ばせた。

「なるほど。つまり、おれは今……魔界から溢れてくる魔力で保たれているのだな。それならば魔術師の真似事も出来るということか？」

言った直後に幽玄が刀を持っていない左手を前へ出した。するとセブンの眼前に太い火柱が吹き上がる。驚いてセブンが後ずさると

今度は地面から無数の棘が突き出された。

「やめろ、幽玄！ そんなことをしたら……！」

「黙れ、フォースよ。おれは生来、盗賊だ。魔術師どもから、その魔術を盗んで何が悪い！」

No. 38 幽玄谷の試練？

『紅牙幽玄。東洋の小さな島国の出身にしてグヴォルト帝国史上、最強の盗賊とされている者の名だ。』

三雄と三度の戦いが繰り広げられ、幽玄が四十歳の時に最後の戦いが始まった。壮絶な三日三晩も続いた激闘の末に幽玄は敗北し、後に幽玄谷と呼ばれるようになった深い森の中に葬られた。彼の武器は卓越した剣術であり、東洋に伝わる片刃の刀と呼ばれる武器を使いこなした。魔術を扱うことはなかったが三雄とたった一人で渡り合ったという実力は伝説の域であり、武器一つで戦う者として考えるのが難しく思われていたが、魔術を扱えないだけであって魔力を扱う素養と、キャパシティは人並み外れたものだろうと近年では推測がされていた。

彼はその類稀なる強さで魔界の王を下した経験もあり、正に最強の剣士であった。グヴォルト帝国には何らかの事情でやって来たということであるが、それがいつの時なのかは定かではない。富を築いた者へも、貧乏人にも略奪や強奪の限りを尽くした大罪人ではあるが後に語った、三雄の一人であるマクスウェル・ホワイトは、「彼はとても強い人間ではありませんが、卑劣なこととはしなかったように思います。いつも連れていた小さなモンスターがいるのですが、彼はそのモンスターをとて可愛がっていたようです。まるで家族のように。彼は確かに盗みを働き、時には人間を殺めることもありましたが。しかし、彼は弱きを助け、強さを求める、孤高の旅人であったのではないかと……今、振り返れば思います」と紅牙幽玄のことを回想した。

真実は歴史の闇の中。紅牙幽玄という人物がどのような人物だったのか、それはもう二度と確かめようのないことなのであろう。

フォングレイド歴史館 グヴォルト帝史学研究員ジェリー・モン

ド
』

「吸収！」
ディクオーバー

幽玄の放った無数の炎の玉をアークが悪魔の懐刀デモンズナイフで吸収した。そしてすぐにまた短刀を振るうと炎の玉をそっくりそのまま幽玄へぶつける。しかし、幽玄は右手に持った刀の一振りでかき消した。

「魔術！　これが魔術というものか！　何とも心地よい力だ！　全てを思いのままにすることが出来る！」

「光の雨！」
シャイン・レイ

自身の周囲から無数の火柱を立ち上らせる幽玄に向かってシュザリアが魔術を放つ。幽玄の頭上に展開された魔法陣から光が注ぎ、それは物理ダメージを伴って地面を撃ち碎いていく。しかし、幽玄はつまらなそうに展開された魔法陣を見やってから刀の切っ先を向けた。すると、魔法陣が書き換えられて暴発する。

「嘘、どうして！？」

「邪魔だ、小娘」

狼狽したシュザリアに向かって幽玄が接近した。たった一足でシュザリアに近づき、両手に持った白刀を振り切る。両者の間にセブンが割って入り、鮮血が舞い散る。

「セブン！？」

シュザリアとアークの声が被った。だが、セブンは倒れるでもなく斬られながらも幽玄の肩を掴まえて、その足下に魔法陣を展開する。

「泥の嫉妬」
クレイ・ジェラシー　アーク、クロエと協力して深魔の穴を封印しろ！

「小賢しい真似を……！」

両足の動きを封じられた幽玄がセブンに風の魔術をぶつけて吹き飛ばす。刀を足下に突き立てると、そこに魔法陣が展開されて地面全体が泥沼のような泥濘になった。水属性の魔術で水分をそこかしこにばら撒いたのだらう。

「シュザリア、自分の身を守れ！」

セブンに怒鳴られて思考の止まっていたシュザリアがティア・ドロップ一雫の涙を

発動した。足を抜いた幽玄が苛立ちのままに刀を振るい、シュザリアを守る防壁が張られる。しかし、セブンの時とは違って防壁が破られることはなかった。ヒビが入ったものの、すぐにそれが修復された上で激しい反発が生じて幽玄を突き放すように衝撃が発散される。

「この幽玄に破壊出来ぬものはない……！」

シュザリアに向かって幽玄が刀を振り上げると、凄まじい勢いで振り下ろした。刀から衝撃が走り、一雫の涙が発動されると防壁から強い光が発せられる。

「きゃあっ」

「シュザリアっ！？」

だが、一雫の涙は破られなかった。魔法陣の中でシュザリアは屍餅についていて、自分でも驚いているのだらう。周囲をきよるきよるで見渡してから、幽玄の方を見やる。

「何でか分からないけど、よかったあ……」

「小娘如きに何故、おれの力が通じない……！」

ほっとするシュザリアに対して幽玄は酷くプライドを傷つけられた。怒りに呼応して魔力が高まるとそれが発散されて周囲がまた酷く揺れた。

「シュザリアの為の魔術なんだから、破られないのは当然だ」セブンが喋り出し、幽玄が鋭い目を向けた。「シュザリアは王族だ。そして一雫の涙の魔法陣には属性指定がされていない。故に発動者固有の魔力に合わせて性質が変化する。王族の魔力属性は光。何者にも効果を及ぼす、強い復元の力を持つ属性だ。一雫の涙は外部からの力を遮断する力だが、それが光の属性によって破壊されてもすぐに、タイムロスなしで復元される。こいつを破りたければ禁忌でも犯すことだな。もっとも、正式な魔術師でないお前がどう足掻こうと、禁忌を犯せるはずはないが。……それと、忠告だ。お前に魔術は扱えない。すぐに使用を止める」

話を聞いていた幽玄が憤りのままに腕を振るった。魔力が吹き荒

れ、洞窟内をぞわりとした空気が流れる。

「魔術を使えぬ？　ならば、この溢れ出てくる力は何だという！？」

それに　、貴様らはこのおれに手出しが出来ぬ状態であろう」

「ああ……。あんたは強い。魔力で姿を保っていると感じただけで、魔術の真似事をするなんてことはそうそう出来ることじゃないだが、あんたは魔術師とは違う。そのペースで魔術を行使し続けてみる。お前は精神、肉体共に滅ぶことになる」

「戯言だ。我が剣術と魔術に恐れを成して、それらしいことを言っているだけだろう？　この幽玄が信ずるは、己の道のみ……！」

刀を下段に構え、セブンに向かって走り出す。舌打ちをしながらセブンは身構え、魔法陣を前方に展開した。そこから無数の水柱が幽玄へ向かって放出される。しかし、それを幽玄は刀の一振りで衝撃波を飛ばして弾く。水飛沫を突破し、セブンに迫ると魔力で刀に炎を宿して大上段から振り下ろす。

「一雫の涙！」

セブンが魔術を発動し、防壁を張る。すぐ幽玄にそれを打ち破られたが、その隙について鋭い蹴りを放った。腹部を思い切り蹴り飛ばし、さらに間を詰めて掌底を叩き込む。

「天圧衝……！」

手の平に集中させた魔力を渾身の力で掌底と共にぶつける技だ。それにより、相手の魔力を吹き飛ばしてしまう効果を持つ。だが、幽玄は掌底の一撃を刀の柄で受け止めた上、そこから刃を切り返してセブンを切り払った。右肩から斜めに一閃。血飛沫が舞う。完全に捉えられた刀傷は斬った箇所だけではなく、その周囲までもを抉り散らす。

「セブン！」

シュザリアが一雫の涙を解いてセブンに駆け寄る。それを幽玄は見逃さなかった。一足で跳び、身を捻りながらシュザリアを振り向きつつ刀を振りかぶる。

「来るな、防御だ！」

「遅い……！」

影がシュザリアとすれ違った。力を失って重力に従いながらシュザリアの体が落ちていく。それを見たセブンの目が見開かれた。

「セブ、ン」

倒れていくシュザリアを振り返りながら、幽玄がにたりとした笑みで口元を歪ませる。確かな感触を味わった。無防備な胴を切り裂いた。血に濡れた刀をぺろりと舐め、奥で深手を負ったセブンを見るやる。

「さあ、セブン・ダツシュよ。お前の仲間は死にかけた。どうする？」

「シュザリア……シュザリア、無事か？」

自分の傷も顧みずにセブンはすぐにシュザリアのところへ行き、倒れた彼女の様子を見る。

「痛いよ……大丈夫かな……？ もっと美味しいものいっぱい食べたいのに……」

「……ああ、大丈夫だ。美味しいもんなら、まだ食える。……食えるから、今だけちょっと我慢してくれ。……あの野郎をぶっ倒す」

マイペースなのはいつも変わらない。そんなシュザリアに少しだけ救われた気がした。シュザリアに魔術をかけて眠らせるなり、ゆつくりと立ち上がった。下を向いたまま体だけ幽玄を向き、すっと顔を上げる。その表情を見た幽玄の体がビリビリと震えた。凄まじいまでの殺気で総毛立つ。

「いいぞ、もつとだ。……もつと、楽しく戦おう」

「うるせえ。もういつペン、今度はおれが殺してやる」

怒りの感情に呼応して魔力がセブンから漏れ出る。そして、次の瞬間に幽玄が激しい炎の魔術をぶつけた。しかし、燃え盛る炎はすぐにかき消されて無傷の、汚れ一つない姿のセブンがそこから飛び出した。

No.39 幽玄谷の試練？

軍事国家ドラスリアム首都アウルスーン。

年中、雪の降り積もる大きな都だ。アウルスーンの名物は都の中心に構えられた建造物だ。高く聳える巨大な塔でドラスリアムの軍隊の本部であり、軍事国家であるドラスリアムの中枢だ。クーデターで総統が命を落とし、今はフォースを統べるボスと呼ばれる人物が軍隊と国、双方の全権を握っている。

その建造物 バベルの地上50階にある大きな会議室に4人のフォースが集まっていた。赤絨毯の敷かれた床に白を基調とした気品溢れる壁紙。テーブルは格調高い黒の大きな円卓でそこにフォースが着いている。

「さつさとこんな会議終わらせて、遊びに行きたいんだけどなー……」

スピードがテーブルの上で足を組んだ状態で退屈そうに呟く。会議はまだ始まっていなかった。召集がかかったのに、その召集をかけた人物が姿を見せていないのだ。

「遊び相手がいるのか、スピード。意外だな」

からかうように言ったのはフォース・ナンバー・ファイブのシロだ。白髪に褐色の肌をした青年でアイマスクをいつもつけている。年齢は20代の後半ほどだ。肩肘をつき、頬を支えている。

「いるよ、遊び相手くらい。ま、こないだ作っただけだね」

「作った、か……」

ふっ、と鼻で笑ったのはフォース・ナンバー・ツー。通称セカンドだ。黒髪に黒い瞳。筋肉質に引き締まった体をしており、スピードの言葉に今は嘲笑的な顔をしている。

「何だよ、セカンド！ 文句でもある訳？」

「そう騒ぐな。すぐ感情的になるのがお前の悪い癖だ」

「サードは腰が重いんだよ。じじいみたい。あ、サードはぎり

ぎり古代大戦で運用されてたんだっけ？ ごめん、ごめん、じいさん同然だったね」

嫌味をスピードが吹っかけるも、二人は黙殺するだけだった。それがつまらなくてスピードが舌打ちをすると、会議室の扉が開け放たれる。

「待たせた」

入ってきたのは燃えるように真っ赤な髪の毛をした男だった。どこか虚ろでただ貼り付けただけ、というような微笑を浮かべている。柔和な表情とは裏腹に彼が入ってきた瞬間にフォース全員が黙った。「ボス、遅かったね」

スピードが足をテーブルから下ろして言う。

「ああ。ゴミ掃除をしていた」

「ボス自ら？ 言ってくればやったのに」

ボスと呼ばれた男が席につく。集まっていたフォース全員が彼を見つめた。フォース・ナンバー・ワン。呼称・ファースト。現在、フォースを統べるドラスリアムの最高権力者にしてボスという呼称をもつ、始まりのフォースだ。

「今日の議題は？」

「幽玄谷にセブン・ダッシュと、グヴォルトの姫君、それにホワイト・ウイングの生徒が二人。四人が確認された。こちらへやって来ることが予想される」

「何をしに？」

「スピード、黙って話を聞け」

腕を組みテーブルの一点を見つめたままサードがたしなめた。ちえ、と舌打ちをしてからスピードが頭の後ろで手を組んで背もたれに寄りかかる。

「目的は知らぬが、アウルスーンまで来るはずだ。奴らがドラスリアムに入り次第、セカンド、サード、スピード……お前から魔法陣を展開しろ。魔封じの契血印だ」

「魔封じの契血印を？ どういうことだ？」

セカンドが問い、サードが腕組みを解いて口を開いた。

「何を封じるのだ？」

「空間転移魔法陣。セブン・ダッシュが発動出来ぬようにしろ。そして幽玄谷の深魔の穴を拡張するのだ。おれが許しを出すまで、奴らがドラスリアムを出れぬようにしておけ」

「そうまでして何をやらかすつもりだい？」

トントン、と指でテーブルを叩きながらシロが言う。口元がにやけている。

「セブン・ダッシュがフォース最高傑作とは言え、それはフォースを造り上げた連中の決めたこと。真に強いのは誰か。はつきりさせようではないか」

「ボスってば、本当に戦闘狂なんだから」

やれやれとスピードが肩をすくめてシロも「まったくだ」と呆れたように笑う。

「無論、それだけではない。奴はフォースの中でも特別だ。セブンの、オリジナルのフォースオリジナル・セブンの秘密も奴の中には眠っている」

「オリジナル・セブン。あいつ、今ごろどうしてるかね」

「さあ？ 興味もないけど……魔界で好き勝手に暴君やってるんじゃない？」

シロとスピードがそんなことを言い合った。

「軽口は慎め」

「んもー、セカンドは本当に頑固なんだから。ボス、もう終わり？」

「ああ。後は軍事整備に関することだ。お前はいらん」

「やった！ じゃ、もう帰るよ！ バイバイ、またねー！」

スピードが椅子から立ち上がるなり姿を消した。魔術ではなく、純粋な彼自身の持つ能力である速さスピードでもって。脅威の速さを持って魔導対戦を制するというコンセプトで造られたスピードは他のフォースを全く寄せ付けない随一の速さを持っている。

「軍備整備なら、おれもいらんね。そいじゃあ、これで」

「シロ、お前に第四師団を預ける」

立ち上がったシロをボスが呼び止めると、彼はアイマスクを額に押し上げた。眼球も瞳も真っ白をした不気味な目でボスを見つめる。瞳の輪郭にだけ輪郭のような線が視認出来る。

「おれに第四師団をねえ……。何をしろってんだい？」

「セブン・ダッシュに挨拶をしてやれ。……腑抜けたままでアウルスーンまで来られても、我が目的は達成されない。挨拶をしてやれ。期待外れならば殺しても構わぬ」

「全く面倒臭い……。だが、まあ……。あんたにや従うよ。期待しないで待っててくんない」

ひらひらと手を振りながらシロが部屋を出ていた。フォース・ナンバー・ファイブ シロ。フォースの中で最も特異にして、魔導対戦における一つの答えを提示する存在。アイマスクをまた装着し、彼はバベルの長い階段を一段ずつ降りていった。

「魔術とは魔法陣を介して、様々な効果に魔力を変換させた術のこと」

幽玄の放った4発の火球を素手で叩き落してセブンは言う。そのまま接近して身を屈め、幽玄の懷から右脚を軸に蹴りを放つ。刀の柄で受け止めた幽玄だったが、激しい衝撃が発生して吹き飛ばした。岩壁に激しく叩きつけられると、洞窟全体が揺れる。いつ落盤が起きてもおかしくない状態になっている。

「その魔法陣は本来、術者によって構成され、展開という手順を踏んで発動される」

「それでも、食らえ……！」

刀から強い光が発せられる。幽玄が刀を振るうと、その軌跡が巨大な三日月のように形を成してセブンへ向けて猛スピードで向かってくる。だが、セブンはそれを見据えたままで片手を前へ出した。その手に斬撃が消え去る。

「何故だ。何故、急に貴様へ対しての攻撃が通用しなくなる……！」
「フォースには番号ごとに特別な能力が与えられている。そして、

おれはフォー^{ナンバー・セブン}ス最高傑作。魔導対戦……要するに魔術を用いた戦闘においても絶大な力を発揮することが出来る。その能力が大聖光^{ジャックポット}」
「ジャック、ポット……？」

「魔力の込められた全てが、この能力を発動しているおれには通用しない。ぶつかってきた魔力はおれ自身を魔法陣として属性を消され、そのまま蓄積される。お前が魔術を放つ度、おれは魔力を吸収する。その魔力で身体能力も跳ね上がる。ついでに傷も癒えれば、おれの意思と関係なしに身につけている服や物までもが再生されていく」

「そんなことが、あつてたまるか……！」

再び幽玄が刀を振るうと洞窟内に灼熱の龍が出現してセブンへ向かっていく。だが、それもセブンにぶつかるのと同時に消え去ってしまう。幽玄がたじろぎ、セブンは一歩前へ出た。

「話の続きだ。お前は魔法陣を正しく展開出来ていない。魔法陣を用いない魔術は存在するが、その多くは肉体に多大なる影響を及ぼす。それだけ連発すれば、幽体とはいえお前の体が朽ちるのは時間の問題だ」

セブンが言う^と幽玄の頬に亀裂が入った。表面がパキパキと音を立てて崩れる。幽玄が奥歯を噛み締めてから、不意に口元を歪めた。
「魔力の通じない能力……。ならば我が奥義をもつて葬るまでのことだ。魔力が含まれようが、奥義の威力そのものは衰えまい」

「やってみろ。……もう、お前と話することなんかない」

刀を鞘に納め、幽玄が右脚を大きく前へ出して足を開く。上体が前傾になり、右手でゆっくり柄を握った。落盤が始まり、大小様々の岩石が降り注いでも幽玄の構えは微動だにしない。それを見たセブンは両手を合わせ、それから拳を握りしめる。

「魔闘術」

深い呼吸。息を吸い、吐いていく。

ただそれだけでセブンの体から漏れ出る魔力が消え去り、握った拳へと全てが注がれていく。哀れな幽体である凄腕剣士を見据えた

まま拳を引いた。そして、セブンの姿が消える。幽玄の鞘から刀が抜き放たれ、凄まじい衝撃が幽玄の前方へと放たれた。全てが横薙ぎに引き裂かれ、地面も壁も天井も、何もかもが瓦解していく。

「奥義・幻楼瞬煉牙！」

幽玄が奥義を放つと、瓦解した全てが吹き飛ばされた。洞窟となつて崖の大地そのものが内部から穿たれたのだ。外の霧もいつの間にやら消え去つていて、日光が幽玄の体に注がれた。チン、と音を立てて幽玄が刀を鞘に納めると、その体が指先の方から塵になつていく。

「ここまでか」

「ああ、もうおやすみだ。空圧し」

ぽん、と力のない掌底が幽玄の背を押した。

セブンは無傷のまま塵となり、崩れていく幽玄を見つめた。

「未練はもうない。心行くまで戦えたこと、我が誇りとしておいてやる」

「心残りはないな？」

「ないとは言えんが、満足した。セブン・ダッシュよ。甘さを消せ」

幽玄の体が完全に塵となつて消え、そこに骨だけが残った。セブンがシュザリアの方を向いて彼女を抱え上げ、霧の晴れた森の中へと入つていった。

No.40 最初の記憶

「セブンって本当に反則の塊みたいだね」

言いながらアークは頭の後ろに手を組んで歩いている。霧の晴れた幽玄谷は異様に静かであった。魔物が姿を現さなくなり、大きな木々の間を足下にだけ注意して歩くだけだ。

ジャックボット
「大聖光のことか？」

「その他もたくさん」

言われてセブンは苦笑する。アークの言い分はもつともだ。そうする為だけに造られた存在なのだから。古代大戦で勝利をすることだけを目的に生み出された兵器。それがフォース。

「けれど弱点だってあるんでしょう？」

クロエがそう言い、シュザリアとアークは彼女を振り向いた。セブンの弱点というのが2人には分からない。

「なきにしもあらず……だな。おれの能力……大聖光は多用出来ないんだ。魔力を取り込んでキャパシティが満タンになったら、その余剰魔力を溜めておくことが出来ない。漏れ出た魔力は勝手に周囲に影響を及ぼす。服が元通りになったり、肉体の傷や汚れが消えたりするのもその影響で、さらに放っておけば今度は漏れ出た魔力が擬似的な深魔の穴と化すこともある。それだけの魔力を一気に消費するのは難しいし、どうあっても周囲に害をもたらしてしまう。面倒臭い能力だよ」

「それだけじゃないでしょう？」

さらにクロエが尋ねるとセブンが足を止めた。シュザリア達も足を止めると、セブンとクロエを交互に見やる。当の2人は互いの腹を探り合うようにして視線を交わしていた。

シックスアイ
「六ツ目単眼か」

「ええ。それにちよつと考えれば分かることよ。大量の魔力を取り込んだ上で、それを暴発させないように発散していくのなら肉体に

途轍もない負担を強いることになる。違つかしら？」

「当たり前だ」

「クロエ、そこまで見抜いてたの……？」

感心しながらシュザリアが呟き、クロエはふふつと微笑んだ。

「流石は4年生の第八席……」

「本当はクロエが主席なんじゃないの？」

「いや、それはないな。4年の主席は本物だ。おれを除けば……学院の最強はあいつで決定だろう」

そんなことを話しながら一行は幽玄谷を進んだ。

丸二日かけて幽玄谷を出ると、そこは地平線を見渡せる広い荒野だった。夕陽が沈んでいく様を眺めてから、その場で野宿することを決めて体を休めた。そして、携行している食糧で簡単な夕食を済ませるとセブンが3人を呼んで焚き火を囲んだ。

「もう、ここはドラスリアムだ。グヴォルト帝国の3倍の国土と、どこよりも強い軍隊を持つ軍事国家。統治するのは戦争のために作り出されたフォース。……ここから先は何が起こるか分からない」

「でも戦争を回避する交渉ってどうすればいいの？」

「さあな……。開戦の契血印を寄越すくらいだ。そう簡単には行かないだろうが単純に考えればトップを失脚させることだろう。元々、ドラスリアムは軍事力こそ侮れないものの、人が住むには厳しい環境が国土の半分以上を占めている。国民の暮らしは貧しい。クーデターを起こしたとは言え、その辺は解消することが難しい問題だ。だから、国民を扇動してトップを平和思想を持つ者に挿げ替える。探せば反乱を企てる輩もいるだろう」

「……随分と盛大でアバウトな作戦……」

小さくアークが呟いて悪魔の懐刀の刀身を布で拭く。戦いがいつ起きてもよいように魔術具の手入れをしているのだ。

「そんなに上手くいくとは思われないけれど」

クロエもまた言うが口元は笑っていた。敵国にあってもクロエの態度は変わらないらしい。緊張もしなければ、何かに警戒している

という訳でもない。

「話し合いなんかで済めば、それがいいんだろうけれどな。それに……もしも戦争となれば、グヴォルト帝国は負けちまうぞ?」

「え、負けちゃうの?」

「ああ。ダウンの情報が正しければドラスリアムの軍事力はグヴォルト帝国のおよそ2倍。兵の質も高ければ、魔業兵器もこの方が発達している。国土だって3倍だ。加えてフォースが5人。グヴォルト帝国で、フォースに対抗出来るのは同じ存在であるおれとダウン。それに学長。魔導騎士団長と、他にいるかどうか……。だから戦争回避を第一として、どうかこの事態を治めないとならない」

焚き火がぱちぱちと爆ぜた。ぽつ、と顔に何かが当たってシュザリアは空を見上げた。ぽつり、ぽつりと雨が降ってくる。セブンが焚き火を無造作に片足で踏み、そのままみ消した。

「濡れる前にテント入って眠れ。夜の番はおれがしておく。こんな場所だが、辺境だし連中が何かしてくるということもないだろう」

夜遅く、土砂降りの雨を眺めながらセブンは昔のことを思い出していた。

一番最初の記憶だ。そこはドラスリアムのどこかにある施設で、目覚めたセブンは幼児だった。セブンには乳児の頃というのが存在しない。ゼロから造り出されたので最初から3歳程度の見た目をしていて。知覚することは出来たが煩雑な情報の処理までは出来なかった。よく分からぬ内に外へ連れて行かれるとそこには大勢の人間が殺し合いをしていた。今思い起こせばそれはセブンの性能実験で大勢の人間は全て処分されることを前提にされてそこにいたのだ。

「おい、ダッシュ」

凄惨な殺し合いが行われている、その場に当時のセブンより少し年上の見た目をした少年がいた。深い緑色をした髪の毛。黒い法衣を身に纏い、幼い顔に振り返り血を浴びていた。

「……」

「随分と無口だな、お前は。ほら、お前の力を見せるよ。ここでは、そうすることが大事なんだ」

「力……？」

「ああ、そっか。目が覚めたばかりなものな。じゃあ、お手本を見せてやるから真似しろよ。おれが全部教えてやる。ダッシュ、おれはお前の兄貴だからな」

そう言っただけで少年が両手を広げると直径1メートルの魔法陣が展開された。セブンはそれを見て同じように腕を広げると、同じ紋様の魔法陣が展開された。しかし、目覚めたばかりのセブンは何も驚くことはなかった。

「そう。その次は分かるだろ？」

少年は楽しげだった。セブンは展開した魔法陣を発動させる。一瞬、激しい光が炸裂するように煌いた。すると殺し合いをしていた人間が消え去った。黒い煙だけが立ち上り、それから黒い雨が降ってきた。

「よく出来たな。……これで、おれがいなくても連中は困らない」

「……こまらない？」

「ああ。おれはフォース・ナンバー・セブン。そして、お前はフォース・ナンバー・セブン・ダッシュ。おれが強すぎるからって、ある程度力を抑えてもう一度造り直したんだってさ。お前は誰かのために強くなれ。そしておれは、おれのためだけに強くなる」

黒い土砂降りの中でオリジナル・セブンはそう言った。翌日、施設は全壊してそこにいた全ての人間が皆殺しにされた。幼いフォースを二人、造り直された最高傑作と手に負えぬ最凶兵器だけを残して。そして、オリジナル・セブンは告げた。

「強さを求めた連中に、強さの意味を教えてやった。ダッシュ、お前はおれとは違うから、おれとはきつと激突する。だから強くなっている。お前を生み出した責任はおれにもある」

あの日は酷い土砂降りで、オリジナル・セブンが去った後にセブンはずっとその場に留まった。一番最初の記憶は、一番最初の敵と

の邂逅だった。

「セブン・ダッシュ。ちよいとこれから、遊んでももらえないか」
雨中から物憂げな声がし、直後に激しい風がテントを吹き飛ばした。弾かれたようにセブンが飛び出し、打ち付ける雨の中に佇む黒い影に襲い掛かる。白い髪に褐色の肌、アイマスク。それを視認するとセブンは足をかけられ、服も強引に引っ張られて倒された。

「あんた……シロか」

「久しぶり。教育係のシロ様だぜ？」

シロの背後に目をやってセブンが舌打ちをする。ドラスリアム軍隊第四師団がシロに付き従うようにしてそこに整列していた。テントから慌てた様子でシュザリアとアークが出てくる。

「さて、殺されてくれるなよ。……全隊、かれ！」

シロが指示を出すと第四師団の歩兵部隊から4人に向かって攻撃が始まった。

No.41 ドラスリアムの雨

「お前らは遠くに逃げろ！ おれが前線に立つ！」

セブンが剣を出してからシュザリアとアークに指示を出した。襲いくるドラスリアム兵士に剣を向け、次から次へと切り払ってはなぎ倒す。激しい雨が降る中に金属音が鳴り響く。

「まあ、頑張れよ。グヴォルトの使者はここが最難関かも知れないけどな」

シロがひらひらと手を振りながら戦場を遠ざかっていく。しかし、兵士は次々と押し寄せてくる。アークが悪魔の咆哮デモンズ・ブレスを放つも、第四師団の魔術師がそれを打ち破る。多勢に無勢。逃げようとしたシュザリアとアークは簡単に取り囲まれてしまった。

「何、何なの、これ！？」

「敵地に入った途端にこんな攻撃なんて……！ 小悪魔の宴会！
ゴブリン・パーティー

皆、僕らを守って！」

「了解だ！」

ゴブリンを召喚すると押し寄せる兵士の波が少しだけ緩和された。

「あれ、クロエは？」

「え？」

シュザリアがテントの方に目を向けた。巨大な剣を持ったドラスリアムの兵士が、テントに向かってその獲物を勢いよく振り下ろす瞬間、テントの中から激しい光が発せられて強い衝撃を發した。吹き飛ばされたテントの残骸からクロエが立ち上がる。むっとした、眠りを邪魔されたが故の不機嫌そうな顔。髪の毛をくしゃくしゃとかいて、それから上方配置魔法陣を展開する。かなり巨大で、直径30メートルはあるうか。土属性特有の茶色をした輝きが強くなる。

「わたしの眠りは、高いのよ」

「しゅ、シュザリア！ バリア、バリア張って！」

「う、うん……一雫の涙！」
ティア・ドロップ

アークにせかされてシュザリアが魔術を発動させる。同時にクロエの魔法陣が発動される。

「クラビティ・クラウンド
大地の重圧！」

ドン、という重く、強い音がしたかと思うと重力が急に強くなって全てのものを地中へと陥没させていく。兵士がずぼずぼと土に埋まっていき、ゴブリンも巻き添えを食らい、魔界へと送還された。

セブンは咄嗟に高く跳び、魔法陣の上に出て逃れていた。地響きが収まると兵士はクロエと距離を置いた。強大な魔術への僅かな畏怖と戦慄。

ヘルズ・サンダー
「雷鐘！」

兵士の視線がクロエへ集まっているところでセブンは魔術を発動した。突如として現れた巨大な光の玉。それが轟音と共に閃光を発生して弾けた。

「ぐあああつ」

兵士の動きが完全に止まり、セブンは陥没した地面を走ってシロへ迫る。

「シロオ！」

「がなるんじゃないよ」

背中を向けていたシロが、舌打ち混じりに振り向いた。セブンのパンチがシロの右頬に炸裂する。だが、シロは殴られたその体勢で左手をポケットに突っ込んだまま立っていた。

「セブンのパンチをまともに食らったのに……！？」

アークが目を見張る。

「さて、ここで問題だ。セブン・ダッシュ。おれはボスから第四師団を預けられた。第四師団はドラスリアム軍でも優秀な、無能の集まりだ。何で無能かって？ こいつらは実践経験があまりにも少なく、指示する前に動けない。この中で生きながらえた奴が、別の師団に配属されるっつー仕組み。さて、どうしてこんな無能ばかり集められたと思う？」

息を荒げながらセブンはシロに延髄蹴りを入れた。足で首を引つ

かけ、そのまま地面へ倒すような蹴りだ。そして掲げた右手に魔法陣を展開する。赤い魔法陣。

サラマンダー・フアング

「火蜥蜴の爪！」

炎の爪がシロを引き裂くが、炎はシロに触れると霧散して消えた。
「お前の回答はそれか？ 残念、はずれ。答えはな、血を流しとけばそれでいいからだ。呪いをくれてやる」

シロがポケットから左手を引き抜くと小刀が何本も飛ばされた。
まだ生きている兵士たちの首や頭に突き刺さり、血が地面に染み込む。

「止める……！」

叫び、セブンが魔法陣を展開する。

「止めねーな。おにのみみだ疑心暗鬼」

兵士たちの血が宙へ飛び出して塊となった。それが細い刺状になってセブンの体を突き刺していく。血の刺がセブンに刺さる度、その体に文字や文様が刻まれていく。

「ぐっ、あ……！」

「セブン！」

「おおっと、下手な真似はするんじゃねーぜ。おれは魔術を無効化する能力を持ったフォースだ。そして呪術のスペシャリスト。意思一つで、この血にふり撒かれた未練や無念を、呪いにしてやることも出来る。セブンにやった以上のこともな。……それとな、セブン。空間転移魔法陣は出来ないぜ。お前らがこの国に入った時点で、セカンドとサード、スピードの3人がそれを封印する契血印を、魔封じの契血印を展開、発動させた。アウルスーンまで来るなら、また相手してやる。……それまでせいぜい、つまんねー理由でいなくなるんじゃねーぞ」

シロがアイマスクを外し、異形の双眸でシュザリアを見た。その瞳に身の毛がよだち、シュザリアがアークにしがみつく。だがアークも同様に鳥肌を立てて震えていた。

「よく、おれのこと覚えておけよ。フォース・ナンバー・ファイ

ブ。魔力無効能力、呪術師のシロ様だ。忘れてたら、呪っちゃうぜ？」

不適に笑って見せるなり、シロはその場を去っていった。シュザリアが一雫の涙を解いてセブンの方へ走り寄る。呻きながらセブンの体を起こしていた。

「大丈夫？」

「ああ……。今のところは問題ない。クロエは？」

いつも着ているお気に入りローブがズタズタに裂けていた。アスターシャツまで血に汚れて布切れになっている。鎖骨の上に刻まれている記号は「7」だけだった。だが、呪術によって上半身に複雑な文様と文字が刻み込まれた。通常の魔術に用いられるものは全く異質で、何がどうなっているのかセブンにも分からなかった。「また眠ったみたい」

アークが地面の上で寝息を立てているクロエの様子を見て答えた。それからセブンの方に戻ってくる。

「呪術って……使う人いたの？」

「……いたみたいだ。俺も呪術は専門外だし、こんなの訳が分からない」

自分の体をじろじろと見ながらセブンがぼやく。だが、訳も分からなかったので腰を上げた。痛みも苦しみも、だるさも魔力も通常何も変化はないように感じられた。

「ここにいたら、また何かされるかも知れない。とにかく歩いて別の場所へ行こう。クロエは……アーク、引きずっていい。頼んだ」

「えー？」

「つべこべ言うな。シュザリア、お前も準備しろ。余計なものは置いていけよ」

雨が降っている。指示を出してからセブンも準備に取りかかる。すると、背中を向けたシュザリアに右手の平を向けて魔法陣を展開する。ぞっとしたものが背中に刺さった。慌てて魔法陣を打ち消すと、自分の右手を凝視した。

「セブン、どうかした？」

アークがテントの中から自分の荷物を引っ張り出しながら尋ねる。それを背負うとクロエの両手首を掴んで、言われた通りに引きずるのだが重いのか、すぐに疲れてしきりに首を傾げる。

「どうもしない。早く出発しよう」

ぞつとする考えを打ち消すようにセブンは拳を握りしめた。

呪術師のシロ。魔導対戦における、魔術の無効化。そして、呪術という全く違うジャンルによる力を持つ特異なフォースだ。もしも、シロにかけられた呪術がセブンの想像したものであるならば、考えられる限りでは最低最悪。まさしく呪いと言えない、恐ろしい効果だ。

「シロ……」

かつての友は、何も変わってなどいなかった。教育係。フォースとして目覚めたばかりのセブンに様々のことを教えた。言葉や、体術や、魔術以外の知識。フォースという集団の中で関わりがあったのはシロだけだった。幼かったセブンに本を読み聞かせたのも、食事をまともに取れなかったのを手伝ったのも、二十四時間側にいて世話を焼いたのも全て、シロだった。

『お前の名前はセブン・ダッシュ。最後のフォース。そして、一番可哀相で、幸福な奴だ。さあ、グヴォルトの皇帝陛下に付いて行け。二度とドラスリアム（じゅうりあむ）に戻るなよ。この国にはもう、未来なんか存在しないんだ』

昔の記憶。経緯は未だに不明だったが、グヴォルト帝国の皇帝であるウインザードがやって来て、シロに別れを告げられたのだ。そこがどこだったかも分からない。たった一人の友と別れてセブンは城に行き、そこでシュザリアと出会った。

「あーっ！」

準備を待っていたセブンの耳に驚愕の声が届いた。アークがクロエを放り出し、たじろいでいる。

「どうした？」

「クロエ……クロエの、体に禁忌の紋がある……」

「何だと？」

セブンが駆け寄り、アークが指差すクロエの首筋を見た。長い髪の毛をよけて、そこを見ると人々が忌避する、罪を犯した証拠でもある紋章があった。右目にナイフの刺さった髑髏の紋章だ。魔術によつて禁忌を犯したものに對して浮き出てくる紋章。

「何で、クロエにこの紋が……？」

「予想以上にドラスリアムには留まることになりそうだ」

苦い顔をしながらセブンが言った。雨だけはいつまでも強く降り続いていた。

No.42 大盗賊と白い竜

「ほら、見てみるよ、クウ。これが今日の夕食だ」

小さなパンの欠片を指につまみ、少年が肩を落としながら呟いた。黒髪の少年で肩に小さな胴長短足の竜を乗せている。白い体毛と控えめな二対の翼。体長は30センチほど。まだ子供の竜であどけないつばらな瞳をしながら少年のつまんでいるパンの欠片を見ている。

「クウ……」

小さく、子竜のクウが鳴いた。すべやかな顔で少年に頼ずりをする。よしよし、と少年が優しく撫でてからパンをクウに与えた。一口でパンを飲み込み、クウが翼をばたばたとはためかせ、少年の周りを二度、三度と飛んだ。嬉しい時にクウはこうするのだ。

「さて、腹ごなしも済んだ……。今日の獲物はどうするか」

座り込んでいた路地裏から、表通りに目を向けた。ドラスリアム国境付近の街・レイパッチ。クーデターが起きてもこの街の貧しさは変わりなかった。皆が頭を垂れて歩き、貧困から意欲も余裕もなくなっている。これから夜になると、顕著にそれが現れる。店先には栄養のない野菜が一つか、二つも並ぶだけ。夕食を食べずに眠って紛らわそうと、誰もが早く布団を被ってしまふ。それも全て、この街の自治を任せられている領主のせいだった。

「クウ、クウ……」

通りを歩く人々を見ながら「獲物」を捜していると、不意にクウが鳴いた。

「どうした？」

しきりに鳴くクウに尋ねて、クウが見ている先を見た。少年が見ていたのとは反対側の通り。そこに金色の髪をした少女と、緑色の髪をした少年が歩いていて。すぐに彼らは消える。そちらの方をクウはじっと見つめる。

「分かった。……行ってみよう」

尻に敷いていた布を体に纏い、少年が路地を出て行った。

「ドラスリアムの街って、全部こうなのかな？」

「どうだろうな。……辺境だからかも知れないが、生活の水準は低そうだ」

セブンとシュザリアは並んで歩いていった。あれから四日。やっと街に到着し、宿を確保したまでは良かったのだが、食糧難で街は全員が飢えているらしく、食事が用意出来ないと言われてしまった。そのため、夕食をどうにかしようと別れて街を散策し始めたのだが、どの店にまともな食べ物売っていなかった。

「だけど、あそこにあるお屋敷は凄く立派だね。いい匂いもする」
シュザリアが立ち止まり、街の東側にある丘の上を見た。そこには大きな屋敷がある。鉄の門扉の両脇には槍を持った兵士までおり、門の内側には美しく整えられた庭もあった。小さな赤い実も成っている。

「あそこは領主の屋敷だよ」

割り込む声がしてセブンが足を止めた。振り返ると、そこにぼろ布を纏った少年がいる。頭まですっぽりと布を被り、顔を隠している。肩には白く小さな竜。

（こいつ、今……）

「領主様、って街の偉い人だね？」

僅かに後ずさったセブンのことに一切気付かず、シュザリアが少年に問う。少年が頷きながら顔を出した。

「そう。もっとも、前の総統閣下が勝手に決めたことで、街の人間は誰一人として納得していない。重税と、身勝手な条例を、権利という名目で振りかざしているんだ」

「そうなんだ……。逆らったりはしないの？」

「出来ない。あの領主にはとんでもなく強い魔導守護者がついているんだ。それがとんでもなく強い。とにかく、強い。クーデターを引き起こした……フォース、だったっけ？ あいつらと同じくらい

強いんじゃないかって言われてるし、実際にこの前、スカウトにも来ていたんだ。軍の將軍にならないかって。……残念ながら、断つたみたいだけど。あいつさえいなければあんなクソ領主は今すぐにも吊るし首か断頭台なのにな」

ため息をついた少年の肩に乗る、白い竜にシュザリアが気付く。見つめると竜も赤いつぶらな瞳で見つめ返した。

「わたし、シュザリア。あなたは？ それと、そのコは？」

「おれはシャオ。こっちはクウだ。……無愛想な彼は？」

「セブン・ダッシュだ。済まないが、急ぐ用事がある。行くぞ、シュザリア」

早口にセブンは言って歩き出した。シュザリアが渋々付いてくる。まだ話していたかったらしい。

「ねえ、急がなくてもいいんじゃない？ 晩ご飯ならまだ時間あるでしょ？」

「お前は本当に間抜けだな。……あいつ、シャオだったか？ ただ者じゃないぞ。おれが全く気付かなかった。気配を完全に消していた。それもごく自然に、意識すらしていないレベルで」

「何で分かるの？」

「あまりにも自然過ぎたんだ、あいつの振る舞いが。目的は何か分からないが、これ以上の厄介ことはゴメンだ。一旦、宿に帰ろう。メシはアークと外に出て何か食べそうな肉でも取ってくる」

宿の部屋へ戻つてくると、すでにアークとクロエは帰っていた。アークは自分の魔術具を磨き、クロエは新聞を机に広げて読んでいる。

「おかえり。何か収穫あった？」

「こっちは何もなかったわ。貧乏な国とは聞いていたけど、予想以上ね」

口々にアークとクロエが言う。

「何もないな。だから街から出て、肉でも取ってくることにした。

アーク、一緒に来い」

「えー？ ばく、か弱いから止めといた方がいいと思うよ……？」
「うるさい、来い」

聞く耳を持つてもらえずにアークは返事をした。行つてきまゝ、と疲れたような口調で言つてセブンと共に部屋を出て行く。

「ねえ、クロエ」

ベッドに腰掛けてシュザリアが窓の外を見る。西の空から夜がやつて来ていた。

「どうかした？」

「竜つて、可愛いよね」

「……普通はお目にかかれなけれど。どこかで見たことがあるの？」

「うん。さつきね、シャオつて人に会つて、その人の肩にクウちゃんつていう白くて小さい竜がいたの」

新聞から顔を上げ、クロエがシュザリアを見る。それから、また新聞に目を落とした。記事に、とある名前が載っている。

『連続強盗の容疑がかけられているのはシャオ・K・エルウィン（17）。首都アウルスーンより西へ逃亡しており、その途中で民家4件にて強盗。飲食店2件にて無銭飲食。大魔業都市ビッグシーンの魔業研究機関より魔業銃を強奪した疑い。シャオ・K・エルウィンはクーデター後に成立した犯罪者取締法が適応される最初の人物であり、捕縛した者には政府より恩赦が与えられる。』

同じ名前というだけならば良いものの、シャオという名前はあまり聞かなかった。シュザリアはクウと戯れられなかったのが残念だという旨をくどくど言っている。

「あ、そういえばね、セブンが勝手に切り上げちゃったんだけど……何だか、気配を消すのが凄いんだって。だから警戒しちゃったんだって」

「そう……。彼、何か言つてた？ どこに行くとか、何かが気に食わないとか」

「え？ うーん……ここの街の領主さんが酷いって教えてくれた……くらいかな」

「……ちよつと気になるわね。シュザリア、出掛けてみる？」

クロエが新聞を畳み、椅子から立ち上がる。髪の毛をさつと払い、シュザリアに微笑みかけた。

領主邸の鉄門扉にシャオがやって来た。門番が2人、シャオに気付いて槍を握り締める。

「止まれ」

門前で言われてシャオが足を止めた。頭に被っている布を取ると、門番の顔を順番に見る。

「何の用だ」

高圧的な門番の問いにシャオがにこりと笑みを浮かべた。

「ちよつとした用事なんだよ。本当、大したことはなくてさ。……」

ま、ほら、この街は今、酷い食料不足に陥っている。なのに領主さんはどうにも、この現状をご存じないように思えて」

「ファルガ様は貴様のような愚民のことなどをお気にかける余裕などない。分かったら去れ。貴様が働けば良いだけのことだ」

「なるほど……。分かった。そしたら、本題に入るよ。大盗賊のシャオ様に道を開けてくれ」

声の調子が低くなった。直後、シャオが体に巻き付けた布の下から剣を2本抜く。剣閃が門番を音もなく切りつける。赤い血が鉄門扉に噴きつけられた。倒れた門番を踏み越え、シャオが門を押し開ける。

「今夜の獲物は上物がいいよな、クウ」

ぼろ布を捨て去り、黒い軽装の鎧姿でシャオが言う。肩に乗っているクウが小さく鳴いてシャオの頬についた返り血を舐めた。

No. 43 大盗賊と魔導守護者？

「ファルガ様！ 屋敷にシャオ・K・エルウィンが押し入ってきました！」

使用人がその部屋へ慌てて入ってくると、屋敷の主ファルガは食事をしていた手を止めた。面長の顔に細い目と、ちろちろ生えた髭。体は細く、骨と皮だけのようにも見えるのだが、腹だけはぽっこりと盛り上がっていた。中年ほどの男で、きらびやかで紫を基調とした服を着ているが、顔には卑しささえ見えてくる。

「何だ、その男は？」

緩慢で横柄な言葉をファルガが返すと、傍らにいた青銅の鎧を身に着けている大男が口を開いた。

「最近、首都より逃げてきた強盗犯です。犯罪者取締法により、捕えると政府より恩赦を賜われます」

「強盗……。ふん、馬鹿らしい。一体何を盗もうと言うのだ。凡人などが私の何を持っていったとしても釣り合うはずがな……。おい、デュラン。そいつを生け捕りにして来い。フォースなどという訳の分からん奴らだろうが、恩赦を出すと言うのなら貰っておいても良いだろう」

デュランと呼ばれた大男が頭を下げ、部屋を出ていく。部屋を出るとその手に2メートルはある片刃の剣が現れて握った。古来より魔術師の役目とされてきた、位の高い者の守護。現代でも魔術師として最高位の一つに数えられる魔導守護者こそが、デュラン・アルバートだ。

「やあ、姿を見せてくれたね……」

屋敷の地下にある宝物庫でシャオは待っていた。箱に詰め込まれた金銀の装飾品などといった財宝を確認するとデュランの方を向く。「双刀の盗賊、か……。何故このような真似をする？」

「そっくりそのまま言い返すよ。武人って言うのは力だけじゃない、精神的な面でも強く、正しいんだ。それなのにクソ領主の言いなりってのが気になるね」

黄金の冠を見つけるとシャオが笑みを浮かべた。冠には赤い宝石も装飾されていて、これだけで数十万ルルの価値がありそうだ。黄金の冠を頭に乘せると、胡座をかいてその場に座る。そしてデュランを見つめた。

「これが運命なのだ」

「運命ね……。なら、これ以上は言わないでおく」

シャオが財宝を袋へ詰め込み始めた。デュランは黙って見つめているが、握った大剣を放そうとはしない。箱を一つ分袋に詰め込むと、肩に乗せていたクウを撫でた。

「食べていいぞ」

「クウ……」

頬ずりをしたクウを愛おしげに撫で、袋を顔に近づける。と、クウが口を開けた。小さな口だったが、一瞬で財宝の入った袋が吸い込まれて消える。いい子だ、と優しく言ってからシャオは立ち上がった。

「さて、これで残る目的は二つ。クソ領主を殺すことと、あんたをぶちのめすことだ」

双刀を握り、その剣先をデュランへ向けた。

「大盗賊の末裔か」

「うるせえ、カス野郎」

次の瞬間に金属音が宝物庫に響き渡った。シャオの双刀とデュランの大剣が交わった。後ろへ飛び、身を低くしながらシャオが双刀を振るう。デュランが大剣を床へ突き刺すとそこから直径2メートル程の魔法陣が展開され、そこにシャオが突っ込む。

「虎峰」

逆手に持ち替えた相当で突きを放ち、内側から引き裂くようにして双刀を振るう技だ。だが魔法陣に入っただと同時に激しい圧力が

シャオを襲った。体勢を崩しながら技を放つが軽々しくデュランの大剣が防ぎ、弾き飛ばされる。

「あの重圧で動けるとは、見事。だが足りぬ。 ヘル・スマッシュ 劫火の鎚」

シャオの頭上に魔法陣が展開され、そこから質量を持った黒い炎が真下へ放射される。

「灼砲蓮華」

だがシャオが双刀の突きを連続で繰り出す。突きの速度は常人のそれを遙かに超え、一つの巨大な峰のように形成される。超速度の突きの塊がデュランの魔術を打ち消した。さらに天井までも破り、瓦礫が降り注いでくる。

「強い。魔術を用いず、剣術だけでこの領域に達するとは……」

「違うね、それ。高位の魔術師は魔術だけではなく、武器を扱えるように訓練するんだろ。だから剣術だけで戦っているおれのことを強いつて言う。魔術がなくて、互角に戦えるなんて、つて。思い違いも甚だしい。魔術ならば魔術だけ。剣術ならば剣術だけ。ただ一つでも極めれば、それは最強に限りなく近づくことが出来るんだ。魔術だけでは限界を感じるから武器を持つ。でも、剣術に限界はない。最強さ。魔術を使う限り、おれには絶対勝てやしない」

右手に持った刀をデュランに向けてシャオが宣言する。黒髪の間から覗く鋭い眼光。デュランが両手で握った大剣の柄に力を込める。「良かるう。少しだけ、本気を出す。勝てるとは思うな」

先に飛び出たのはシャオだった。迎える形でデュランが剣を横薙ぎにすると、シャオは一足跳んで中空で身を捻りながら回避し、身を捻ったバネで着地してから双刀を振り回す。突風を巻き起こした剣戟をデュランが大剣で受け止めると、そのまま受け流した。シャオの手首を片手で掴み、壁へ投げつけた。

「まだイケんぞ……！」

壁へ激突しながらもシャオが起き上がると、シャオを取り囲むように立体魔法陣が展開された。六面の魔法陣は全てが赤く輝く。クウを乱暴に掴むと魔法陣の中から投げ出した。

「深紅の箱」

放り出されたクウが飛びながらシャオを向くと、直後に凄まじい炎が立体魔法陣の中で燃え盛る。そこへデュランが大剣を大上段から振り下ろす。金属音がしてデュランの体が押し返された。炎の中からシャオが飛び出し、躍りかかる。

「まだまだア……！ 弧狼牙！」

双刀を同時に上方向から切りつける。大剣で左の刀を絡めとり、弾き飛ばした。そのままシャオの首筋に足首を引っかけ、そのまま床に強く叩き付ける。受け身を取りながら体勢を直したシャオの鼻先に大剣の切っ先が突きつけられた。

「勝負はついた」

「まだ、終わりじゃないさ」

左手を背に回し、シャオが抜いた。魔業銃がそこに握られており、発砲されるとデュランの顔面に直撃した。しかし、デュランは平然としながらシャオを見つめる。

「これで終わりか」

「……やっぱ強いな」

苦笑いしながらシャオが言い、魔業銃を下ろした。黙ったままデュランは見下ろしている。力の差は大きく開いていた。

「投降しろ。お前を政府に突き出す」

「……それは困る」

「一生を檻の中で過ごすのは嫌か？」

「そんなチンケな考えじゃないさ。おれには大事な家族がいるんだ。家族を残して、ばらばらになることなんて絶対に出来ない。なあ、クウ」

それまでずっと飛びながら様子を窺っていたクウが、呼ばれてシャオの肩に乗った。頬を舐めるクウの頭を指で撫でながらシャオはデュランと会話を続ける。

「白い竜を連れた盗賊か……。奇しくも、伝説の大盗賊と同じだ」

「奇しくも、じゃないさ。おれは、その大盗賊を継ぐ者なんだ。？」

世界最強の剣士・紅牙幽玄の子孫だからな」

「だから、ファルガ様の屋敷に乗り込んできたのか？」

「それもある。だけど、もっと大事なことがある。……あんと戦って、自分の実力を確かめる。フォースと同等とか言われているらしいけど、フォースはもつと強いはずだ。フォースの三番以内は7人いるフォースでも特に強いとされているからな。そんなのを殺そうとしているのに、フォースにも劣るだろうあんに負けていたら話にならないと思うだろ？」

「フォースを倒すと言うのか？」

僅かに驚愕の顔を見せてデュランが言う。もちろん、とシャオが笑みを見せた。

「あんたは色々と察しが良いから気付いているんじゃない？ どうして、おれみたいなこそ泥同然の人間が犯罪者取締法に適用されるのか。どうして、首都から逃げてこなきゃならなかったのか。フォースの連中がおれのことだけは危険視してるからだ」

「元革命軍のエースは白い竜を連れた少年だと聞いたことがある」

「その通り。おっさん、魔導守護者だよ。……あんな領主じゃなくて、おれのことを守護してくれない？ 国を救うことにも繋がる。あんたは頭だつていいから、この国が変なことくらい気付いているんでしょ？」

デュランが構えていた剣を静かに下ろした。シャオの顔が僅かに緩む。だが、緊張の糸が弛緩した時にデュランの大剣がシャオの腹部を貫いた。防具などは意に介さず貫かれ、国から大量の血が吐き出される。

「魔導守護者は、契約によって仕える。ファルガ様との契約により、貴様を政府へ突き出そう」

冷たくデュランが言い放ち、大剣を消した。シャオの顔面を右手で掴むと、引きずりながら宝物庫を出て行く。と、光の矢が数本飛んでデュランの右腕を貫いた。シャオが放されると壁際からシユザリアとクロエがいきなり姿を現す。

「何だ、お前らは」

「内緒！」

「それに、言ったってあなたは態度を変えないでしょう？」

「無論だ。侵入者は、排除する……！」

デュランが大剣を再び手の平に召喚して握ると、シュザリアへ切り掛かった。しかし、その間にクロエが召喚したカブトが割って入り攻撃を受け止める。

「シュザリア、彼を運んで。食い止めるから」

「うん！ クウちゃん、おいで！」

倒れたシャオの方へ駆け寄り、シュザリアが肩を組んで宝物庫から出て行く。デュランが振り返ると大きな鎌を担いだ、漆黒の甲冑がいた。クロエの召喚した魔界の執行者・ガゼルだ。エクスエキョーター目だけが赤く光り、デュランに襲いかかる。大剣と鎌がぶつかり火花が散った。

「カブト、ガゼル、食い止めるだけでいいわ。足止めして頂戴」

「御意！」

ガゼルが連続で鎌を振るう。デュランが押し切ると、カブトが体当たりした。足止めをしている間にシュザリアとクロエが、シャオを連れて宝物庫から出て行く。逃げられてしまうとデュランは大剣を下ろした。カブトとガゼルが少量の煙を上げてその場から消え去った。

No.44 大盗賊と魔導守護者？

「セブン、セブン！ 助けて、早く！」

宿にセブンとアークが帰ってくるなり、シュザリアが駆け寄った。何事かとセブンが眉をひそめると、アークが悲鳴を上げる。床一面に広がる血の池。そして、ベッドの上。シャオが寝かされていたのだが、貫かれた腹部から血が流れて止まらないのだ。

「だ、誰？」

「こいつは、さっきの……。どういふことは、後できっちり説明しろ」

たじろぐアークを押しつけてセブンがベッドに寄る。クロエが六ツクスアイツ目単眼をかけていた。

「傷口はこれだけか？ あと、こうなってからどれくらい経過した？」

「色々と傷はあるけれど、致命傷になりそうなのは腹部だけよ。ここへ運んでからは3分、運ぶまでに10分経過しているわ。強い意志があるみたいだから、あえて眠らせてない。もっとも、意識があるかは分からないわ」

「分かった。こいつの固有属性は？」

尋ねながらセブンがシャオの手を握り、僅かに魔力を流し込む。

反発が弱く、体内の魔力があまり残っていない。

「火みたいね。アークと一緒に」

「だけど、アークはキャパシティがない。他に、この場で火属性の人間はいないとなると……」

難しい顔をしながらセブンが閉口するとクウがセブンの頭に乗った。頭を振って追い払うと、今度は顔の前に飛びながら出て来る。

「竜がどうして人間といえるんだ……」

「セブン、その竜の属性は火みたい」

「……頭のいい奴みたいだな」

セブンが手を差し出すとクウがそこに乗った。魔力を少しだけ流し込むと、強い反発が起きて逆に体内へ魔力が入ってくる。目を大きくしながら、クウをシャオの横に座らせた。

「小さくても竜の魔力はダテじゃないみたいだな。アーク、少しだけ手伝え」

呼び寄せると血だらけのシャオにびびりながらアークが近寄った。アークの手を取って傷口に触れさせる。生暖かい肉と血の感触に鳥肌が立った。

「な、何するの……？」

「お前を介して、この竜から、こいつの体内に魔力を流し込む。片方の手を竜に添える。コントロールは得意か？」

「一応……。でも、こんなことやったことないし……。どうして間に合う必要があるの？」

「流し込む魔力は十分にある。だけど、その流れが強いんだ。だから、お前の体内に魔力を通し、そこで流れを弱くした上で患部へ流し込む。そうしないとショック症状を引き起こしかねないんだ。ちょっと辛いかも知れないけれど頑張ってくれ。同じ属性のお前じゃないといけないんだ」

戸惑っているアークの手をクウが噛んだ。しかし、歯を立てない甘噛みだ。赤い瞳がアークを見つめる。

「分かった……。やってみる」

答えるとクウから魔力が流れ込んできた。感じたことのない、熱い波のようなものがクウに触れている左手から流し込まれてくる。

体中の血が滾るような感覚がする。頭の中が白くなっていくのを感じた時にセブンの手が両肩を叩いた。

「アーク、お前の体内に溜めるな。危ないぞ」

言われて気を取り戻すと、右手で触れている患部に魔力を流し込む。すると体が元のようになってくる。そっと目だけでクウを見た。小さくて可愛い体。それなのに数秒で自分がパンクしそうな程の魔力を流し込んできた。

「顔色が戻ってく……」

小さくシュザリアが呟いた。シャオの手を両手で握り、祈るように目を閉じる。

「……アーク、右手から僅かにでも反発を感じるようになったら止めていいぞ。クロエ、傷口を塞いでくれ。シュザリアは……好きにしている。とりあえず、食事の用意をしてくる」

入り口に放置していた、モンスターの肉を手にしてセブンは部屋を出て行った。

深夜になり、皆が寝静まった頃にシャオは目を開けた。包帯の巻かれた腹部。全身への僅かな痺れと、吐き気。口の中が血の臭いでいっぱいだった。手を動かすとクウに当たった。顔を持ち上げることも出来ず、手探りで確かめると優しく撫でる。体内に充満する、熱い感覚。優しく感じられた。

「お前に魔力を与えたのは、その竜だ」

声がしてシャオは目を左側へ動かした。椅子に座り、グラスを傾けている人影。暗くてよく分らないが声に覚えはあった。

「夕方の……彼女の連れだったかな」

「……ああ。大体のことはシュザリアに聞いた。紅牙幽玄の子孫なんだって？」

「血は随分と、薄くなったけど……」

「幽玄谷で戦った。幽霊になって、ずっとそこに留まっていたらしい。一応は満足して成仏してくれたようだ」

「嘘だとしても、やっぱりご先祖様は凄い人物だ……。助けてくれたのはクウと……あんたか？」

「床で寝てるアークもだ。シュザリアとクロエがここまで連れてきた。おれは直接的には何もしてない」

「……そうか。礼を言っておいてくれ」

部屋は静まり帰っている。女子供の寝息だけしか音がない。セブンもシャオも黙った。

「盗み聞きを、シュザリアとクロエがしていた。それを聞いた」

「いいさ。お陰で助けてもらったんだ。命の礼は大きい。盗み聞き程度、何て言うことはない」

「その上で、一つ提案がある。フォースを倒そうとしているんだろう？ 協力させて欲しい。訳あって、おれ達もフォースにこの国から立ち退いて貰わなきゃならないんだ」

グラスを置くとセブンがシャオを見た。飲んでいたのはドラスリ
アムの果実酒だった。店先に一本だけ埃を被って置いてあった品だ。
「あんたもフォースなんだろう？ 仲間じゃないのか？」

「……仲間じゃない。敵だ」

「そうか。まだ……眠たいからまた今度、その話をしよう……」

それきり会話は途絶えた。再びセブンはグラスを手にして果実酒を飲んだ。少しだけ東の空が白んできていた。

「強盗をまんまと取り逃がすなんて、失望だ。きみには失望したよ、デュラン」

「申し訳ありません」

ファルガの説教は続いていた。新鮮でみずみずしい果実が溢れるほど皿に乗せられていて、ファルガはそれを食べながらデュランの失態を飽きずに何時間も責め続ける。

「この屋敷にきみが来てから、何年になる？ その間、誰がお前を食わせてやったんだ？」

「27年間になります。……全て、ファルガ様のお陰です」

「そうだ。なのに、お前はそれを仇で返す。しかも、契約によってお前は半永久的にわたしの下僕であり続けなければならない。忌々しい。下僕の方で主を困らせるんじゃない」

「申し訳ございません」

デュランは何を言われても頭を下げるだけだった。何を言われようと、どんなことをされようと、契約を結んだ相手。いかなる理由があっても契約が破棄されるまでは彼に傷一つとしてつけること

は許されない。それが魔導守護者の誇りであるのだ。

「まあ、いいだろう。それで、取り逃がした強盗は……いつ、捕まえるつもりなんだ？」

「明日までには必ず」

「そうか。……じゃあ、さっさと取っ捕まえてこい」

ファルガが赤い果実を齧った。レイパッチではかつて、特産品として街の誰にも愛されていた果物だ。甘みと酸味の絶妙なバランスが良く、かつてこの果物だけで街は安定した収入を得られた。

「ファルガ様、強盗が出るのは社会の乱れている証拠です。この街で何か対策を施してはいかがでしょう」

「血迷ったことを言うんじゃない。社会の乱れている証拠？　どこが、乱れているのだ。わたしは何不自由なく暮らしているというのに」

「……失礼しました」

深々と頭を下げてデュランは部屋を出て行った。扉を閉めると右腕に触れる。シュザリアの魔術によって光の矢を撃たれた箇所が酷く痛んだ。

「光の魔術……。グヴォルト帝国の王族だったか」

空が白んできていた。屋敷から外へ出ると、東の空から太陽が昇り始めていた。

「???よう、おっさん」

開け放たれた鉄門扉にシャオが立っていた。包帯だらけの体を体に纏った布で隠している。肩に乗るクウは眠たいのか、うとうとしている。

「懲りずにまた来たのか。逃げる算段は出来ているのか？」

「今回は、逃げない。昨日だって、逃げるつもりはなかった」

双刀を抜き、シャオがデュランを見据えた。

「そうか」

ゆっくりとデュランが左手を頭上へ持ち上げると、そこへ大剣が現れる。その太い柄を握り締めると、シャオへまっすぐ剣先を向け

た。

「一つだけ、質問だ。魔導守護者と、魔導騎士っていうのは……どっちが強いんだ？」

「ともに魔術師の就く職としては最高位。どちらが上という優劣の関係はなく、双方とも最強だ」

「そっか。……分かった。そうしたら、今度こそ、おれの策略通りになってもらうぜ」

言うなりシャオが身を屈めて飛び出した。双刀を交差させ、そこから振り切る。しかし、上段からの大剣の一撃が双刀を弾き飛ばした。

「死にかけの身で、安易に戦いを挑んだことを後悔しろ」

No.45 大盗賊と魔導守護者？

「契約つてのが、魔導守護者には一番大事なのか！？」

弾き飛ばされた双刀に代わり、シャオは懷から魔業銃を引き抜いた。グリップも銃身も全てが漆黒に塗装されていて、通常の拳銃よりも二回り以上大きかった。後ろへ跳びながらトリガーを引くと魔力の弾丸が撃ち出される。大剣の幅広い刀身で弾丸を受け止めたデユランだったが、受けた瞬間に強い衝撃が発散されて体勢を大きく崩された。

「くっ……！」

「もう一丁！」

体勢を立て直したデユランに二発目を撃ち込む。至近距離まで引きつけてから、デユランが大剣で弾丸を叩き斬る。しかし、今度は触れた瞬間に大爆発を起こした。

「ほらほら、こっちは死にかけの盗賊だぜ。魔導守護者様が、手こずっていいのか！？」

巻き上がった土煙に向かってシャオが怒鳴りつけると、その中から三日月のような斬撃が繰り出される。

「それでインだよ。??クウ、焰鬼だ！」

離れていたクウが大きく口を開けると、そこから何かが吐き出された。シャオが左手でそれを掴む。真っ赤なトンファーだった。黒い炎の模様があしらわれている。迫ってきた斬撃を左手に装備した焰鬼で受け止めると、そのまま押し切るようにして逸らした。

「それが盗賊の本領か？」

デユランが大剣を肩に寄せ、シャオを見つめていた。まっすぐ相対しながらシャオがにやりと笑みを浮かべる。

「力の一端を担うのは武器だ。強い武器を力ずくで奪ってたら、いつの間にか盗賊になってただけのことだよ」

焰鬼をくるくると回しながら背筋を伸ばし、シャオが喋る。そう

か、と静かにデュランは返した。

「そして今度は力のために、わたしを奪おうと？」

「そう。契約が大事だなんて言われても、おれは諦められない。あんたは強い。正直、まだ勝てるかどうかは怪しいけど……それでも欲しい。潔く、契約なんか破棄しちまえ！」

飛び出しながらシャオが魔業銃を連射する。一発として当たらない。舌打ちしながらも懷へ潜り込んだ。するとデュランが足下に魔法陣を展開した。赤い輝きが強くなり、デュランが魔法陣から出るとすぐに発動される。

ヘル・スマツシユ
「劫火の鎚！」

「火は効かないんだな、これが！」

黒い炎が足下からシャオを襲ったが、振り回した焰鬼に全て吸い寄せられた。黒い炎が纏われた焰鬼をシャオは思い切りデュランへぶつける。炎は鬼を形作り、デュランを飲み込んで火柱となる。その火柱へ銃身を向け、シャオが両足を開いて体勢を低くした。

「この魔業銃はここへ来る途中で奪ってきたんだけど、最大出力がなかなか凄いいんだ。初めて撃つから、気をつけるよ」

漆黒の魔業銃・ブラックシューター。魔弾の種類は実に数十種。核とは別に大気中の魔力を吸収することで従来の数十倍にもなる威力を引き出すことが出来る。

「エネルギー充填率マックス・フルスロットル。??食らえ、スーパーノヴァ！」

反動でシャオの足が石畳にめり込んだ。狙いが逸れて地面へ射出される。だが、その威力と範囲は想像を絶していた。一面が全て眩い光によって遮られ、轟音が街中に響き渡ったのだ。

気付くとシャオはその場に倒れ込んでいた。両腕が痺れ、軸足にしていた左足の膝関節が動かすと痛んだ。屋敷の屋根が一部分吹き飛んでいた。大きく抉れた地面には土煙が舞い上がっている。その向こうに人影が見えた。

「おいおい……あれを食らって、立っていられるもんか……？」

土煙が晴れると、そこに居たのはセブンだった。その後ろには膝をついているデュラン。

「何をしているかと思えば、朝っぱらから迷惑だ」

どこか呆れたような口調でセブンが言くと、拍子抜けた顔をしながらシャオは舌打ちをした。

「ちつ……済まないけど退いてくれないか？ おれは魔導守護者のおっさんを倒さなきゃなんないんだ。それとも、何か？ あんたもおれと敵対するか？ フォース相手なら、丁度いい力試しになる」

「調子に乗るな」

デュランがゆっくりと立ち上がった。セブンの前に出て来ると、少し崩れた屋敷を見てからシャオを見つめる。

「そう来なくっちゃ。もう少しだけ……おれの体も動ける」

にやりと笑みをこぼしてシャオも立ち上がる。全身のあちこちが痛んだ。昨日の傷も開いたようにで体に纏った布の下が血でぐしゃぐしゃになっているのを感じた。左足がぎこちない。右腕にも違和感があった。

「何を狙っているかは知らぬが、魔導守護者は護ることに本分がある。力などは副産物に過ぎない。主を護り、契約を護り、それが自己を護ることに繋がるのだ」

「だから……さつさと主を鞍替えしろつての……！」

ブラックシューターを連射しながらシャオが走り出す。それを全て大剣で防ぎながらデュランが狙いを定めて魔術を放つ。大きな上方配置魔法陣から夥しい数の雷が閃いてシャオを狙い撃つ。大きく迂回するようにしてシャオはそこへ辿り着いた。激戦で歪んだ鉄門扉の近くに刺さっていたのは最初に弾き飛ばされた双刀だ。焰鬼を放り出してブラックシューターを懷へしまう。双刀を地面から抜くと、まっすぐデュランへ向かって走る。

「これが真正正銘、最後だ！」

「……お前の意思を砕く」

両手で大剣を握り、大上段へデュランは振りかぶった。両者が激

突する。

風が生まれ、街を、空を、大地を駆け抜けた。その風を追って凄まじい衝撃が駆け巡る。窓硝子を割り、大気を強く震えさせ、土は表面をなぜられて土埃を伴った辻風を生む。

「な、ななな、何事だ!？」

屋敷から数人の付き人を伴ってファルガが出てきた。しかし、巻き上がっている土埃に咳き込む。

「げほっ……くそ、くそ! ここは、わたしの屋敷だぞ!？ おい、デュラン! 何をやっているんだ!？ これを何とかしろ!」

喚き散らすファルガの首を、土埃から飛び出した太い腕が掴んだ。砕けた青銅の鎧の残骸。額から垂れた血は顎まで伝っている。乱れた銀色の髪が目にかかる。

「デュラン……何をしている? わたしは、お前の、主だぞ!？」

自らの首を掴んだデュランに向かってファルガが唾を吐きながら訴える。しかし、デュランは微動だにせず、ファルガを鋭い目線で見つめていた。

「貴様は確かにわたしの主だった。だが、契約が破棄された」

「破、棄……? どういうことだ、許可していないぞ」

狼狽しながらファルガがデュランの手首を掴むが、どれだけ力を込めても全く動かなかった。恐怖が胃へ流れ込む。脂汗が浮かんでくる。

「契約を交わしたのは27年前のこと。契約に必要なものは主から受け取る装備品と、互いの血で署名をした書状。それを貴様はどこへ保管していた? 肌身離さず持っている、とわたしは最初にきちんと伝えたはずだ」

「だ、だから……誰にも取られぬように宝物庫へ??」

ファルガの目の前に黒い炭となった紙片が空から降ってきた。

「偶然、その契約書とやらを宝と一緒に盗んじやったんだよね。契約につるさい魔導守護者の契約書を、ぽーんと置いておくから悪いんだよ」

シャオが瓦礫に腰掛けていた。

「わたしへの恩義は感じないのか！？ 誰よりも偉い、領主なんだぞ！」

顔を青くしながらファルガが言うとデュランは首を掴んだ右腕を上へと持ち上げた。ファルガの足が地を離れる。

「わたしがこの街へ来た頃、人々は皆が明るい顔をしていた。心身に傷を負い、弱っていたわたしを翳りのない笑顔で迎え入れてくれたのだ。そして、彼らの生活を護りたいと強く思った。貴様のことをよく知らなかったのが、唯一にして最大の失敗だった」

「かつ……あ、ゆ……許しつ……！」

「この街から領主は消えろ」

高く空へファルガを投げ飛ばし、デュランが大剣を振りかぶった。白刃が地面を割った。無傷のままファルガが落ちる。泡を吹いて気を失っていた。

「さて、失業した魔導守護者さん」

肩に乗せたクウを撫でながらシャオが口を開いた。大剣を消したデュランが少年を振り返る。

「おれと契約してくれない？ 金もなければ、明日生きていられる保証もないんだけど。契約の品としてこれをあげるよ」

言いながらシャオが投げて寄越したのはブレスレットだった。何の変哲もない。黙ってデュランはそれを左手首にはめた。

「言っておくが、対等な関係の契約とさせてもらっ」

「いいね。……その方が気楽だよ。じゃあ、一段落ついたことด้วย？」

喋っている途中でシャオはふらりと倒れた。デュランが歩み寄ると、緩い表情をしたまま眠っていた。

「世話のかかりそうな主だ」

「おれの宿泊している宿へ来てくれ。朝から、そいつがいなくて騒いでるツレがいて困ってるんだ」

シャオを肩に担いだデュランにセブンが声をかけた。日はすでに

高く昇っていた。

No.46 動き出した齒車

「???何だか派手になったなあ……この街も」

ステッキをこつこつと鳴らしながら少年は歩いていった。向かつているのは半壊したファルガの屋敷だ。デュランがいなくなっても領主という地位を固持しようとしていたが、民衆の暴動によつて屋敷を打ち壊されて金目のものを根こそぎ奪われていった。それから2週間が経過し、みすばらしい姿を風雨にさらすだけとなった。

「邪魔するよ。ファルガつて人はいるかな？」

崩れている壁から少年は中に入った。だが、人の気配がない。まだ壊されていない東側へと向かい、その内の大きな部屋に足を踏み入れた。暖炉に火が焚かれ、その近くで薄汚い毛布にくるまるファルガの姿があつた。小声でずつとぶつぶつ呟いている。

「……ねえつてば。あんたがこの街の領主？」

領主、という言葉に反応してファルガが顔を上げた。そこにいる、声変わりも終えていない少年を見ると、その目が急に怒りで染め上げられる。

「こ、ここ……こんなガキまでもが！ このわたしをコケにするか！？ わだ、わたしは……！ 領主だぞ！」

「すっかり錯乱しちゃって、まあ……。だけどね、おじさん。ぼくは別におじさんをどうしようとは思ってないから大丈夫だよ」

少年は床に転がつていたイスを拾い、ファルガの側へ来て座つた。

「誰だ、お前は何だ!？」

「フォース・ナンバー・フォー」

スピードが言うとファルガが体を激しくビクつかせた。カタカタと歯の根を揺らし、スピードを見つめる。瞳も小刻みに揺れた。

「な……」

「ボスからのお使いで来たんだ。ここにさ、緑色の髪の毛で、すかした顔の魔術師は来なかった？」

「し、知らん……！　だ、だが、盗賊は来た！　わたしの下僕を、魔導守護者を……う、奪っていったのだ！　宝もだ！」

縋るようにしてファルガが言う。そうなんだ、とスピードは意にも介さず、何やら考えてから立ち上がった。

「シャオ・K・エルウィンと……デュラン・アルバート……。ちょっと面白そうな組み合わせ。遊びなくなっちゃうけど、今はセブンが先だし我慢しなきゃ」

「わ、わたしは悪くないんだ！　だから、この土地を取り上げるな！」

「ああ、うん。安心していいよ」

ステッキでファルガの胸元を軽く押して、優しく突き返しながらスピードが言う。

「おじさんのことなんて、どうとも思っていないから」
「え？」

直後、ファルガの胸に直径20センチはあろう風穴が空いた。血だけがファルガの体から漏れ出る。抉られた肉はどこにもなかった。「名門ファルガ家も終わりか。呆気ないもんだね、人間なんて。簡単に死んじゃうんだから」

酷く冷めた瞳を据え、スピードが去っていった。残されたのは半壊した屋敷。主を失い、とうとう形だけに成り下がった、過去の残骸だけだった。

「革命軍は結果的に前体制のドラスリアム国家を倒そうとした武装集団だ。半年前に前総統を追いつめるところまでおれ達は進軍した。だが、そこへフォースが乱入してきて、ドラスリアム軍と革命軍、双方に壊滅的ダメージを与えて国を乗っ取った。前総統のライゲンと、革命軍の総帥だったデイエゴを圧倒的な力を見せつけながら殺害した。それからドラスリアム軍は新たな国の支配者となったフォースに吸収され、革命軍は弾圧された」

深い谷底にセブン達の一行はいた。レイパッチを発って1週間。

シャオに連れられて革命軍が拠点としている場所の一つに来了。自然の洞窟を利用した基地で小さな空間が多く空けられている。そうしたところを部屋にして、革命軍の生き残りや、その家族が暮らしている。シャオがここへ来たのは久しぶりだったらしく、多くの人に歓迎されていた。シャオのためにと用意された広い部屋でドラスリアム軍事国家の現状について、セブン達は説明を受けている。

「半年前の戦いで多くの同士が散っていった。ドラスリアム軍の方が数だけなら圧倒的に上だ。それに数ばかり集めてもフォースには勝てないことは明白だ。だから、革命軍はフォースに迫る、個人での戦力を求める方針にした。おれは革命軍のトップで、唯一の生き残りだから皆をまとめている」

クウを膝の上で撫でながらシャオが言う。4人はそれぞれに考えている顔をしていた。

「大変なんだね」

感心しながら能天気シュザリアが言う。セブンは眉にしわを寄せながら苦笑する。大変、だなんて騒ぎでもない。自国との紛争なんて酷く追いつめられたが故の結果であるのだ。ドラスリアムという世界の大国の一つの現状は平和なグヴォルトとは全く違う。

「思うんだけどさ……」

不安な面持ちで切り出したのはアークだった。

「フォースって軍隊でも敵わないくらい強いんでしょ？ ドラスリアムの軍は世界でも凄く強くて、グヴォルト帝国でも負けるんじゃないかって聞いたこともある。それを簡単に蹴散らすくらいフォースが強いのに、どうしてまだ戦おうと出来るの？」

右手の中指にはめられている剣の指輪をなぞりながらアークは俯く。

「……その問いに対する答えは分かっているんじゃないのか？」

頭に重みを感じてアークが顔を上げると、クウが肩に乗ってきた。シャオの穏やかな目に見据えられているのに気付いてまた俯きかけると、クウが膝の上に乗ってくる。

「恐怖がなくて戦えるのは、よほど強い奴か、何も考えていない奴かだ。そして、それに該当する人間はここに一人か、二人。おれは含まれない」

シャオがセブンとデュランを順番に見た。アークもその目線を追いかける。

「大事なことさ、怖いと感じられるのは。そして恐怖が分かるから戦える。ドラスリアムでは昔から、火の固有属性を持つ者は生まれついで戦士だと言われる。戦士が戦う理由は全員、一緒なんだ。大切な何かを守りたいから。……これ以上は、言わなくてもいいな？」

「……お腹すいた」

ぽろつとシュザリアが欲求を漏らした。クウが小さく鳴く。

「ははっ、クウも食べたいか。……食堂はここを出て左手側を一番奥だ。行けば誰かしら案内してくれるだろう。セブンだけ残つてくれ」

シュザリア達が広間を出て行く。残ったのはセブンとシャオ、それにデュランだ。クウはシュザリアにくっついて行った。

「何の用だ？ 一応、おれはシュザリアに付いていないといけないんだが」

「ああ、済まない。一つ、頼まれてくれないか？」

「……内容にもよる」

シャオは神妙な顔をしながら広間を歩いた。

「首都アウルスーンへ一緒に行つて欲しい。そしてこの国を終わらせる」

「終わらせる？」

頷き、それからシャオが両手を体の前で合わせた。そこに魔力が集まり、ゆつくり両手を放していくと魔法陣がそこに展開されている。その紋様を読み取ったセブンとデュランが目大きく見開いた。

「お前、そんなもんをどこで手に入れた……！？」

「使えば咎人になるぞ。今すぐに破棄しろ」

セブンとデュランの言葉を聞きながらシャオは両手を再び合わせ、魔法陣を消した。

「これを使ってフォースを一網打尽にする。想定する最悪はこの魔法陣を何らかの方法によって防がれるか、効果範囲におびき寄せられずに発動してしまうことなんだ。そこでセブンに、一緒に来て欲しい。デュランとセブンがいればフォース4人をまとめてこの魔法陣の餌食にしてやれるはずだ」

「つまり、おれや、デュランまで殺すってことか？」

「いや……死なない。この魔法陣はディエゴが最終決戦用に構成し直したんだ。革命軍としての契血印を用意していれば無効化される。おれは武具に契血印を刻みこんでいるし、デュランには契約で渡したブレスレットの内側にあらかじめ付けておいた。セブンも身体や身につけているもののどこかに契血印を施せば問題はないんだ。……頼む。これを頼める人間はもういないんだ。フォースを討つて、おれの家族が……国が笑っていられるような世界を作りたいんだ。咎人になっても構わない。魔界へ落とされても、いつか必ず這い上がってくる。異形の姿になっても、世界から蔑まれたっていい。おれはその覚悟でいる」

と、不意にコツコツと響く音が聞こえてきた。いち早く反応したのはセブンだった。広間のたった一つの入り口を向く。

「???やあ、搜したよ」

ほんの一瞬前にはいなかった。ステッキを突いて歩く、フォーマルウェアの少年がいた。白いシャツに黒いベストと半ズボンのフォーマルパンツ。

「スピード、何をしに来た？」

低い声でセブンが尋ねる。スピードはにこやかに微笑みながら洞窟を見渡し、シャオとデュランを順番に見た。

「革命軍の生き残りと一緒にいるなんて止めて欲しいな」

「どつという意味だ？」

双刀を抜きながらシャオが言う。

「だって曲がりなりにもセブンはフォースの一員なんだよ？　なに馬鹿で愚劣で、低俗な人間とは一緒にいて欲しくないじゃない。フォースっていう名前そのものに傷つくでしょ？　まあ、別に凄く偉い地位にある王族とかなら、ぼくだって認めたくないけどさ。負け続けて五十年、勝ち戦ほど縁遠いもののない革命軍と一緒になんていうのは……やでしょ」

悪びれた様子もなく飄々とスピードが言葉を紡いだ。

「お前……この状況が分かってるのか？　三対一だぞ」

唸るシャオに向かってスピードは平然としながら言い返す。

「三対一？　違うよ。ぼくのこと全然分かってないんだね。ぼくは凄く速く動けるからね。きみ達を相手にしないで、この薄汚い洞窟に暮らしてる人を殺しに行くに決まってるじゃない。きみ、状況分かってる？」

くすくすと笑いながらスピードが言う。

「何しに来たんだ？」

「うん。セブン、ちょっとアウルスーンまで来てよ。ボスがさ、セブンと早く戦いたくて仕方ないんだ。……勿論、本気でね。だから卑怯な手を使わせてもらうよ。グヴォルト帝国のお姫様っているじゃない？　あと、王子様もいるよね。あの二人がさ、もしも……死んじゃったら、殺されちゃったら、絶対に戦争だよな？」

それは残酷な、冷たく凍りつくような笑顔だった。セブンが声を失い、それからスピードへ魔術を放った。セブンの扱う魔術の中でも最速の雷魔術だったがスピードはセブンの背後に回って、背もたれのように寄りかかる。

「あはは……。必死だねえ。今のはちょっと掠りそうだった。まだ何も手を出していないから安心して。問題なのはセブンの答えなんだよ。来てくれるよね？　アウルスーンまで。殺し合いをしに」

No. 47 最高傑作の所以

「??? 久しいな、セブン・ダッシュ」

軍事国家ドラスリアム首都アウルスーン。その象徴であるバベルの地上二十五階にセブンは案内された。スピードにだけ与えられた、魔法陣を介さない瞬間移動能力によってセブンはそこへ連れられてきたのだ。窓のない広めの部屋で、暖炉ではごうごうと火が焚かれて蒸し暑い。1から7までの数字が大きく刻印されたドアがあり、セブンは7の前に立たされていた。スピードは連れてくるなり姿を消してしまい、一人残されたところで正面にあった1のドアから人が出てきた。

「始まりのフォース……。ナンバー・ワンか」

赤い長髪はオールバックにっていて、黒を基調とした軍服を身に着けている。30歳代後半ほどの見た目。体が大きく、肩幅も広い。その顔には虚ろな微笑だけが張り付けられている。

「ボスと呼んでもらおう」

「……お断りだ。おれは別に主がいる」

そう言い放ち、セブンは他のドアを見た。この部屋は、特別な場所であると知っていた。造られたフォース同士がここで初めて全員、顔を合わせたのだ。最後に造られてあどけなかったセブンと、それを取り囲む6人のフォース。未だに当時の光景を覚えていた。

「そうか。……ドラスリアムという国をお前はと思う？」

「酷い国だ。大国でありながら、国民の幸福度は低い。しかも、それまでの政府を討とうと革命までやらかしたのに、それが無惨に返り討ちになってしまったては希望なんて見つけれない。寂しい、貧乏な心ほど不幸なものはない」

4のドアが開いてステッキを突きながらスピードが出てきた。

「セブンって、本当にアマちゃんだね。希望？ 寂しい？ 貧乏な心？ そんなの人間にはそもそもいらんだよ。ひ弱で、すぐに

寿命になつて死ぬような連中に希望なんて必要だと思つ？ そんな概念がある時点で、もう可哀相過ぎてやんなっちゃう」

「そう辛辣なことを言つな、スピード。フォースの半数は元々、人間だった者だ」

「あ、そつか。けどフォースにも希望とかつていないよね。絶対なんだし」

邪気のない笑顔でスピードが言う。しかし、セブンには色々と気に食わなかった。スピードは見た目こそアークと変わらない子どもだが、中身は人間を見下してフォースこそ至上であるという傲慢に満ちている。

「驕りはいずれ身を滅ぼすぞ、スピード」

3のドアからサードが出てきた。金属製の胸当てだけを身に着けた戦士風の出で立ちだ。低い声がスピードへ警告をするが、聞く耳を持たずにスピードはあつかんべをする。

「どうでもいいけどよ、こっちからセブンを連れてきちゃうつてどうなんだ？ 段取り無視も甚だしいぜ？ ボス」

フランクな口調。5のドアからシロが出てくる。アイマスクに褐色の肌。かつて、セブンの世話を焼いた。フォース内でも特異な存在だ。

「待ちきれなかったのだ。最高傑作とされたセブン・ダッシュとは、未だ一度として手合わせをしたことがない」

「……最強を求めるなら、オリジナルの方をやればいいだろう。ダウンに聞いた話が正しいなら、あいつが解き放たれたんだろう？」

5のドアに誰もいない。ダウンはグヴォルト帝国でメイジの側近をしているはずだ。

「オリジナル・セブンなら魔界へ行つたぜ。そっちの方が楽しいから、つて。深魔の穴にむりやり入つて行つた」

呆れながらシロが言う。へらへらと仕草はセブンの記憶にあるシロと何も変わらない。

「前置きはいいからさ、遊ぶなら早く遊ぼうよ」

苛々し始めてきたのはスピードだ。ステッキを肩へ担ぐようにして持ってむくれた顔をする。ため息混じりにサードが片刃の剣を抜いた。シロは脱力しながら後ろへ下がってドアに背中からもたれかかる。と、2のドアからセカンドが入ってきた。

「待たせた」

静かにセカンドが言ってセブンを見据える。黒い髪と黒い瞳が印象的なフォースで、見た目としては最も年老いて見える。40歳代に近い見た目だ。

「さあ、始めよう。セブン、多対一を恨むな。最高傑作としての力を我々に見せつけろ」

ボスが言った直後、セブンは右腕を前へ出した。スピードの蹴りを受け止める。速かったが重さはあまりなかった。後ろへ飛び退くと上からサードが剣を振り下ろしながら降ってくる。一雫の涙を發動すると上方配置魔法陣が二重に展開された。そこから業火を纏った岩石が降り注ぐ。サードが自身の攻撃と共に發動したらしい。

「続きをどうぞ」

それからスピードの声がして足下に大きな下方配置魔法陣が展開される。舌打ちをしながらセブンが一雫の涙を解いて飛び出した。業火を纏う岩石がその行く手を塞ぎ、それからセブンを囲むように四方へ落ちた。下方配置魔法陣が發動される。

トリック・ストリーム
「水竜の戯れ」

激しい水の渦が部屋全体を暴れ回る。セブンが跳ぶとサードも跳んでいた。肩まで振り上げた剣をセブンへ向けて振るう。床へ叩き付けられたセブンは激しい水流に吞まれた。

スクエアサークル
「能力を使ったらどうだ？ 立体魔法陣??」

セカンドの声がし、セブンは六面の魔法陣に閉じ込められた。ただでさえ複雑な文様の魔法陣。立体として、六面による相関関係によつて威力は何十倍にも跳ね上げられる。

クリムゾン・ボックス
「深紅の箱」

セブンを閉じ込めた立体魔法陣が一気に燃焼する。空気が一瞬で

なくなり、器官にまで炎が入り込む。だが、セブンは堪えていた。常人ならば一瞬で骨だけになるほどの火力。しかし、その業火の中からセブンは飛び出した。

「最高傑作はダテじゃないな」

飛び出したところにサードがいた。剣がセブンの腹を貫通する。そのまま吹き飛ばされて立体魔法陣を突き抜けるとスピードのステッキがセブンの肩に刺さった。乱暴にステッキが抜かれてセブンは地面へ突っ伏す。腹と肩から血がだくだくと流れた。

「フォースを相手にしながら、まだ生きてるんだからね。でもさ、ボス。まだフォース3人分だよ。どうするの？」

「それで死ぬなら構わぬ。殺すまでは一切の手を抜くな」

「もう……ボスってば乱暴だね。そういうとこ、ぼくは大好き」

にやにやしながらスピードが言うと、倒れているセブンの上に上方配置魔法陣が展開された。青色に輝いた魔法陣が発動されると、そこから濁流が流れ出してセブンを激しい水圧で押しつぶす。シロは5のドアに背を預けたまま天井を仰いだ。

「??? 身構えろ」

小さくシロが呟いた直後にスピードの上方配置魔法陣が打ち消された。水が消え、スピードの首ねっこをセブンが捕まえる。そのままスピードは床へ叩き付けられ、サードが切りかかるとセブンは右腕だけでそれを受け止めて振り払い、激しい蹴りを入れた。立体魔法陣がセブンを囲んで展開される。

「サイクルチェンジ
構成変換」

発動された魔法陣は内側ではなく、外側へ向かってその強力な魔術を放射した。鉄製の床や壁がどろりと溶ける。スピードが目にも留まらぬ速さでセブンへ近づいた。ステッキの側面に白刃が現れる。それでセブンの首を引き裂こうとしたが、手の平で受け止められた。掌底がスピードの腹に炸裂すると、そこから魔力が激しい衝撃とな

って吹き飛ばされる。
「ジャックポット
大聖光とは違うようだ」

静かにボスが言い、取り囲んでいたサイドとセカンドが身構える。スピードは腹を抱え、悶絶しながら転がっていた。シロは関係ないとはかりの態度で相変わらずドアに背を預けたまま。

「おれがフォースの最高傑作たる所以は単純な力とは違う。じゃあ、何がフォースを造り出した連中からした最高傑作なのか。他の暴走したフォースを止める能力と、人間に害をなさないようにインプットされた性格だ。単純な戦闘能力ならオリジナルや、ナンバー・ワンの方が強いかも知れない。だが、おれはお前らが相手である以上、絶対的優位な能力を備えている」

No.48 ぶつかり合う想いは

「絶対的優位なんてぼくは信じてないよ……。さっきまで防戦一方だったのにさ。脅してしょ、どうせ」

スピードがステッキに体重をかけ、腹部を押さえながら立ち上がった。見開かれた目の瞳が大きくなっている。セカンドが魔術を用いて部屋を丸ごと氷漬けにして崩れないようにする。

「……やってみるか？」

「そういうさ……。上から目線ってムカつくんだよ！」

怒りをあらわにしながらスピードが消えた。セブンの顔面にパンチが叩き込まれる。重い一撃ではないが、スピードの武器はその速さだ。目にも留まらぬ速さで次々とセブンに攻撃を加えていく。後退しながらスピードの攻撃に堪えるセブン。

「こっちは何年も、何十年も、殺戮兵器として生きてたんだ！ 平和で長閑なグヴォルトなんかについて、いきなり現れて絶対的優位なんてよく言えるよ！」

セブンを壁際まで追いつめると、スピードが魔術を発動した。スピードの由来は動きだけではない。展開と発動、という魔術の手順までもを高速で行える。圧倒的な速さこそがスピードの武器。握り拳ほどの大きさをした無数の水の球がセブンを襲った。水の球はぶつかると炸裂してセブンを傷つける。魔術に紛れてスピードが渾身の力を込めてセブンに殴りかかった。なりふり構わぬ一撃はセブンの胸を撃ち、背にしていた壁に大きな亀裂が入ってめり込んだ。「フォースを止めるために造られたのがおれなんだ。当たり前だろう」

しかし、セブンはスピードの手首を捕まえていた。振りほどこうとスピードが足掻くも、単純な力はフォース内では最も劣る。自慢の速さも魔力を利用したものであるため、筋力自体は常人よりも上程度だ。

「放せ……！ 放せよ！」

「お前から、おれの力を見せてやるよ。順番に、全員倒してやるから待ってる」

フォース全員に睨みを利かせてセブンが手を放した。スピードはすかさず間合いを取る。口では否定していたがスピードとて頭が悪い訳ではない。最後のフォースであるセブンに未知の力が眠っているのは分かっていた。しかし、それが何だかは誰も知らない。フォースを造り出した科学者はオリジナル・セブンによって研究所ごと葬られたのだから。

「……ボス、もっと速くしていい？」

体勢を低くしながらスピードが問うた。セブンは黙って指輪を外す。

「いいだろう。手加減はするな。全力でセブンと戦え」

「そういうところが好きだよ、ボス」

につとスピードが笑ってベストを脱いだ。白いシャツも脱ぎ捨てると紺色のアンダーシャツ姿になる。体にフィットした薄手の生地
で肉のない細い上半身が見て取れる。首筋から鎖骨にかけて「4」の文字が刻まれている。

「服を脱いでパワーアップか？」

「違うよ。気に入った服だったから脱いでおいたの。シロ、持ってる」

ベストとシャツをまとめてシロへ投げて寄越す。あいよ、と返事をしながらシロは服を受け取った。

「まずはレベル1だよ。47秒でこの塔の外壁を駆け上れる速さ」
バベル

「御託はいいから、さっさと来いよ」

ドン、と音がした。猟銃のように響いた太い音。セブンへ向かってくるスピードの姿がぶれて見える。大きく右腕を薙いで牽制すると、それを鼻先だけ掠めて避けた。スピードの目が大きくなっている。顎に真下からの強い衝撃を感じた。それが蹴りだと認識したのは背中から床に倒れた時だ。

「レベル2。35秒でアウルスーンの外周を回る」

飛び上がったスピードを目に留めると、その姿が消えた。咄嗟に体を真横へ転がして起き上がるとセブンのいた場所にスピードが落下していた。小さなクレーターが出来上がっている。ゆっくり首だけセブンを見たスピードの口角がぐいと持ち上げられる。

ヘルズ・サンダー
「雷鐘」

「あはっ、遅いよ。のろまの亀より、何倍も」

魔法陣が展開され、発動されるまでの限りなく僅かなタイムラグさえスピードには見切れる。閃光と轟音が弾ける刹那前にセブンは側頭部を蹴り飛ばされていた。床へ転がる前にスピードが先回りしてセブンの背中へ握り拳をぶつける。

「まだまだ行っちゃうよ。死なないでね、最高傑作なら。??レベル3。あと20秒で動けなくしてあげる」

片手を床についてセブンが顔を上げる。剣を出して握ると、目を閉じた。スピードが迫るのを魔力探知で感じる。??それでも速い。右側面から蹴り飛ばされた。剣を床へ突き立てながらブレーキをかけるが、今度はその反対からの衝撃で息が詰まる。

「何が絶対的優位だよ！ぼろぼろじゃんか！」ファイナル・ランス正面からステッキを拾ったスピードが突っ込んでくる。「終の一突き！」

究極の速さと、ステッキに集中させられた魔力。スピードの固有属性である水属性は一点集中によってその力を十二分に発揮する。

バベルに大穴が穿たれた。内側から外壁が破られる。外から冷たい風と雪が降り注ぐ。

「捕まえた??」

眉間に僅かな隙間だけを残してステッキはセブンに触れていなかった。スピードが中空で完全に動きを止められたのだ。セブンの足下で魔法陣が輝いている。鮮やかな緑色に輝く魔法陣。魔法陣の輝きは属性を表すものだが、緑色の輝きは存在しないはずだった。

「その、魔法陣……」

「今、構成したんだよ。お前になぶられながら仕掛けた複合魔法陣

だ」

スピードの目が周囲を見る。セブンの右側に同じ魔法陣が輝いている。起き上がりざまに手をついたのを思い出す。だが、それはフォースとは言え信じ難い行為。

「別属性の魔法陣を重複させない形で発動させるなんてあり得ない

……！ 位置がずれるだけでも暴発する！」

「何言ってるんだ。今、ここで構成したって言っただろう」

一瞬であらかじめ仕掛けた魔法陣との位置を把握し、どこに効力を適用させるかを計算して構成。そして、発動。魔法陣を一つ構成するのにも多大な時間が費やされるはずであるのに、セブンは戦闘中に一瞬で作り上げた。

ファイア・エクスタシー
「？？？ 赤の絶頂」

セブンがスピードに掌底を叩き込むと、アンダーシャツの上に魔法陣の紋様だけが浮き上がった。それは円陣にはなっていない。

フォース
「お前らを止める力、存分に見せてやるよ」

赤く輝く紋様が強い光を発するとそこから繭のような紅蓮に包まれた。それは決して逃れられない灼熱地獄。スピードが全身を焦がしながらその場に倒れる。

「次は誰だ？」

セブンがボスに向かって言う。

「シロ。やれ」

「……おれかよ。サードじゃダメなのか？」

シロはスピードに近寄って預かっていた服をそつとかける。

「元教育係だろう。……再教育でもしてやれ」

「ははは……何年前の話だか。けど、ボスの命令じゃあ仕方ないよな、セブン」

懐へ手を入れるとシロがナイフを出した。何の変哲もない刃渡り20センチ程度のナイフ。

「13年か、14年だ。あんたとは正直、戦いたくなかった」

「そうか。じゃ、お互いに手加減してみるか？」

「適当なことを言っな」

セブンが剣を下段に構えて飛び出した。へらへらと笑いながらシロがナイフで受け止める。

「脇を締めろ」

すつと剣を受け流されてナイフがセブンの脇下にぴたりと当たられた。一歩退くと足の動きに合わせてシロが前進する。アイマスクが不気味にセブンを見据えるようだった。

「体裁きが甘い。呼吸を読まれるな。感情を剥き出すな。??魔闘術開祖をなめるな」

密着した状態からセブンに動きを合わせてシロがナイフを滑らせるようにして動かす。セブンの頬に「?」と浅い傷が刻まれる。

「魔力無効化能力、呪術、魔闘術??。魔力を持たぬ、最強の対魔術師戦士。全てを捨てて強さを求めた愚者の末路こそ、シロだ」

ボスが言う。それを聞きながらシロは自嘲気味に笑った。

「道化は、いつまでも道化なのさ??」

「それでもあんたは、おれの恩人だった」

ナイフがセブンの胸をなぞった。服が切れて体に刻まれた「7」の刻印が現れる。

「それならさっさと、おれを倒せばいい」

シロの掌がセブンの額を押した。足を引っ掛けられ、そのまま簡単に投げ飛ばされるとナイフが投げられる。そこに赤い血が飛び散った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7047j/>

-SEVEN'S WAY-

2011年10月5日20時36分発行